

沖縄県文化財調査報告書 第92集

MIYAGI

宮城島遺跡分布調査報告

A REPORT ON THE INVESTIGATION OF ARCHAEOLOGICAL
SITES DISTRIBUTION IN MIYAGI ISLAND OKINAWA

1. 宮城島の遺跡分布

2. 高嶺遺跡

TAKA MIKE

1989年 3月

沖縄県教育委員会

The Okinawa Prefectural Education Committee

沖縄県文化財調査報告書 第92集

MIYAGI

宮城島遺跡分布調査報告

A REPORT ON THE INVESTIGATION OF ARCHAEOLOGICAL
SITES DISTRIBUTION IN MIYAGI ISLAND, OKINAWA

1. 宮城島の遺跡分布

2. 高嶺遺跡

1989年 3月

沖縄県教育委員会

The Okinawa Prefectural Education Committee

卷首圖版

上：第2段丘にある竪穴住居跡群と土留め石積み
中左：第6号竪穴住居跡 中右：第5号竪穴住居跡
下左：第19号竪穴住居跡 下右：第10号竪穴住居跡



序

この報告書は、与那城村宮城島の遺跡分布調査の内容を記録したものであります。

調査は文化庁の補助および指導を得て、昭和61・62・63年の三次にわたって実施されました。

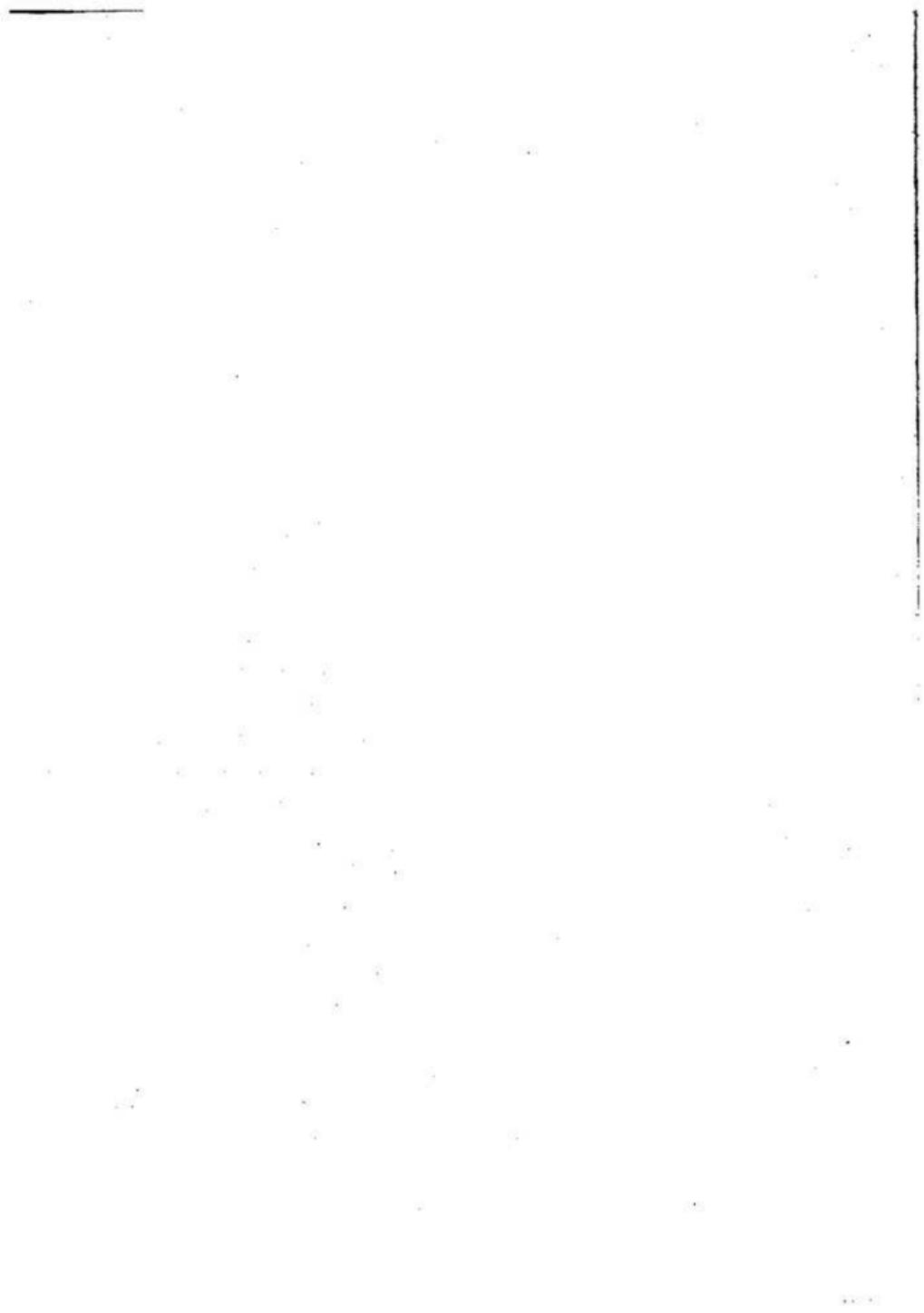
近年、県下においては多くの地域で農業基盤整備事業が計画・実施されています。このような状況は宮城島でも顕著となり、大規模な圃場整備の計画が進められています。過去に調査が実施されたシヌグ堂遺跡も圃場整備に伴う範囲確認調査がありました。これらの圃場整備計画に伴い、その一画に存在する埋蔵文化財の実態や範囲等を把握し、埋蔵文化財を適切に保存するための基礎的資料が必要となりました。これを踏まえて、三次にわたる調査を実施したわけであります。その成果は貴重であり、遺跡数も從来よりも増えています。また、範囲確認を実施した高嶺遺跡では沖縄貝塚時代中期の大規模集落址が検出されました。その中でも竪穴住居や集落の境界となる石積み遺構などが検出されたことは貴重であります。さらに多量の土器や石器等も出土しました。これらの遺構や遺物は、その当時の集落・社会・生活形態を伝える貴重な内容をもった遺跡であります。

高嶺遺跡は幸いにして、圃場整備計画から設計等に配慮していただき現地保存を図る方針で協議調整が進められています。

本書が多くの方々に文化財への理解を深めると共に、考古学研究に十分に供され、さらに文化財愛護思想の高揚の一助ともなれば幸いであります。

平成元年3月

沖縄県教育委員会
教育長 高良清敏



A REPORT ON THE INVESTIGATION OF ARCHAEOLOGICAL SITES DISTRIBUTION IN MIYAGI ISLAND, OKINAWA

The Culture Section of the Okinawa Prefectural Education Committee conducted an investigation of the archaeological sites distribution in Miyagi island from 1986 to 1988.

This investigation project received 80% of financial aid from the national Bureau of Culture.

In recent years, there has been an increase in the development plan of Miyagi Island such as the improvement of agricultural land.

Thus, the purpose of the investigation was to find out the situation of the archaeological sites distribution in order to make an adjustment with the development plan and preserve the archaeological sites adequately.

Miyagi Island is one of the scattered islands along the east coast of the central part of mainland Okinawa and is now connected to Katsuren Peninsula by an artificial road on the sea.

Almost the whole island is made of limestone and the central part is a wide plateau. The end of the plateau is a cliff that slopes down toward the coast.

Most of the archaeological sites are distributed around the edge of the plateau (top of the cliff) and the dune along the coast. There are 16 sites that have been discovered so far. Among them, the takamine site has the possibility to be affected by the project to improve the agricultural land. Thus, the investigation spent most of the time to estimate the scope of this site.

The Takamine site has an area of approximately 10,000m² and is located on the eastern end of the central plateau. There is also a possibility that the site extends below the cliff. However, this area has not yet been investigated.

The excavation of the site was conducted by dividing the area into units of 4 meter square, and digging 49 parts of them. The layer order of the site is a field soil on the top, followed by a cultural layer of the prehistorical period. In the cultural layer, pit dwellings are discovered aside from the remains of that time.

The pit dwellings are 14 and many of them are squares dug in the ground. moreover, the west end of the dwellings is surrounded with a stone wall.

The earthenwares have the largest amount among the remains. Others are adzes axes, grind stones and bone artifacts. Most of these remains and pit dwellings

belong to the middle period of the Okinawan Neolithic Age. The adzes axes which are left in the dwelling pits of the old period are broken ones and are not usable. And a part of the stone surrounding the lower part of the house is taken away. We could understand from these that the tools and the stones of the old dwellings were again used when moving to a new one.

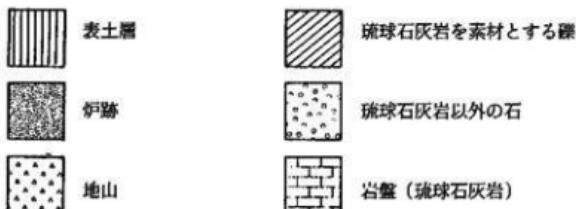
The Takamine site is a large scale of settlement that belongs to the middle period of the Okinawan Prehistoric Age. Similar to the Sinugudo site, it is very important for the study of the settlement during the Okinawan Prehistoric age.

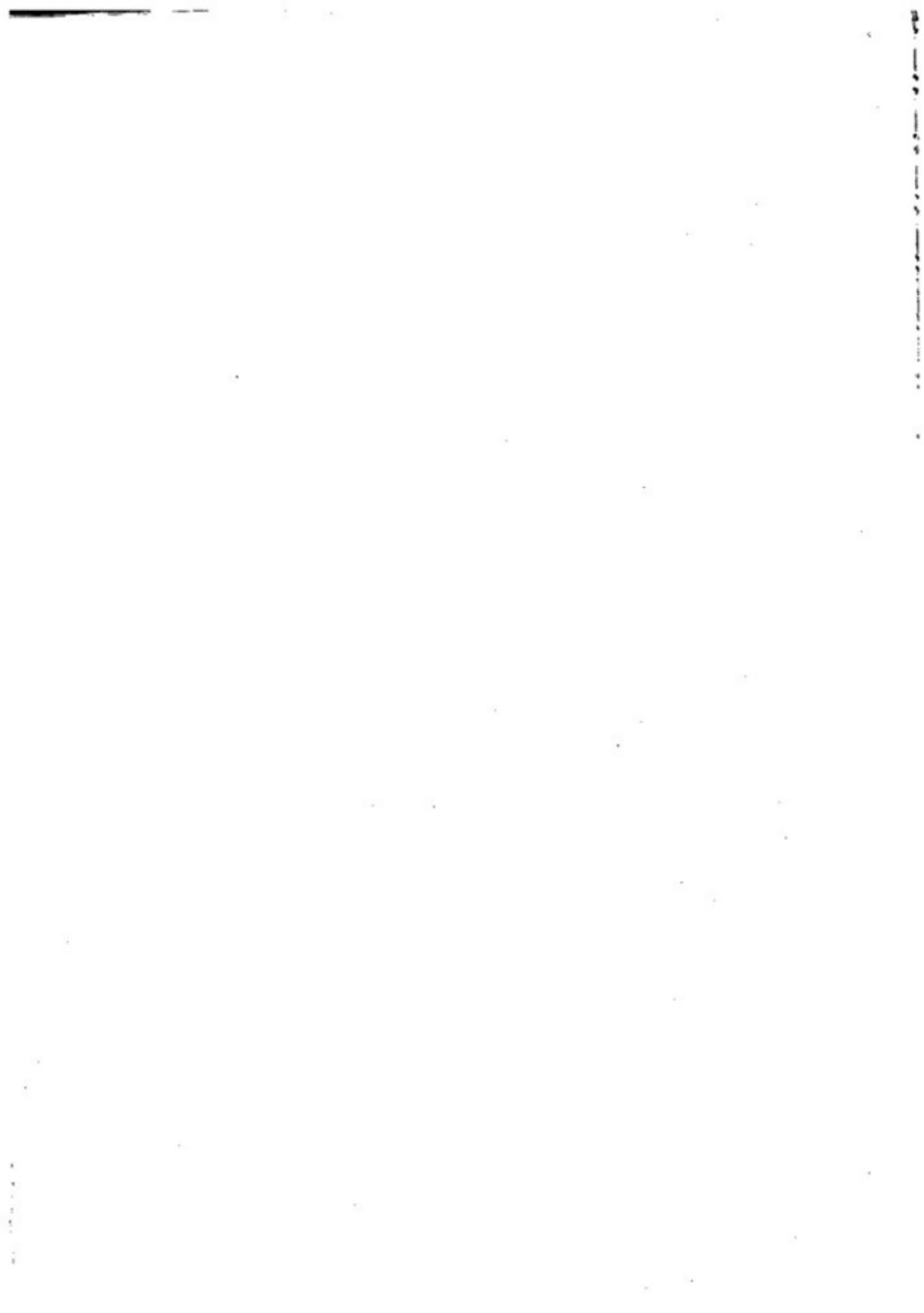
例　　言

1. 本報告書は、沖縄県教育委員会が国の補助（80%）を受けて、昭和61・62・63年度に実施した「宮城島の遺跡分布」・「高嶺遺跡」の成果を収録したものである。
2. 脊椎動物遺体・炭化種子・石質・貝類については下記の方々の同定を受けた。記して感謝申しあげる次第である（敬称略）。

脊椎動物遺体	金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）
炭化種子	渡辺　誠（名古屋大学助教授）
石質	神谷厚昭（南風原高等学校教諭）
貝類	黒住耐二（沖縄生物学会々員）
3. 本書で使用した地形図・空中写真は、県教育委員会が過去に発刊した「シヌグ堂遺跡」のものを再版した。
4. 「宮城島の遺跡分布」は金城が執筆した。
5. 「高嶺遺跡」の執筆は下記のとおりである。編集は金武・金城で行なった。

第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章	金武正紀（沖縄県立博物館主任専門員）
第Ⅰ・Ⅱ章・第Ⅵ章第1・2節・第Ⅶ章・第Ⅷ章	金城亀信（沖縄県教育庁文化課専門員）
第Ⅸ章第3節・第Ⅹ章	鳥袋春美（浦添市教育委員会非常勤）
第Ⅺ章第1節	黒住耐二（沖縄生物学会）
第Ⅻ章第2節	金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）
6. 植物遺体については、名古屋大学助教授の渡辺誠氏から貴重な手稿をいただいた。深く感謝申し上げる次第である。
7. 遺構は基本的につきのような記号で表現したが、住居跡内で特に関連する柱穴や炉跡については細かい点描や砂目・赤刷を必要に応じて使用した。





目 次

1. 宮城島の遺跡分布	1
第Ⅰ章 調査の概要	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	2
第Ⅲ章 おわりに	4
2. 高値遺跡	5
第Ⅰ章 序 言	5
第1節 調査にいたる経緯	5
第2節 遺跡の位置と環境	6
第Ⅱ章 調査概要	6
第1節 調査地域	6
第2節 調査経過	7
第3節 調査体制	11
第Ⅲ章 遺 跡	13
第1節 層 序	13
第2節 遺 構	14
第Ⅳ章 人工遺物	17
第1節 土器・土製品	17
第2節 石器・石製品	29
第3節 骨製品・貝製品	37
第Ⅴ章 検出遺構と出土遺物	41
第Ⅵ章 自然遺物	179
第1節 売類	179
第2節 脊椎動物遺骸	191
第Ⅶ章 宮城島高値遺跡出土の植物遺体	217
第Ⅷ章 琉球王府時代の遺構と遺物	219
第1節 遺 構	219
第2節 遺 物	222
第Ⅸ章 総 括	223

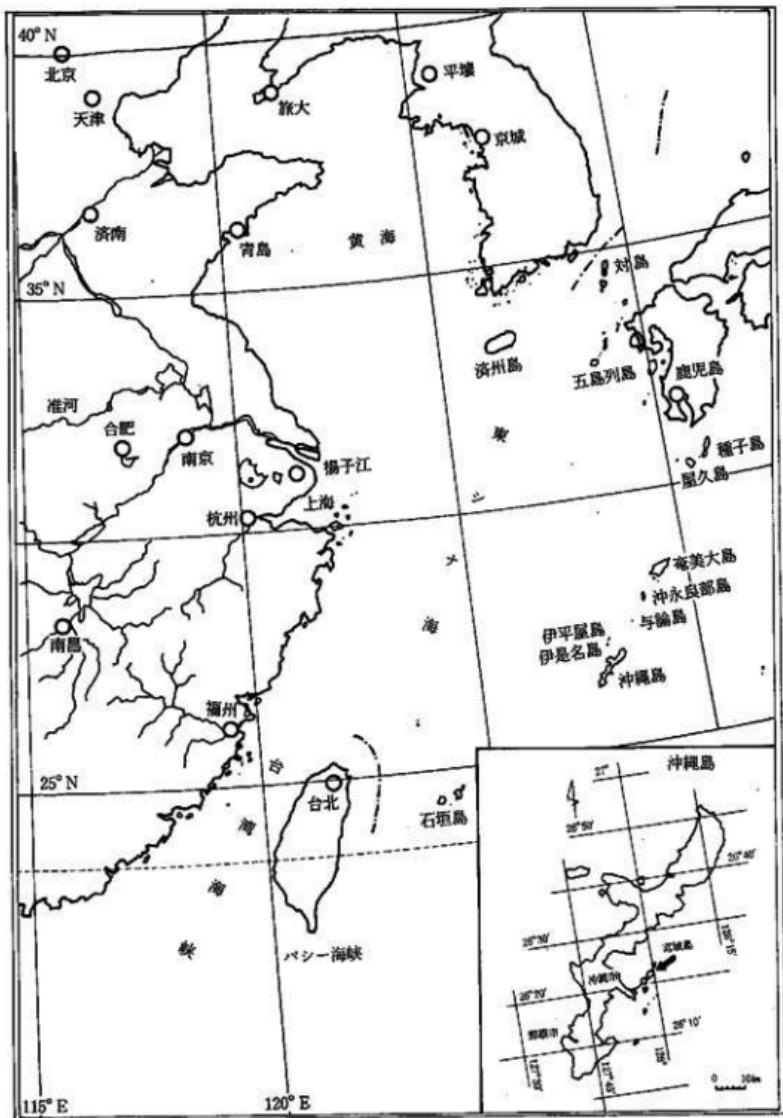


Fig. 1 位置図

1. 宮城島の遺跡分布

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査の目的

県下における諸開発は、近年になって増加し、著しくなっている。与那城村内においても農業基盤整備事業を始め、数多くの事業が実施されてきている。特に伊計島では、島のほぼ全域が土地改良事業の対象となり、遺跡の発掘調査や範囲確認調査が行なわれた経緯がある。^(註1)今回、報告する宮城島もこれと似たような状況にあり、島の台地はほとんどが圃場整備・農道整備などの事業が実施・計画されている。島内だけでも土地改良等で、約12haが予定されている。これに係る発掘調査例は、1983年（昭和57年）～1984年（昭和58年）に実施されたシヌグ堂遺跡^(註2)があった。この様な状況から宮城島内に所在する遺跡の分布調査を、昭和61・62年度に実施した。調査の一環として範囲確認調査を実施した高嶺遺跡一帯は、本格的に工事が着工された為に遺跡の範囲確認を急いだ。

（註1） 当真嗣一・上原静「伊計島の遺跡」 沖縄県教育委員会 1981年。

（註2） 金武正紀他「シヌグ堂遺跡」 沖縄県教育委員会 1985年。

2. 調査地の地理的環境

与那城村は勝連半島の北側部分と同半島の北東に点在する糸地島・平安座島・宮城島・伊計島の四島からなる。これらの島々は、1970年（昭和45年）以降から今日までの間には、本島と平安座島を結ぶ海上道路の完成や平安座・宮城島間の埋め立て、そして、宮城・伊計島間の橋の完成で現在は地続きとなっており、離島苦から解放された。宮城島は俗に高離とも言う。島の中央付近には台地があり、台地の南側と北東側に集落がある。南側には桃原集落があり、北東側には池味・上原・宮城の集落からなる。これらの集落は半農半漁で生業とする。

島の台地の東縁辺沿いには、シヌグ堂（シヌグ祭りを行なう場所）や近世の火番小屋が所在する他に沖縄貝塚時代中期の遺跡が立地する。この島での考古学的調査は、1933年（昭和8年）に多和田真淳氏によって発見されたシヌグ堂貝塚^(註1)（現在のシヌグ堂遺跡）から始まる。その後、金武正紀・知念勇氏らによる分布調査で、高嶺貝塚（高嶺遺跡に改名）・泊グスク・桃原貝塚が確認された。^(註2)1983年（昭和58年）にはシヌグ堂遺跡が村の水道管理設工事に伴う削削溝断面調査などが行われてきた。

(註1) 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布とその編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1956年。

(註2) 金武正紀・知念勇他「宮城島調査報告」『郷土』 第2号 沖縄大学・沖縄学生文化協会 1965年。

(註3) 『宮城島シヌグ堂遺跡』 与那城村教育委員会 1977年。

参考文献

◦『与那城村史』 与那城村役場 1980年。

◦『与那城村の「文化財」めぐり』 第1集 与那城村教育委員会 1985年。

第Ⅱ章 遺跡の概要

1. 桃原貝塚

桃原集落の東端部から南西側裾に広がる畠地一帯が遺跡である。沖縄貝塚時代後期に位置づけられ、上器片が採集できる。

2. 高嶺遺跡

上原集落西方にある台地の最南端に位置する。遺跡内には近世の火番小屋や碑文が残っている。沖縄貝塚時代中期に位置づけられる竪穴や砾床住居が21基と当時の石積み遺構が確認されている。

3. シヌグ堂遺跡

上原集落の西方にある台地の東縁辺部が遺跡である。本遺跡も高嶺遺跡と平行関係にある。竪穴住居や砾床住居が50基検出されている。

4. 深川遺跡

シヌグ堂遺跡の西方約250mの地点にあり、沖縄貝塚時代中期の遺跡である。包含層が確認されている。

5. 日奈田遺跡

島の西側緩斜面にある畠地一帯が遺跡である。沖縄貝塚時代前期。

6. 西原遺跡

島の西側緩斜面にあり、日奈田遺跡から北西約100mの地点に位置する。沖縄貝塚時代後期。

7. 赤山遺跡

島の西側にあり、台地にある深川遺跡から一周線（工事中）に抜ける小道の途中にある。グスク時代に比定される遺跡である。

8. イークン山遺跡

池味集落の南側にある台地の崖下および斜面一帯が遺跡である。時期は不詳である。

9. 南グスク

池味集落の北西崖下にナングスクまたは南山墓と呼称されている箇所があり、屋敷跡や石積みなどが残っている。

10. 池味貝塚

池味集落から北西にある海浜（トンナハビーチ）一帯が遺跡である。沖縄貝塚時代後期の砂丘遺跡である。

11. 喜納遺物散布地

池味貝塚から西方約100mの箇所にある斜面地一帯に立地する。グスク時代から古島に比定される。

12. 大兼久遺物散布地

池味集落から北西約200m離れた丘陵の斜面地に遺物が散布する。グスク時代。

13. 池味集落北貝塚

池味集落の北端にある小丘陵地内にあり、村道29号沿いに面している。道路沿いには貝塚が僅かに残っている。沖縄貝塚時代前期から中期。

14. 宮城遺跡

宮城集落から東方へ約600mの地点にあるサトウキビ畑および松林一帯が遺跡である。沖縄貝塚時代後期に位置づけられる。

15. 宮城遺跡地遺物散布地

宮城遺跡と同一丘陵地内にあり、宮城遺跡からは農道を隔てた箇所に隣接する。時期不詳。

16. 泊グスク

宮城集落から北東側約900mの箇所にある石灰岩丘陵上（標高10~15m）に形成されたグスクである。別名「カクレ城」とも称されている。グスクの面積は約8,000m²である。野面積みの石積みが残っている。グスク時代。

参考資料

- ・多和田真淳「琉球列島の貝塚分布とその編年概念」『文化財要覧』 琉球政府文化財保護委員会 1956年。
- ・金武正紀・知念勇他「宮城島調査報告」『郷土』 第2号 沖縄大学・沖縄学生文化協会 1965年。
- ・『沖縄県の遺跡分布』 沖縄県教育委員会 1977年。
- ・『与那城村史』 与那城村役場 1980年。
- ・『ぐく』 グスク分布調査報告（I） -沖縄本当及び周辺島- 沖縄県教育委員会 1983年。
- ・『与那城村の「文化財」めぐり』 与那城村教育委員会 1985年。

第Ⅲ章 おわりに

宮城島々内では16ヶ所の遺跡が確認できたが、これらの遺跡は時期的には沖縄貝塚時代前期（縄文後期）・中期（縄文脱期～弥生前期）・後期（弥生中期～古墳時代・平安時代）・グスク時代（鎌倉・室町時代）に比定されるものが主である。将来、これらの遺跡をいかに開発から保護するかが課題として残っている。

島の中央台地縁辺部には、沖縄貝塚時代中期を代表する大規模集落であるシヌグ堂遺跡（面積約14,000m²）や高嶺遺跡（面積約10,000m²）があり、貝塚時代中期の集落形態・住居形態などを研究するために重要な遺跡であることは間違いないだろう。今後、いかにして両遺跡を保存し、活用するかが、将来の課題ともなっている。

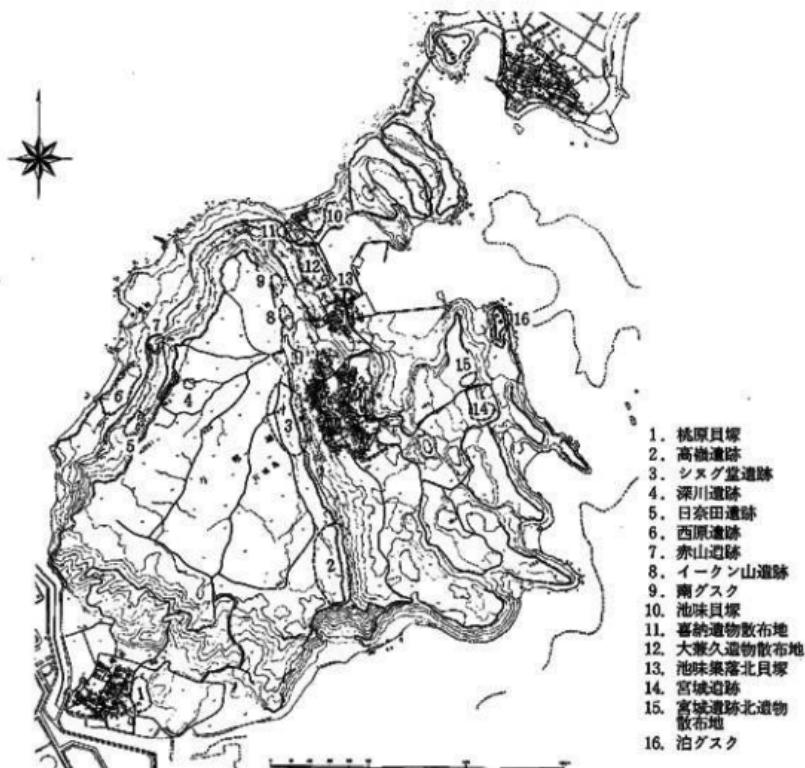


Fig. 2 宮城島の地形図と遺跡分布

2. 高嶺遺跡

第一章 序 言

本書は、昭和61・62・63年度に実施した宮城島遺跡分布調査の一環として実施した高嶺遺跡の範囲確認調査で得られた成果を収録したものである。

第1節 調査にいたる経緯

本遺跡は、昭和48年に金武正紀と沖縄学生文化協会（沖縄大学）によって発見されたものである。発見当初、「高嶺貝塚」と命名されていたが、昭和61・62・63年度にわたって実施された発掘調査で、その成果を踏まえて「高嶺遺跡」と改められた。^(註1) 本遺跡の北側約700mの箇所には、昭和57～59年度に発掘調査が実施された「シヌグ堂遺跡」^(註2)があり、本遺跡と一時期並行する集落跡でもある。

島内では、昭和57～59年度の間に圃場整備・農道整備・灌漑排水整備などの事業が実施・計画されており、中央台地の土地改良と圃場整備だけでも総面積は121haの事業となっている。この様な状況で実施された島内の遺跡分布調査では16箇所の遺跡が確認された。特に高嶺遺跡のある一帯は、昭和62年度から本格的に工事が着手された為、遺跡の範囲確認を急いだ。

調査の結果、遺跡の範囲は6,128m²に及んだ。これに基づいて、沖縄県中部農林土木事務所と協議を行い、遺跡西側で確認された当時の土留め石積みから数m～10數m程度、離す線で調整が出来た。当初の計画では、遺跡内に農道や排水路などの他のに切り土による法面工法があった。

註

- 註1 「宮城島調査報告」「郷土」 第2号 沖縄大学・沖縄学生文化協会 1965年。
- 註2 「高嶺遺跡－調査概報－」「南島考古だより」 第37号 沖縄考古学会 1987年。
- 註3 「シヌグ堂遺跡－第1・2・3次発掘調査報告－」 沖縄県教育委員会 1985年。
- 註4 「与那城村の遺跡」 沖縄県与那城村教育委員会 1988年。

第2節 遺跡の位置と環境

本遺跡は、与那城村宮城島の標高115～120mに位置し、琉球石灰岩を基盤とした丘陵上に形成されている。島の周囲は約12kmあり、島の中央にある台地は約130haである。この台地のほぼ全域が圃場整備（総面積121ha）の範囲である。遺跡の地籍は大字上原小字高嶺原・茅野原である。^(註1) 遺跡の北側には、一時期並行するシヌグ堂遺跡が位置し、立地条件も類似する。本遺跡の東側崖上には海岸へ下るための小道がある。この小道は崖に沿う様にあり、落石した石や岩の割れ目に堆積した土砂などの上にあり、踏み分け道的な感じも受ける。差し詰め、縄文時代の道ということである。この道は最近まで使用されていた歴史の道でもある。また、遺跡の立地する丘陵南端近くには、地元で火立毛と称されているところがある。首里正府時代の岸上監視のために狼煙をあげた場所から由来する名である。この種の火立所は、薩摩藩調整図（18世紀後半）によると本島内に10ヶ所がプロットされている。^(註2) 第Ⅴ章参照。

本遺跡の北側には、小高い丘があり、そこに立つと北に伊計島や北部地域などがみえる。南には平安座島・浜比嘉島・勝連半島などを望むことができる。また、天気の良い日には、久高島も眺望することができる。

本遺跡の面積は10,000m²あり、崖下に貝塚が形成されたかどうかは今回、確認できなかった。シヌグ堂遺跡の例からも崖下に貝塚が存在することは、ほぼ間違はないであろう。

註

註1 「シヌグ堂遺跡－第1・2・3次発掘調査報告－」 沖縄県教育委員会 1985年。

註2 「沖縄県歴史の道調査報告書－真珠道・末吉宮参詣道－」 沖縄県教育委員会 1984年。

。 「沖縄県歴史の道調査報告書V－中頭方東海道－」 沖縄県教育委員会 1988年。

第Ⅱ章 調査概要

第1節 調査地域

宮城島の遺跡詳細分布調査で、特に本遺跡一帯は圃場整備等が昭和62年度から実施されている為、前章でも述べたように範囲確認を実施した。

遺跡内の地形はシヌグ堂遺跡と類似し、自然の段丘を利用している。自然段丘は東から西方向へ3段あり、東の高い地域から西の低い地域へと移行する。第1段丘（標高約118m）、第2段丘（標高約117m）、第3段丘（標高約116m）と呼称した。遺跡の範囲を確認するために、各

段丘にグリッドを設定した (Fig. 3)。特に第2段丘と第3段丘へ移行する法面部分や段丘の縁辺部分で、当時の集落の境界として考えられる石積み遺構が検出された。住居は第1・2段丘に形成され・第3段丘には形成されないことが判明した。調査は第1・2段丘の中でも第2段丘を中心に発掘した。遺跡の面積は全体で、 $10,000m^2$ あり、その中の約 $735m^2$ を発掘の対象とした。

第2節 調査経過

調査は第1次発掘調査が昭和61年12月15日～昭和62年2月28日、第2次発掘調査が昭和62年5月11日～同年7月16日、第3次調査は地形測量で、昭和63年2月29日～同年3月11日まで実施した。

座標は遺跡南西にあるグスク原と称されている箇所から求めた。この丘の頂上に基-2 ($X = 39,573.739$, $Y = 48,168.527$) が確認できた。このポイントは土地改良地域内にあり、土取り場となっている為、絶対高はなかった。遺跡南端付近に基-3 のコンクリート製の座標点があったので、基-2 と基-3 ($X = 39,643.844$, $Y = 48,496.878$) を結ぶ座標軸から W 60° N へ振って、54 m の地点に基-4 ($X = 39,731.400$, $Y = 48,460.000$) を設定した。さらに基-4 と基-3 を結ぶ座標軸から E 143° N へ振って、基-5 ($X = 39,731.400$, $Y = 48,455.800$) の座標点を設定した。基-4 と基-5 の2点を結ぶ座標軸 (平面直角座標系より N $0^\circ 5' 12''$ W に偏る座標軸) を高儀遺跡の局地座標軸とした。この座標軸を K ライン (南北基準座標軸) とし、東西基準座標軸は基-4・基-5 に直角に交わる軸で、26 ラインを設けた。絶対高は遺跡北側約 700 m の地点 (シヌグ堂遺跡近くにある) にある杭から遺跡内へ移動させた。その結果、次の値が求められた。基-5 ($H = 117.390$)、基-4 ($H = 117.533$)、基-3 ($H = 117.229$)。グリッドは Fig. 3 に示すように $4m \times 4m$ のグリッドを第1・2段丘に設定した。グリッド番号は東から西へ A・B・C ……、南から北へ 1・2・3 ……、とした。

(1) 第1次発掘調査 (1986年12月15日～1987年2月28日)

遺跡に入る道がないため、農道から遺跡までの伐採を行い道を確保する作業と遺跡内の伐採から開始した。この作業だけで、調査期間の $\frac{1}{4}$ を要した。

発掘調査は遺跡南側にある火立毛から着手した。B～D の 3～5 までの調査であり、この一帯から野面積みを主体とする近世の火番小屋が検出された。火番小屋の石積みは、方形である。火番小屋の東側に入口が確認できた。この火番小屋は柱を持たない構造で建てられていたことが判明したので、そのまま掘り下げた。その結果、小屋の下から竪穴住居 3 基と疊床住居 1 基が地山を掘り込んで検出された。これらの住居は竪穴 1・2 と竪穴 3・疊床 1 が切り合っていた。特に疊床住居は疊床面を丁寧に検出し、実測した後で掘り下げた。この地域の発掘が終了した後で、第1・2・3段丘へ移って発掘を行った。第3段丘では遺構等は確認できなかったが、第1・2

段丘は遺跡の保存は良好で、旧耕作地の下にそのまま残っている状態にあった。第1段丘では疊床式住居と考えられるものが1・2基確認できた。この時点で発掘を止めて、主体部分となつた第2段丘の発掘に集中した。第2段丘では地山直上（琉球石灰岩の風化した赤褐色土）を薄く削り取りながら遺構の輪郭を検出した。遺構は竪穴と第2段丘の縁辺やその周辺で土留めの石積みが確認された。竪穴内には土器や自然遺物などの遺物が多く、その上面には礫が集中した為、疊床の可能性も考慮されたので、実測を行なつてから掘り下げたが、最終的には竪穴遺構（7基）であることが判明した例もあった。竪穴遺構は重複が認められ、実測や発掘は進まない状態が生じた。完掘しないまま期限がきた。2ヶ月後には第2次発掘調査が予定されているので、地主の承諾を得て、埋め戻さないでビニール・シートを覆つて第1次発掘調査を終了した。

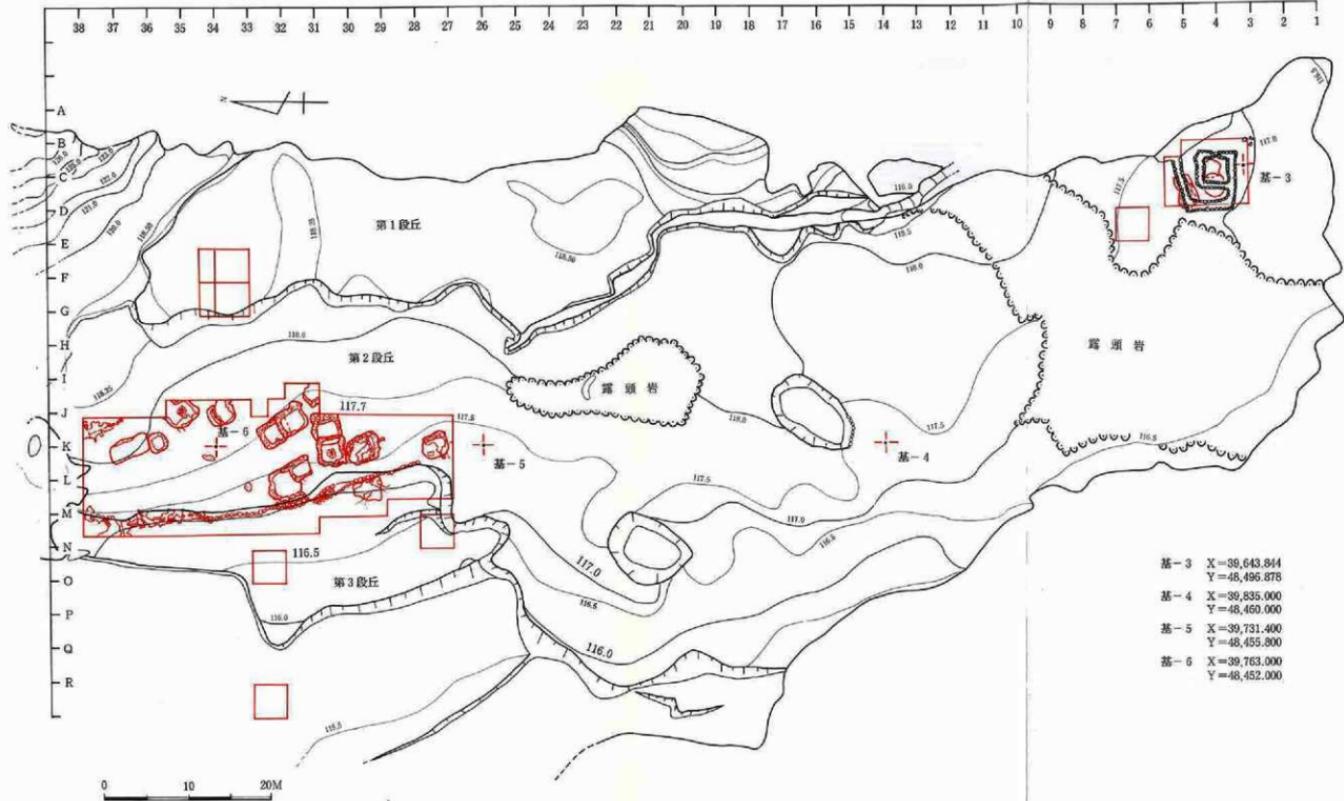
(2) 第2次発掘調査 (1987年5月11日～同年7月16日)

第1次発掘調査の際に切り開いた遺跡までの進入路および遺跡地には、草木が茂っていたので伐採作業から始める。伐採は遺跡東側の丘陵縁辺と崖下に降りる小道も実施した。伐採中に刈り残した地域にハブが一匹潜んでいたので、その処理に苦慮した。

伐採と並行しながら第1次発掘調査で掘り出した第2段丘の土砂の移動を行なった。この第2段丘では竪穴住居や土留め石積み遺構をブルー・シートで覆つて保護してあったので、これを取り除いて遺構の残りを発掘しながら柱穴や炉跡の検出を行なつた。発掘と並行しながら第1次発掘調査で一部分検出した遺構の実測も進めた。実測は水糸をグリッド（4m×4m）設定のとおり張り、さらに1m単位に水糸を張つて方眼に割り付けた。実測グリッドはI～Mラインの31・32で、竪穴住居跡の4～10号までの7基と土留め石積みの一部である（第1次発掘調査で検出した遺構）。

土留め石積み遺構は南と北側に延びていたので、M・Lラインの28～38まで拡げた。また、竪穴住居跡の拡がりを確認するために、これも南北に拡げた（I～Lラインの28～37）。

土留め石積み遺構は第2段丘の縁辺や法面に構築され、竪穴住居跡と並行する時期のもので、その性格から集落の境界として把握された。石積み遺構の規模は南北35m、高さ50cm前後の範囲で検出された。この石積み遺構の内側には広場とみられる空間や広場を中心として展開されたと考えられる竪穴住居跡群が検出された。竪穴住居は33ラインから北側で13～16・18・19号の6基が検出された。同ラインの南側では4～12・17号の10基が検出された。この間、発掘・撮影・実測の繰り返しをした。最終的には実測が遅れ、埋め戻しの作業と重なり、実測も調査終了日の1日前まで続いたが無事終了した。調査中に台風が接近したが、その影響はなかった。



(3) 第3次調査 (1988年2月29日～同年3月11日)

第3次調査は、地形測量である。第2次発掘調査で伐採した地域にも草木が茂っていたので、伐採と平行しながら調査を進めた。平板測量は3月2日から始め、3月4日に終了した。遺跡内に絶対高がなかった為、遺跡の北側にあるシヌグ堂遺跡近くで、県営の圃場整備事業が実施されていたので、その地区の基準杭（絶対高）から遺跡に移動した。この基準杭から遺跡までの距離は直線にして約700mを測った。遺跡内に移動した絶対高を基にして、25cm～50cm間隔で高低差を測り、縮尺1/400の地形図を作成して終了した。これまでの調査で、遺跡は北側にある小高い丘陵（標高126m）と琉球石灰岩の露頭部までは拡がらないことが判明し、遺跡は第1・2段丘までがその範囲であることが確認できた。遺跡の総面積は崖下を除いて6,128m²である。

第3節 調査組織

第1次発掘調査から第3次調査までの調査組織はつぎのとおりである。

調査指導

文化庁記念物課 文化財調査官 山崎信二（第1次発掘調査）

調査協力

沖縄国際大学 学長	高宮廣衛（第1次発掘調査）
琉球大学法文学部史学研究室 助手	池田栄史（第2次発掘調査）
浦添市立図書館 館長	高良吉吉（第3次調査）
糸満市企画課市史編集係	金城 善（第1次発掘調査）
与那城村教育委員会 課長	前原龍雄（第1～3次調査）
“ 文化財担当	糸数 学・新星敷文雄（同上）
今帰仁村教育委員会 文化財担当	宮里末廣（第2次発掘調査）
沖縄市立郷土博物館 職員	比屋根満（同上）
名護市教育委員会 文化財担当	鳥福善弘（同上）
沖縄国際大学考古学研究室 玉城安明・高良京子・知念奈美子・ 知花一正・山城安生（第2次発掘調査）	
“ 考古学研究会 園田淳美・宜保いづみ（同上）	

調査責任者

沖縄県教育委員会	教育長	米村幸政（第1・2次発掘調査）
“	“	池田光男（第3次調査）

沖縄県教育庁文化課 課長 比嘉賀幸（第1～3次調査）
" 課長補佐 西平守勝（第1・2次発掘調査）
" " 平田與進（第3次調査）

調査総括

沖縄県教育庁文化課 主幹兼係長 安里嗣淳（第1～3次調査）

調査事務

" 係長 小橋川順市（第1～3次調査）
" 主任 大山京子（"）
" 主事 本郷公朗（"）

発掘調査員

" 主任専門員 金武正紀（第1～3次調査）
" 専門員 金城龍信（"）
" 専門員 島袋洋（第3次調査）
" 専門員 金城透（"）

発掘調査作業員および補助員

沖縄国際大学文学部社会学科 下地傑（第1次発掘調査）
琉球大学法文学部史学科 江藤和幸（第2次発掘調査）
池原ヨシ・伊礼門サト・大屋梅子・奥間ユキ・東門キヨ・森東トミ・
森屋良子・門口益子・山城キク・山城ツネ（字上原）
安里フジ・金武トヨ（字桃原）

資料整備作業員および協力者

松川朝子・瑞慶覧尚美・高良三千代・池原直美・安次富智子・小嶽律子・
小嶽禮子・備瀬枝美子・請盛智秋・金城フミ・松木道代・金城トミ子・
山崎律子・石橋朝子・新城礼子・上地千賀子・平田幸子・中村美江子・
浜元春江。

第Ⅳ章 遺 跡

第1節 層 序

第Ⅰ層は層厚20~25cmの耕土。暗褐色で、僅かに遺物が検出される。第Ⅱ層は層厚が僅か2~5cmである。暗灰褐色土で、遺物は第Ⅰ層よりは若干多い。この層は全面に残っているのではなく、堆積土のやや厚い所に残っている。薄い所は耕作によって地表面まで攪乱されている。

第Ⅲ層は竪穴住居跡内に堆積している黒褐色土である。層厚は10~50cm。土器や角礫が大量に堆積している。陸産マイマイや海産貝などの貝殻や魚骨、イノシシ骨などの骨類も多い。

第Ⅳ層や第Ⅴ層は深い竪穴に堆積している。黑色土で土器が多い。層厚は5~25cm。竪穴住居跡内の堆積状況は遺構ごとに若干の違いがあるので、各竪穴住居跡については実測図と観察表に示した。ここでは主な層序についてのみ述べる。

Fig. 4はM-32・L-32グリッド北壁断面図である。第2段丘から第3段丘へ移行する所で、土留め石積みなどが理解しやすい。第Ⅰ層は第2段丘の耕土は約20cmであるが、第3段丘への法面で約40cmと厚い。第Ⅱ層は層厚が2~25cm、第2段丘の土留め石積みを包んでおり、石積みのあとに堆積した層であることが理解できる。第Ⅲ層の黒褐色土層は、第8号竪穴住居跡内から、土留め石積みの内側まで堆積している。土器が大量に検出された。第Ⅳ層と第Ⅴ層は第8号竪穴住居跡内に堆積している黒色土層で、土器が夥しく検出された。

Fig. 5はM-34・L-34グリッド北壁断面図である。第Ⅰ層は土留め石積みの内側と外側に堆積している。石積み外側の第Ⅰ層はaとbに分けた。1bは角礫の堆積層である。第Ⅱ層も土留め石積みの内側と外側に堆積している。土留め石積みは3段積み上げられているが、下の2段は第Ⅱ層に覆われており、第Ⅱ層より古い石積みと考えられる。

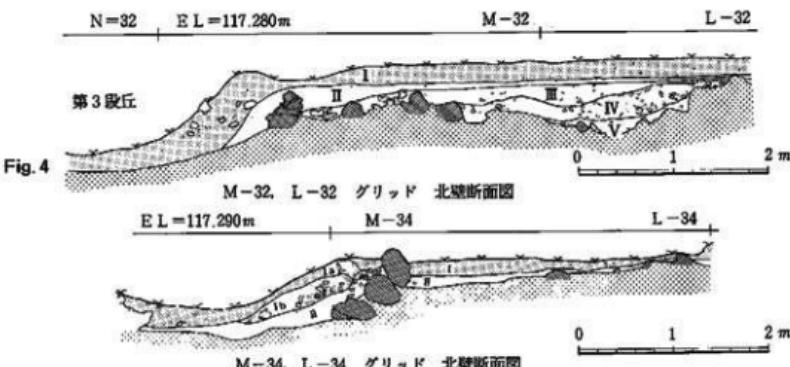


Fig. 4 層序断面図

第2節 遺構

(1) 穫穴住居跡

竪穴住居跡が20軒検出された。今回の発掘（800m²）は一部であり、全面発掘をすれば、50軒以上の竪穴住居跡群が検出されると考えられる。

重複 竪穴の重複は6例（1と2、5と6、7と8、9と10、13と18、19と20号）である。いずれも2つの竪穴の重複であり、シヌグ堂遺跡のように8軒とか9軒が重複するような複雑なものはなかった。なお、重複によって、60cm以上の深い竪穴か古い竪穴であることが確認された。

形状 岩盤に左右されて形がくずれているものもあるが、基本的には隅丸方形と方形（正方形と長方形）である。石積みで壁面化粧している竪穴はほとんど方形であり、石積みがなく地山を掘り込んで壁面としている竪穴は隅丸方形である。

規模 第3・14号竪穴のように1辺が2m以内の小さい竪穴や、第15・16号竪穴のように1辺が4m以上もある大きな竪穴もあるが、多くは1辺が2.2mから3m前後の竪穴である。なお、遺構觀察表に示した南北最大長、東西最大長は、石積みのあるのは石積み内側上場、石積みのないのは地山掘り込み上場を測定した。

深さ 60cm以上の深い竪穴（6・8・10号）、25~30cmぐらいの竪穴（1・2・3・4・7・9・11・12・13・15・17・18号）、20cm以下の浅い竪穴（5・14・16・19号）の3つに大別される。

壁 地表面を掘り込んで壁としたもの、岩盤を壁として利用しているもの、石積みで壁をつくっているものがある。石積みは深い竪穴では2・3段積み上げたのも見られるが、多くは1段である。また、扁平な石を立てて使用しているのも見られる（3・7・17号）。壁面の勾配は石積みのものはほぼ垂直になっているのに対して、石積みのないところはかなり傾斜した壁が多い。

床面 ほとんど地表面と岩盤面（尖った石はある程度削っている）を床面としているが、第11号や第13号のように張り床（黄褐色土）をしているのも見られる。なお、黄褐色の張り床はシヌグ堂遺跡でも検出されている。

炉跡 今回検出された20軒の竪穴住居跡のうち15軒で炉跡が検出された。残り5軒（2・3・4・18・20号）は一部の発掘なので、全面発掘をすれば検出される可能性が強い。1軒の竪穴住居跡に2つ以上の炉跡があるのは、同時に使用されたものではなく、炉が移動したものであることが切り合（重複）関係で確認できた（1・6・8・10~12号）。

今回の発掘で石窯い炉が2基（5・19号）検出された。凝灰岩をレンガ状に加工し、それを1段積んだ方形状の石窯い炉である。2基とも最も深い竪穴（5~15cm）のほぼ中央部に築かれている。シヌグ堂遺跡では竪穴住居跡内からは検出されてないが、疎床住居跡で同じような石窯い炉が2基検出されている。

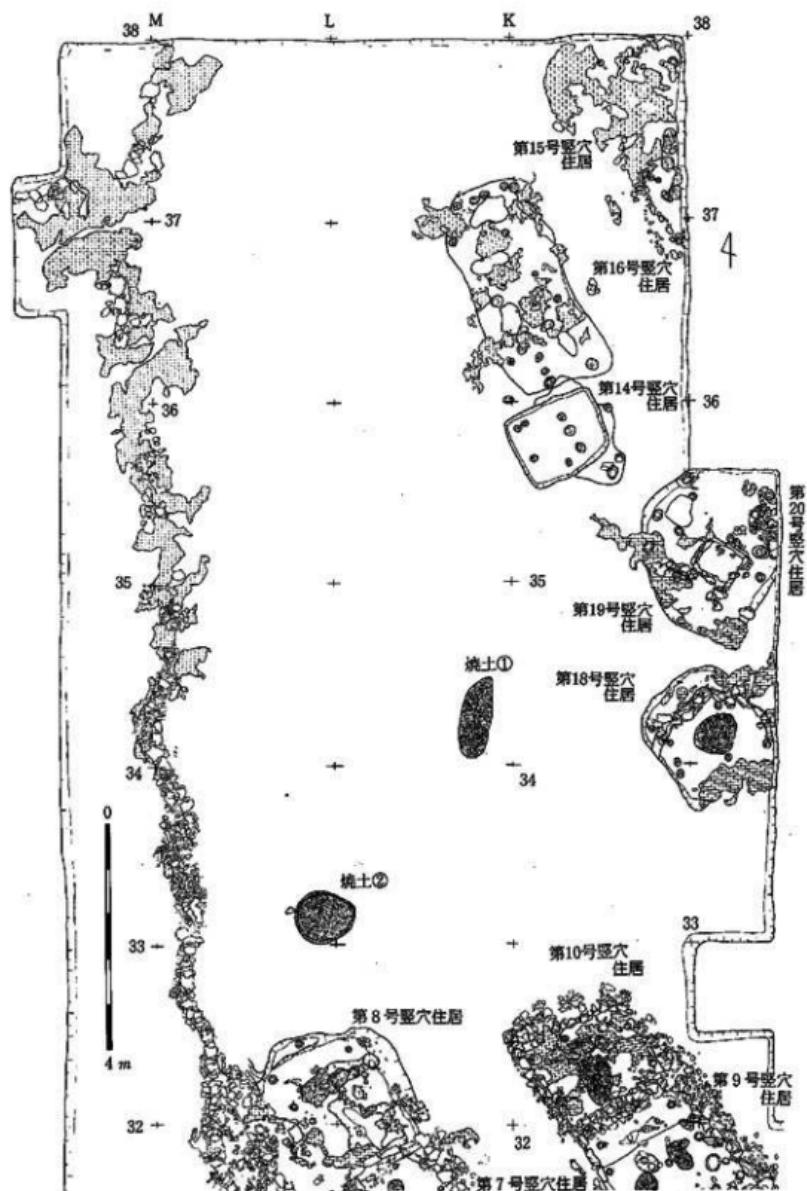


Fig. 6 土留め石積みと屋外焼土と広場
土留め石積み・広場・竪穴住居地の配置図

柱穴 穴の壁面に沿って柱穴が廻っている。柱の並び方はシヌグ堂遺跡のように整然としているのは少ないが、未発掘の20号竪穴以外はすべての竪穴で検出された。口径は10~25cm、深さは8~25cmぐらいである。

階段 第8号竪穴と第10号竪穴で1段の階段が検出された。8号竪穴は地山を削り出してつくった階段であるが、10号竪穴は琉球石灰岩を1段積んでいる。^(註1-4) いずれも60cm以上の深い竪穴であり、「深い竪穴には階段がつく」というシヌグ堂遺跡と類似している。

(2) 碓床遺構

琉球王府時代の火番小屋石積み下に碓床遺構の一部が検出された。柱大の角砾を敷き詰めた遺構である。炉跡や柱穴などの有無が不明なので、住居跡とはできないが、シヌグ堂遺跡では碓床住居跡が検出されているので、住居跡の可能性もある。

(3) 屋外焼土と広場

3基の屋外焼土が検出された。焼土①はK-34グリッドにあり、約180×70cmの精円形である。焼土②はL・K-33グリッドにあり、約130×115cmのほぼ円形である。焼土③はJ-29グリッドにあり、約90×30cmの精円形である。いずれも広場と考えられる所にある。特に①と③は弧状に並ぶ竪穴住居跡群の広場にある。ただ、これらの焼土は竪穴内の炉跡に比べて、焼土が薄く、長時間の使用は考えられない。屋内炉とは別の用途が考えられる。

(4) 土留め石積み

第2地区は3つの段丘で構成されている。東の断崖上を第1段丘（標高約118m）、その西側を第2段丘（標高約117m）、さらにその西側を第3段丘（標高約116m）とする。今回の竪穴住居跡のはほとんどは第2段丘で検出された。

土留め石積みは第2段丘と第3段丘の境に積まれたもので、総延長約35mである。石積みは地形に合わせて曲線的に積まれている。人頭大の石を2~4段積み上げられ、高い所は約50cm残っている。石積みは第1・2層に覆われており（Fig.4の断面図）、第2段丘の竪穴住居跡の時期に積まれたものと考えられる。

なお、この土留め石積みは、当時の地表面より10~30cmも高く積まれていることと、第2段丘で集中的に検出される竪穴住居跡が第3段丘では検出されないことなどから、第2段丘の集落境線石積みの可能性もある。しかも、集落の境線石積みは全国的にも検出例がなく、今後の状況に注目したい。

註1 金武正紀・比嘉春美ほか『シヌグ堂遺跡』 沖縄県教育委員会 1985年。

註2 金武正紀 「沖縄の縄文時代住居」 原像日本5 旺文社 1988年。

第Ⅳ章 人工遺物

第1節 土器・土製品

出土遺物の中で、最も多量に得られた。口縁破片だけでも2,699個、底部片313個が得られた。(Tab.1・2・3)。口縁・底部・土製品も含めて、基本的にA～H群に分類し、さらに群中で細分類を試みた。特に出土量の多い、E群は胎土等で細分した。個々の記述については、遺構別に觀察表を作成した。

1. A群土器

このグループは伊波式土器^(図1)・荻堂式土器^(図2)・大山式土器^(図3)・カヤウチバンタ式土器^(図4)と称されるものである。素地に石英・チャート片などが多く混入される。焼成は不良なものが目立つ。器形は深鉢形土器である。文様は叉状工具や単範工具で短沈線文や押し引き文などを施す。底部は平底である。典型的なものとして、Fig.32-1の伊波式土器、Fig.78-1の荻堂式土器、Fig.78-3の大山式土器、Fig.20-2のカヤウチバンタ式土器が出土している。

2. B群土器

このグループは室川貝塚^(図5)で型式設定された土器の一群で、室川式土器と総称されるものが主流となるものである。素地に石灰岩の粗粒や石灰質の砂粒などが混入される。焼成はA群土器よりも良好である。器形は深鉢形と壺形があり、前者が圧倒的に多い。文様は単範工具等で押捺刻文などを施す。無文の例も目立つ。底部は底径の小さいものが多く、底面を指などで窪ます例が少々ある。丸底や尖底もある。肥厚口縁が主体を占めている。肥厚の形態は豊富であり、型式が判るのは、カヤウチバンタ式や宇佐浜式土器の範疇に入るものののみに限られた。

I類：カヤウチバンタ式土器の範疇に入るもので、無文と有文がある。無文は30点・有文が17点得られた。(Fig.32-3, Fig.57-1)

II類：宇佐浜式土器^(図6)の範疇に含まれるもので、I類と同様に無文が59点・有文は6点を数えた。(Fig.27-3, Fig.73-3)

III類：基本的にはI・II類から外れるグループが主であるが、広義となる場合は、これに類するものも含まれるものもある。口縁形態などから次の8種類に細分した。

IIIa類：宇佐浜式と類似または近似した肥厚を造るもので、縦断面が三角形あるいはこれに近似するものである。(Fig.23-1, Fig.43-2)

IIIb類：宇佐浜式と類似または近似した肥厚を造るもので、縦断面が丸い肥厚となるものやカマボコ状となるものである。(Fig.20-4, Fig.27-4, Fig.73-6)。

IIIc類：口唇部を幅広く成形したものが主体を占める。肥厚形態からI～Hまでの3種に細分した。

IIIcイ種：口唇部成形は幅広で、肥厚帯とその直下とを区別する為、縦断面はハブラシ状の有段となるものが主である。(Fig.20-6, Fig.32-6)。

IIIcロ種：口唇部成形は幅広く、肥厚帯とその直下は有段ではなく、肥厚帯からゆるやかに脣部へ移行するものである。(Fig.20-7, Fig.43-3)。

IIIcハ種：口唇部の内側で、角がなくなり、丸く成形する為、口唇の幅が不明瞭なものである。肥厚帯およびその直下の成形はIIIcロ種と同様にゆるく脣部へ移行する。(Fig.8-1)。

IIId類：このタイプは肥厚しないものであり、外反する例が多い。口縁形態からI～Hの3種に細分した。

IIIdイ種：口脣部がゆるく外反するもの。(Fig.23-3, Fig.48-4)。

IIIdロ種：口脣部が「く」の字状に折れて外反するもの。(Fig.8-4, Fig.17-3)。

IIIdハ種：口縁が直口状となるもの。(Fig.20-8)。

3. C群土器

このグループは、B群に後続するもので、宰川上層式土器と称されているものが主流となっている。器面がアバタ状を呈するものが多いのも特徴のひとつである。器形は深鉢形が主で、壺形は少ない。底部は平底が多く、尖底・丸底の順に少なくなる。文様は単籠工具等による押捺刻文が主流となる。これも肥厚する例が多く、B群土器と同様に口縁形態で細分類を試みた。

I類：カヤウチバンタ式土器の範疇に入るもので、無文と有文がある。無文が7点、有文が3点得られている。(Fig.27-8)。

II類：宇佐浜式土器の範疇に入るもので、Iと同様に無文が圧倒的に多い。無文39点、有文4点が得られている。(Fig.8-8, Fig.32-8)。

III類：この手のものも基本的にはI・II類から外れるグループが主であるが、広義となる場合は、I・IIに類するものも含まれるものも若干ある。口縁形態などから次の8種類に細分した。

IIIa種：宇佐浜式土器に類似または近似する肥厚を造るもので、縦断面が三角形状もししくはこれに近似するものである。(Fig.8-7, Fig.27-9)。

IIIb種：宇佐浜式土器に類似または近似する肥厚を造るもので、縦断面が丸い肥厚となるものやそれに近似するものである。(Fig.8-9・10, Fig.13-3)。

IIIc種：口唇部を幅広く成形するものを主体とする。肥厚の形態から次の3種に細分した。

IIIcイ種：口唇部を幅広く成形し、肥厚帯とその直下は段を造らずゆるやかに胴部へ移行させるものである。(Fig.8-11, Fig.13-4)。

IIIcロ種：口唇部を幅広く成形する点で、IIIcイ類と共通するが、肥厚帯の幅が極端に狭くなるものや肥厚帯がなくなるものがある。肥厚帯とその直下はゆるやかに胴部へ移行させるものである。(Fig.9-12, Fig.74-12)。

IIIcハ種：口唇部の内側の角がとれて丸く成形するものである。IIIcロ類と同様に肥厚帯下や口唇部下からゆるやかに胴部へ移行させるものである。(Fig.74-13)。

IIId類は肥厚しないグループの土器で、外反する例が多い。次の3種に分類した。

IIIdイ種：口頸部の縦断面で、ゆるく外反するもの。(Fig.17-6, Fig.20-13)。

IIIdロ種：口頸部の縦断面で、「く」の字状に折れて外反するもの。(Fig.9-13)。

IIIdハ種：口唇部を尖らせて、ゆるく外反するもの。(Fig.27-10, Fig.74-13)。

4. D群土器

いわゆる宇佐浜式土器と称されるものである。この時期にも登場するカヤウチバンタ式土器も胎土・焼成等からD群土器に含めた。素地に粗い石英や雲母片等を多量に混和させる。器形は深鉢形が一般的で、蓋は少量得られている。文様を施す例は一例(Fig.43-4)のみ得られ、無文化が進行していることを裏付ける土器群である。(Fig.13-6, Fig.32-9)。

5. E群土器

この群の土器は、仲原遺跡やシヌグ堂遺跡^(註5)で多量に出土した土器で、古くは天久遺跡・荻堂遺跡^(註6)などからこの手の土器群に属するものが報告されている。器形は深鉢形・壺形があり、前者が圧倒的に多い。底部は尖底土器が多く、次いで丸平・平底の順に少なくなる。無文化は著しい。この群の上器が、本遺跡の主体となるもので、全体の約70%を占めている。素地等についても若干の分類を試みたので、一応、各類の概要を記した後で述べる。E群土器はI～VII類までに大別した。この中には九州縄文晩期土器の影響を受けたグループも含まれている。

I類：カヤウチバンタ式系統の土器で、肥厚帯が縦方向に長くなり、山形口縁を造る例が多い。(Fig.43-5～8)。

II類：口縁は肥厚しないものや目立たないものが多く、口縁に山を造る。(Fig.33-15・16)。

III類：宇佐浜式系統の上器で、肥厚帯が縦に長くなる傾向がある。口縁が山形とする例が多い。

(Fig.33-10~14)。

IV類：九州繩文晩期上器の影響を受けた土器で、口縁部にリボン状の突起を造るもの。肩部が「く」の字状に折れるものや口縁に方形状の突起を貼付けた碗などがある。(Fig.44-14, Fig.34-18, Fig.89-10, Fig.28-17)。

V類：口縁が肥厚しないもので、成形が雄なグループ。この手のものが、E群土器の大半を占めている。(Fig.28-13~16, Fig.34-19・20, Fig.38-2~6, Fig.44-13~15)。

VI類：肥厚口縁のグループである。肥厚の形態から次の4種に分類した。

　・三角形状 (Fig.34-21~23)。　・丸味を帯びるもの (Fig.34-24・25)。

　・方形状 (Fig.34-26~28)。　・逆「く」の字状 (Fig.44-20)。

E群土器は器壁の厚さや素地に混和される混入物等から以下のタイプに分類した。

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| イ. 厚手のタイプ | 1. 石灰質の微砂粒等が少量混入し、アバタ状を呈する。 |
| | 2. 石灰質の細砂粒・石英等が混入。 |
| | 3. 石灰岩の粗砂粒・貝片等が多く、混入する。 |
| | 4. 石英・雲母・石灰質の微砂粒等が混入。 |

ロ. 薄手のタイプ { 1. 微細な石英等が混入する。

これらは分類の後に追記する方で、観察表に旱示した。例としてEⅠイ1・EⅡイ4・EⅢロ1等と標記した。また、VI類の肥厚・口縁は、三角状のものは(△)、方形状のものは(□)として記した。

6. F群土器

奄美系の土器で、喜念I式土器^{喜念}、面縄西洞式土器^{面縄}がある。特に前者の例が多い。また、奄美系土器の影響を受けたものもこれに含めた。素地に雲母・石英等を混和させる。文様は凸帯文に点刻文などを施す。器形は壺形が多い。器壁は他の土器群より薄い点が、ひとつの特徴とみられる。喜念I式土器 (Fig.74-16)。面縄西洞式土器 (Fig.78-8)。

7. G群土器

G群土器としたものは、把手 (Fig.49-14~16, Fig.88-4・5, Fig.89-12)、注口土器 (Fig.78-9)、脚台・台付上器 (Fig.35-34, Fig.38-9, Fig.61-8)、瘤付き土器 (Fig.85-4) である。胎土・混入物から群が識別出来る資料は観察表中に所属群名を記した。その大半はE群土器である。

8. 底 部

底部資料も形態からイ～リ類までの9種類に分類した。また、胎土・混入物等から群が識別で

きたものは所属群名を観察表中に記載した。以下、各類の特徴を記する。

- | | |
|----|---|
| 平底 | イ. 底面からの立ち上がりは丸みを帯ながら胴部へ移行する。(Fig.87-6)。 |
| | ロ. 底面からの立ち上がりは直線的に開きながら胴部へ移行する。(Fig.35-30)。 |
| | ハ. 底径が小さく、底面を内側に指などで窪ませる。(Fig.17-8)。 |
| | ニ. イと同様に丸味を帯びるが、底径がイよりも小さい。(Fig.9-15)。 |
| | ホ. ロと同様に直線的に開くが、立ち上がりの箇所でくびれる。(Fig.20-14)。 |
| 丸底 | { ヘ. 丸底や尖り気味の丸底を含むものである。(Fig.35-31)。 |
| 尖底 | ト. 尖底。(Fig.17-9)。 |
| | チ. 乳房状尖底やこれに近似するもの。(Fig.35-33)。 |
| 不明 | { リ. 形状が破損の為、不明なもの。 |

9. 土 製 品

上製品は2点出土したいずれも上器の胴部片を研磨用の道具として利用したもので、研磨によって有溝状となっている。対象となるものとして木・骨・貝などの製品で、仕上げの最終的段階での研磨に利用されたものとして今のところ考えられた。(Fig.20-18, Fig.44-24)。

土 器 収 束

高儀遺跡から出土した土器で、主体となるのはE群上器であり、E群土器の中には仲原式土器と称されるものがある。E群土器は焼成も比較的に他の群より良好な例が目立った。また、この土器群の胎土・混入物等を分類した中で、イ1・イ2・ロ1が胎土は泥質のものが多く、イ3・イ4は砂質のものが目立った。つまり胎土・混入物等の面から精製と粗製が存在するのではないかということであるが、器形の成形や仕上げ(丁寧か・雑か)と精粗が一致するかどうかは今回の分類ではそこまでは至っていない。将来この視点から見ればかなり有効的な方法かと思われた。E群土器は概して、他の土器群と比較して成形等が確なものもある。例えば、EⅠ・EⅢの山形口縁の肥厚帯および、帯下の成形がラフなものがあった。また、外面の箇削りは他の群と比較(B・C群)して多用されている点が特徴として言える。

住居内の覆土から出土した土器の傾向として、A～C群土器は第1号礫床住居、第1号～第3号竪穴住居、第15・16号竪穴住居で多く出土し、D～E群土器が第4～14号竪穴住居・第17～19号竪穴住居から集中する。しかしながら最も重要なものは床着の上器であり、礫床・竪穴住居から確認できたのは3基であった。これは第5号・第9号・第13号竪穴住居で、いづれもE群土器

のV類が得られたので、E群期の竪穴住居として解釈して良いのではないかと思慮された。

本遺跡内から出土した土器の中で、今ひとつ気になるのはA群土器が出土したことである。この手のものが、遺跡内に遺構や小規模貝塚が形成されたのか、あるいは他所からの持ち込みなどによって入ってきたかである。この様な例はシヌグ堂遺跡^{〔復刻版〕}でも認められている。

本遺跡出土の土器から時期を述べるならば、沖縄貝塚時代前期末頃～中期中頃（縄文後期後半～晩期後半）に比定されるものかと推定され主体時期は、中期中頃と考えられる。

註

- 註1. 大山柏「琉球伊波貝塚発掘報告」（復刻版） 第一書房 1982年。
- 註2. 松村瞭「琉球荻堂貝塚」『人類学教室研究報告』 第3編 東京帝国大学 大正9年。
- 註3. 賀川光夫・多和田真淳「宜野湾大山貝塚の調査概要」『文化財要覧』 1959年。
- 註4. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年」『文化財要覧』 1956年。
- 註5. 高宮廣衛・比嘉賀盛「沖縄市室川貝塚発掘調査速報」 沖国大考古 創刊号 沖縄国際大学考古学研究室 1976年。
- 註6. 高宮廣衛・島袋優子・阿利直治・島袋洋「室川貝塚第3・4次発掘調査概報」 沖国大考古 第3号 沖縄国際大学考古学研究室 1979年。
- 註7. 註4と同じ
- 註8. 註6と同じ
- 註9. 当真嗣一・上原静「伊計島の遺跡」（神山遺跡・仲原遺跡確認調査概報） 沖縄県教育委員会 1981年。
- 註10. 金武正紀・比嘉春美・金子浩昌「シヌグ堂遺跡」（第1・2・3次発掘調査報告） 沖縄県教育委員会 1985年。
- 註11. 高宮廣衛「天久遺跡」「那覇市の考古資料」 那覇市史 資料編 第1巻1 1968年。
- 註12. 知念勇・高宮廣衛「荻堂遺跡調査概報」 南島考古2号 1961年。
- 註13. 白木原和美他「手広遺跡」 熊本大学文学部考古学研究室 1986年。
- 註14. 河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」 鹿児島考古 第9号 1974年。
- 註15. 註14と同じ。
- 註16. 上原静・当真嗣一「仲原式土器の提唱について」 紀要 第1号 沖縄県教育委員会文化課 1984年。
- 註17. 註10と同じ。

Tab. 1 口緣部分類別出土狀況

番 号	A			B			C			D			E			F			G		
	力 小 計	上 手 計	下 手 計	左 手 計	右 手 計	中 手 計	I a	I b	I c	II a	II b	II c	III a	III b	III c	IV a	IV b	IV c	小 計	合 計	
11	■	1	1			1							1							1	1
号	■	1	1	1	1	1							1	2	4	2			1	1	
小計	1	1	2	1	1	1							1	1	4	5	3		5	29	13
12	■					1	2	3											2	1	6
号	■					1													15	34	97
小計	1					1	2	3											17	35	103
13	■	2	2	4	1	6			3	1	6								1	4	
号	■					3			2										5	31	30
小計	6	1	7	3	2	1			2	1	6								6	31	30
14	■	1	1	1	1	2			3	1	1								1	1	
号	■					1	2	3	1	1	5	1							1	1	
小計	1	2	3	2	5	1	1	9	1	1								2	4	1	
15	■	3	2	6	3	2	11	2	10	1	10	2	1	2	4	4	2		1	1	
号	■					3	2	11	2	10	1	10	2	1	2	4	4		1	1	
小計	3	2	5	3	2	11	2	10	1	10	2	1	2	4	4	2		1	1		
16	■	2	1	8	1	2	4	1	10	1	3	2	1	2	3	2	1		1	1	
号	■					8	1	2	4	1	10	1	3	2	1	2	3		1	1	
小計	10	2	2	2	5	2	21	3	3	3	3	43	4	9	10	1	4	1	30	21	
17	■					1													3	1	
号	■					1													1	1	
小計	1					1													2	4	
18	■																		2	1	
19	■																		5	3	
号	■																		2	3	
小計	1																		19	1	
石 根 各 種 類	■	1	3	2	5	1													21	1	
小計	4	2	6	1															32	1	
E	■																		39	1	
33	■																		28	1	
小計	1	3	1	1	1	1													3	1	
F	■																		6	1	
34	■																		9	1	
小計	1																		22	1	
F	■																		6	1	
34	■																		7	1	
小計	1	1		2	2	5	1												3	1	
F	■																		7	1	
34	■																		9	1	
小計	1	1		2	2	6	1												22	1	
G35	■																		1	1	
小計	1	3	1	1	2	1	5	2	1	1	10	2	3	4	3				38	1	
G36	■																		17	1	
小計	1	1	2	1	6	2	1	2	2	20		2	3	4	3				55	1	
G37	■																		26	1	
小計	1	1	2	1	6	2	1	2	2	20		2	3	4	3				95	1	
合計	57	32	89	17	30	6	59	29	68	9	44	8	20	26	33	9	3	7	1	439	
																			189	37	
																			192	65	

Tab. 2 底部分類による出土状況

群 分類 別	底部分類	平底		丸底		尖底		不明		小計
		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	
A	3号	III								1
	4号	II	1							1
	5号	III	3							3
	6号	III								0
	7号	III					2	2		4
	8号	III					3	7		10
	小計		4							14
	レキ1	II						1	1	2
B	1号	III						1	1	2
	2号	IV						1	1	2
	3号	III	1	1			1	3	6	10
	"	IV						1	1	2
	4号	I		2				2		4
	"	IV						2		2
	5号	II						1		1
	6号	III								0
	7号	III								0
	8号	III								0
	9号	III								0
	10号	III								0
	11号	III								0
	12号	III						1	1	2
E	13号	II						1	1	2
	14号	III						1	1	2
	15号	III					2	3		5
	"	IV								0
	16号	III		1	2		2	2	1	8
	17号	I					1	1		2
	18号	III						1		1
	E・34	I						1		1
	F・33-34	III	1					1		1
	小計	III	1	3	4	5	17	12	8	66
C	レキ1	II					1			1
	1号	III								0
	2号	I					1			1
	"	III						1		1
	3号	I					1	1		2
	"	III					1	1		2
	4号	I						2		2
	"	III						1		1
	5号	II								0
	6号	III					2	1		3
	8号	III						2		2
	14号	I						1		1
	15号	III								0
	17号	II								0
F	19号	II								0
	E・33	I					1			1
	E・34	III								0
	F・33	I								0
	F・34	III								0
	M・32	I								0
	表様									0
	小計		1	2	3	3	3	4	1	23
	合計	1	8	6	8	20	15	12	3	96

出上 届届	底部分類	平底				丸底				尖底				不明				小計
		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	
4号	I																	1
5号	II																	4
6号	III																	2
8号	I																	12
E	V																	51
9号	I																	2
10号	I																	6
11号	III																	1
12号	III																	7
13号	I																	1
14号	III																	1
15号	IV																	1
17号	I																	1
19号	III																	1
E・34	I																	1
F・33-34	III	1																1
小計		1	3	4	5	17	12	8	2	14	66							18
レキ1	II					1												1
1号	III																	1
2号	I					1												2
"	III					1												2
3号	I								1									2
"	III								1									2
4号	I							1	1									8
"	III							1	1									1
5号	II																	1
6号	III								2	1								3
8号	III								2	1								3
14号	I								2	1								3
15号	III																	3
17号	II																	3
19号	II																	3
E・33	I																	3
E・34	III																	3
F・33	I																	3
F・34	III																	3
F・33-34	III																	3
F・34	I																	3
M・32	I																	3
表様																		3
小計																		3
合計	1	8	6	8	20	15	12	3	3	23								1
表様																		217

第2節 石器・石製品

A 石器

石器は破片も含めて320点が得られた（Tab. 3）。この中で器種が明確なものは石斧・磨石・砥石・石皿であった。石製品は未製品を含めて、8点が得られた。石斧と磨石は量的に多く出土したので細分類を行った。石器及び石製品等も観察表を作成した（Tab. 4）。以下。石斧。磨石・砥石・石皿・石鑑・スクレイパー・未製品・転用品・再利用品・用途不明の順に記す。

1. 石斧

石斧は完形品および破損品を含め、23点得られた。但し、刃部・頭部の破片は分類から除外した。石斧は平面形態・製作技術・大きさなどから以下のとおり細分した。分類基準を略記する。個々の観察は観察表にして記した。完形品および破損品を含めて分類を試みた。

イ 平面形態による分類

I : バチ形（抉りを入れたものを含む）。完形品16点。破損品1点。

II : 短冊形（　　）”。完形品5点。

III : 逆バチ形。 完形品1点。

ロ 製作技術等による主な分類。

A : 斧身（画面：両側面）が研磨によって成形されたもので、いわゆる定角式石斧。

完形品5点。

B : 斧身の両側または一側面に敲打がみられるもの。

完形品13点。破損品1点。

C : 斧身は主に敲打で整形され、研磨は部分的に限られるもの。

完形品4点。

ハ 基端から刃端までの長さによる分類。

S : 4.0～6.9cm。 完形品3点。

M : 7.0～9.9cm。 完形品10点。

L : 10.0～12.9cm。 完形品7点。

LL : 13.0～26.9cm。 完形品2点。破損品1点。

ニ 刃部の幅による分類。

小 : 2.0～3.9cm。 完形品3点。

中 : 4.0～5.9cm。 完形品10点。破損品1点（推定復元）。

大 : 6.0～7.9cm。 完形品7点。

特大 : 8.0～9.9cm。 完形品2点。

ホ 刀部平面観による分類。

- 1 : 直刃。 完形品 1 点。破損品 3 点。
- 2 : 円刃。 完形品 14 点。破損品 3 点（推定復元）
- 3 : 偏刃。 完形品 1 点。―――。
- 4 : 再生刃。―――。破損品 1 点。

ヘ 刀部正面観による分類。

- イ : 直線。完形品 11 点。破損品 8 点（推定復元）。
- ロ : 外湾。完形品 1 点。破損品 1 点（“”）。
- ハ : 内湾。完形品 2 点。

ト 刀部側面観による分類。

- a : 両面から均等に研ぎ出して刀を付ける（片刃的両刃も含む）。
- 完形品 10 点内 6 点が片刃の両刃。破損品 2 点。
- b : 裏面から主に研ぎ出して表面寄りに付刃する。完形品 5 点。
- c : 表面から主に研ぎ出して裏面寄りに付刃する。完形品 6 点。

観察表中の分類には上記の分類を組み合わせて表記した。例：Ⅱ C L 大 2 イ a とし、破損品については（Ⅰ B） M 中（2 イ） a と記した。

2 磨 石

磨石の完形品および破損品は、28個が得られた。なお、磨石の小破片等は分類から除外した。分類は下記のとおり行った。個々の観察は表に記した（分類の記入例として、Ⅱ S A ロ 4 とした）。

イ 平面形態による分類

- I : 円球状。 完形品 2 点。
- II : 楕円形状。 完形品 15 点。破損品 4 点。
- III : 四角長方形状。 完形品 2 点。破損品 2 点。
- IV : 不定期。 完形品 1 点。
- V : 破損品形態不明。 完形品 2 点。

ロ 長軸（長さ）による分類。

- S : 5.1～9.4cm。 完形品 8 点。破損品 2 点。
- M : 10.2～15.6cm。 完形品 12 点。
- L : 18.0～20.4cm。 完形品 3 点。
- LL : 21.0～30.0cm。 完形品 3 点。

ハ 重量による分類。

- A : 130～449 g。 完形品 8 点。破損品 2 点。

B : 450~1,010 g。 完形品12点。

C : 1,791~2,800 g。 完形品 3点。

D : 3,450~6,000 g。 完形品 3点。

ニ 磨石の最終形態による分類

イ：完形（ほぼ完形品も含む）。 完形品16点。

ロ：破損。 破損品12点。

ホ 各部位における使用の主な状況による分類。

1 片面は摩滅し、他の面に敲打が認められるもの。

完形品 4点。破損品 1点。

2 両面は全体的に摩滅するかあるいは部分的に摩滅する。他は敲打。

完形品 8点。破損品 3点。

3 両面と両側面が部分的に摩滅し、他は敲打が認められるもの。

完形品 3点。破損品 1点。

4 片面と一側面が摩滅し、他は敲打が認められるもの。

完形品 1点。

5 全体的に摩滅し、敲打は片面ないし一側面に部分的に認められるもの。

完形品 1点。

6 両面・一側面が摩滅し、他は敲打が認められるもの。

完形品 4点。破損品 1点。

7 両面・一側面・一端面が摩滅し、他は敲打を施すもの。

完形品 1点。

3 砥 石

砥石は2点得られた。その内の1点は第13号竪穴からである。他は近世の延行として考えられるものが石積み遺構の上部から出土した。（Fig.67-1, Fig.92-6）。

4 石 皿

石皿も2点得られた。表採品とE-36グリットからのものである。（Fig.94-14, Fig.95-5）。

5 石 鋸

石鋸は6点が得られた。いずれも調整刃鋸（打製）で成形されたものである。素材は黒曜石製2点（Fig.29-1, Fig.95-2）、チャート製3点（Fig.58-2・3, Fig.82-1）、石英製1点（Fig.24-1）。

6 スクレイパー

チャートの剥片を用いたもので3点が得られた。いずれも剥片の周縁の一部に非常に細かい調整剥片離を加えて付刃する。(Fig.58-4~6)。

7 未 製 品

石斧の未製品が5点が得られた。次の様に分類ができた。荒粗りの段階とみられるものが1点(Fig.98-5)・調整剥離と敲打を加える段階のものが1点(Fig.18-1)・調整剥離・敲打以外に研磨を一部施すものが2点(Fig.58-8, Fig.93-4)。調整剥離・敲打を施すが、研磨が入っているかどうか不明なものが1点(Fig.93-6)得られた。

8 転 用 品

石斧破片もしくは石斧から敲打器・磨石・皮なめし用に転用されたもので、4点が得られた。
敲打器2点(Fig.54-9・10)。磨石1点(Fig.58-9)。皮なめし用1点(Fig.92-2)である。

9 再 利 用 品

これは石斧破片を磨石として再利用したみられるものである。5点が得られた。(Fig.10-2, Fig.40-3, Fig.93-7・8, Fig.95-3)。

10 用 途 不 明

用途不明は5点得られた。機能が特定できないものである。実用的なものが3点(Fig.24-5, Fig.54-11, Fig.94-15)。非実用的なものが1点(Fig.95-4)。製品がどうか判然としないものが1点(Fig.92-7)。

B 石 製 品

石製品および未製品は8点が得られた。素材は粘板岩・千板岩等を用いている。装身具の一種として考えられるものが6点得られた。3点は千板岩・粘板岩を薄く加工したもので2点は付刃する(Fig.50-1, Fig.88-1)。他の1点も薄く加工し、縁辺に抉りを入れる(Fig.58-1)。また、これに属するものとして考えられるものが3点得られている。いずれも有孔のものあり、千板岩・泥岩ノジュール・ヒスイを素材とする。(Fig.75-2, Fig.88-2, Fig.95-1)。

石製品の未製品は2点出土しており、2点とも研磨を部分的に施す(Fig.40-1, Fig.75-1)。素材や用途が判然としないものが1点得れている。板状に成形され、側面近くを有段するものである(Fig.40-2)。第7号住居床面から出土している為、将来、素材の細かい分析が必要であろう。

石器 収 束

石器の中で特定できた器種は石斧・磨石・砥石等の6種であった。石斧では定角式石斧が得られ、この時期の代表的な石斧として再認識できた。この手の石斧は類似としてシヌグ堂跡や室川貝塚などを出土している。^(註1)

石斧の重量に着目した場合、平均は50~250gのものが多かった。軽いものは21gを量り、小型のノミと見られる。重いものは2,100gの例があり、県内でも大型の部類に入っている様である。

石器の出土傾向から注目されたのは、第1号縫床・第1~3号竪穴・第15・16号竪穴住居からは石斧の完形品は出土していないことである。これらの6基の竪穴は、土器分類のA~C群期の古い住居群であり、住居を放棄する際に使用可能な石斧を持ち出していることが推定された。従って、石斧をすべてE群期（土器分類）の所産とするには不十分であった。

砥石は石皿・石斧や磨石の出土量から見ても極めて少ない状況が窺えた。石縫の中で、黒曜石製のものは、素材自体が本県では産出しない為、九州地方からの搬入されたものである。この手の資料は地荒原遺跡などで出土している。また、石英製の石縫は、県内では今のところ報告例がなく、今後の資料に期待されるところである。^(註2)

磨石の中には白木原和美氏が命名したクガニイシ（A型）と称される資料（Fig.63-6）も得られている。沖縄ではクガニイシ（A型）はこれまでに報告例がなく、本遺跡が最初の発見例となった。これも第12号竪穴の第3層から出土し、時期的にも符合する。

石製品の中では、ヒスイ製として考えられる装身具系統のものが得られている。ヒスイも本県に産出しない為、産出地は九州以北にあり、これも搬入されたものである。ヒスイ製のものは、住居や石積み遺構内からのものではなく、時期を特定するには困難な状況にあった。類例資料も少ないのである。

註

- 註1 金武正紀・比嘉春美・金子浩昌「シヌグ堂遺跡」（第1・2・3次発掘調査報告）沖縄県教育委員会 1985年。
- 註2 高宮廣衛他「室川貝塚第4次発掘調査概報」 沖国大考古 第6号 沖縄国際大学考古学研究室 1982年。
- 註3 安里嗣淳・大城慧他「地荒原遺跡」（県道10号改良工事に伴う発掘調査報告） 沖縄県教育委員会 1986年。
- 註4 白木原和美「クガニイシ」法文論叢第41号 熊本大学法文学会 1978年。
- 註5 富山県埋蔵文化財センター「ひすい」（地中からのメッセージ）特別企画展 富山県教育委員会 1987年。

Tab. 3 石器出土一覧表

器種 出土 グリッド編	石 斧	磨 石	砥 石	石 皿	石 鐵	撲 器	未 製品	転 用品	再利 用品	用途 不明	破 片 石斧(?)磨石(?)	小 計
第1号縦床 I		1								1	4	6
	II	1								1	3	5
	III								1		1	2
	小 計	2							1	2	8	13
第1号豊穴 I										2	1	3
	II									1	1	2
	III	1								1	1	3
	IV									1	1	1
小 計		1								4	4	9
第2号豊穴 I							1					1
	II										14	14
	III									2		2
	IV										1	1
小 計							1			2	15	18
第3号豊穴 II											14	14
	III										1	1
	IV										15	15
小 計												
第4号豊穴 I				1						1	3	5
	II	1								1	1	3
	III	2									2	4
	小 計	3		1					1	1	6	12
第5号豊穴 II											2	2
	III	2	1			1				1	1	6
	小 計	2	1			1				1	3	8
第6号豊穴 III	1	1								2		4
	小 計	1	1							2		4
第7号豊穴 II		1										1
	III	2								2	1	5
	小 計	3								2	1	6

器種 出土 グリッド層	石 斧	磨 石	砥 石	石 皿	石 鐵	鐵 器	未 製品	転 用品	再利 用品	用途 不明	破 片 石片(?)磨石(?)	小 計
第8号竪穴 I										2		2
										3	8	15
			4							1	4	5
										6	12	22
第9号竪穴 II										1	1	2
										1	9	13
	2	1								2	10	15
第10号竪穴 III	1											1
	6										3	2
	1										1	3
	8									1	4	5
床 着												1
												1
												1
小 計												18
											2	2
												4
											2	6
小 計	1	1					1	3	1			12
	2	4								1	9	16
第11号竪穴 I	2	4									1	9
	2	4									1	16
小 計											4	12
											2	6
											4	12
第12号竪穴 III											1	1
												1
												1
小 計												1
												1
												1
第13号竪穴 III											2	2
											2	2
												2
小 計											3	5
											3	5
												1
第14号竪穴 III											1	1
											1	1
												1
小 計											2	2
											2	2
												2
第15号竪穴 III											3	5
											3	5
												1
小 計											3	5
												1
												1
第16号竪穴 III											1	1
											1	1
												1
小 計											2	2
											2	2
												2
第17号竪穴 I											1	4
											2	4
											7	10
小 計											3	3
											9	17
												1

器種 出土 グリッド番	石 斧	磨 石	砥 石	石 皿	石 鏃	振 櫛	未 製品	転 用具	再利 用品	用途 不明	破 片		小 計
											石斧(?)	磨石(?)	
土留め石積み I	1	2	1					1		1	8	12	26
II		1								4	6		11
III										2			2
小計	1	3	1					1		1	14	18	39
E - 33・34 I		1		1						4	1		7
II										2	2		8
III	3						1			6	3		15
小計	3	1		1			1						
F - 33・34 I		7						2		1	2	22	34
II		7						2		1	3	3	6
小計		7								1	5	25	40
表 探		1		1	1								3
その他の	1									1	11	14	26
グリット II												3	3
小計		1		1	1					1	11	17	32
合 計	23	34	2	2	6	3	5	1	1	5	72	166	320

Tab. 4 石製品及び未製品出土表

グリット・層	装身具			未製品	小計
	付 刀	抉り入り	有 孔		
第7号竪穴 III				1	1
第9号竪穴 III	1				1
第11号竪穴 床着		1			1
第15号竪穴 III			1	1	2
第19号竪穴 III	1				1
" IV					1
R - 32 I				1	1
小 計	2	1	3	2	8

第3節 骨・貝製品

骨製品

実用品と考えられるものは骨針、骨錐、ヘラ状製品、他で計26点、装飾品と考えられるものはイノシシ牙製品、サメ歯製品、他の計9点の総計35点の出土である。

実用品

骨針は4点出土した。いずれもイノシシの肺骨をもちいたものである。

骨錐は6点出土した。イノシシの尺骨、 Tab.5 骨製品出土状況

脛骨をもちいたものとジュゴンの肋骨をもちいたものがある。ジュゴン製のものはシヌグ堂遺跡の分類に従うと無孔のタイプが出土している。

ヘラ状製品は4点出土した。トリ、ジュゴンなどの素材がみられる。

管状製品は2点出土したがいずれも9号遺構で同一個体と考えられる。報告例は少なくシヌグ堂遺跡に類似。材質は異なるようである。

他にジュゴンの肋骨を加工したものが出土している前述した製品に分類できないものであるが主に利器として用いたものと考えられる。

装飾品

イノシシの牙を加工したものが2点出土した。加工は基部と先端部に穿孔するものでペンダントにしたと考えられる。

サメの歯の加工品は2点出土した。イタチザメ、アオザメの2種があるが後者は化石の可能性もある。

サメの脊椎の加工品は1点出土した。ビード状に使用したと考えられる。

リクガメの背甲板に6個の穿孔を施したもの(Fig.71)が出土したが他に報告例はなく今後の資料の追加を持って用途を検討したい。

出土地	針	骨錐		ヘラ状		管状		ジュゴン・その他		イノシシ		サメ歯		リクガメ	小計	
		イノシシ	ジュゴン	製品	品	状	製品	シヌグ	シヌグ	の他	シヌグ	の他	歯	脊椎		
1-2	II					1										1
碑敷1号																1
3	II															1
4	II															1
5	II			1												1
	III				1											2
6	III					1										1
7	III						1									1
8	III			1							1					2
9	III						2									2
10	II															
	III	3	3				1									7
	IV	1														2
12	III										1	1				2
13	III							1								1
14	II												1	1		2
	III												1			1
15	III															
16	II									1						1
18	II						1									1
E33	II								1							1
その他	I															
合計		4	3	4	4	2	5	2	4	2	1					31

貝製品

実用品と考えられるものは貝刀、貝斧、二枚貝有孔製品（貝縫）、スイジガイ、ホラガイ系利器、ホラガイ有孔製品、ヤコウガイ製貝匙を計31点、装飾品と考えられるものは貝輪、オオベッコウガサ有孔製品、ビード、その他の計31点、総計62点の出土である。

実用品

貝刀はチョウセンハマグリ3点、シレナシジミ6点、リュウキュウマスオ3点、計12点の出土である。実用品の中で最も多い。

附刃の範囲についてFig. 6'のシヌグ堂遺跡の模式図を基準にした。これによると①～⑦の範囲に集中する。今回、報告例の少ないチョウセンハマグリが出土したことが意義深い。

ヤコウガイの螺蓋貝斧は5点得られた。附刃の範囲については前者と同様、シヌグ堂遺跡の模式図を基準にした。(Fig. 6'')

これによると④～⑩の蓋の薄い部分に打割するものが多い。

本品の用途について、製品名についてはいろいろな説があるが基準を設定し、今後分類しながら検討していることがやまられる。

二枚貝有孔製品はカワラガイ、リュウキュウマスオがそれぞれ1点のみ得られた。いずれも10号遺構の出土である。

利器はスイジガイ2点、イトマキボラ、オニコブシが出土した。スイジガイの突起の呼称についてはFig. 6''の上原氏のもの用いた。いずれもNo.1の突起に加工らしきものが確認される。また第12号遺構の床着

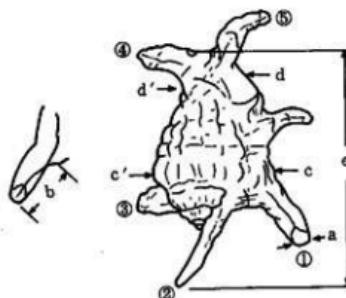
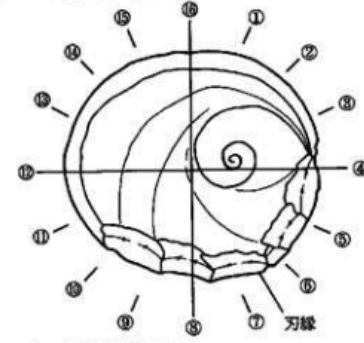
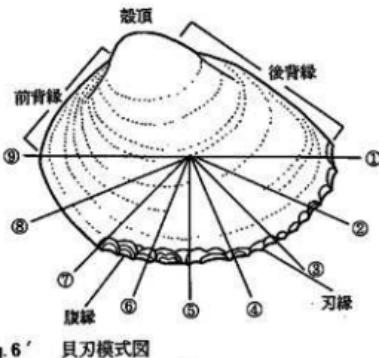


Fig. 6'' スイジイ製利器突起番号及び各部の計測 (上原静氏による。)

面から出土しているがこれはシヌグ堂遺跡で2つの竪穴遺構から炉の直上から出土した例もあわせると本品の用途を考えるうえで意義深い。

ホラガイ有孔製品は2点えられた。いずれも10号遺構の出土である。殻口の裏面が大きく割れているのが特徴である。

ヤコウガイ製貝匙は5点得られたがすべて破片である。

装飾品

貝輪はオオベッコウガサ4点、サラサバティ4点、ゴホウラ1点、メンガイ1点の計10点で最も多いため、そのほとんどは未製品である。

ビードは製品4点、未製品1点の出土である。すべてイモガイ科の殻頂部を用いたものであるが、Fig.59のように磨耗した貝に研磨痕をほどこしたもの出土した。遺跡内から食用にできない摩耗した貝が出土する例が見られたが本品の出土により製品に加工するために意識的に持ち込んだ可能性が高くなかった。

イモガイ科有孔製品7点出土した。タヤガサンミナシガイ、ハナイモなどで同系統の模様をもつものでなんらかの関係が想定されるが今後の資料の追加をまって検討したい。

タケノコガイの体層を研磨したものは宇宿遺跡で人骨の足の近くから出土した例があり、また、ウミウサギも報告例は少ないが装飾品と考えられる。

オオベッコウガサガイの有孔製品は波ノ上洞穴遺跡で人骨とともに出土した例がある。

まとめ

以上、骨・貝製品について概略したが、両者とも10号遺構に集中して出土することから他の遺物とも検討を要するが本遺構は遺跡の中心的性格を持つ感をうける。骨針、骨錐や貝刀、貝製利器、ホラガイ有孔製品等の実用品などが本遺構に集中することみるとその性格も想定される。

これらの骨・貝製品についてはすぐ近くにはほぼ同時期の遺跡であるシヌグ堂遺跡、仲原遺跡があり、遺跡間や遺構間の遺物の検討をするより具体的に浮き彫りされると考える。今回は時間の都合上報告のみに留め今後の研究課題としたい。

註

註1 「シヌグ堂遺跡」（第1・2・3次発掘調査報告） 沖縄県教育委員会 1981年。

註2 上原静「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』 第7号 1981年。

註3 鹿児島県笠利町教育委員会『宇宿貝塚』 1979年。

註4 高宮廣衛「波ノ上洞穴遺跡」『那覇市の考古資料』 那覇市史資料篇 第1巻1
1968年。

Fig. 6 貝製品出土状況

製品名	出土地	貝 刃			螺			収具			利 器			貝 輸			有 札			製 品			合			
		チハ ヨマ ウダ セリ	シ レナ ジミ	リマ コウ スギ ウオ	カ ラ ガ イ	カ ラ ガ イ	リマ コウ スギ ウオ	ス ジ ギ オ	トマ キボ ラ	ヤ コ ウ ガイ 貝 殻	サ ラ バ ティ	ホ ウ ガ イ	メ ン ガ イ	ゴ ラ イ	ビ ー ド	タ ケ ノ コ ガ イ	モ ガ イ	ウ ミ ウ サ ギ	オ ベ ッ コ ウサ	ホ シ ダ カラ	計					
5	III																						1			
6	III	3																						3		
8	III																							1	2	
9	III		1																					1	4	
10	II				1																			1		
	III	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	3	4	1	1	2	1	1	2	26			
	IV																1							1		
11	I																							1	1	
12	III																1							1	3	
13	I	1															1							1	1	
14	I																							1	1	
15	III																	1						1		
FE33	III																1	1	1				2	6		
その他		3	6	3	5	1	1	3	2	2	5	4	4	1	1	4	7	1	1	5	1	62	5			
合 計		3	6	3	5	1	1	3	2	2	5	4	4	1	1	4	7	1	1	5	1	62				

第V章 検出遺構と出土遺物

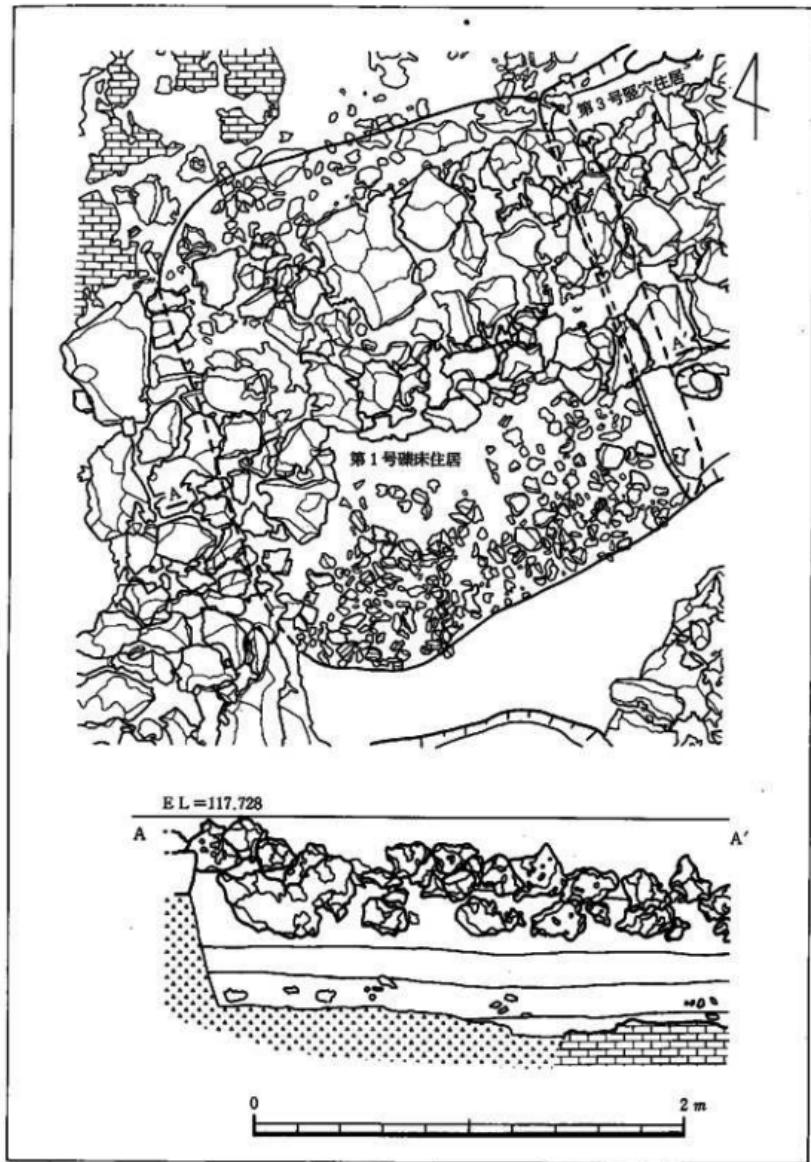


Fig. 7 第1号砾床住居跡実測図

Tab. 7 第1号縄床住居遺構

位置	地 区	第2地区 C-4・5グリッド							
	重 複	第3号竪穴を切っており、第3号竪穴よりは新しい。							
規 造	形 状	方 形							
	規 模	約200cm × 200cm							
	床 面	こぶし大の角砾を敷き詰めている。							
	炉 跡	発掘できた部分においては検出できなかった。しかし、未発掘の琉球王府時代の火番小屋石積みの下にある可能性はある。							
	柱 穴	不 明							
出 土 遺 物	土 器 (口縁部の個数)	群 層	A	B	C	D	E	F	G
		I		1	5				
		II		5	30	1			
		III	2	1	7	1			
	石 器	磨石片2個、両利用品1個、石器片10個							
	骨 製 品	サメ歯製品1個							
	貝 製 品	——							
	食 料 残 沢	貝類7個(僅少)、イノシシ骨・ジュゴン・ウミガメ僅少、魚骨少量							

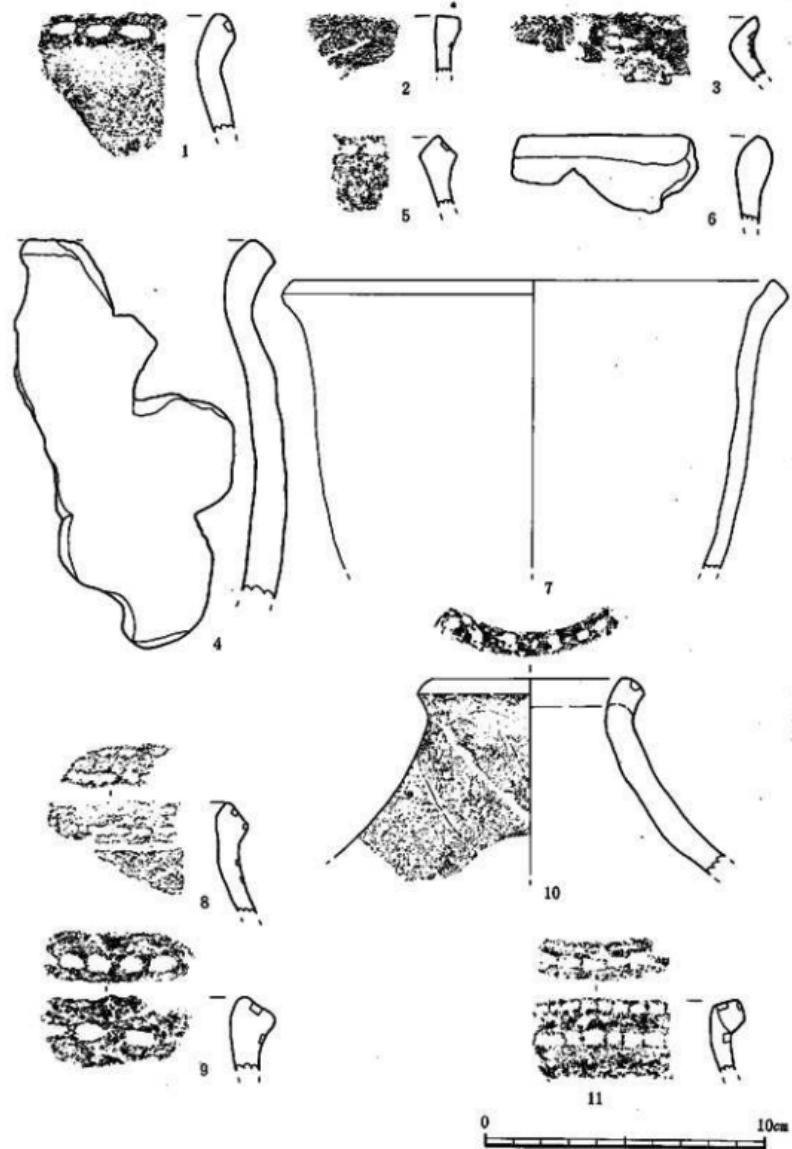


Fig. 8 第1号床居内出土の土器 1～5, B群土器 6～11, C群土器

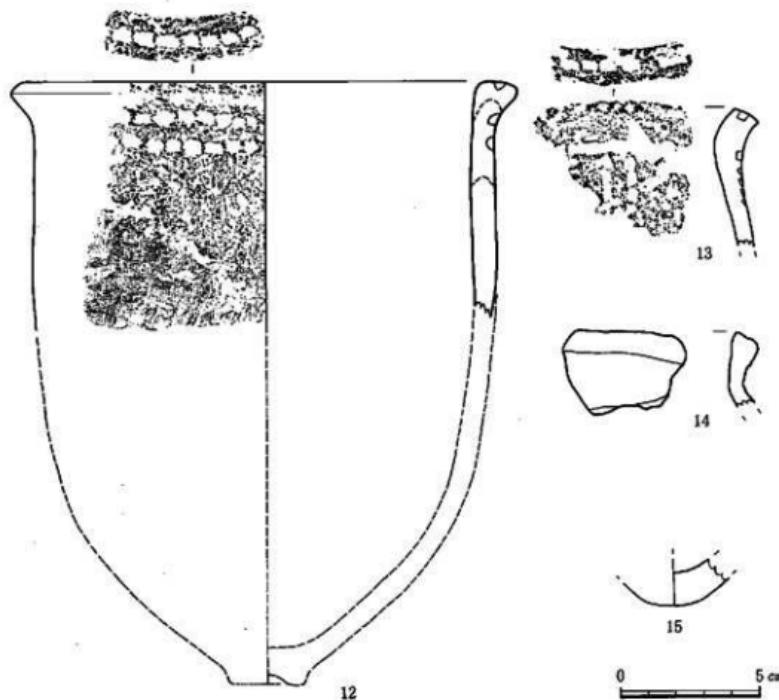


Fig. 9 第1号疊床住居内出土の土器 12・13,C群土器 14,D群土器 15,C群土器底部

Tab. 8 第1号疊床住居内出土の上器

標題番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器種	形 態 等 の 特 故	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 8 P.L. 17 1	I号 疊床住居 Ⅲ層	B群 IIa	深鉢	B群期の有文字佐呂式土器。肥厚 部に単範工具で押捺刻文を施す。	両面とも磨 耗。	良く、 硬い。	茶 褐色	石英を混入。
" " 2	II層	IIc口	"	有文の肥厚口縁。口唇を幅広く造 る。斜沈線文を施す。	外面ナマ。 内面磨耗。	"	"	石英・雲母 を混入。

插図番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形 態 等 の 特 徴	器面調査	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 8 " 3	" III層	B群 IIIcハ	"	口縁部をきつく外反させる。瓶方向に押し引き文を二条施す。	両面ともナデ。	堅緻	淡黃色	微細な石英を混入。
" 4	" II層	" IIbロ	"	口縁部を軽く外側に折り曲げる。肥厚は僅かである。	両面とも摩耗。	悪い、脆い。	暗褐色	石英を多量に混入。
" 5	" II層	" IIbロ	"	口唇は外側に傾むく。口唇に押捺刻文。	外面ナデ。内面摩耗。	良い。硬い。	"	石英少量混入。
" 6	" II層	C群 IIb	"	無文の宇佐浜式土器。口唇を尖らせる。アバタ状を呈する。	両面とも摩耗。	悪く、脆い。	黃褐色	"
" 7	" II層	" IIIa	深鉢	口縁の肥厚は弱く、疑似肥厚となる。アバタ状を呈する。(口径18.0cm・脚径15.0cm)。	外面ナデ。内面剥離。	"	"	"
" 8	" II層	" IIIa	盤	壺形の口縁破片。肥厚部に二組みの押し引き文、同直下に三条の押し引き文を施す。	両面ともナデ。	"	黒褐色	石灰岩の粗粒を少量混入。
" 9	1号 疊床住居 II層	" IIIb	深鉢	口縁の肥厚は比較的大きい。肥厚部とその直下に押捺刻文を施す。アバタ状を呈する。	両面とも摩耗。	良く、硬い。	茶褐色	石英・石灰質微砂糖を少量混入。
" 10	" II層	" IIIb	壺	ナテ肩の壺。口縁と端に單範工具で、点刻文を施す。アバタ状。(口径8.0cm)。	両面ともナデ。	"	灰褐色	石灰岩の粗粒・石英を少量混入。
" 11	" II層	" IIIcイ	深鉢	口唇が頗広の肥厚口縁。口唇・肥厚部直下に押捺刻文を施す。アバタ状を呈する。	両面とも摩耗。	良い、硬い。	明黄色	石英を微量混入。
Fig. 9 PL18 12	" II層	" IIIcロ	"	口・脚部は直線的である。口唇と肥厚部直下に押捺刻文を施す。アバタ。(口径18.0、脚径16.5、底径2.5、高さ21.5)。	両面ナデ。	悪く、脆い。	茶褐色	石英を少量混入。
" 13	" II層	" IIbロ	深鉢	口頭部で僅かにくびれ外反する。口・頭部(横位)と頸・脚部(縱位)に押捺刻文を施す。	両面ナデ。		褐色	粗い石英を少量混入。
" 14	" II層	D群	壺	宇佐浜式土器の壺形とみられるもの。	外面丁寧をナデ。内面摩耗。	堅緻	青褐色	粗い石英を少量混入。
" 15	" II層	C群 ニ		C群期の底部破片で、底径の小さい平底。(底径2.0cm)。	両面ナデ。	悪く、脆い。	"	粗い石英を多量混入。

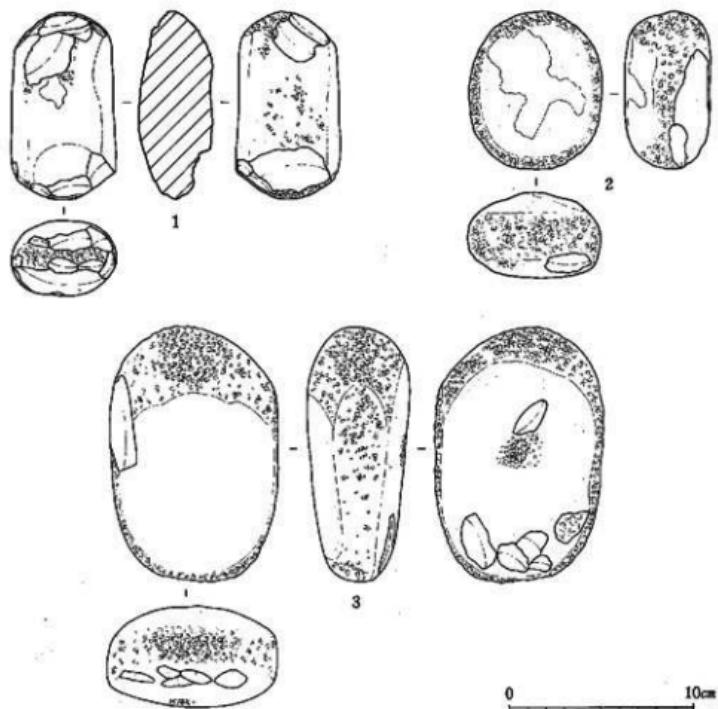


Fig.10 第1号縄床住居 1.転用品(磨石) 2・3.磨石

Tab. 9 第1号縄床住居内出土の石器

標図番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	石質	法量(cm·g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig.10 PL.39 1	1号 縄床住居 Ⅱ層	再利用 磨石		玄武岩 砂岩	10.0	5.6	4.0	401	石斧削部片を再利用。上・下端面に敲打痕 が残る。表面の中央付近は敲打による浅い 窪みが残る。
" "	" Ⅱ層	磨石	ⅡSA 口4	砂岩	8.5	7.2	4.6	(415)	表面は摩滅、左側面は敲打痕が残され滑面 となる。裏面及び上・下端面・右側面は敲 打が上で、部分的に摩滅が若干、認めら れる。
" " 3	I層	"	ⅡMB 42	砂岩	13.6	9.1	5.5	943	両面は摩滅。裏面中央は敲打で窪む。他は 敲打痕が主に認められ、部分的に小さい窪 面や剝離痕が觀察される。

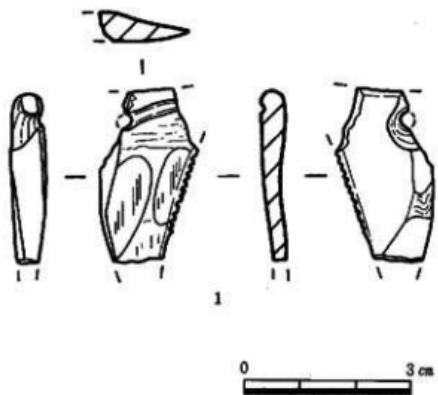


Fig.11 第1号床居 1. 有孔サメ歯製品

骨製品

Fig.11-1はホホジロサメ歯の基部のほぼ中央に穿孔したもので、表面は横位に2.8mm、溝状痕を施す。孔は主に裏面から穿孔し、研磨痕は表面の一部以外殆どに認められる。色は灰褐色を呈する。破損品で残存部の最大長30.3mm、厚さ6mm、孔径は外8mm、うち2.6mmを測る。第I層の疊敷の中から出土している。

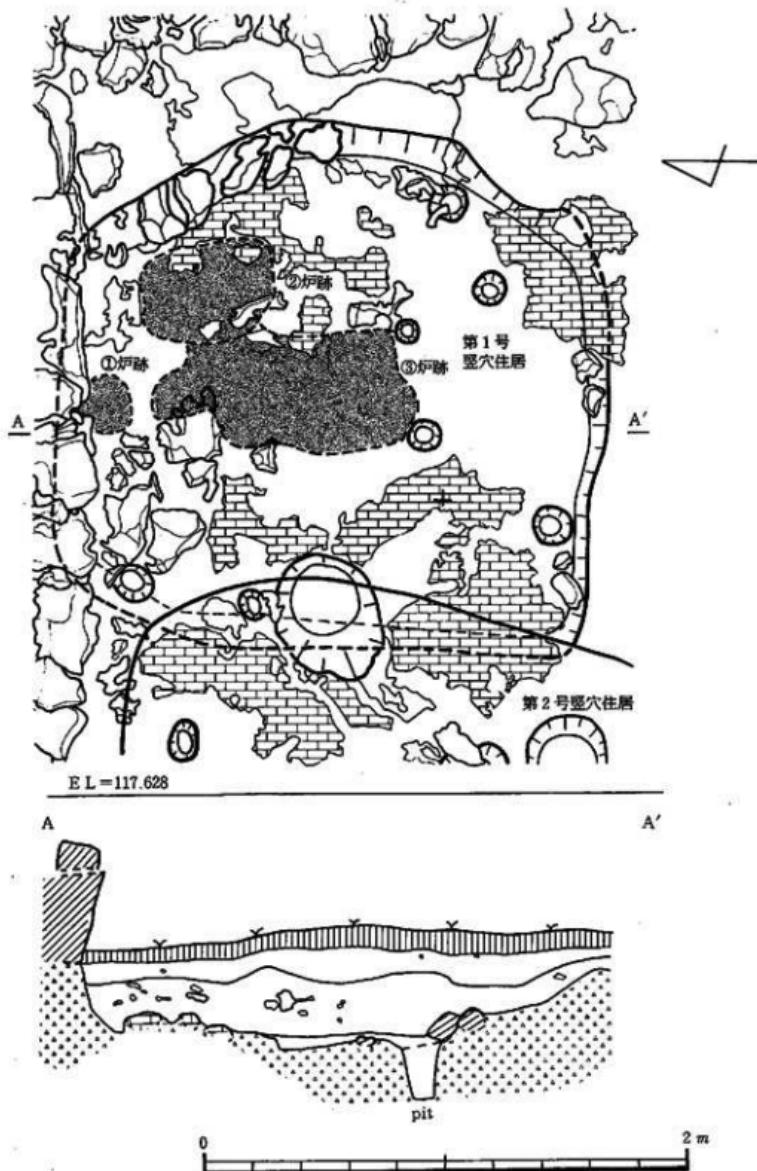


Fig.12 第1号壁穴住居跡実測図

Tab.10 第1号竪穴住居跡

位置	地区	第1地区 B-3・4, C-3・4グリッド						
重複	第2号竪穴住居跡に切られているので2号竪穴より古い。							
形狀	北壁は琉球王府時代の石積みの下にあり不明であるが、ほぼ隅丸方形。							
規模	南北最大長約230cm、東西最大長約220cm。							
深さ	約30cm							
構造	壁	東南隅一帯と東北隅の一部では岩盤の傾斜部分を利用しているが、ほかの壁は地山をやや緩やかに掘り込んで利用している。						
壁面石積	東・南・西壁の一部に一段積みの石積みが残っている。東壁のは最大長25cm前後・高さ15cmの石が使用され、それが約90cmの長さで残っている。							
床面	岩盤が多い。中央部一帯は地表面を使用している。							
造	炉跡	地表面に3つの炉跡が検出された。③の炉を③が切っており、③が新しい。③も2つぐらいの炉にわかれると考えられる。炉の上には1~3cmの灰層が堆積していた。						
	柱穴	直径15cm前後、深さ12~15cmの柱穴が5つ検出された。東北隅にもあると考えられるが、新しい石積みの下になっているので確認できなかった。						
出土	土器 (口縁部の個数)	群層	A	B	C	D	E	F
		I	1				2	
		II			1			
		III	1		9	1		
		IV				1		
遺物	V							
	石器	磨石1個、破片8個						
	骨製品	骨鏡1点						
	貝製品	——						
	食料残滓	貝類89個(少量)、イノシシ骨・魚骨少量、ジュゴン・ウミガメ僅少。						
堆積状況	黒褐色で土器が多量に堆積。第I層は火番小屋の層ではほとんど遺物なし。							

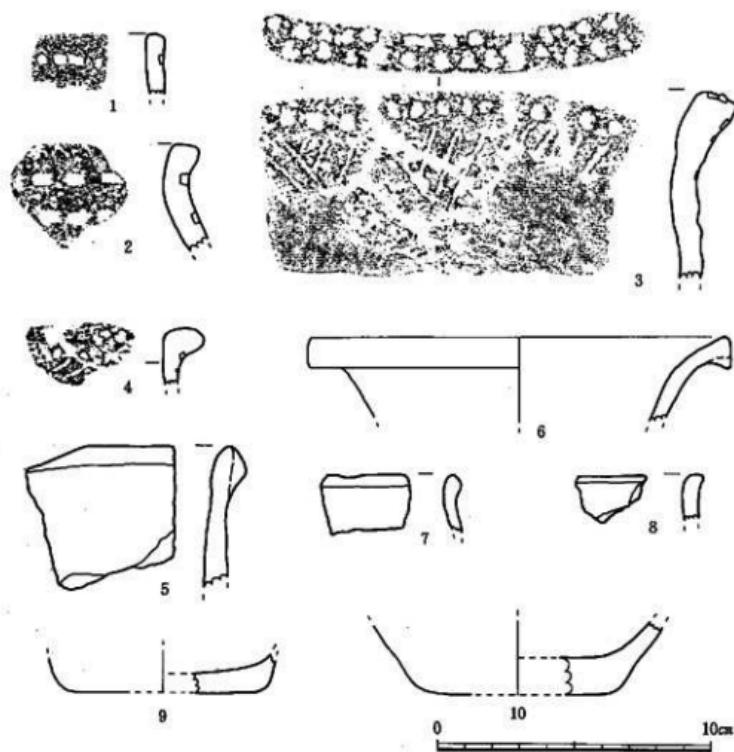


Fig.13 第1号竪穴住居内出土の土器
1.A群土器 2～4,C群土器 5・6,D群土器
7・8,E群土器 9,B群土器 10,C群土器

Tab.11 第1号竪穴住居内出土の土器

標図番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器種	形態等の特徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	添入物
Fig. 13 P.L. 18 1	1号 竪穴住居 Ⅰ層	A群	深鉢?	A群期の状茎式または大山式土器の口縁。單撚工具で、押し引き文を一条施す。	両面とも剥離。	悪く、 黒い。 茶褐色	粗い石英を 多量混入。	
" " 2	Ⅲ層	C群 Ⅲb	深鉢	口縁部で若干、くびれ外反する。单撚工具で押捺刻文を二条施す。アバタ状を呈する。	両面ともナゲ。	良く、 硬い。 褐色	細かい石英を 少量混入。	

標図番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	層 種	形 個 等 の 特 故	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig.13 PL.18 3	" Ⅲ層	" Ⅲb	"	口頭部で若干、くびれ外反する。 口唇・口縁端に単範工具で押捺刻文、口縁下に棒状工具で斜滑文状の文様。アバタ状を呈する。	外面ナデ。 内面摩耗。	悪く、 硬い。	黄 褐色	石灰質微砂 粒・細い石 英等を混入。
" " 4	" Ⅲ層	" Ⅲc-i	深鉢?	口縁幅広の肥厚口縁。肥厚部直下に鋸状工具で横位の押捺刻文。その直下に斜滑線文。アバタ状。	両面ナデ。	良く、 硬い。	"	石灰岩の細 片が少量混 入。
" " 5	" Ⅲ層	D群	深鉢	無文の宇佐浜式土器の口縁破片。	両面ともナ デ。	堅	紫 褐色	細かい石英 を少量混入。
" " 6	" Ⅳ層	"	壺?	無文の宇佐浜式土器で壺かとみら れる。(口径15.3cm)。	"	"	"	"
" " 7	" Ⅰ層	E群 13	深鉢?	無文の肥厚しない口縁破片。	"	"	灰 褐色	微細な石英 を少量混入。
" " 8	" Ⅰ層	" 14	"	"	"	"	"	細かい石英 を多量混入。
" " 9	" Ⅲ層	B群 口		B群期の底窓で、比較的底径が大 きい。(底径6.3cm)	"	悪く、 硬い。	黄 褐色	石灰質微砂 粒等を多量 混入。
" " 10	" Ⅲ層	C群 口		C群期の底部で、比較的底径が大 きい。(底径7.0cm)	"	悪く、 硬い。	"	石灰質微砂 粒等を少量 混入。

Tab.12 第1号竪穴住居内出土の石器観察表

標図番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	帶 種	分 類	石質	法 量 (cm · g)				主 な 特 故
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 14 PL. 39 1	1号 竪穴住居 Ⅲ層	磨 石	ⅢMB 13	砂 岩	10.2	7.7	3.9	525	両面及び側面は摩滅が全体的に見られる。 上・下端面に敲打痕が集中する。

骨製品

Fig.15-1の骨錐が1点得られた。イノシシの脛骨を半裁し、その一端を両側から削り尖がらしたものである。先端部に研磨痕が認められる。基端部は欠損する。残存部の最大長50.1mm、幅10.0mmを計る。第Ⅱ層5cm~10cmの出土である。

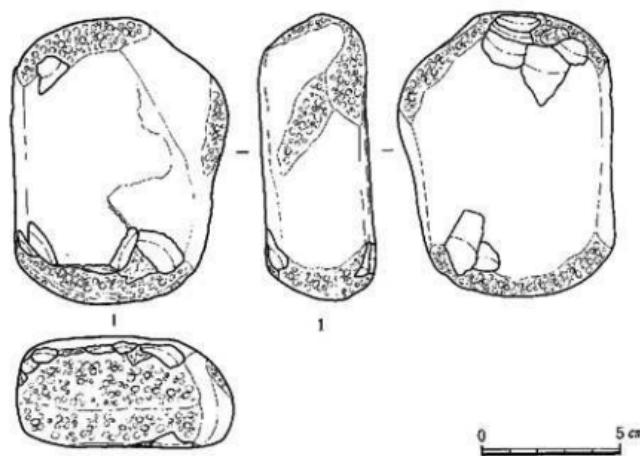


Fig.14 第1号堅穴住居 1.磨石

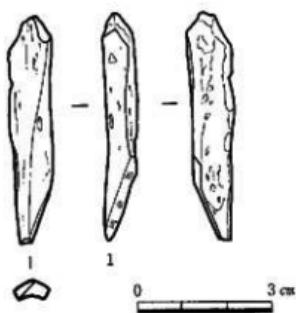


Fig.15 骨製品 1.骨錐

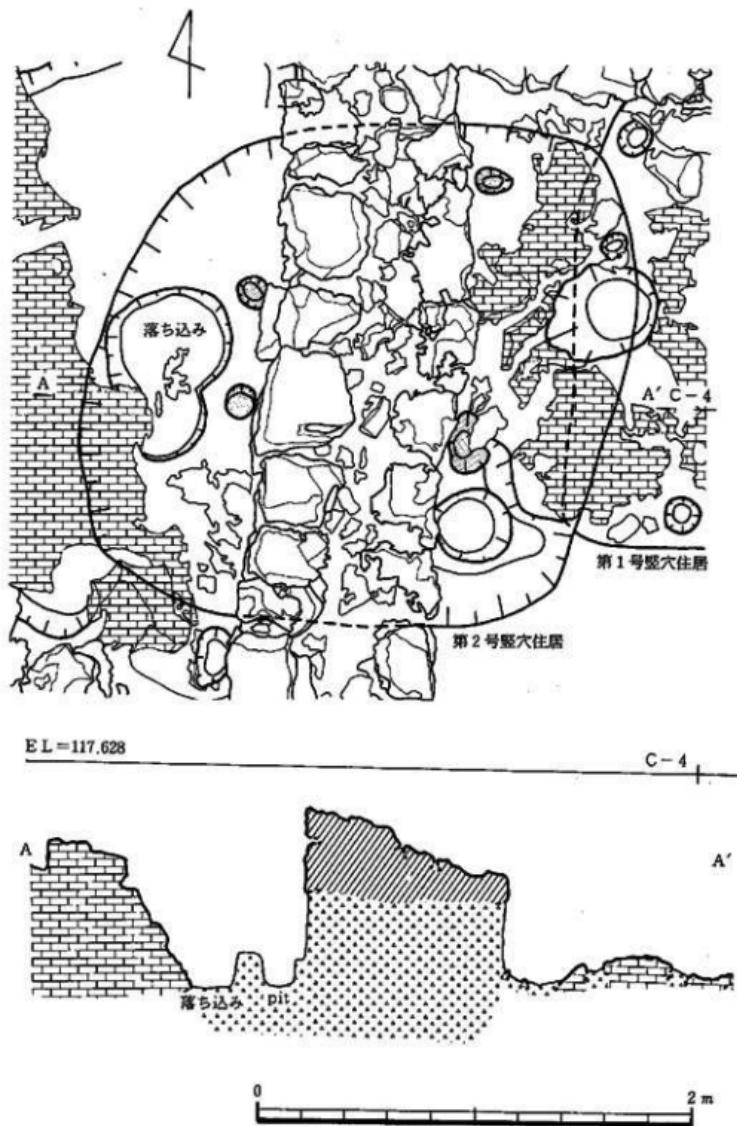


Fig.16 第2号竪穴住居跡実測図

Tab.13 第2号竪穴住居跡

位 置	地 区	第1地区 C-3・4グリッド							
	重 複	第1号竪穴を切っており、1号竪穴より新しい。							
構 造	形 状	竪穴住居跡の中央部に琉球王府時代の火番小屋の石積みが乗っているが、ほぼ隅丸方形である。							
	規 模	南北最大長約230cm、東西最大長約240cm。							
	深 さ	約30cm							
	壁 壁	地山をやや緩やかに掘り込んで壁面としている。							
造 成	壁 面 石 積	石積みは見られない。							
	床 面	地山面を使用しているが、一部に岩盤も見られる。							
	炉 跡	火番小屋の石積みの下にある可能性が高い。							
	柱 穴	直径15~20cm、深さ15~25cmの柱穴が4つ検出されているが、火番小屋の石積みの下にもかかれていると考えられる。							
出 土 遺 物	器 (口縁部の個数)	群 層	A	B	C	D	E	F	G
	I	2							
	II	2	9	7			1		
	III		1						
	IV								
	V								
遺 物	石 器	未製品1個、破片17個							
	骨 製 品	—							
	貝 製 品	—							
	食 料 残 滓	貝類23個(少量)、イノシシ骨・ジュゴン・ウミガメ・魚骨が僅少。							
堆 積 状 況		黒褐色土で、土器や角礫が混入。							

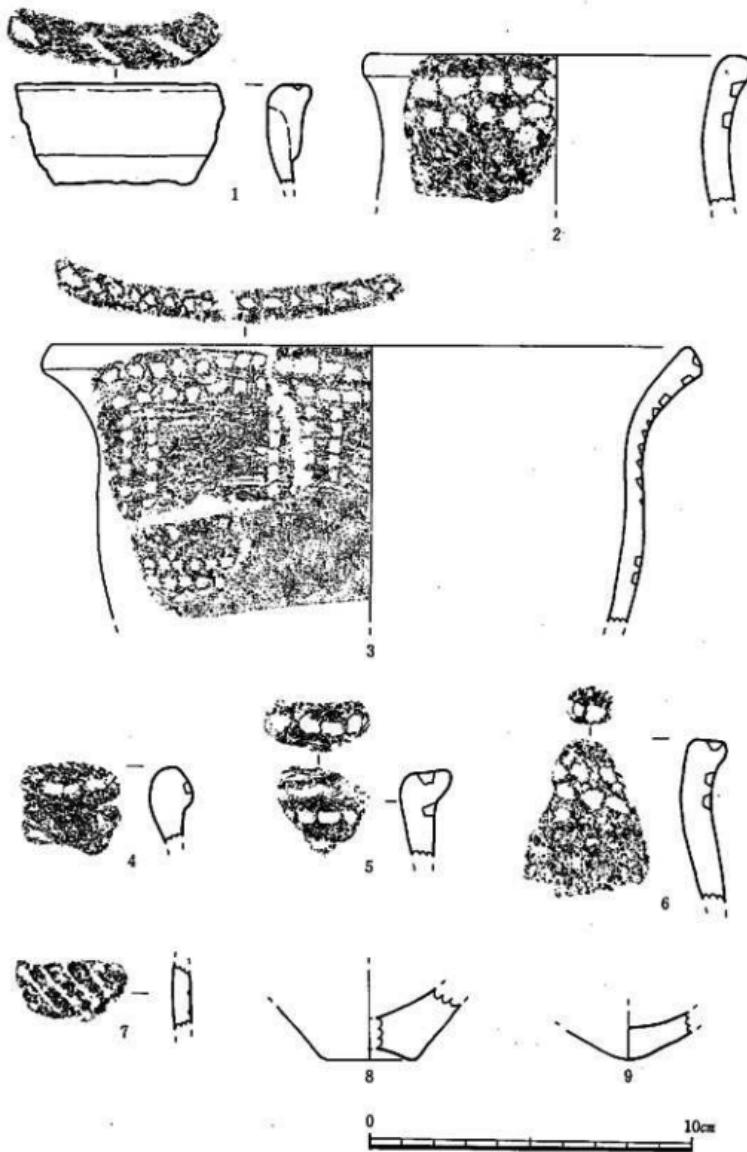


Fig.17 第2号竪穴住居跡内出土の土器
1～4. B群土器 5～7. C群土器
8・9. C群土器

Tab.14 第2号堅穴住居内出土の土器

持因番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形 塗 等 の 特 徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 17 P.L. 19 -1	2号 堅穴住居 Ⅰ層	B群	深鉢	B群期のカヤウチバンタ式土器。 口唇に棒状工具で沈線を施す。	両面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質砂 粒・石英を 少量混入。
" " 2	" Ⅰ層	" Ⅱb	"	口縁が僅かに肥厚する。肥厚部直 下に単刃工具で押捺刻文を施す。 (口径12.0cm)。	両面ともナ デ。	良く、 硬い。	"	"
" " 3	" Ⅰ層	" Ⅲd口	深鉢	口頭部に若干、くびれ外反する。 口唇・口縁・明窓に押捺刻文を施す。 口・頭部は継続に二～三条施す。(口径20.5、 胸径16.8)。	外面は条痕 とナデ。 内面ナデ。	"	"	細かい石英 を少量混入。
" " 4	" Ⅰ層	" Ⅲb	深鉢	有文の肥厚口縁、肥厚部に棒状工 具で押捺刻文を施す。	"	"	"	"
" " 5	" Ⅱ層	C群 Ⅲcイ	深鉢?	口唇の幅が広い肥厚口縁。口唇と 口縁に押捺刻文を施す。アバタ状 を呈する。	両面ともナ デ。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質砂 粒と細かい 石英を混入。
" " 6	" Ⅱ層	" Ⅲdイ	深鉢	肥厚しない口縁破片。口頭部が僅 かにくびれる。口唇と口縁に棒状 工具で押捺刻文を施す。	"	"	"	粗い石英等 を多量に混 入。
" " 7	" Ⅱ層	" Ⅲ		C群期の目字属する頭部片、斜沈 線文を施す。アバタ状を呈する。	外面ナデ。 内面摩耗。	堅硬	黄褐色	微細な石英 を少量混入。
" " 8	" Ⅲ層	C群 ハ		C群期の平底で、底径が大きい。 底面を押し上げる為、薄け。アバ タ状を呈する。(底径3.7cm)。	両面ともナ デ。底面に 粗圧とナデ。	悪く、 険い。	暗褐色	微細な石英 を少量混入。
" " 9	" Ⅰ層	" ト		C群期の底部で、尖度である。	両面ともナ デ。	堅硬	黄褐色	"

Tab.15 第2号堅穴住居内出土の石器観察表

持因番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 種	分 類	石 質	法 尺 (cm・g)				土 な し 特 徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 18 P.L. 39 !	2号 堅穴住居 Ⅲ層	石斧 未製品		石灰 質 砂 岩	9.4	4.6	1.9	164	内面の削離面を除き、全体的に研磨。向 側は剥離測定と敲打が認められる。上・下端 面もはげ同じ状況にあり、敲打が多い。

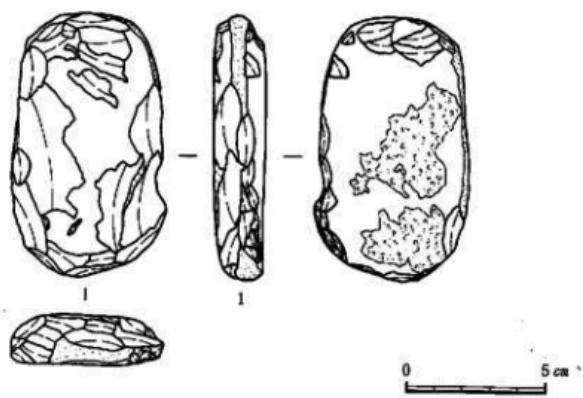


Fig.18 第2号整穴住居 1. 石斧未製品

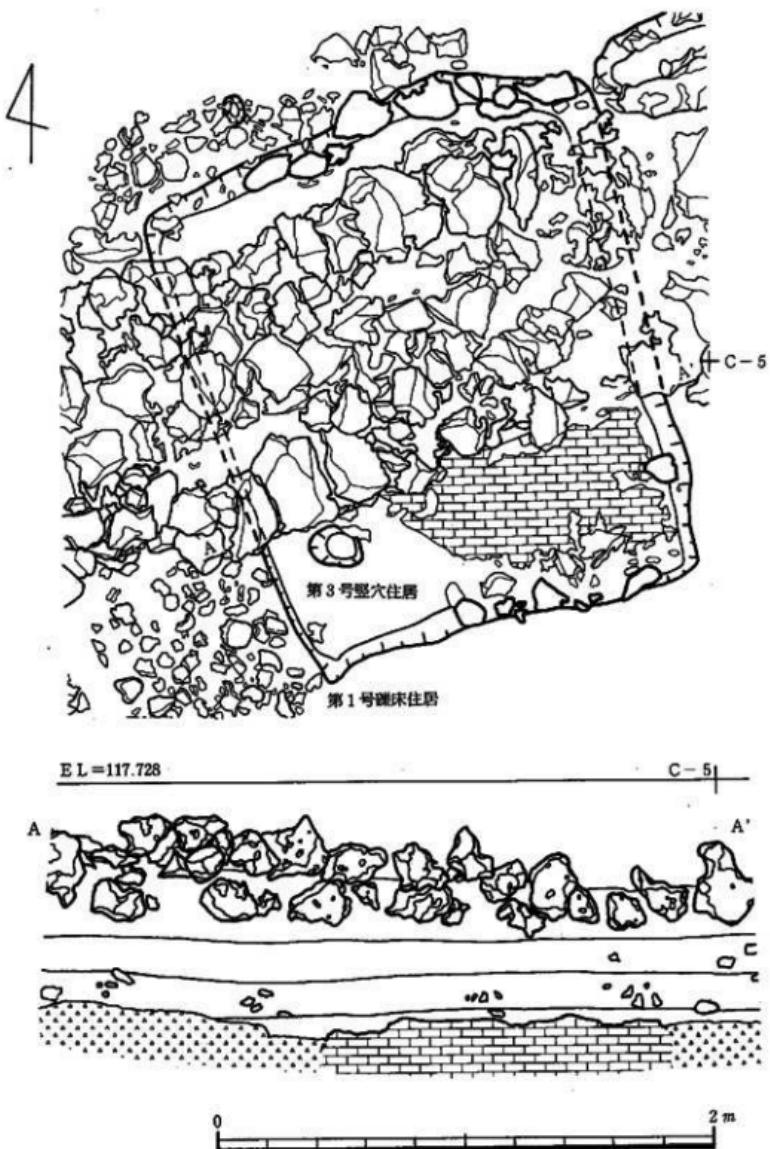


Fig.19 第3号竖穴住居跡実測図

Tab.16 第3号竪穴住居跡

位 置	地 区	第1地区 C-4・5グリッド							
重 複	第1号竪床遺構の東端が僅かに乗っており、竪床遺構よりは古い。								
形 状	琉球王府時代の火番小屋の石積みが中央部に乗っているが、ほぼ隅丸方形である。								
規 模	南北最大長約200cm、東西最大長約180cm。								
深 さ	南東隅は深さ約10cmで岩盤であるが、北側は約25cmで地山。								
構 造	壁	地山を急傾斜に掘り込んで壁面としている。北・東・南には石積みによる壁面が残っており、少なくとも3面は石積みで壁面が化粧されていたと考えられる。							
	壁面石積	北・東・南壁に石積みが残っている。北壁では石を立てて使用したのが3個見られる。東壁にも立てて使用されたのが1個見られる。							
	床 面	南側ではほとんど岩盤、北側では地山を使用している。							
	炉 跡	琉球王府時代の火番小屋の石積みの下にあると考えられる。							
	柱 穴	南西隅に1つ見られる。火番小屋の石積みの下にかくれているのがいくつかあると考えられる。							
	土 器 (口縁部の個数)	群 層	A	B	C	D	E	F	G
		表 土			1				
		I			2				
		II	1	1	5				
		III	6	4	8		2	3	
上 遺 物	石 器	破片15個							
	骨 製 品	ジュゴン肋骨加工品1個							
	貝 製 品	——							
	食 料 残 滓	貝類102個(多量)、イノシシ骨・魚骨少量、ウミガメ僅少。							
堆 積 状 況	角礫が混入する黒色土の堆積。								

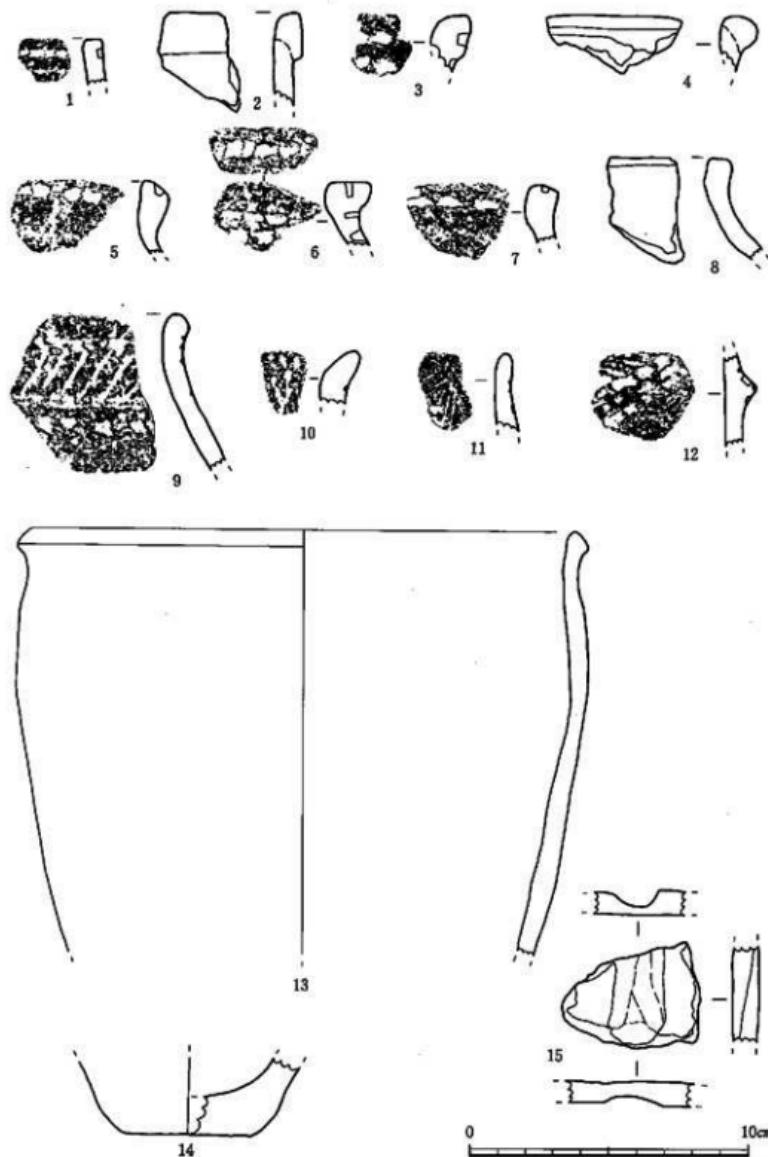


Fig.20 第3号竖穴住居内出土の土器
 1・2. A群土器 3～8. B群土器 9・10. C群土器
 11・12. F群土器 13, C群土器 14. B群土器
 15. G群土器（土製品）

Tab.17 第3号堅穴住居内出土の土器

擇出番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	図 種	形 態 等 の 特 徴	表面調整	備 考		
						焼成	色調	記 入 物
Fig. 20 P.L. 20 1	3号 堅穴住居 Ⅲ層	A群	深鉢?	A群期の伊波式または荻窓式の口縁破片。棒状工具で押し引き文を二条施す。	両面とも摩耗。	悪く、脆い。	黄褐色	微細な石英を多量に混入。
" 2	" Ⅲ層	A群	深鉢	A群期の無文カヤウチパンタ式土器。	外面ナデ。内面原毛。	悪く、脆い。	茶褐色	微細な石英を多量に混入。
" 3	" Ⅲ層	B群 I a	盃?	B群期の有文カヤウチパンタ式土器。肥厚帯とその直下に単範工具で押捺刻文を施す。	両面ともナデ。	良く、硬い。	黄褐色	石灰岩の細粒・貝殻片を少量混入。
" 4	" Ⅲ層	" Ⅲ b	深鉢?	無文の肥厚口縁。肥厚の造りは薄である。	外側は指圧とナデ。内面ナデ。	堅密	"	"
" 5	" Ⅲ層	" Ⅲ d 口	盃	有文の肥厚口縁破片。小型の盃とみられる。口縁部は器壁が薄い。口唇部に斜状工具で押捺刻文。	両面ともナデ。	良く、硬い。	赤褐色	微細な石英を少量混入。
" 6	" Ⅲ層	" Ⅲ c イ	深鉢?	口唇と肥厚帯直下に棒状工具で押捺刻文を施す。アバタ状。	両面とも摩耗。	悪く、脆い。	黄褐色	石灰質微砂粒と石英を多量混入。
" 7	" Ⅲ層	" Ⅲ c 口	"	有文口縁で、肥厚は微弱。口唇に棒状工具で押捺刻文を施す。アバタ状を呈する。	外面ナデ。内面摩耗。	良く、硬い。	灰褐色	微細な石英を少量混入。
" 8	" Ⅲ層	" Ⅲ d ハ	盃	無文の小型の盃。口縁はゆるく外反する。アバタ状を呈する。	外面ナデ。内面摩耗。	"	黄褐色	石灰質微砂粒を少量混入。
" 9	" Ⅲ層	C群 Ⅲ b イ	盃	有文の壺形口縁。口縁上端・胴上部は半纏竹管で横位の押し引き文。空間は斜沈線で埋める。アバタ状。	両面ともナデ。	良く、硬い。	黄褐色	微細な石英を少量混入。
" 10	" Ⅲ層	" Ⅲ d 口	深鉢?	有文口縁・口唇部は尖り気味。口縁は棒状工具で折捲文様に斜沈線文を施す。	両面ナデ。	"	"	石灰質微砂粒を多量混入。
" 11	" Ⅲ層	F群	"	壺式不明の壺形系土器。棒状工具で斜沈線文と横沈線文を施す。	"	良く、硬い。	"	微細な石英を少量混入。
" 12	" Ⅲ層	"	"	壺形系。高急上式土器の胴部。凸帶同側に点刻文、凸帶上方は斜目に斜沈線文を施す。	外面摩耗。内面ナデ。	"	"	"
" 13	" Ⅲ層	C群 Ⅲ d イ	深鉢	無文口縁。口縁部で僅かに縮まり、軽く外反する。アバタ状を呈する。(口洋20.4、胴径20.4)。	両面とも摩耗。	悪く、脆い。	"	微細な石灰質砂粒と石英が少量。

拂図番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び編	形 式	器 樹	形態等の特徴	器面調査	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 20 P.L. 20 14	3号 直器	B群 木		B群初期の底窓で、平底。底面から立ち上る箇所で若干、くびれる。 (底径4.6cm)。	両面とも厚 絶。	良く、 硬い。	黒 褐色	石灰岩の粗 粒・石灰質 砂粒が多い。
" " 15	" 直器	G群	土製品	A群末期～B群初期の脚部片を研 磨用の道具として使用したもの。 溝状になり横断面が「U」字状に 窪む。	"	"	褐色	細かい石英 等が多く混 入。

骨製品

骨製品はFig.21-1の1点のみ得られた。

1はジュゴンの肋骨に横位に擦り痕が確認
できるもので、骨錐等の未製品と考えれる。
大きさは長さ74.5mm、幅24.7mm、厚さ19.7mm、
重さ35gを測る。第Ⅱ層15cm～20cmの出上で
ある。

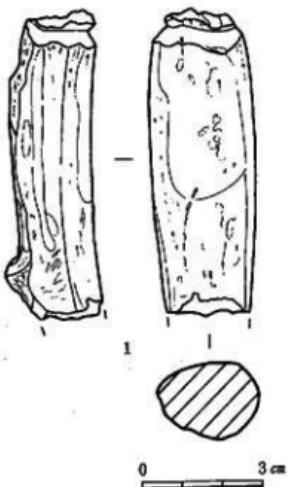


Fig.21 骨製品 1. 骨製品

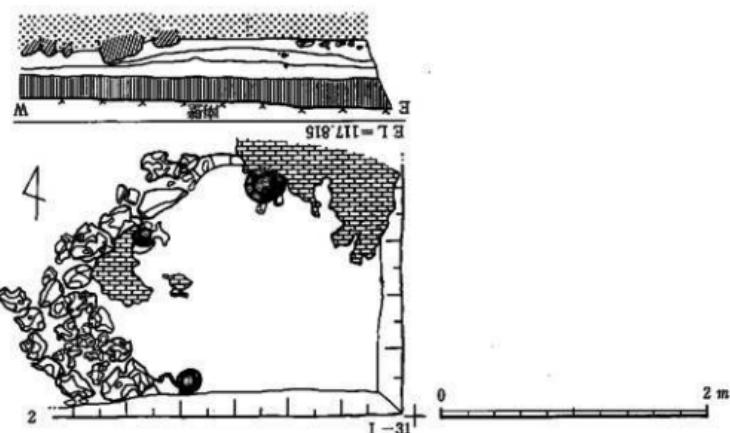


Fig.22 第4号竪穴住居

Tab.18 第4号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 H-30・31, T-30・31グリッド						
重複	なし							
構造	形状	一部しか検出してないか隅丸方形と考えられる。						
	規模	南北最大長220cm以上、東西最大長180cm以上。						
	深さ	20~25cm						
	壁	北東隅は露頭した岩盤を使用している。北と西は地山をやや垂直に掘り込んでから石積みで壁面化粧している。東と南は未発掘のため不明。						
造	壁面石積	北壁と西壁は最長20~40cmの硫球石灰岩を1段積んでいる。南壁と東壁の一部については不明。						
	床面	北側で一部岩盤が見られるが、ほかは地山面である。						
	炉跡	発掘した範囲では検出できなかった。未発掘の南半分には可能性がある。						
	柱穴	直径15~25cm、深さ15~20cmの柱穴が3つ検出された。未発掘部分にもいくつかあると考えられる。横行があるのも見られる。						
出土	烟群	A	B	C	D	E	F	G
(口縁部の個数)	I	1	3	4	1	14		
	II	3	2	9		31	2	
	III	1	1	6		21	2	
	IV			1				
	V							
遺物	石器	磨石3個、石鏃1個、用途不明1個、破片7個						
	骨製品	サメ歯製品1点						
	貝製品	—						
	食料残滓	貝類20個(多量)、イノシシ骨少量、魚骨・ウミガメ僅少。						
堆積状況	土器や角礫が多く混入する黒褐色土が堆積している。							

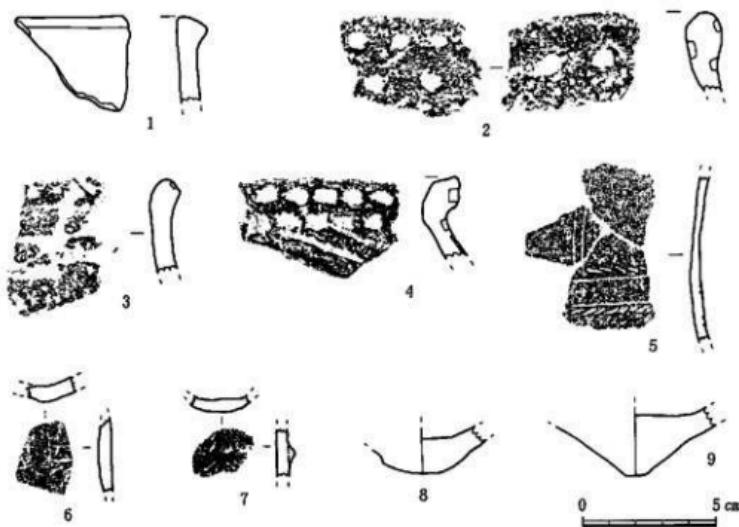


Fig.23 第4号竪穴住居内出土の土器実測図
1. B群土器 2~4. C群上器 5~7. F群
土器 8. B群上器底部 9. E群土器底部

Tab.19 第4号竪穴住居内出土の土器

掘出番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形式	深 程	形 造 等 の 特 徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 23 PL. 21 1	4号 竪穴住居 Ⅰ層	B群 Ⅱa	深鉢	B群期の無文字佐氏式土器。	両面ともナ デ。	良く、 硬い。	黄 褐色	石灰質微 粒・石英を 少量混入。
" " 2	" " 2	C群 Ⅲa	深鉢	C群期の有文口縁。口縁は僅かに 肥厚。貫状工具で、押捺刻文を外 面と内面に施す。アバタ状。	"	"	"	石灰質の粗 砂粒を少量 混入。
" " 3	" " 3	" Ⅲd 4	深鉢？	僅かに外反する有文口縁破片。貫 状工具で押捺刻文を施す。アバタ 状を呈する。	"	悪く、 弱い。	茶 褐色	石灰質の粗 粒・粗い石 英を少呈。
" " 4	" Ⅲ層	" Ⅲd 口	深鉢	有文の肥厚口縁。肥厚唇とその直 下に單鋸工具で押捺刻文を施す。 この文様帶下に斜沈線文を施す。	"	良く、 硬い。	黄 褐色	細かい石英 ・石灰質微 粒を少呈。
" " 5	" Ⅲ層	F群	壺	奄美系の有文透底片。颈部は長い。 網目線文を横位・縱位に3条。横位 の網目線文の上下に斜位の点刻文。	外面部削り とナデ。	堅 硬	暗 褐色	微細な石英 を微量混入。

標図番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形態等の特徴			器面調整	備 考		
				焼成	色調	混 入 物				
Fig. 23 PL. 21 6	4号 整穴住居 Ⅲ層	F群	器?	奄美系の底片?。細沈線文を縦位と横位に備す。	両面ともナデ。	良く、硬い。	茶褐色	微細な石英を多量に混入。		
" " 7	" Ⅲ層	F群		奄美系の有文刺部。突起を貼付ける。細沈線文で、縦位・斜位方向に備す。	"	"	暗褐色	微細な石英と蜜母を多量に混入。		
" " 8	" Ⅲ層	B群 二		B群期の底部片。底径が小さい。底面から立ち上がる部分で共干、くびれる。(底径1.9cm)	両面にナデと指圧。	良く、硬い。	赤褐色	微細な石英と石灰岩の細粒を少量。		
" " 9	" Ⅲ層	E群 ト・イ2		E群期の底片。アバタ状を呈する。	両面とも摩耗。	良く、硬い。	黄褐色	石灰質の砂粒を少量混入。		

Tab.20 第4号整穴住居内出土の石器観察表

標図番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 種	分 類	石質	法 量 (cm・g)				主 な 特 徴		
					長さ	幅	厚さ	重量			
Fig. 24 PL. 40 1	4号 整穴住居 Ⅰ層	石 磨		石英	(1.8)	(1.6)	0.4	1.4	石英製の打製石器。基部中央に抜りがある。基部の両側を欠く。		
" " 2	Ⅲ層	磨 石	ⅡMB イ2	砂 岩	12.6	9.2	5.2	(839)	両面は一部を除いて磨面となる。下端面及び両側は敲打痕が顯著。特に左側面の中央は敲打で浅く、窪む。		
" " 3	Ⅲ層	"	ⅡMB イ2	砂 岩	12.9	9.8	3.7	825	比較的丁寧に使用され、形も安定する。両面は磨鍛で、滑面となる。上・下端面及び両側面は敲打。		
" " 4	Ⅲ層	"	V(SA) ロ(1)	砂 岩	6.2	6.3	3.7	(209)	表面のみ摩鍛。右側面、上・下端面は裏面は敲打痕。破損品。		
" " 5	Ⅲ層	用途不明		砂 岩	10.8	8.5	4.8	495	磨石の破損品を使用したとみられるもので、周辺に剥離面が残り、縁辺は滑れている。表面中央は敲打痕が集中。		

骨製品

Fig.25-1 の1点のみである。ジュゴンの肋骨を二等辺三角形状に型どったもので、さらにその基部に3個の小孔が確認できる。サメ歯の模造品と考えられる。破損しているが、図上から5個推測できる。研磨は丁寧で、研磨の方向は明瞭である。破損品で残存部の最大長33.7mm、幅19.8mm、厚さ7.0mm、孔は平均3.0mmを測る。第Ⅱ層の出土である。

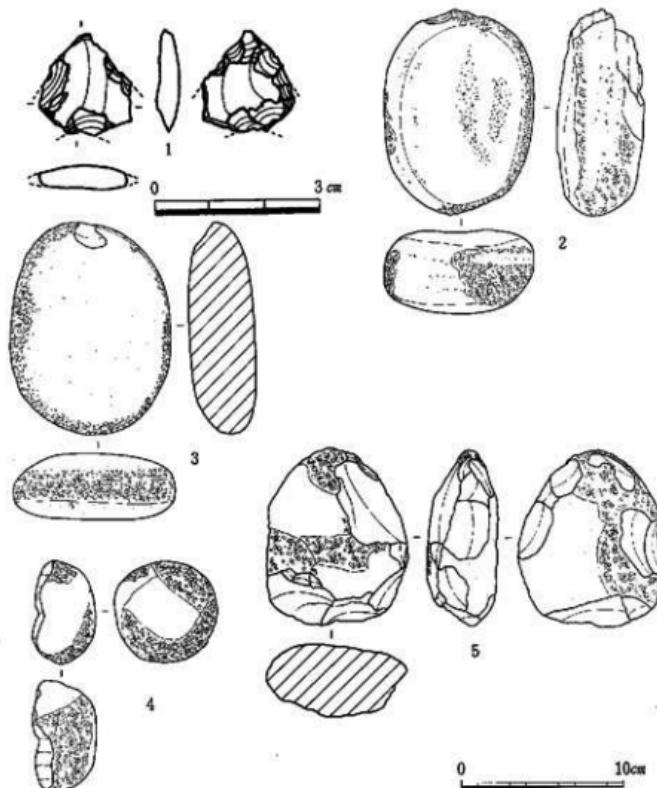


Fig.24 第4号竪穴住居 1. 石器 2～4. 磨石 5. 用途不明

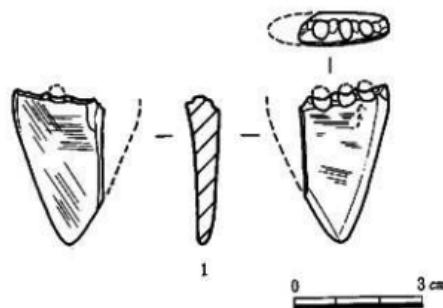


Fig.25 1. 骨製 サメ歯模造品

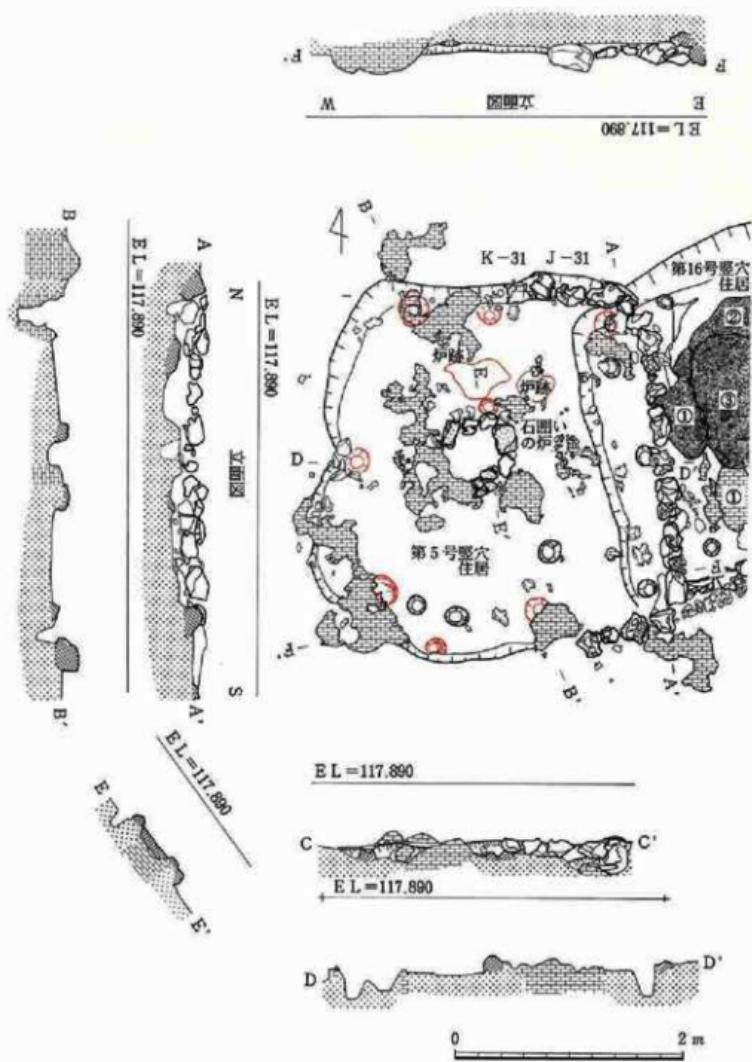


Fig.26 第5号竪穴住居跡実測図

Tab.21 第5号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 J-30, K-30グリッド						
重複	複	第6号竪穴を切っており、第6号竪穴より新しい。						
形	状	ほぼ隅丸方形						
規模	模	南北最大長約300cm、東西最大長約300cm。						
深さ	き	5~15cmの浅い竪穴						
構	壁	西半分は地山を緩やかに掘り込んで壁面としているか、東半分は6号竪穴を掘り込んでから石積みで壁面化粧されている。南西隅は露頭した岩盤を利用している。						
	壁面石積	東壁と北・南壁の東半分に琉球石灰岩が1段積まれている。北と南は地山をやや垂直に掘り込んで積まれているが、東石積は第6号竪穴の第IV層を掘り込んで積まれている。						
造	床面	岩盤面や地山面が床面となっているが、東側では第6号竪穴住居跡の第IV層が床面。						
	炉跡	中央部に焼灰岩や琉球石灰岩を使用した石囲い跡がある。外径約70cm×70cm、内径約40cm×40cm、深さ約15cmの変則的な方形。石囲いの中は15cmの灰層が堆積しているが、焼土面はない。なお、石囲いのない炉跡も2カ所検出された。この炉にも灰層が1~3cm堆積していた。						
	柱穴	口径20cm前後、深さ10~20cmの柱穴が壁面に沿って9本迴っている。						
出土遺物	群層		A	B	C	D	E	F
	I						3	
	II		2	7	6	1	21	
	III			5	2		18	
	IV			1				
	床面						4	
食料残滓	石器	石斧2個、磨石1個、石器1個、破片4個						
	骨製品	骨錐2個(ジュゴン、イノシシ)、ヘラ状製品1個						
	貝製品	ヤコウガイ遺製貝斧1個						
	貝類	貝類122個(多量)、イノシシ骨・魚骨・ウミガメ少量、ジュゴン僅少。						
堆積状況	黒褐色土が堆積。							

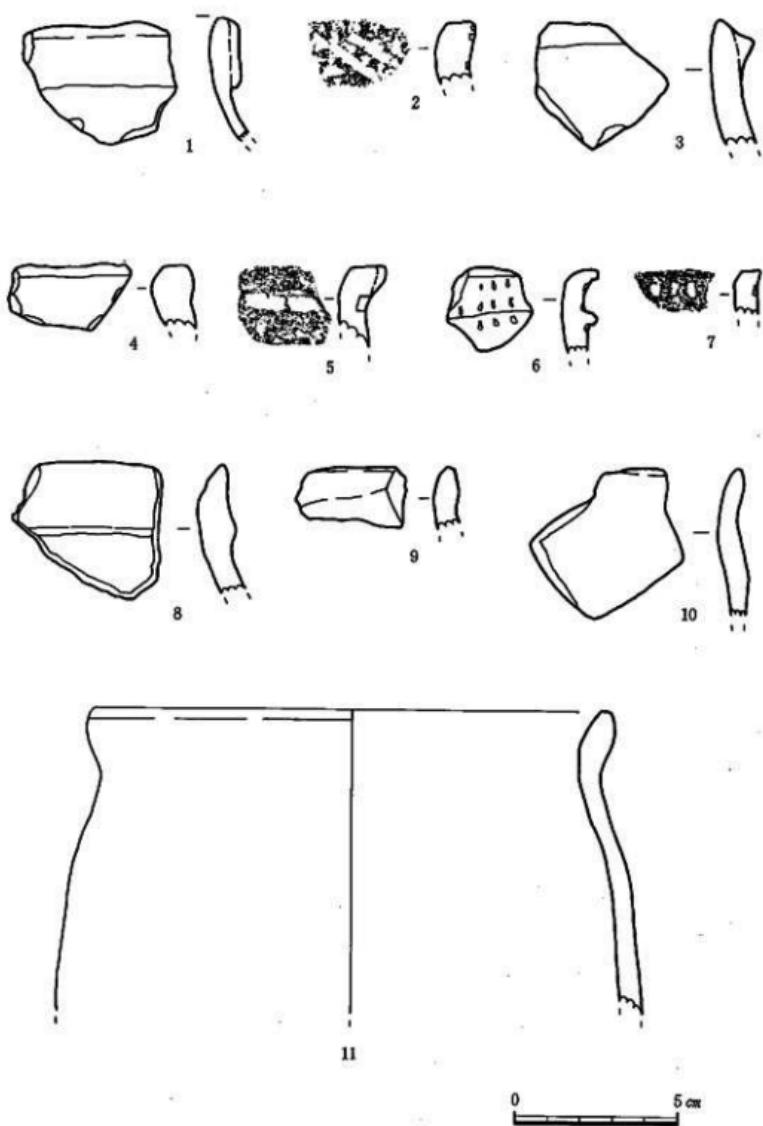


Fig.27 第5号整穴住居内出土の土器 1. A群土器 2~7. B群土器 8~11. C群土器

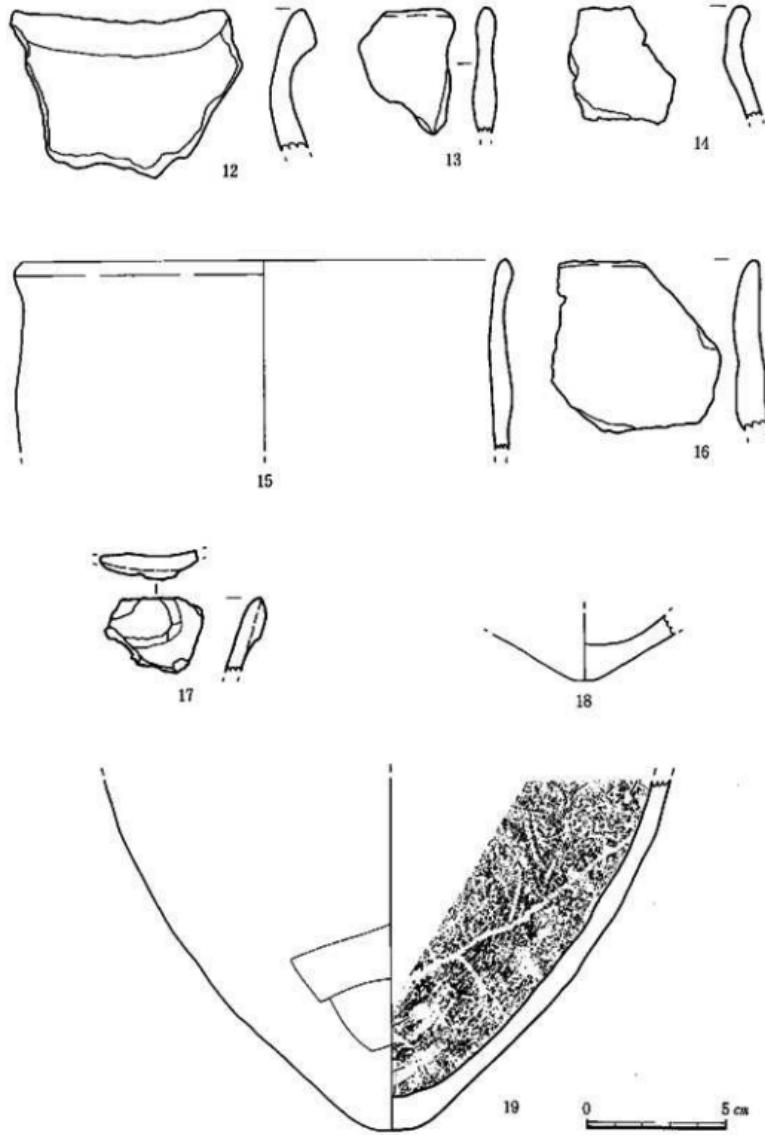


Fig.28 第5号竪穴住居出土の上器 12, D類土器 13~17, E群土器 18・19, E群土器底部

Tab.22 第5号竪穴住居内出土の土器

検出番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形態等の特徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 27 P.L. 21 1	5号 竪穴住居 Ⅲ層	A群	深鉢	A群期の無文カヤウチパンタ式土器。肥厚帯面下を鋸状工具で成形し、肥厚部を強調。	外面ナデ。内面ナデと指圧。	悪く、 脆い。	黄褐色	細かい石英 ・石灰質微砂粒を少量
" " 2	" Ⅲ層 I a	B群 I a	深鉢?	B群期の有文カヤウチパンタ式。肥厚帯のみの破片。鋸状工具で横位の点刻文と斜位の押し引き文。	外面ナデ。内面は摩耗。	脆弱。	"	石灰質微砂粒・粗い石英が多量。
" " 3	" Ⅲ層 II b	" II b	深鉢	B群期の無文カヤウチパンタ式土器。	両面ともナデ。	良く、 硬い。	暗褐色	石灰岩の粗粒を少量混入。
" " 4	" Ⅲ層 III b	" III b	"	無文の肥厚口縁。肥厚は微弱である。	"	悪く、 脆い。	黄褐色	石灰質の粗砂粒と石英を少量混入。
" " 5	" Ⅲ層 III c ロ	" III c ロ	"	口唇を幅広く造る。肥厚帯面下に鋸状工具で押し引き文。	外面ナデ。内面摩耗。	悪く、 脆い。	黄褐色	石灰質の粗砂粒や細砂粒が多量。
" " 6	" Ⅲ層 III c ハ	" III c ハ	深鉢?	有文の肥厚口縁。凸唇を横位に貼付ける。文様は口唇を抜むように点刻文を施す。	両面ともナデ。	良く、 硬い。	茶褐色	細かい石英が多量混入。
" " 7	" Ⅲ層 III d イ	" III d イ	"	有文口縁。鋸状工具で点刻文。	"	悪く、 脆い。	"	石灰質の微砂粒と石英を少量混入。
" " 8	" Ⅲ層 C群 I b	C群 I b	深鉢?	無文の肥厚口縁。	外面ナデ。内面摩耗。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の微砂粒等を少量混入。
" " 9	" Ⅲ層 III a	" III a	"	"	外面摩耗。内面ナデ。	悪く、 脆い。	"	石灰質の微砂粒・石英が微量混入。
" " 10	" 床 著 III d ハ	" III d ハ	深鉢?	肥厚しない無文口縁。	外面剥離、内面摩耗。	脆弱。	"	石灰質の微砂粒を多量に混入。
" " 11	" Ⅲ層 III b	" III b	深鉢	無文口縁。口脣部で若干くびれる。アバタ状を呈する。	"	良い、 硬い。	"	ほとんど見 えない。
Fig. 28 P.L. 22 12	" Ⅲ層	D群	"	無文の宇佐浜式土器。	外面ナデ。内面ナデと指圧。		茶褐色	微細な石英を多量混入。
" " 13	" Ⅲ層	E群 Vイ2	深鉢?	無文の直口口縁。	外曲摩耗。内面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	微細な石英を微量混入。

捕獲番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形態等の特徴	断面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 28 PL. 22 14	" II層	E群 V-42	壺	無文の吸口縁片。口縁は直口となるナデ肩の壺。	外面ナデ。 内面ナデと 指圧。	"	"	"
" " 15	" II層	" V-43	深鉢	無文の口縁。口縁部で極端にくびれるが、全体的に口・脚部はほぼ垂直(口径17.8、脚径17.8)。	両面ともナ デ。	悪く、 弱い。	茶 褐色	石灰質の細 砂粒を多量混入。
" " 16	" II層	" V-43	深鉢	無文の口縁。口縁から脚部まではほぼ垂直に近い器形。	"	良く、 硬い。	黄 褐色	石灰岩の粗 粒を多量混入。
" " 17	" II層	" 壺	輪形	方形形状の突起を貼付けた壺。口唇は尖り気味。	外面ナデと 指圧。 内面ナデ。	"	"	微細な石灰 質砂粒を微量混入。
" " 18	" II層	E群 ト-イ1		E群期の尖底。尖端部を窓で削り出して成形する。	外面ナデと 窓削り。 内面摩耗。	"	黄 褐色	微細な石灰 質砂粒を微量混入。
" " 19	" II層	E群 ト-イ2		E群期の尖底。脚下部に窓削り。	外面ナデと 窓削り。 内面ナデ。	良く、 硬い。	黄 褐色	石灰質の微 砂粒を微量混入。

Tab.23 第5号竪穴住居内出土の石器觀察表

捕獲番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 種	分 類	石質	法 尺 (cm · g)				主 な 特 徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 29 PL. 40 1	5号 竪穴住居 重層	石 刀		黒 曜石	2.6	1.8	0.6	13	ばば、光形の打製石刀。基部中央に抉りを入れる。
" " 2	III層	石 刀	I BM小 24c	母 岩 千枚岩	8.0	4.0	1.6	99	片刃の磨製石刀。刃はキに表面から研ぎ出して付刀する。裏面の研磨は徹底していない。
" " 3	III層	"	(1B)M(中) (24)b	綠 色 砂 岩	9.2	5.6	1.4	(125)	片刃の磨製石刀。刃は上に裏面から研ぎ出して付刀する。
" " 4	II層	磨 石	ISA 口(2)	砂 岩	8.4	7.1	4.0	(270)	裏面と上端面は破損。表面は磨面。左側面は敲打痕が主である。

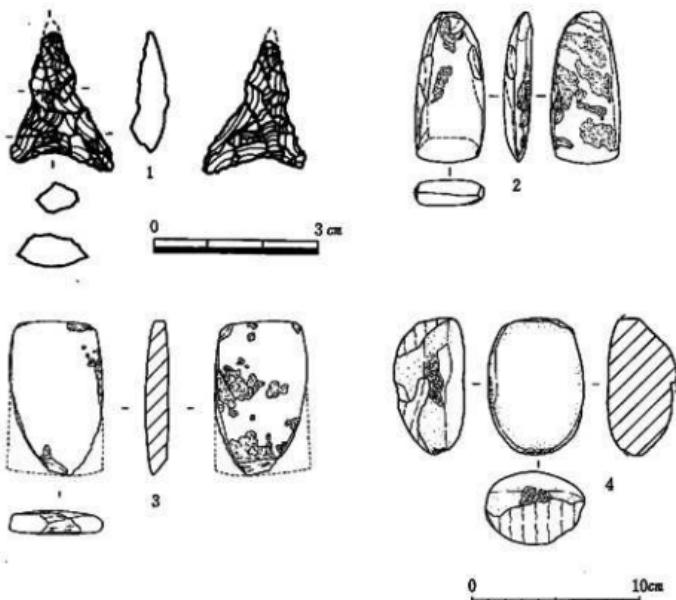


Fig.29 第5号竪穴住居 1.石鎌 2・3.石斧 4.磨石

骨製品

Fig.30の3点が得られた。

1はイノシシの長管骨を半裁し、一端をヘラ状に加工したものである。側縁を観察すると片側は緩やかに湾曲し、薄手であることからあるいはナイフ状のものかもしれない。残存部の最大長26.0mm、最大幅10.0mm、厚さ1.2cmを測る。第Ⅲ層0~10cmの出土である。

2は骨錐にしては小型でイノシシの右脛骨前縁の稜を旨く用いたもので、針先から3分の1は丁寧に研磨して仕上げ、それ以外は自然のままである。針先は段を有する。完形品で最大長64.4mm、最大幅19.4mmを測る。第Ⅲ層0~5cmの出土である。

3はジュゴンの肋骨を錐状に加工したものである。断面は偏平の梢円を呈する。先端部のみで先端は刀こぼれのため丸みを帯びる。裏面は自然である。残存部の最大長34.7mm、幅12.0mm、厚さ8.0mmを測る。第Ⅱ層の出土である。

貝製品

Fig.30-4はヤコウガイの蓋を用いた、蝶蓋製貝斧1点が出土した。大きさは縦69.2cm、横7.36cmをはかる。附刃の範囲は③～⑩で全体的に風化が著しい。第Ⅲ層0～5cmの出土である。

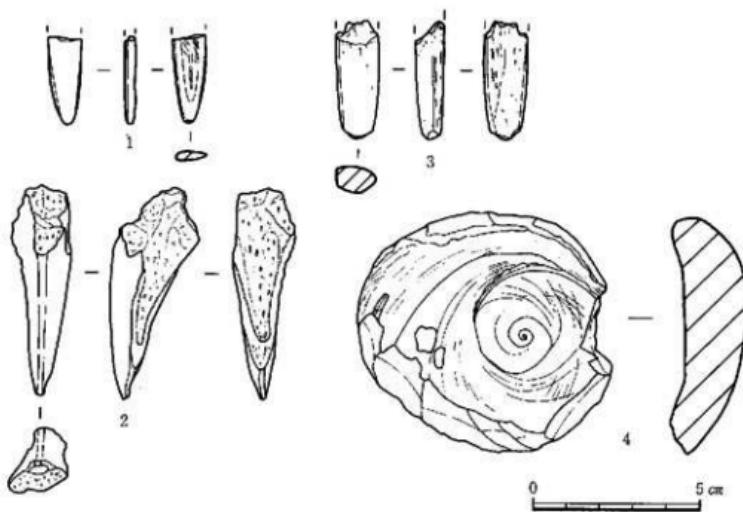


Fig.30 1～3. 行製品 4. 貝製品

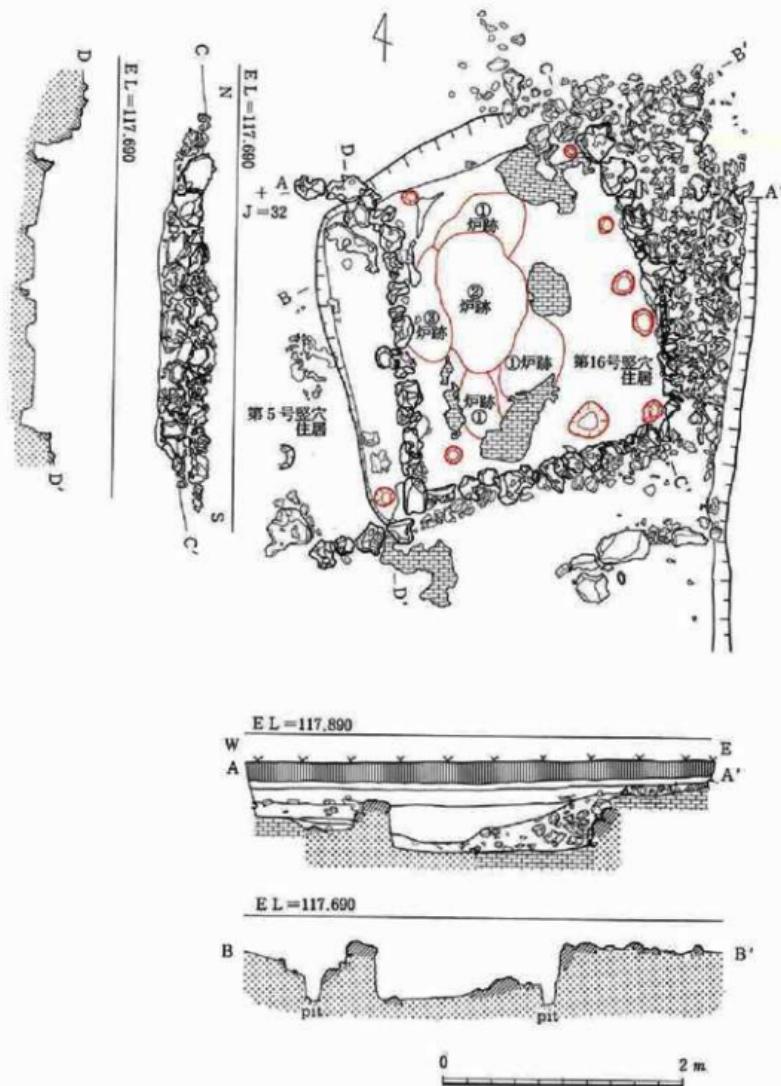


Fig.31 第6号竖穴住居跡実測図

Tab.24 第6号竪穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 J-30グリッド																																																
重 複	複	第5号竪穴に切られており、第5号より古い。																																																
形 状	方 形	方形(正方形)																																																
規 模	南 北	南北最大長約270cm、東西最大長約270cm。																																																
深 さ	地 形	地形が北から南へ傾斜しているので、南側では約30cm、北側では約60cmと深い竪穴。																																																
構 造	壁	北壁と西壁は地山を急傾斜で掘り込んで壁面としているが、東壁と南壁は地山を削り込んでから、石積みをして壁面化粧している。																																																
	壁 面 石 積	東壁は最大長30~60cmの大きな琉球石灰岩を垂直に積み上げている。低い所で40cm、高い所は60cmもあるりっぱな石積みである。南壁は30cmの1段積み。																																																
造 成	床 面	岩盤面も一部に見られるが大部分は地山面である。																																																
	炉 跡	中央部に大きな焼土面があるが、それは5つの炉跡が切り合っているためである。①3つを②が切り、②を③が切っている。①3つの前後関係は不明であるが①→②→③と新しくなる。炉の上には1~3cmの灰層が堆積していた。																																																
	柱 穴	口径15~30cm、深さ10~20cmの柱穴が壁面に沿って9本廻っている。																																																
出 土 遺 物	上 器 (口縁部の個数)	<table border="1"> <thead> <tr> <th>群 層</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> <th>D</th> <th>E</th> <th>F</th> <th>G</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>I</td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td>2</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>II</td> <td></td> <td>2</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>III</td> <td>7</td> <td>58</td> <td>1</td> <td></td> <td>153</td> <td>5</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>IV</td> <td></td> <td>11</td> <td></td> <td></td> <td>9</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>V</td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	群 層	A	B	C	D	E	F	G	I		1			2			II		2			1	1		III	7	58	1		153	5	2	IV		11			9			V		1					
群 層	A	B	C	D	E	F	G																																											
I		1			2																																													
II		2			1	1																																												
III	7	58	1		153	5	2																																											
IV		11			9																																													
V		1																																																
	石 器	石斧1個、磨石1個、破片2個																																																
	骨 製 品	ヘラ状製品1点																																																
	貝 製 品	チョウセンハマグリ製貝刃3個																																																
	食 料 残 滓	貝類164個(多量)、ウミガメ・魚骨多量、イノシシ骨少量、ジュゴン僅少。																																																
堆 積 状 況	地盤	第IV層黒褐色の下に糠やマイマイなどを大量に混入する層が床面で続いている。																																																

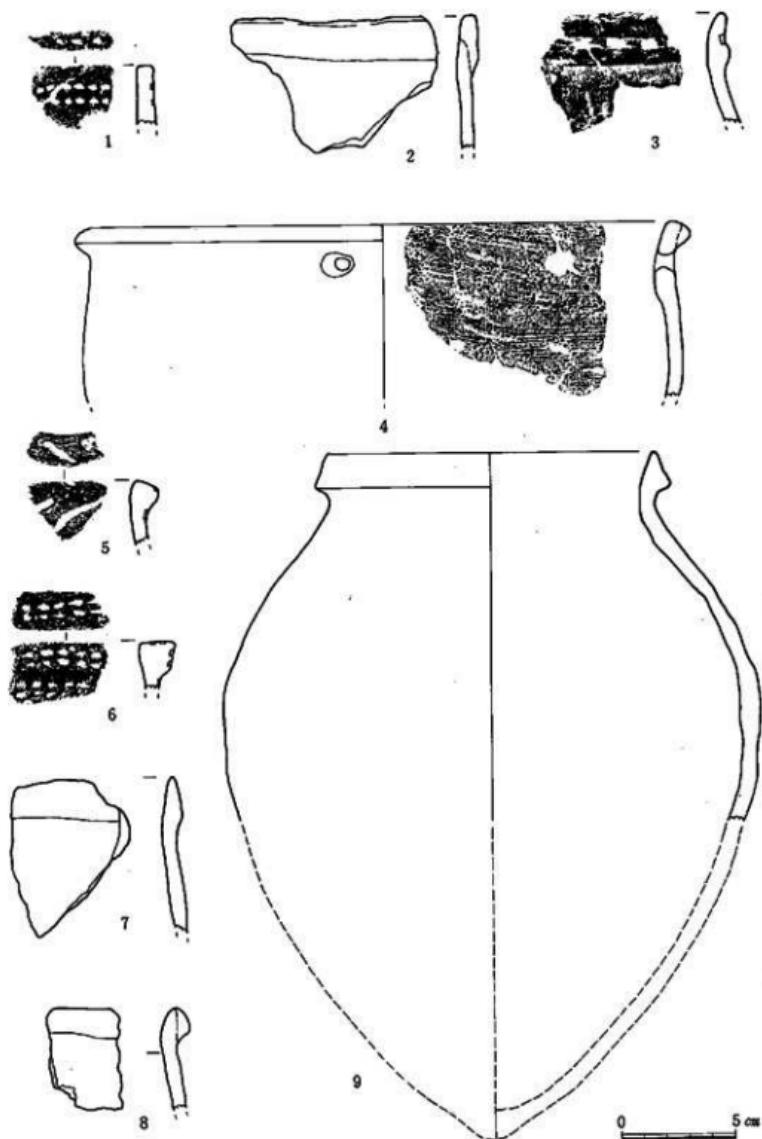


Fig.32 第6号竪穴住居内出土の土器

1・2. A群土器 3~6. B群土器
7・8. C群土器 9. D群土器

Tab.25 第6号竪穴住居内出土の上器

発掘品番 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形態等の特徴	器皿調整	備 考		
						焼成	色調	記 入 物
Fig. 32 6号 P.L. 22 竪穴住居 1 重羽	A群	深鉢?	△群期の伊豆式土器の口縁。口唇に凹状突起、口唇に異状工具で点刻文。口縁は叉状工具で点刻文。	両面ナデ。	悪く、 脆い。	褐色	細かい石英 ・チャート 片が多量。	
" " 2 重羽	A群	深鉢	△群期の大山式土器。肥厚帯に指圧痕が認められる。	両面ナデと 指圧。	脆弱。	茶褐色	細かい石英 ・チャート 片が多量。	
" " 3 重羽	B群 II a		B群期の有文カヤウチパンク式土器。肥厚帯に单足工具で押し引き文。肥厚部の造りは複である。	"	"	褐色	石灰質の粗 砂粒を多量 混入。	
" " 4 重羽	" II b		B群期の有文カヤウチパンク式土器。肥厚帯直下に直径5mm程度の粗孔を両面から空っている。孔は袖縁のものか?。(口径26.9)。	外側ナデ。 内面条痕ナ デ。	脆弱。	黄褐色	石灰岩の粗 砂粒・粗砂粒 等が多量。	
" " 5 重羽	" II b	"	有文の肥厚口縁。口唇と肥厚帯に 叉状工具で斜め擦文を施す。	両面ともナ デ。	"	暗褐色	石灰質の粗 砂粒が少量。	
" " 6 重羽	" III c-i	"	有文の肥厚口縁。口唇は粗ら。口 唇・肥厚帯・同帯直下に叉状工具 で押し引き文を施す。	外面摩耗。 内面ナデ。	悪く、 脆い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒が多量 混入。	
" " 7 重羽	C群 III b	深鉢	無文の宇佐浜式土器。アバク状を 呈する。	両面ともナ デ。	良く、 硬い。	暗褐色	微細な石英 が少量。	
" " 8 重羽	" III a	深鉢?	無文の肥厚口縁。	外面摩耗。 内面ナデ・ 条痕。	"	黄褐色	石灰質の微 砂粒等を少 量混入。	
" " 9 重羽	D群	盆形	宇佐浜式土器の底。(II径14.3、 胴径23.5、胴高推定30.0)	外曲ナデ。 内面摩耗。	良く、 硬い。	黄褐色	粗い石英を 多量混入。	
Fig. 33 " 10 重羽	E群 III i-3	深鉢	山を持つ宇佐浜式系統の土器。肥 厚帯直下に成形時の舞削り痕。 (口径15.5、胴径15.0)。	外曲ナデと 削り。内面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒と貝片 が多量。	
" 11 重羽	" III i-3	深鉢	宇佐浜式系統の土器。口縁は尖る。 口縁の肥厚は軽く仕上げる。(口 径22.8、胴径25.8)。	外内ナデ・ 削り。内面摩耗。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒と貝片 が多量。	
" 12 重羽	" III i-2	"	山を持つ宇佐浜式土器。口縁が若 干、内側へ傾く。肥厚帯直下に直 径7mm前後の袖摩孔を二孔穿つ。 (口径27.7cm、胴径34.4)。	両面にナデ と条痕。	堅硬。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒が少量。	
" 13 重羽	" III i-2	"	25.2、胴径24.2) (II径 外曲ナデと 削り。内 面ナデと条 痕。	"	"	黄褐色	石灰質の微 細砂粒等が 微量。	

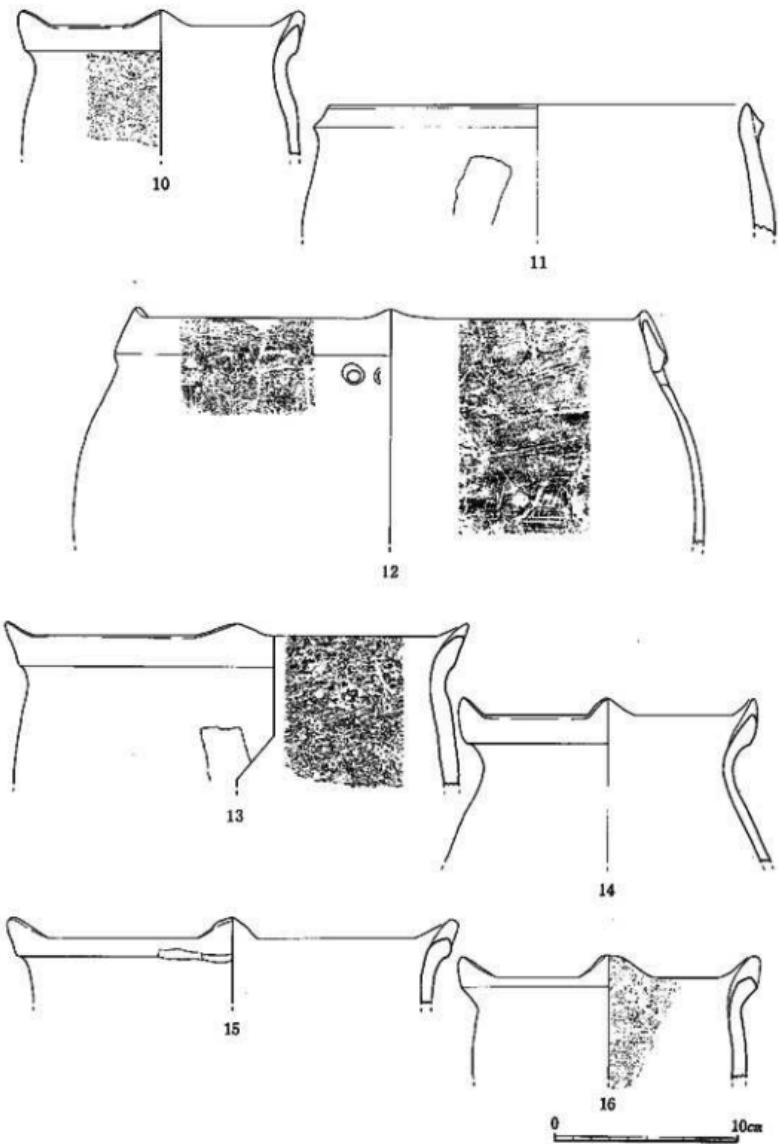


Fig.33 第6号堅穴住居内出土の土器 10~16. E群土器

排気管番号 PL番号 適合番号	グリッド 及び層	形 式	層 種	形態等の特徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混人物
Fig. 33 PL 23 14	6号 壁穴仕様 目層	E群 Ⅲイ3	深鉢?	山を持つ字形式系統の土器。比較的丁寧に仕上げる。(口径16.0、底径17.4)。	両面ともナデ。	良く、 硬い。	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が多量。
" " 15	" 目層	" Ⅲ	"	"。肥厚部 下は指圧等で難に仕上げる。(口 径16.4)。	外側ナデと 指圧。内面 ナデと鋸削 り。	"	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が多量。
" " 16	" 目層	" Ⅲ	深鉢	肥厚口縁に山を貼付ける。肥厚 下を窓で難に削る。(口径24.5)。	外側ナデと 鋸削り。内面 ナデと指 圧。	"	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が少量。
Fig. 34 PL 24 17	" 壁	" Ⅲ	"	" (口 径23.5)。	両面ナデ。	"	"	"
" " 18	" Ⅲ壁	" Ⅳイ3	深鉢?	口縁部の山形は半乾きの時にV字 状に挿入してリボン状の突起を表 現。	"	"	茶 褐色	石英・石灰 質微砂粒が 多量。
" " 19	" Ⅲ壁	" Ⅴイ3	深鉢?	"。口唇下2.2cmの 箇に底径5mmの孔を穿つ。焼成後 のもので、袖修孔とみられる。	外側ナデ。 内面ナデと 条痕。	"	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が少量。
" " 20	" Ⅲ層	" Ⅴイ3	深鉢	無文口縁で、全体的に外側に軽く 開く。(口径20.9)	両面ともナ デと条痕。	"	褐色	石灰質細砂 粒・貝片等 が多量。
" " 21	" Ⅲ層	E群 Ⅴイ2 (△)	深鉢?	無文の肥厚口縁。	外側摩耗。 内面ナデ。	良く、 硬い。	淡 褐色	石灰質微砂 粒が微量。
" " 22	" Ⅲ層	" Ⅵイ3 (△)	深鉢?	"。肥厚部の貼付け は難である。	両面ナデ。	"	茶 褐色	石灰質の粗 砂粒・貝片 が多量。
" " 23	" Ⅲ層	" Ⅵイ2 (△)	深鉢	" (口径20.8)	外側ナデと 鋸削り。内 面削り。	"	黄 褐色	"
" " 24	" Ⅲ層	" Ⅵイ2 (○)	" る。	"。アバタ状を呈す	両面摩耗。	"	"	"
" " 25	" Ⅲ層	" Ⅵイ1 (○)	" る。	"。アバタ状を呈す	内面ナデ。	"	淡 蓝色	石灰質の粗 砂粒等が少 量。
" " 26	" Ⅲ層	" Ⅵイ2 (□)	深鉢?	"。	"	良く、 硬い。	灰 褐色	ほとんど見 えない。
" " 27	" Ⅲ層	" Ⅵイ4 (□)	"	無文の肥厚口縁。肥厚部の貼付け は難である。	両面とも摩 耗。	悪く、 難い。	茶 褐色	石灰質の粗 砂粒・石英 が微量。

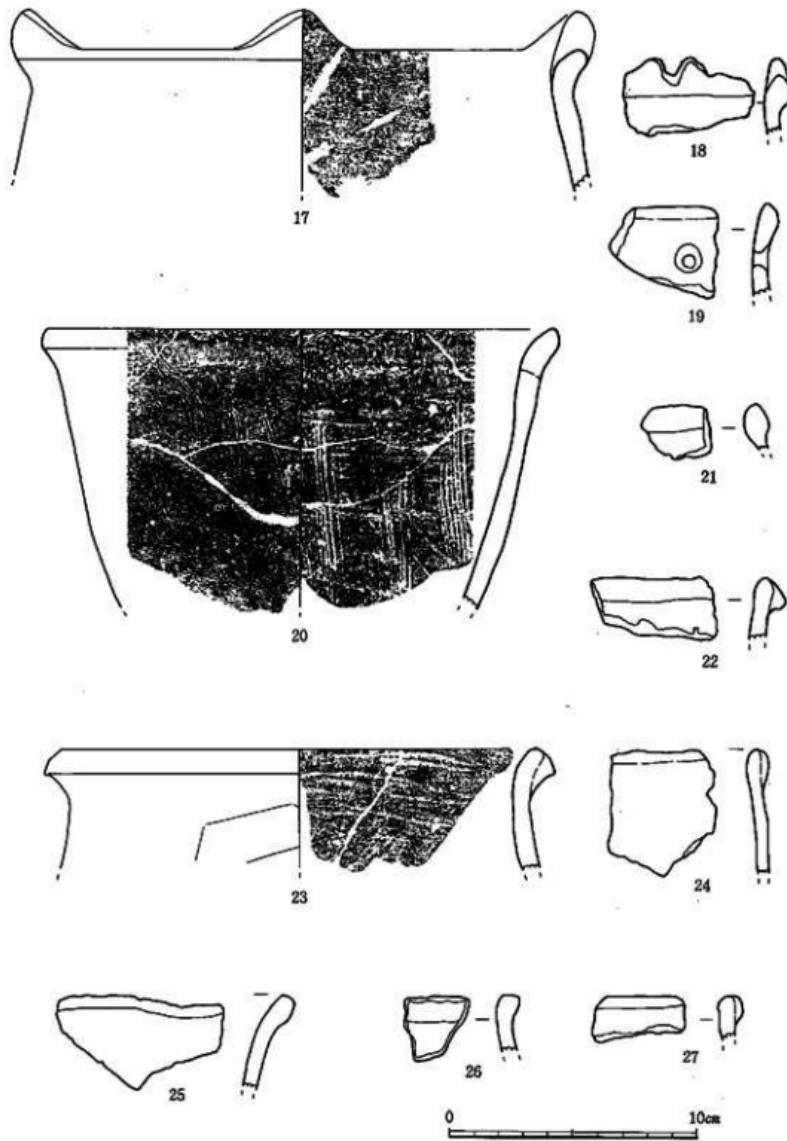


Fig.34 第6号竪穴住居内出土の土器 17~27. E群土器

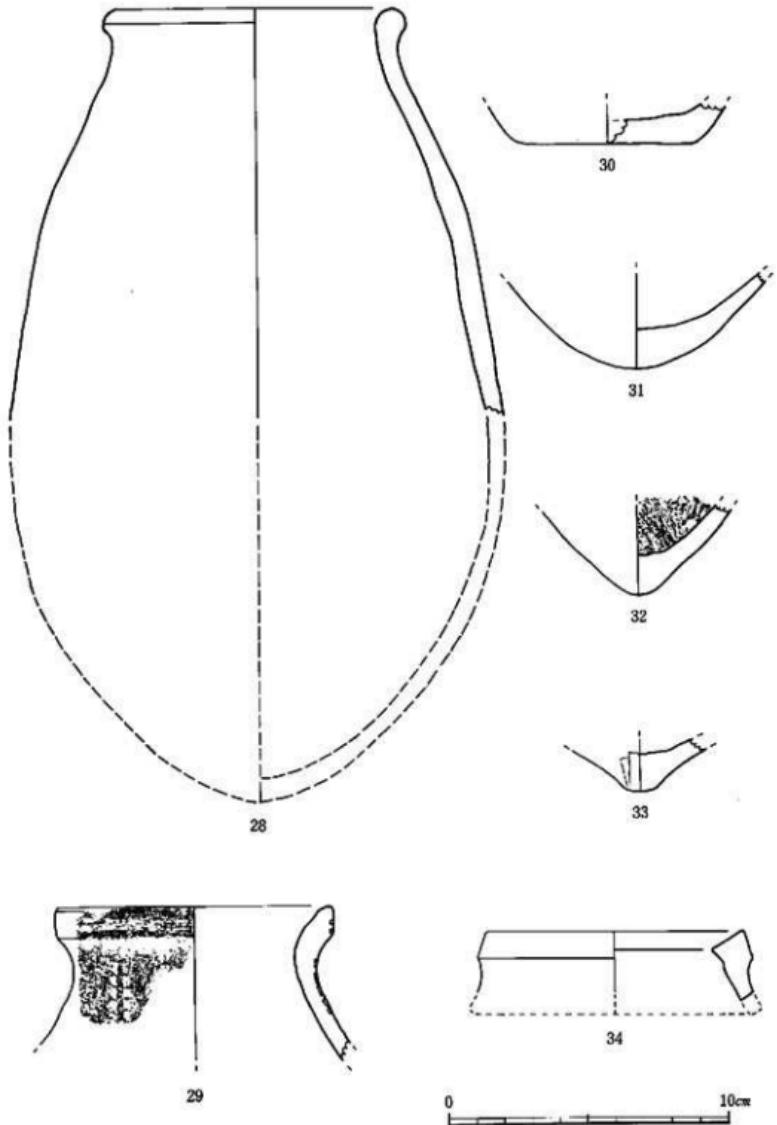


Fig.35 第6号竪穴住居内出土の上器

28. E群上器 29. F群土器 30. A群土器底部
31~33. E群土器底部 34. G群土器

標図番号 PL.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形 态 等 の 特 徴	表面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 36 PL. 25 28	6号 竪穴住居 Ⅲ層	E群 Ⅳイ3 (□)	壺	無文の壺で、肥厚口縁。全体的に内傾する。(口径10.8、脚径17.6、壁高推定28.4)。アバタ状。	両面ナデと指圧。	"	淡 黄 色	"
" " 29	" Ⅲ層	F群	壺形	肥厚する有文壺で、毫美系土器の影響か?。肥厚部と凸縁の両側に押し引き文。(口径10.0)。	両面ナデ。	良く、 硬い。	褐色	石灰岩の粗 粒・貝片が多量。
" " 30	" Ⅲ層	A群 口		A群期の底部片。底面から直線的に外に開く。(底径6.2)。	両面摩耗。 底面ナデ。	悪く、 弱い。	黄 褐 色	細い石英・ チャート片 が多量。
" " 31	" Ⅲ層	" ヘイ3		"	外表面耗。 内面ナデ。	良い、 硬い。	"	石灰質微砂 粒・石英が少 量も。
" " 32	" Ⅲ層	E トイ2		E群期の底部。丁寧に成形する。	外表面ナデ。 内面ナデと 条痕。	堅敏。	"	石灰質の微 砂粒が微量。
" " 33	" Ⅲ層	" トイ3		"。乳房状尖底。アバ タ状を呈する。	外表面ナデと 鋸削り。 内面摩耗。	堅敏。	褐色	細かい石英 が微量。
" " 34	" Ⅲ層	G群	脚台	脚台。脚の下端を欠く。粘土・焼 成等からE群期に所属する。(上 端の直径9.1)。	外表面耗。 内面ナデ。	"	黄 褐 色	"

Tab.26 第6号竪穴住居内出土の石器観察表

標図番号 PL.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 種	分 類	石質	法 量 (cm · g)				主 な 特 徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 36 PL. 41 1	6号 竪穴住居 Ⅲ層	石 斧	ICL大 21a	重 鐵 鋸 岩	11.0	7.6	3.0	390	竪穴の柱穴内から出土。両面とも研磨面である。刃は研ぎ直しがある。敲打は上端面と両側面に観察される。
" " 2	" Ⅲ層	磨 石	IMB □3	砂 岩	8.5	13.0	5.7	(939)	敲打は上・下端面に集中する。両面は磨面となる。右側面も磨面となっている。

骨製品

Fig.37の1のみである。トリの長管骨を半裁し、研磨したもので、更に、一端をヘラ状に削る。色は茶褐色を呈することから火を受けたと考えられる。残存部の最大長37.0mm、最大幅8.3mm、厚さ5.5mmを測る。第Ⅲ層5cm~10cmの出土である。

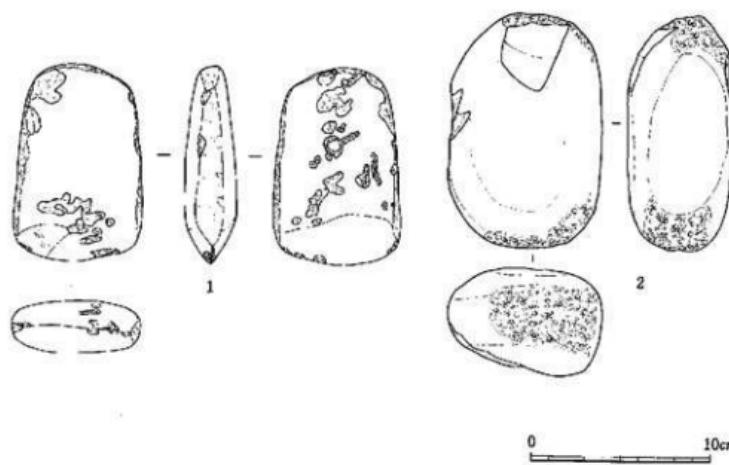


Fig.36 第6号巖穴住居 1. 石斧 2. 磨石

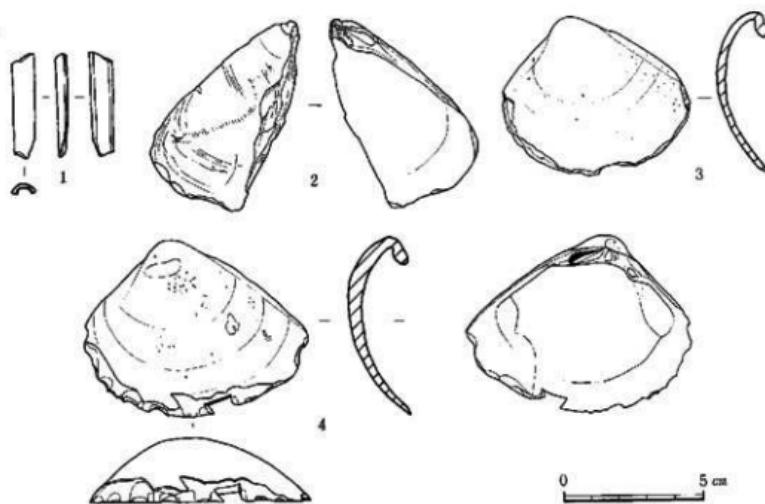


Fig.37 1. 骨製品 2～4. 貝製品

貝製品

貝製品はFig.37-2~4のチョウセンハマグリ製の貝刀が3点得られたのみである。以下、Tab.27に示す。

Tab.27 チョウセンハマグリ製貝刀

単位:mm

No. 37	層	貝種	残存 状況	R/L	法量			附刀		加工状況
					縦長	縦高	厚さ	範囲	刃先	
2	Ⅲ	チョウセンハマグリ	破損	右	70.4	32.3	22.0	①~	荒	大部分が破損する。
3	Ⅲ	チョウセンハマグリ	完形	左	55.3	65.8	19.0	①~②	荒	腹縁の中央が破損する。
4	Ⅲ	チョウセンハマグリ	完形	左	78.3	63.3	21.0	①~②	荒	剥離が著しく好資料である。

Tab.28 第7号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 K-31グリッド															
	重複	第8号竪穴を切っており、8号竪穴よりは新しい。															
構造	形状	方形(長方形)															
	規模	南北最大長約220cm、東西最大長約160cm															
	深さ	約25~35cm															
	壁	東・北・西は石積の壁になっているが、南壁は地山を掘り込んで壁面としている。しかし、一部石積みが残っていることから、南壁も石積みであった可能性もある。															
	壁面石積	最大長30~50cmの大きな石が積まれている。北側の石積みは4個の石を立てて使っているのが特徴。															
	床面	一部に岩盤面もあるが、大部分は地表面。															
	炉跡	直径約35cmの円形状の炉跡が1つ検出された。炉の上には厚さ1cmの灰層が堆積していた。															
	柱穴	口径10~20cm、深さ10~15cmの柱穴が10本残っている。															
出土遺物	土器 (口縁部の個数)	層群	A	B	C	D	E	F	G								
		Ⅱ					3										
		Ⅲ	2				55	2									
	石器	磨石3個、破片3個、石製品、未製品1個															
食料	骨製品	ヘラ状製品1個															
	貝製品	-															
	残滓	貝類5個(僅少)、イノシシ骨・魚骨・ウミガメ少量、ジュゴン僅少。															
堆積状況																	
礫や土器などを多く混入する黒褐色土が堆積。																	

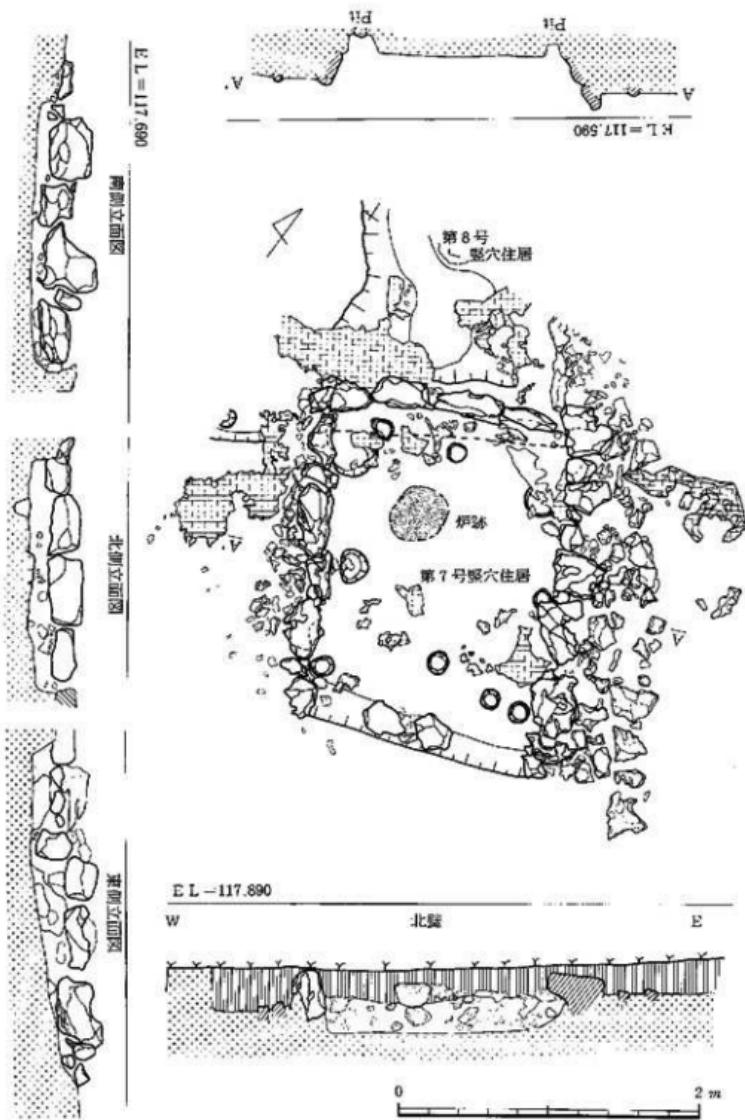


Fig.38 第7号窑穴住居跡測図

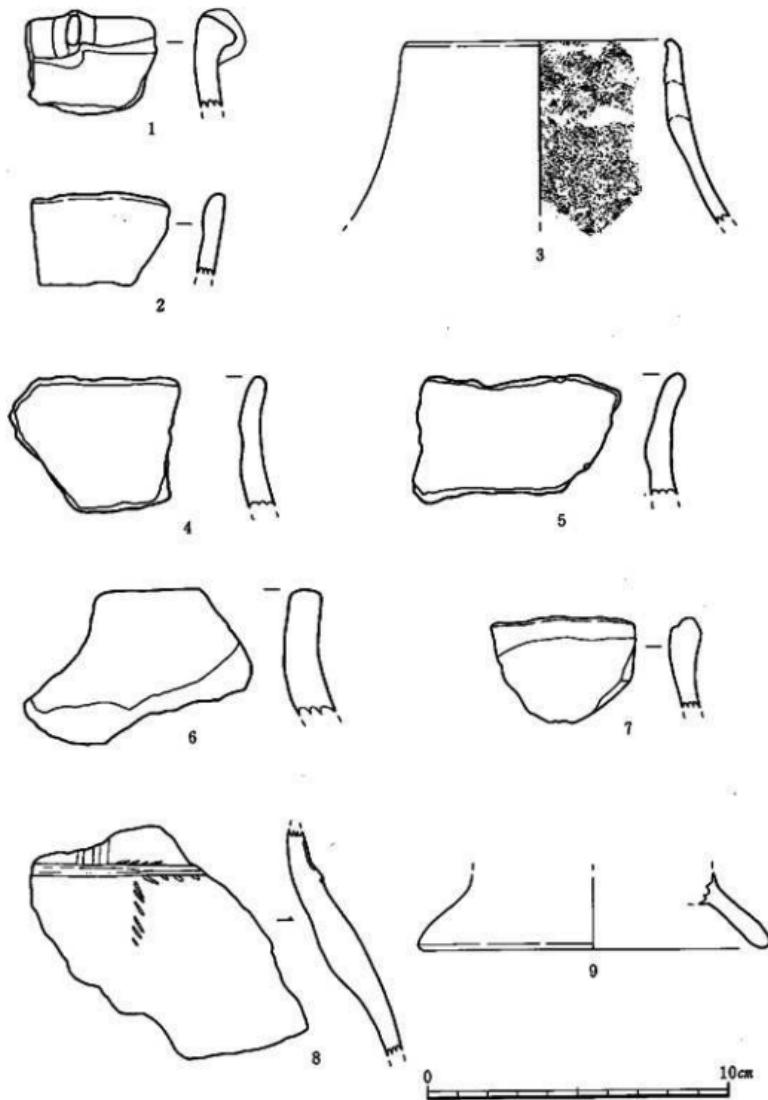


Fig.39 第7号竪穴住居内出土の土器

1. D群土器 2～7. E群土器 8. F群土器
9. G群土器

Tab.29 第7号竪穴住居内出土の上器

捕獲番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器種 形態等の特徴	器面調査	備 考	
					焼成	色調 及 入 物
Fig. 39 PL. 26 1	7号竪穴 住居 Ⅲ層	D群	山を持つ宇佐氏式土器。肥厚底に 粘土を貼付けて山を盛るが堆である。	外面ナデ。 内面糊付。	堅版。	茶褐色 粗い石英が 多量。
" " 2	" 目録 V-42	E群	無文の直口縁。	内面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色 石灰質の微 砂粒が少な。
" " 3	" Ⅲ層 V-13	"	無文の直。内側へきつて内傾する。 ナデ石。口縁の大半を欠く。(口 径9.1)	外向糊付。 内面ナデと 指印。	"	石灰質の粗 粒が少な。
" " 4	" Ⅲ層 V-13	深鉢	無文口縁。	外面ナデ。 内面ナデと 指印。	堅版。	灰色 石灰質の粗 砂粒が少な。
" " 5	" Ⅲ層 V-14	深鉢	無文口縁。口延長のくびれは強弱 である。全体的に難に形成。	外面ナデ。 内面ナデと 指印。	"	黄褐色 "
" " 6	" 住居 目録 V-14	E群	無文口縁。器底が大きい。各面とも、 丁寧に成形。	両面ナデ。	堅版。	褐色 微細な石英 が多量。
" " 7	" Ⅲ層 V-13 (△)	深鉢?	無文の肥厚口縁。肥厚の横断面は 三角形状。	"	堅版。	褐色 石灰質の微 細粒が微量。
" " 8	粗筋	F群	両側に細い刃状縁。凸部上方に削 痕線を複数位に施す。	内面ナデと 指印。		砂粒と微細 な石英多量。
" " 9	" Ⅲ層	G群	台付土器か脚付。(古徑11.5)。 焼成・混人物等からE群期に所属 する。	内面ナデ。	"	黄褐色 貝片等が微量。

Tab.30 第7号竪穴住居内出土の下器

捕獲番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	法 量 (cm · g)				主 な 特 徴	
				石質	長さ	幅	厚さ		
Fig. 40 PL. 41 1	7号竪穴 住居 Ⅲ層	石製袋 身筒の 木製品		粘 板岩	(3.2)	(2.6)	0.4	(5.3)	破損品で袋身其の1回とみられる。両面は 剥離面が主で、表面の下半部に薄かく研磨 を施す。
" " 2	粗筋 (表面)	用途不明		土 25mm ?	(5)	(3.6)	0.5	(7.9)	非常に軽く、土器の破片ではないと思われる。 粗筋は表面右側に残る。右側は辺は段 状になる。

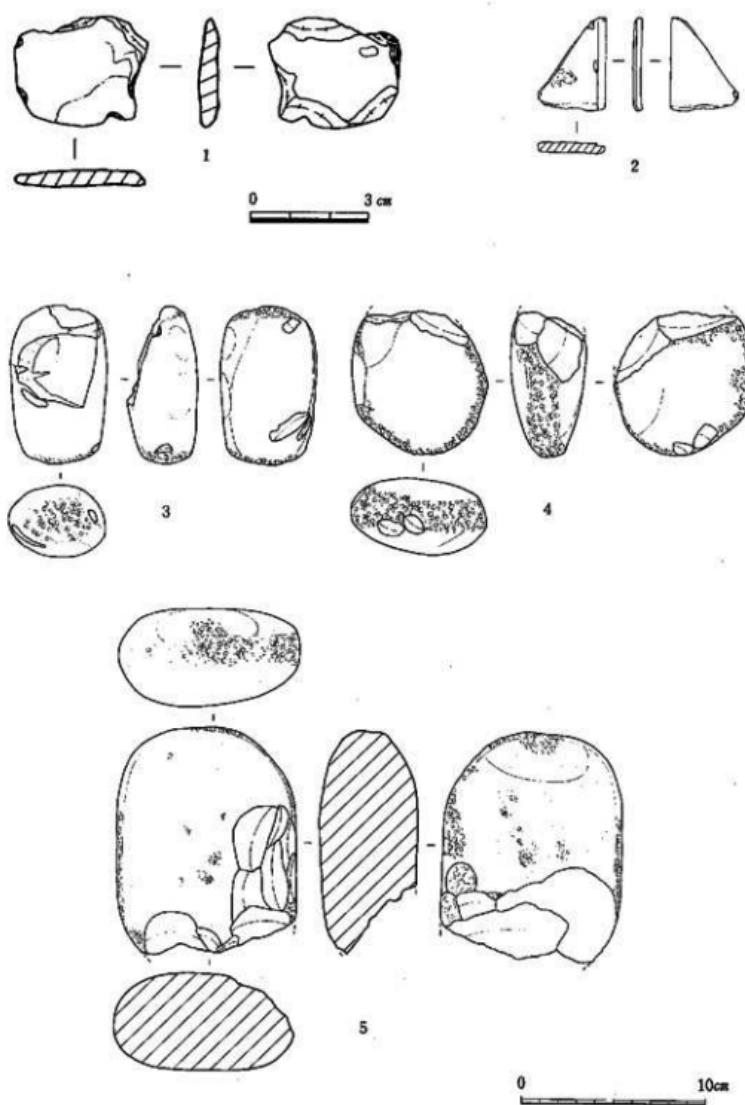


Fig.40 第7号堅穴住居
1. 石製装身具(木製品) 2. 用途不明 3. 樟用品(磨石)
4・5. 磨石

採集番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	石質	法量(cm・g)			主な特徴
					長さ	幅	厚さ	
"	"	内利用 磨石		緑色 半板岩	(85)	5.7	3.7 (241)	石斧頭部片を磨石として再利用。裏面の大部分を欠く。各面とも研磨面で、表面の上端に剥離痕が現る。(磨石の未製品?)。
"	3	Ⅲ層						
"	"	磨石	(II) SA 口2	變態 砂岩	7.7	7.8	4.1 (345)	上端が破損する。両面とも磨面。内側面と下端面に敲打が集中。
"	4	Ⅱ層						
"	"	"	(III) MB 口6	砂 岩	16.7	9.7	5.4 915	両面とも磨面。左側面・右側面・上端面に敲打が一部残る。右側面は使用による剥離面がある。
"	5	Ⅲ層						

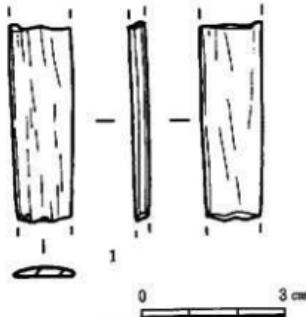


Fig.41 1. 骨製品

骨製品

Fig.41の1点のみである。イノシシの肢骨を板状に加工したもので、表・裏面とも顕著に研磨する。ヘラ状製品の基部と考えられる。横断面は長方形を呈する。残存部の最大長41.1mm、最大幅13.3mm厚さ3.5mmを測る。第Ⅲ層0cm～5cmの出土である。

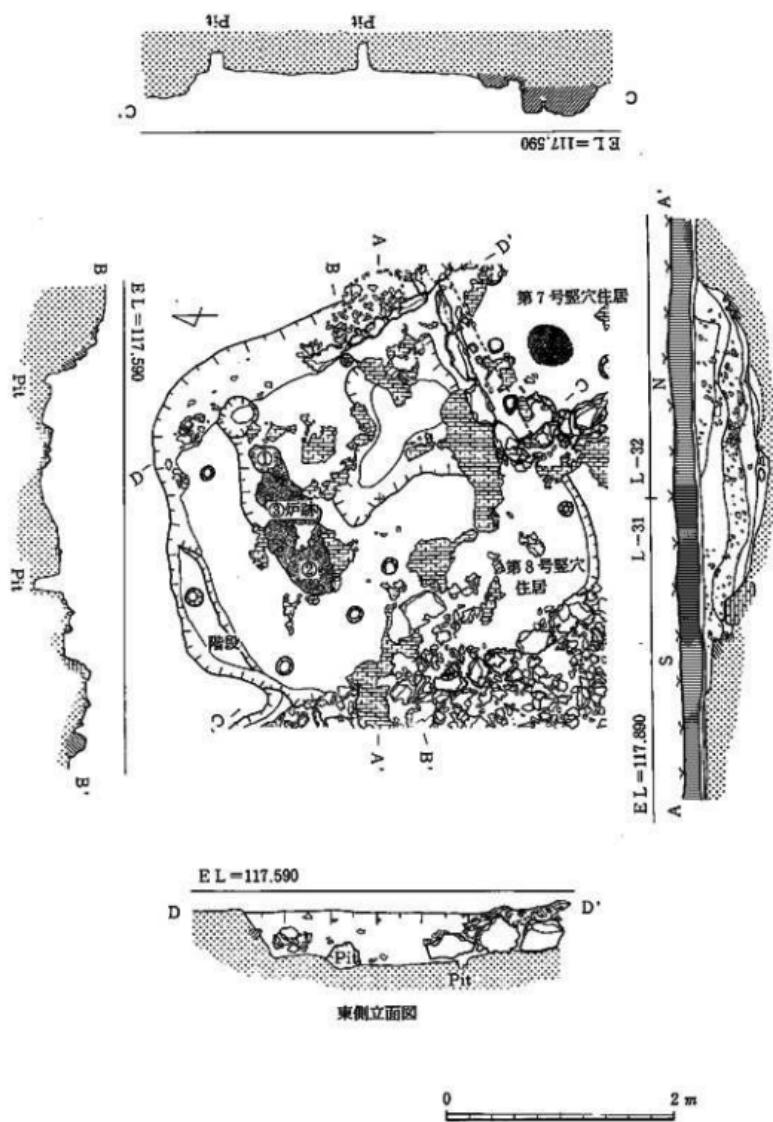


Fig.42 第8号竖穴住居跡実測図

Tab.31 第8号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 K-31・32, L-31・32グリッド																																																
重複	形狀	第7号竪穴に切られており、第7号竪穴より古い。																																																
	規模	隅丸方形(やや長方形)																																																
	構深さ	南北最大長約280cm、東西最大長約320cm																																																
	壁	約60cm 東壁の一部に石積みの壁面が見られるが、北壁や南壁は地山を掘り込んで壁面としている。なお、西壁は土留め石積によって廻されている。北壁に地山を削って造った1段の階段がついている。																																																
	壁面石積	東壁の南半分には石を立てて使った石積みが残っている。																																																
造	床面	岩盤面と地山面																																																
	炉跡	3つの炉跡が切り合っている。①と②が③が切っており、③が最も新しい炉跡である。炉の上には1~3cmの灰層が堆積していた。																																																
	柱穴	直径15~30cm、深さ10~23cmの柱穴が7本検出された。																																																
	出土	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>群</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> <th>D</th> <th>E</th> <th>F</th> <th>G</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>I</td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td>16</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>II</td> <td>3</td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>21</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>III</td> <td>15</td> <td>24</td> <td>22</td> <td>6</td> <td>458</td> <td>2</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>IV</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>30</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>V</td> <td></td> <td>5</td> <td></td> <td></td> <td>9</td> <td>1</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	群	A	B	C	D	E	F	G	I	1	1			16			II	3		1		21			III	15	24	22	6	458	2	6	IV			1		30			V		5			9	1	
群	A	B	C	D	E	F	G																																											
I	1	1			16																																													
II	3		1		21																																													
III	15	24	22	6	458	2	6																																											
IV			1		30																																													
V		5			9	1																																												
遺物	石器	磨石4個 破片18個																																																
	骨製品	骨錐1個、イノシシ頭大歯加工品1個																																																
	貝製品	ヤコウガイ貝匙1個、有孔製品ホシダカラ1個																																																
	食料残滓	貝類268個(多量)、イノシシ骨、魚骨多量、ウミガメ少量、ジュゴン微量。																																																
	堆積状況	夥しい量の土器が堆積していた。																																																

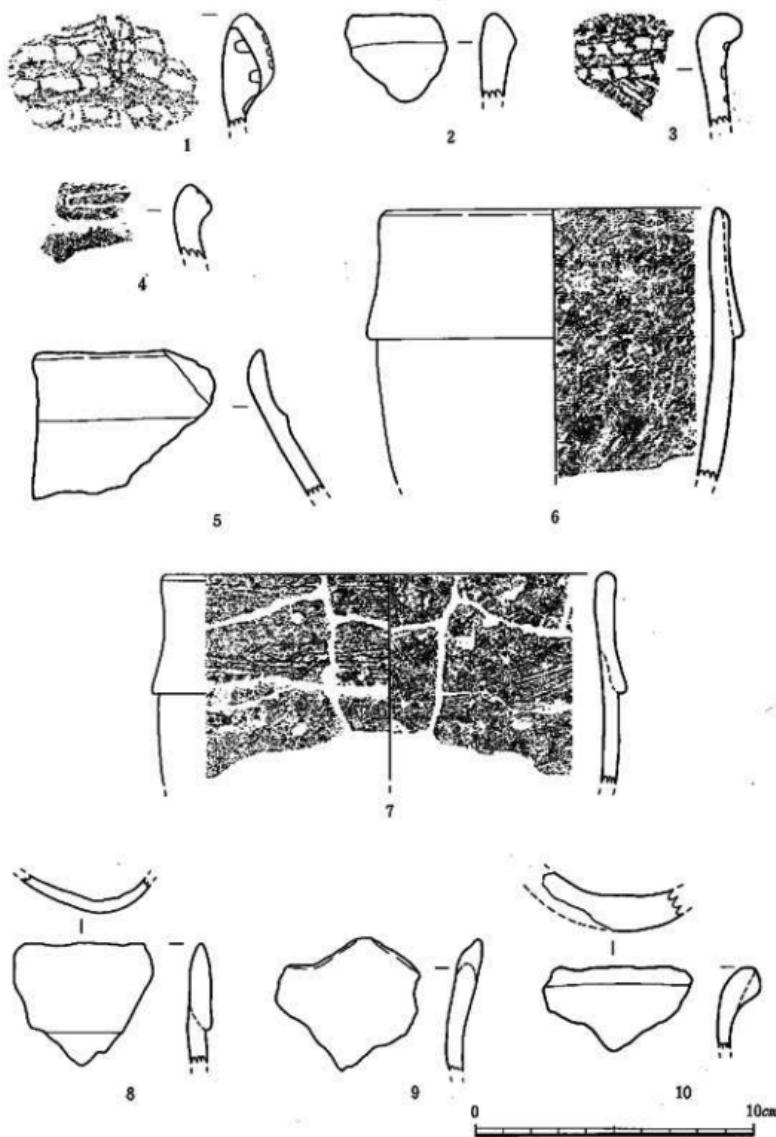


Fig.43 第8号竪穴住居内出土の土器 1～3. B群土器 4, D群土器 5～10. E群土器

Tab.32 第8号堅穴住居内出土の土器

持岡番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び標	形 式	型 種	形 畵 等 の 特 徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 43 PL. 26 1	〃	II 壁	B群	山を持つ有文肥厚口縁。肥厚帯は施工具で押捺文。山の腹所と肥厚帯直下は又状工具で点刻文等。	外面ナデ。内面磨耗。	良く、硬い。	茶褐色	細かい石英と粗い石英が多量。
〃 〃 2	〃 III 壁	B群 III a	深鉢	無文肥厚口縁。	両面剥離。	〃	黄褐色	石灰岩の粗砂粒・貝片が多量。
〃 〃 3	〃 III 壁	III c 12	〃	有文の肥厚口縁。口唇は輪広。肥厚帯直下に押捺刻文と斜め線文。	外曲磨耗。内曲剥離。	〃	〃	〃
〃 〃 4	〃 III 壁	D群	〃	有文の宇佐浜式土器。肥厚部に粗筋線文。口唇部の状況から山か付くとみられる。	〃	堅緻。	淡褐色	細かい石英と粗い石英が多量。
〃 〃 5	〃 III 壁	E群 Iイ2	〃	無文の肥厚口縁。カヤウチバンタ式系統。	両面剥離。	〃	黄褐色	段細な砂粒が微量。
〃 〃 6	〃 III 壁	E群 Iイ1	深鉢	小型の深鉢?。カヤウチバンタ式系統。肥厚帯の詰りは強。アバタ法。(11径114)。	外曲剥離。外曲ナデと条痕。	〃	〃	ほとんど見えない。
〃 〃 7	〃 III 壁	Iイ-3	〃	無文口縁。カヤウチバンタ式系統。肥厚帯の詰りは強。(11径16.0)。	両面ともナデと条痕。	〃	〃	石灰岩の粗砂粒が少量。
〃 〃 8	〃 III 壁	Iイ3	壺	山縁の上面側は倒丸方形。	両面剥離。	〃	褐色	石灰岩の粗砂粒が微量。
〃 〃 9	〃 III 壁	II イ1	深鉢	山形口縁。アバタ法を示す。	両面ともナデと指圧。	〃	黄褐色	〃
〃 〃 10	〃 III 壁	Ⅲイコ	壺	宇佐浜式系統。無文の壺。	外曲ナデ。内面肥厚。	〃	淡黄色	殘留な石英等が少量。
Fig. 44 PL. 27 11	〃	II	III 41	〃。肥厚帯に山を抱む。肥厚帯に点刻文。アバタ法。(11径16.0)。	外曲剥離。内曲ナデ。	〃	〃	石灰岩の粗砂粒が少量。
〃 〃 12	〃 III 壁	Ⅲイ-3	深鉢	無文口縁で、肩部が「く」の字状に折れる。粗な詰りである。	外曲ナデと鏡削り。内曲ナデ。	〃	褐色	〃
〃 〃 13	〃 III 壁	Ⅲイ3	〃	無文口縁。全体的に粗な成形。輪積みの窓が強烈。(11径16.8)。	外曲ナデと鏡削り。内曲ナデと指圧。	〃	〃	石灰岩の粗砂粒と微砂粒が多量。

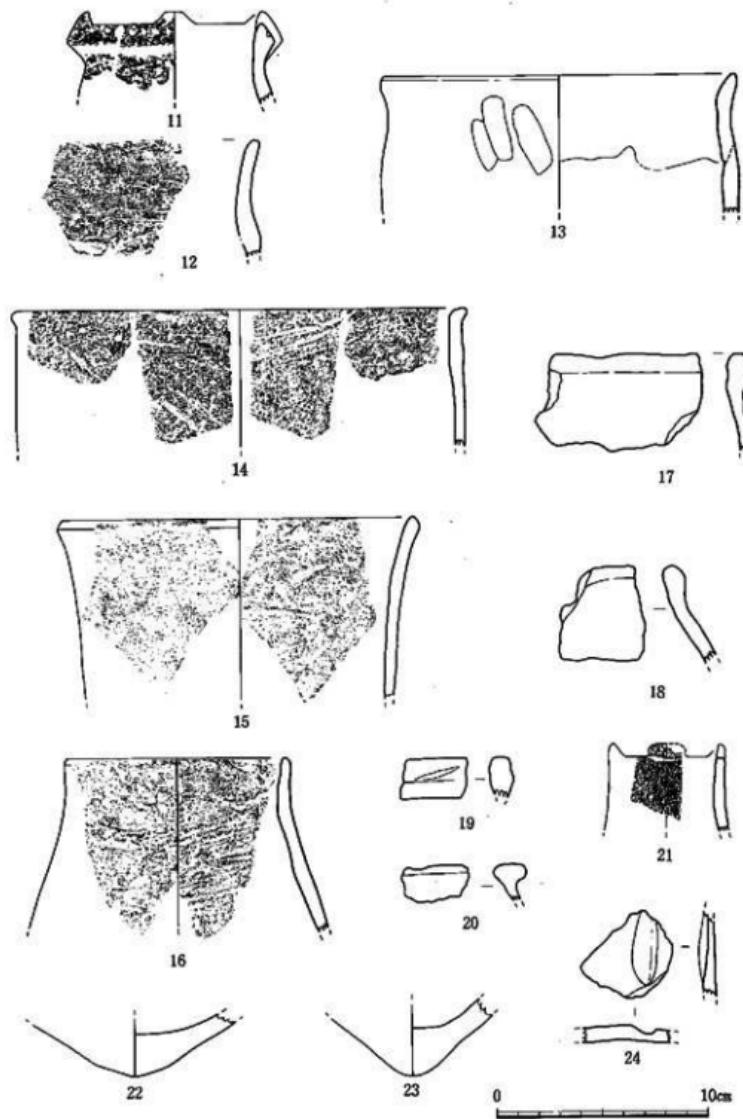


Fig.44 第8号竪穴住居内出土の土器

11~20. E群土器 21. F群土器
22・23. E群土器の底部 24. G群土器（土製品）

特因番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形 似 等 の 特 徴	器面調査	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 44 PL. 27 14	"	"	"	" " アバタ状。 (口徑21.5)。	内面ともナ デと鋸割り。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が微量。
"	"	"	"	" 全体的に錐な成形。 (口徑17.1)。	外表面ナ デと鋸割り。内 面ナデと条 痕。	"	褐色	"
15	"	"	"	無文の壺。 (口徑:0.6)。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	"	"	"	無文の壺。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
16	"	"	"	無文の肥厚口縁。全体的に錐な成 形。アバタ状。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	"	"	"	無文の肥厚口縁。全体的に錐な成 形。アバタ状。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
17	"	"	"	無文の肥厚口縁。壺とみられる。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	8号竪穴 住居 遺物	E群	"	無文の肥厚口縁。壺とみられる。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	良く、 硬い。	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
18	"	質イ3 (△)	壺?	無文の肥厚口縁。配厚帯に斜丸線。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	堅緻。	"	はとんど見 えない。
"	"	"	"	無文の肥厚口縁。配厚帯に斜丸線。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	堅緻。	"	はとんど見 えない。
19	"	"	"	無文の肥厚口縁。アバタ状を呈す る。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	"	"	"	無文の肥厚口縁。アバタ状を呈す る。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
20	"	"	"	無文の肥厚口縁。アバタ状を呈す る。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	"	"	"	山を持つ長葉壺。有文。口縁に單 純線を模倣・複複・斜位に施す。穿 空ナデ。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	良く、 硬い。	"	はとんど見 えない。
21	"	"	"	山を持つ長葉壺。有文。口縁に單 純線を模倣・複複・斜位に施す。穿 空ナデ。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	"	"	"	山を持つ長葉壺。有文。口縁に單 純線を模倣・複複・斜位に施す。穿 空ナデ。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	"	"	"	山を持つ長葉壺。有文。口縁に單 純線を模倣・複複・斜位に施す。穿 空ナデ。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
22	"	"	E群 ト	E群期の底盤。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
"	"	"	"	"	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	"
23	"	"	"	"	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	"
"	"	"	G群 上製品	E群期の頭部片を研磨用の道具と して用いたもの。研磨した際に生 じた溝がある。	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	堅緻。	灰 褐色	はとんど見 えない。
24	"	"	"	"	外表面ナ デ。内面ナ デと条 痕。	"	黄 褐色	"

Tab.33 第8号竪穴住居内出土の石器

特因番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 種	分 類	石質	法 量 (cm · g)				主 な 特 徴
					長さ	幅	厚さ	重 量	
Fig. 45 PL. 42 1	8号竪穴 住居 遺物	磨石	IMB イ1	砂 岩	13.6	8.6	4.0	899	表面のみ磨削面。両側面、上・下端面は敲打面。先端は鉋面ではなく、自然面に近い。前面中央に敲打痕が認められる。

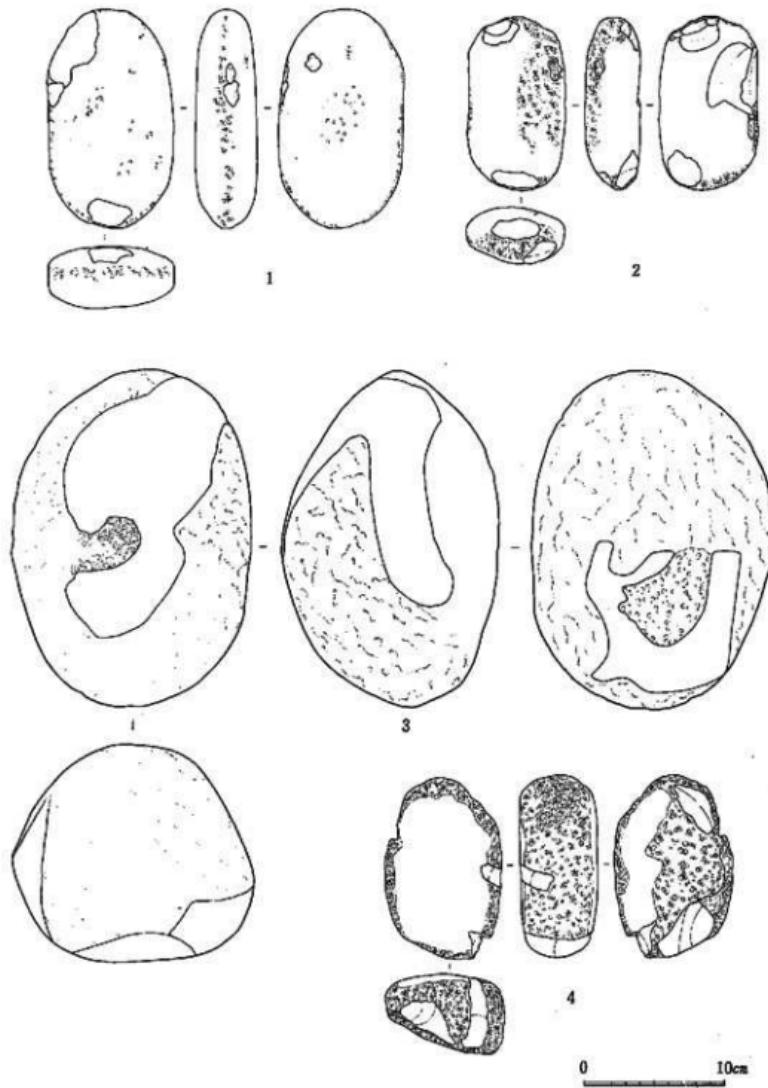


Fig.45 第8号竪穴住居 1~4. 磨石

標印番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	種類	分類	石質	法量(cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
〃 2	Ⅲ層	〃	Ⅲ.MB イ2	砂岩	12.1	6.6	4.0	456	両面は擦面で、一部に剝離面等が残る。敲打は上・下端面及び両側面に集中する。
〃 3	Ⅲ層	〃	Ⅲ.I.D イ6	砂岩	23.4	17.3	15.7	5,870	表面と右側面(裏面寄り)は擦面。他の面は敲打面察察される。表面の中央付近の横は震す際に上下運動で生じたものか?。
〃 4	Ⅲ層	〃	(Ⅲ)MB イ2	砂岩	13.0	7.4	5.5	(866)	両面が擦面。他の面は敲打のみが認められる。裏面は2/3程度が破損する。

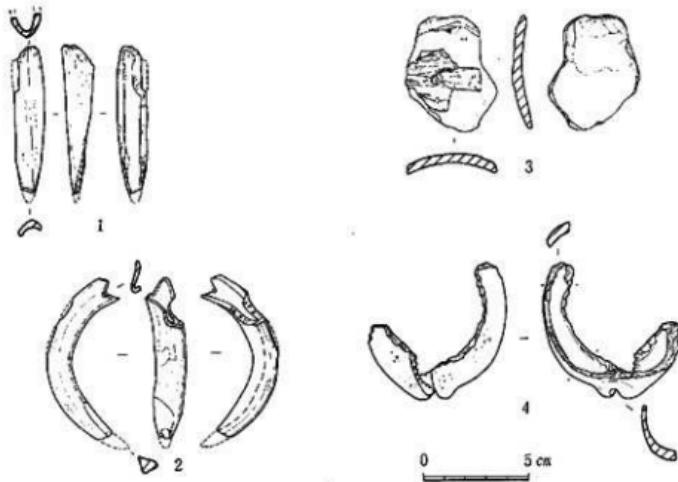


Fig.46 1・2. 骨製品 3・4. 貝製品

骨 製 品

Fig.46の2点のみが得られた。

Fig.46-1 イノシシの右脛骨の前縁を用い、一端を錐状に加工したもので先端部を欠損する。残存部の最大長69.1mm、幅13.8mm、厚さ9.6mmをかる。第Ⅲ層の出土である。

2はイノシシの左下顎犬歯の基部と先端部に加工痕を加えたものである。基部の外縁近くに幅14.2mm、深さ3.0mmの抉りが認められ、さらに2.5mmの孔が施される。先端部1.8mmの孔の跡がある。破損品であるが、残存部の最大長7.47mm、幅11.5mmを測る。第Ⅲ層の出土である。装飾品と考えられる。

貝製品

Fig.46-3の1点のみである。ヤコウガイの貝殻を切り取り、加工したものである。研磨などの細かい加工痕は認められない。破損品で残存部の最大長52.0mm、最大幅42.3mm、を測る。第Ⅲ層の出土である。

Fig.46-4はホシダカラの殻底面及び殻頂を打ち欠いたものである。殻底面は両側から打削調整が顕著に認められる。未製品で残存部の最大長29.0mm、最大幅14.0mmを測る。第Ⅲ層の出である。

Tab.34 第9号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 J-31・32グリッド						
重複	第10号竪穴を切っており、第10号竪穴より新しい。							
構造	形状	方形（長方形）						
	規模	南北最大長約270cm、東西最大長約240cm						
	深さ	20~30cm						
	壁	東・北・西壁は石積みで壁面化粧している。西壁の半分と南壁は地山を掘り込んで壁面としている。しかし、西壁の半分には石を抜かれた跡があり、西壁全体が石積みであったと考えられる。						
	壁面石積	最大長30~50cmの大きな石を1段積んでいる。第10号竪穴を掘って積まれた石積みの下に見える石は第10号竪穴に投げ込まれた石である。						
	床面	南側は地山面が床面であるが、北側は第10号竪穴の第Ⅳ層が床面である。						
	炉跡	2つの炉跡が検出された。炉の上には1~2cmの灰層が堆積していた。②の炉跡には2本の柱穴が付いている。						
	柱穴	口径20cm前後、深さ10~20cmの柱穴が8本廻っている。						
出土	土器 (口縁部の個数)	層	A	B	C	D	E	F
		I			1		5	
		II					3	
		III	2	7	2		41	
		IV					1	
遺物	石器	石斧2個、磨石1個、破片12個、石製装身具1個						
	骨製品	骨針1個、管状製品2個						
	貝製品	ヤコウガイの蓋製貝斧1個、シレナシジミ製の貝刃1個、スイジガイ製利器1個、装飾品1個						
	食料残滓	貝類833個(多量)、イノシシ骨、魚骨少量、ウミガメ・ジュゴン骨少。						
堆積状況		上は疊が大量に混入し、床面近くでは黒褐色土が堆積。						

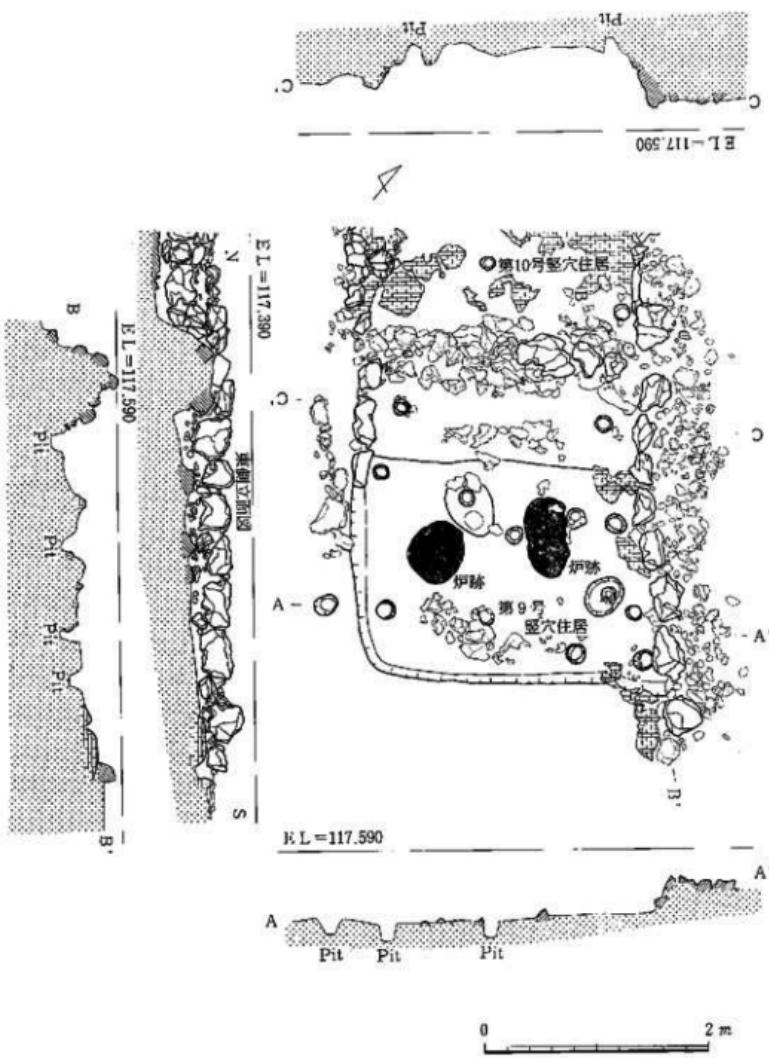


Fig.47 第9号窑穴住居踏勘图

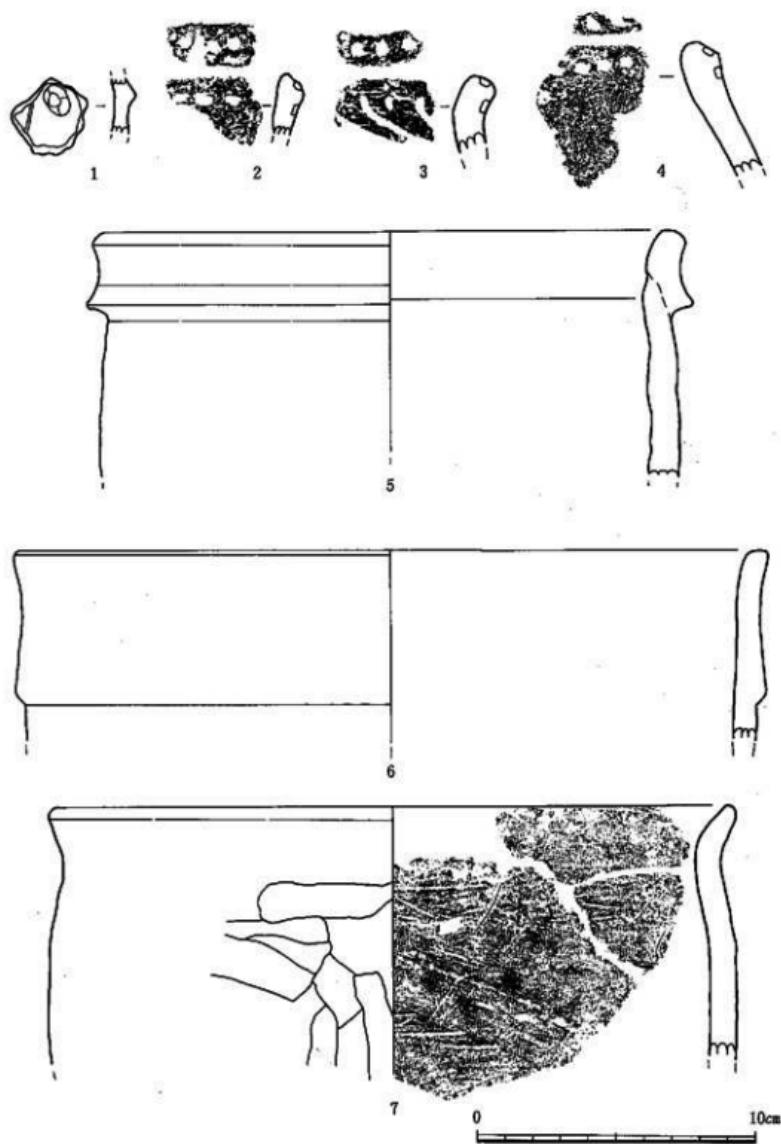


Fig.48 第9号竪穴住居内出土の土器 1. A群土器 2~4. B群土器 5~7. E群土器

Tab.35 第9号竪穴住居内出土の土器

博岡番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び門 目	形 式	器 種	形 壓 等 の 特 徴	器皿調査	備 考	
						焼成	色調
Fig. 48 P.L. 28 1	9号竪穴 住居 III	A群		A群期の灰空式土器。脚部片。脚 状の突起を貼付ける。文様は叉状 工具による短波捺文を斜面に施す。	両面ナデ。 悪く、 脆い。		石英が多量。
" " 2	" B群 III a		深鉢	有文の肥厚口縁、口唇と肥厚唇直 下に单範工具で押捺刻文。	両面ナデ。 良く、 硬い。	黄 褐色	石灰岩の粗 砂粒、石灰質 微研粒多量。
" " 3	" B群 III d c		深鉢?	有文の口縁。肥厚しない。口頭部 で軽く外反。口唇と口縁上端に点 刻文、その底に斜位の沈線文。	両面ともナ デと条痕。	"	茶 褐色
" " 4	" B群 III d i	"		" " " " 口唇と口 縁に半範で点刻文。	両面ともナ デ。	"	石灰質粗 砂粒と長片が 多い。
" " 5	" B群 I 4 3	"		無文口縁。カヤウチバタ式系縫。 肥厚唇の造りは複であるが、脚厚 唇直下に埋て開窓。(口徑21.2mm 径20.6)。	両面ともナ デと節削り。	堅強。	石灰岩の粗 砂粒、口片 が少。
" " 6	" B群 I 4 4	"		無文のカヤウチバタ式系縫の土器。 肥厚唇の造りは比較的丁寧。(口 縁27.0)。	両面ナデ。	良く、 硬い。	淡 黄色
" " 7	" B群 V 1 3	"		口頭部で若干、くびれながら軽く 外反す。(口徑24.6)。	外面部ナデと 観割り、内面 ナデと条痕。	"	石灰岩の粗 砂粒、サン ゴ片等多量。
Fig. 49 P.L. 28 8	" B群 V 1 3	"		" " " 小型の深鉢。(口徑13.2)。	外面部ナデ。 内面部ナデと 条痕。	"	石灰質の粗 砂粒が微量。
" " 9	9号竪穴 住居 B群	E群 V 1 3	深鉢	無文口縁。口頭部のくびれは微弱。 輪積みの溝が頗る。	外面部ナデと 条痕、内面 ナデと指圧。	堅強。	石灰質の黃 砂粒が少。
" " 10	" B群 VI 1 (O)		深鉢	" アバク状をなす。	外面部ナデ。 内面削離。	良く、 硬い。	石灰岩の粗 砂粒が少。
" " 11	" B群 VI 4 (O)		壺	" 壺と見られる。	両面削離。	"	細かい石英 が多量。
" " 12	" B群 VI 4 (O)	"	深鉢	口縁部で僅かに肥厚する。	外面部削離。 内面ナデ。	"	細かい石英 が多量。
" " 13	" B群 F群			凸唇を貼付けた有文壺。凸唇は、 斜位の短波捺文。凸唇上下方に撥位 の短波捺文。	内面ナデ。	"	細い石英が 少。

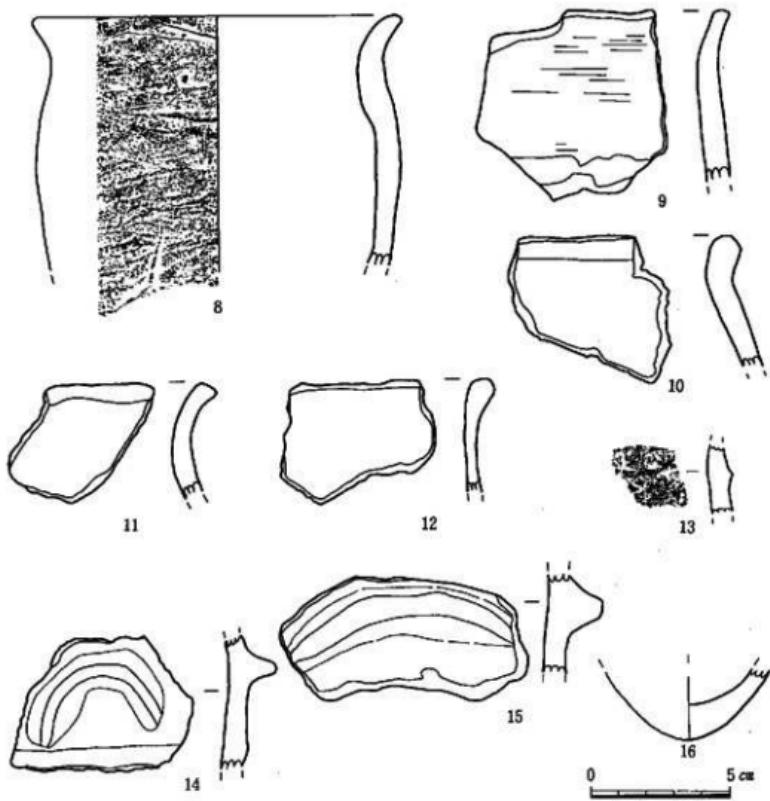


Fig.49 第9号竪穴住居内出土の土器 8~12. E群土器 13. F群土器 14・15. G群土器
16. E群土器の底部

鉢岡番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形 細 等 の 特 徴	器面調査	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 49 P.L. 28 14	"	G群	把手	把手を貼付けた口縁近くの破片で、内側に幾分頗く。肥厚帯に強状の把手。E群期に所属する資料。	"	"	黄褐色	"
" 15	" 直器	"	"	把手を貼付けた側部片。弓状の把手。E群期に所属する。	"	"	"	細かい石英 が多量。

捕獲番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層 及び層	形 式	器 種	形 態 等 の 特 故	器面溝壑	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 49 PL. 28 16	*	E層 田舎 ト		ヒ群期の尖底。	外面ナデ、 内面剥離。	"	赤 褐 色	石灰質の細 砂粒が少量。

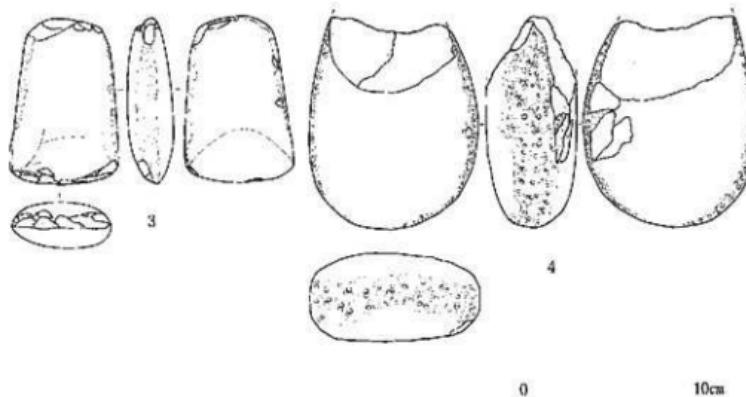
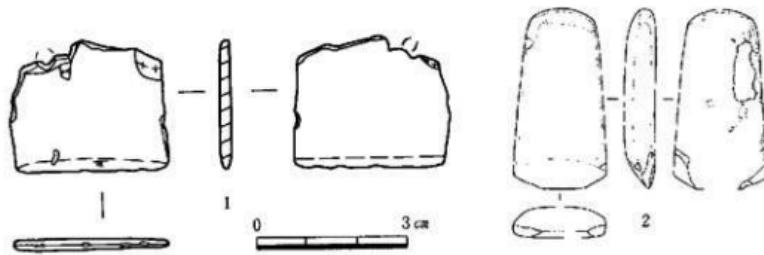


Fig.50 第9号竪穴住居 1. 石製袋身具 2・3. 石斧 4. 磨石

Tab.36 第9号竪穴住居内出土の石器

福岡県丹 PL.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	石質	法量(cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 50 PL. 42 1	9号竪穴 住居 Ⅲ層	石製裝 身具		粘 板岩	(2.5)	2.9	0.2	(2.6)	有孔の装身具とみられるもので、孔の半分を欠く。両面に研磨。両面の下端に刃を付ける。両刃。
# 2	# 直層	石斧	I AL中 (1)イ b	玄 武岩	10.0	5.3	1.7	179	磨製の両刃石斧。研磨は上端面と底面を除いて、丁寧に研磨を施す。刃の研ぎ出しへ底面が主体。
# 3	# 直層		I CM大 (2イ a)	玄 武岩	(9.3)	6.1	2.5	(240)	磨製の両刃石斧を刃部を欠く。両面に丁寧な研磨を施す。底打は両側面と上端部の一部に限られる。
# 4	Ⅲ層	磨石	(II) MB ロ 2	砂 岩	(11.4)	9.5	5.1	(778)	両面とも磨面で、滑沢を帯びる。両側面・下端面は敲打が残る。

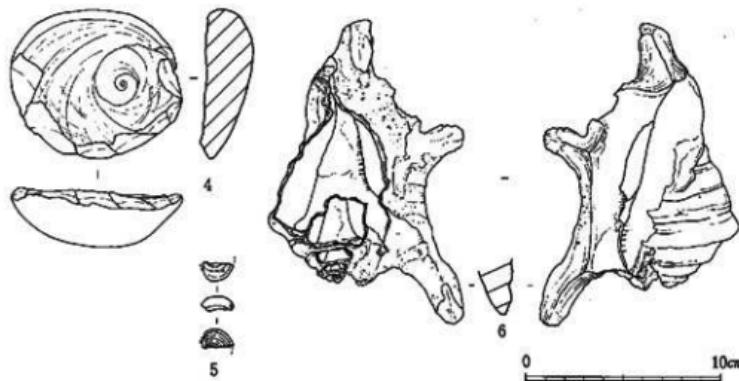
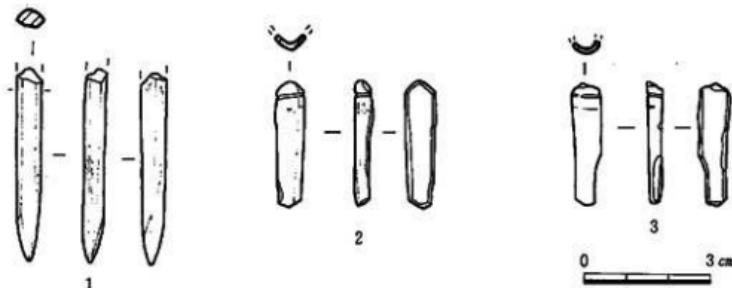


Fig.51 1～3, 骨製品 4～6, 貝製品

骨製品

第Fig.51図の3点が得られた。1はイノシシの腓骨の一端を針状に尖がらしたもので、骨針と考えられる。針先以外は加工痕は認められない。残存部の最大長44.9mm、幅5.7、厚さ3.8mmを測る。第Ⅲ層15cm～20cmの出土である。

2、3は歯骨の長管骨を横位に切取り、管状にしたものである。一端に沈線文を二条施すが、回続しない。外の切断面に研磨のみで加工痕は認められない。縦位に破損し、前者は同一個体と考えられる。最大長28.7mm、最大幅6.5ミリ後者は最大長29.0mm、最大幅6.5mmを測る。第Ⅲ層0cm～5cmの出土である。

貝製品

実用品3点、装飾品1点の計4点が得られた。

実用品は夜光貝製螺蓋製貝斧、シレナシジミ製貝刀、スイジガイ製利器である。

Fig.51-4は夜光貝製螺蓋製貝斧は縦8.6mm、横7.6mm、附刃の範囲③-⑤はかなり、腹縫に食い込んでいる。第Ⅲ層10cm～15cmの出土である。

5はイモガイ製のビードで肩部と体層の切離面に研磨痕らしきものが認められる。破損品で直徑1.5cmと推測される。厚さ7.0mmである。第Ⅲ層の出土である。

6はスイジガイ製利器で上原氏分類にしたがうとNo.1に附刃し、No.2,3,4は基部から欠損し、No.5,6は僅かに基部を残す。背面は大きく欠損しているが特に加工の痕は認められない。No.1は体層に対して、横刃で両面から研磨される。刃の幅は1.2cmを測る。第Ⅲ層0cm～5cmの出土である。

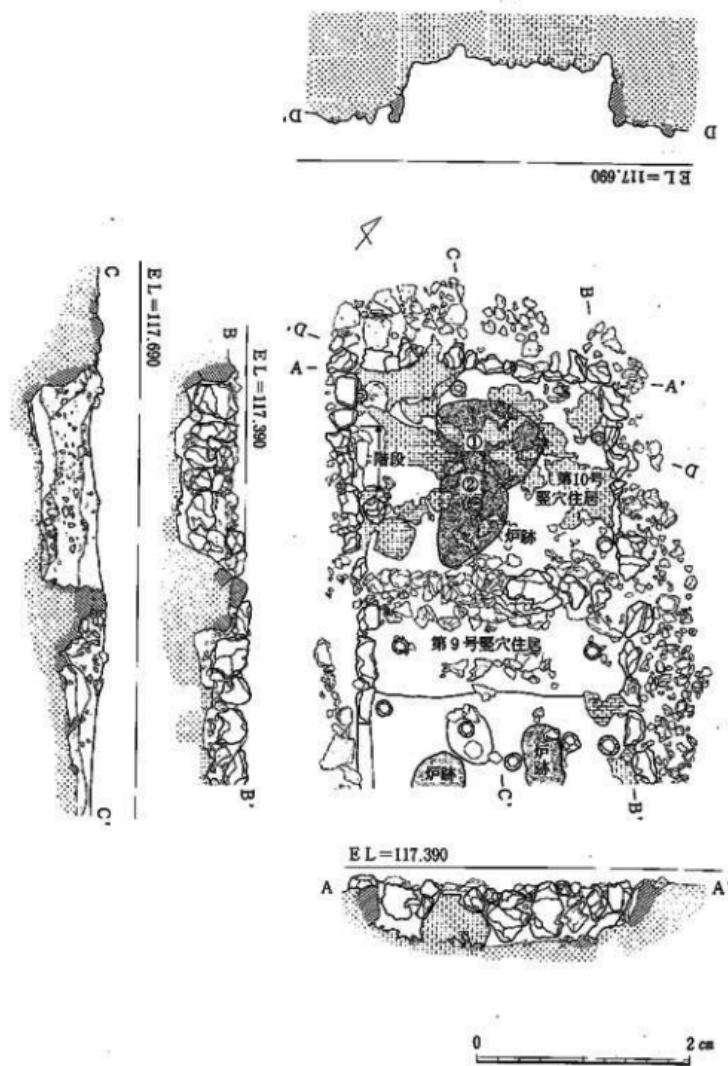


Fig.52 第10号竖穴住居跡実測図

Tab.37 第10号竪穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 J-31・32グリッド																																																								
	重 複	第9号竪穴に切られており、第9号竪穴より古い。																																																								
	形 状	方形(長方形)																																																								
	規 模	南北最大長約300cm、東西最大長約240cm。																																																								
構 造	深 さ	60~70cm																																																								
	壁	東・北・南は石積みで壁面化粧されている。南壁は第9号竪穴に接されているので不明。 なお、西壁に石積みの階段が1段付いている。																																																								
	壁面石積	最大長20~40cmの石を60~70cm積み上げている。石積みはどの竪穴よりも丁寧に積まれている。																																																								
	床 面	地山面もあるが岩盤面が多い。																																																								
造	炉 跡	ほぼ中央に2つの炉跡が検出された。炉は重なっており、①は②に切られており、③が新しい炉跡である。炉の上には1~4cmの灰層が堆積していた。																																																								
	柱 穴	直径10~15cm、深さ7~15cmの柱穴が5本検出された。第9号竪穴の下になっている部分は掘ってないので不明。																																																								
出 土	器 (口縁部の個数)	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>群 層</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> <th>D</th> <th>E</th> <th>F</th> <th>G</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>I</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>12</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>II</td> <td>1</td> <td>3</td> <td>1</td> <td>20</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>III</td> <td>4</td> <td>13</td> <td>4</td> <td>10</td> <td>236</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>IV</td> <td></td> <td>4</td> <td></td> <td></td> <td>34</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>V</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>6</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>床 面</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>3</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	群 層	A	B	C	D	E	F	G	I					12			II	1	3	1	20	1			III	4	13	4	10	236	1		IV		4			34			V					6			床 面					3		
群 層	A	B	C	D	E	F	G																																																			
I					12																																																					
II	1	3	1	20	1																																																					
III	4	13	4	10	236	1																																																				
IV		4			34																																																					
V					6																																																					
床 面					3																																																					
遺 物	石 器	石斧8、用途不明1個、破片9個																																																								
	骨 製 品	骨針3個、骨錐3個、その他6個																																																								
	貝 製 品	貝刃5個、貝斧1個、有孔製品8個、貝輪7個、その他3個																																																								
	食 料 残 滓	貝類1,467個(多量)、イノシシ骨多量、魚骨・ウミガメ少量、ジュゴン僅少。																																																								
堆 積 状 況		上は角礫や頭大の石が多く堆積し下は角礫と土器が多く堆積。																																																								

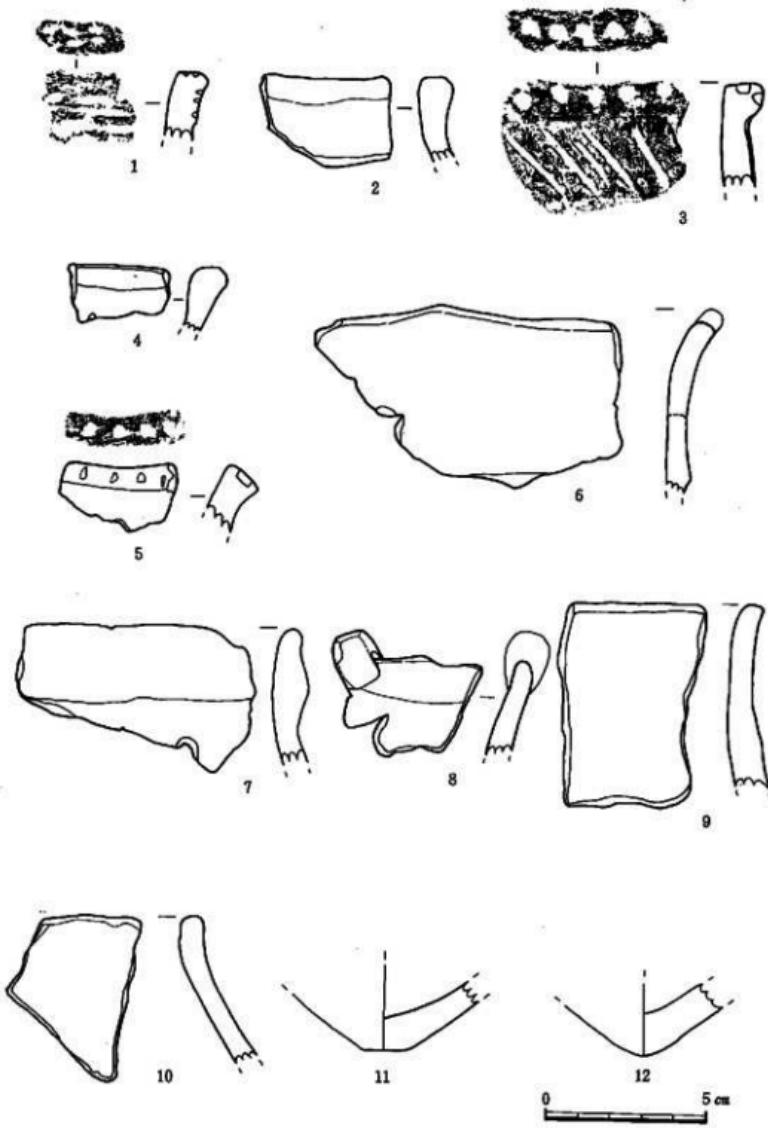


Fig.53 第10号竪穴住居内出土の土器
1. A群土器 2～5. B群土器 6～10. E群土器
11・12. E群上器の底部

Tab.38 第10号壁穴住居内出土の上器

拂因番号 P.L.番号 遺物番号	グラフド 及び番	形 式	器 形	形 值 等 の 特 徴	器面調査	備 考		
						焼成	色調	
Fig. 53 P.L. 29 1	10号 壁穴住居 Ⅰ	A群 Ⅲ類	深鉢?	△群期の伊波式または荻窓式の口縁。叉状T工具で口縁に点刻文。口縁に押し引き文。	両面ナデ。	悪く、 敷い。	茶褐色	粗い石英が 多量。
" 2	" Ⅲ類	" Ⅲ b	"	無文の肥厚口縁。	両面ナデ。 内面削離。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒・貝片 が多量。
" 3	" Ⅲ類	" Ⅲ c イ	深鉢	有文の肥厚口縁。口唇と肥厚帯に 単角工具で押捺刻文。肥厚帯下に 線状工具で斜沈線文。	両面ナデ。	"	黄褐色	貝片・石灰 岩の粗粒が 多量。
" 4	" Ⅲ類	" Ⅲ c ロ	深鉢?	無文の肥厚口縁。	"	"	茶褐色	"
" 5	" Ⅲ類	" Ⅲ d ロ	"	無文の肥厚口縁。肥厚は微弱。口唇に単鋸工具で押捺文。	両面ナデ。 内面ナデと 条痕。	"	黄褐色	"
" 6	" Ⅲ類	B群 1イ3	深鉢	山を持つ無文の肥厚口縁。カヤウチパンタ式系統。	両面ナデ。 内面ナデと 条痕。	堅微。	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が少量。
" 7	" Ⅲ類	" 1イ3	深鉢	無文の肥厚口縁。カヤウチパンタ式系統の上部。肥厚帯の張り出しは微弱。	両面ともナ デと指圧。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰岩の粗 粒等が少量。
" 8	" Ⅲ類	" IV 13	"	無文口縁で肥厚はない。口唇部に 斜状の突起を貼付ける。	両面削離。 内面ナデ。	"	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が少量。
" 9	" Ⅲ類	" V 13	深鉢	無文口縁。	両面削離。	"	"	"
" 10	" Ⅲ類	" V 13	盞?	無文口縁。盞とみられる。	両面ナデと 指圧。内面 削離。	"	"	"
" 11	" Ⅲ類	" ホイ3	"	E群期の武部。底跡が非常に小さ い。(底径1.0)。	両面削離。	"	暗褐色	石灰岩の粗 粒・石灰質 粗砂粒多量。
" 12	" Ⅲ類	" トイ3	"	E群期の底部。	両面ナデ。	"	"	石灰岩の粗 粒が微弱。



Fig.54 第10号竪穴住居 1～8. 石斧 9・10. 标用器（敲打器） 11. 用途不明

Tab.39 第10号竪穴住居内出土の石器観察表

標団番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び場 所	器種	分類	石質	法華 (cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重さ	
Fig. 54 P.L. 43 1	10号 竪穴住居 1	石斧	I AM中 2イC	手 持斧	8.8	5.6	1.9	149	磨製の片刃石斧。主に表面から研き出して刃を形成する。研磨は丁寧で上端部を除く、全面に施す。
# # 2	■ ■	■	I BM中 2イa	ダ	7.2	4.6	2.0	74	片刃的両刃石斧、向山に研磨を施すが裏面の研磨は確実で、徹底しない。向山面の敲打は流れ面となる。
# # 3	■ ■	■	I BM中 2イb	變 種 研 磨	8.3	5.5	1.5	128	磨製の片刃石斧。研磨は両面・向山面・上端に施る。刃は上端面と向山面の一部に限られる。表面から主に研き出して刃を形成する。
# # 4	■ ■	■	I CM中 2イb	ダ	7.5	4.7	2.1	(150)	片刃的両刃の石斧で、向山面がくびれる。研磨は両面にのみ認められ他の敲打である。刃は裏面から研き出して刃を形成する。
# # 5	■ ■	■	I BS中 1イb	ダ	6.9	4.1	1.5	95	片刃石斧。研磨は両面と向山面に限られる。上端部は剥離と敲打が残る。裏面は剥離される。
# # 6	■ ■	■	I BL大 2イa	ダ	10.3	6.5	2.1	264	片刃的両刃。研磨は両面・向山面・上端部の一部に施される。敲打は上端部の一部に限られる。裏面の向山面と上端部に剥離跡。
# # 7	■ ■	■	I BL大 2イa	變 種 研 磨	13.0	7.7	2.6	480	片刃的両刃。研磨は両面・向山面の一部・上端部に施される。他の敲打と剥離が認められる程度。上端に刃を付けた痕跡あり。
# # 8	■ ■	■	III AS小 1イc	ダ	6.9	2.2	0.6	21	片刃のノミ状石斧。研磨は全面に施すが、裏面は徹底しない。刃の研磨出しは主に裏面から。
# # 9	■ ■	鉢用品		砂 岩	9.9	5.0	2.7	200	石斧から敲打器等として転用されたものである。研磨は両面の下半部に限られ、他の敲打を主とする。
# # 10	■ ■	■		變 種 研 磨	8.9	5.8	3.4	270	石斧から敲打器として転用されたものである。研磨は両面施されるが徹底しない。向山面はくびれる。
# # 11	床面	用途不明		變 種 研 磨	7.3	10.6	2.9	209	円盤状の石器。研磨は表面とその周辺に若干認められる。裏面は剥離跡。

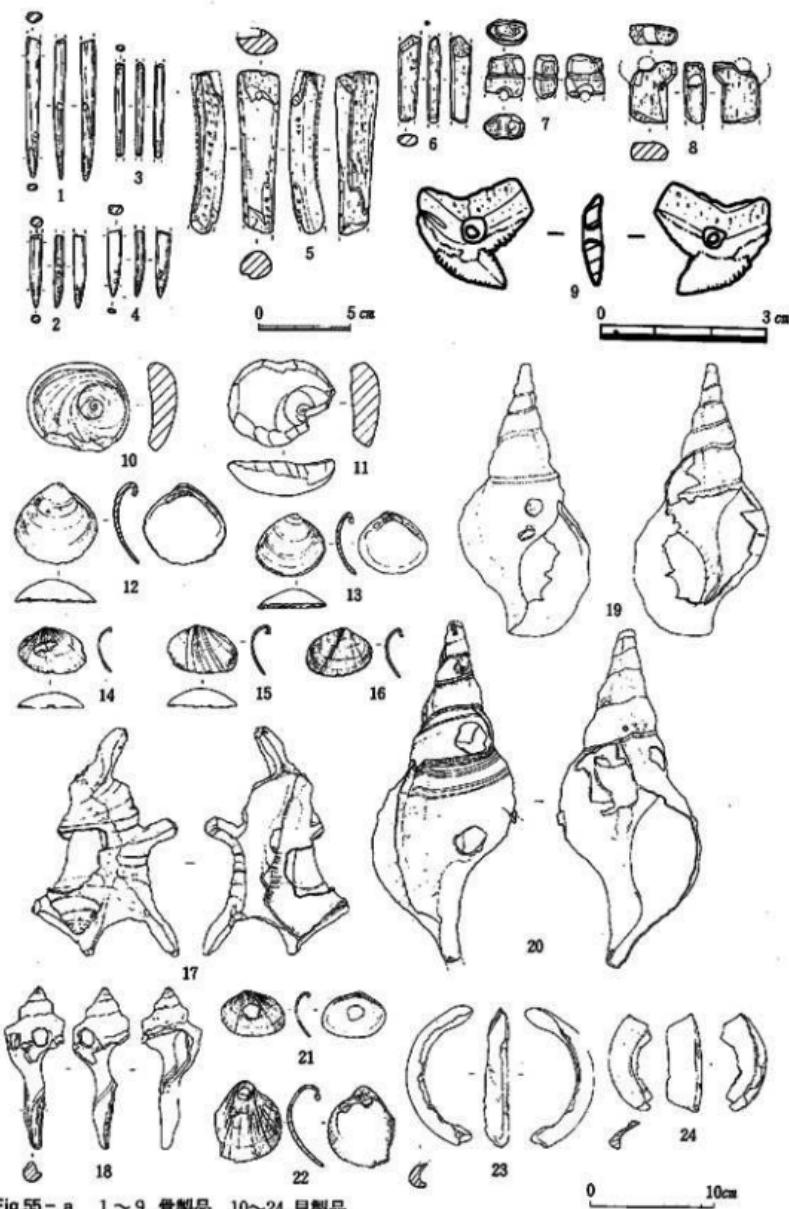


Fig.55-a 1~9, 骨製品 10~24, 貝製品

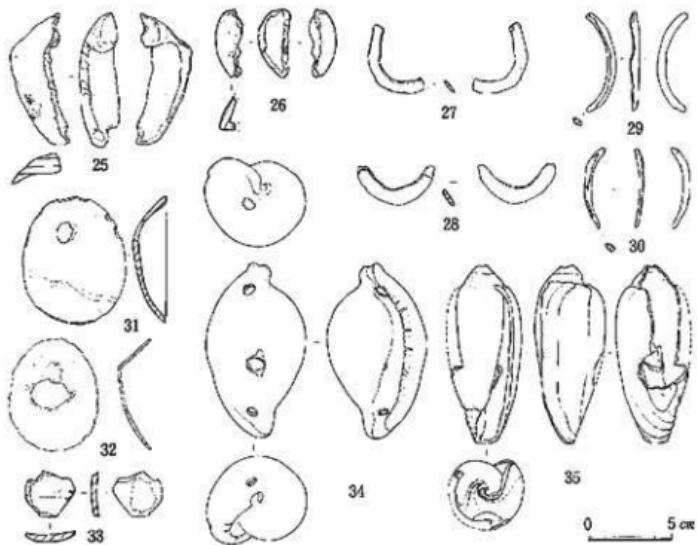


Fig.55-b 25~35. 貝製品

骨製品

実用品は7点、装飾品2点の計9点が出土した。貝製品と同様他の遺構に比べて出土量が多い。

Fig.55-a 1~4 骨針である。

Tab.40 骨針

単位：mm

No.	種 骨 種	残 存 状 態	法 量			加 工 状 況
			最大長	最大幅	最大厚	
55 a 1	Ⅲ イノシシ 腓 骨	破 損	76.1	7.6	4.7	針先の部分をかなり削り込でいるため、骨端が露出する。近位端を針先に利用する。大型の骨である。
55 a 2	Ⅲ イノシシ 腓 骨	破 損	39.0	5.9	4.8	遠位端を尖らす。針先及び側縁は横位に研磨痕が認められる。研磨痕は先端部に顕著に認められる。
55 a 3	Ⅲ イノシシ 腓 骨	破 損	49.5	4.5	3.4	細い骨である。副体部である。両端に研磨痕が横位に認められる。
55 a 4	Ⅲ イノシシ 腓 骨	破 損	35.9	7.3	4.0	長管骨を平裁し、尖らしたもので、先端に骨端の海綿質が確認される。先端はシャープに尖る。

骨錐は3点出土した。

Tab.41 骨製品

単位:mm

No.	層	骨種	残存状態	法量			加工状況
				最大長	最大幅	最大厚	
55 a 6	III	ジュゴン 肋骨	破損	46.0	10.6	0.6	胴体部で幅は一方が細いことから錐状になると認められる。断面は長方形を呈する。研磨は全面に認められる。
55 a 5	III	ジュゴン 肋骨	破損	85.5	22.5	14.3	細い肋骨を用いる。無孔タイプである。軸頂と側縁に研磨痕が認められる。他は自然のままで、縦位に欠損する。
55 a 7	III	ジュゴン 肋骨	破損	22.8	20.9	12.7	細い肋骨を用いる。径5.5mmの孔を施し、基端部と孔の中間に溝状痕を施す。幅は1.5mmを測る。溝は囲繞しない。

8はジュゴンの骨を板状に加工し、突出部の中央に径7.3mmの孔を施したものである。かんざしの軸頭部と考えられる。残存部の最大長31.5mm、最大幅19.7(24.5)mm、厚さ10.2mmを測る。研磨面はていねいである。

9はイタチザメの歯の基部に穿孔したものである。孔は基部と歯冠部の境に穿孔する。孔径は2.3mm×1.6mmを測る。歯冠のエナメル質は研磨される。完形品で最大長18.9mm、幅20.2mm、厚さ5.4mm、重さ0.5gを測る。第IV層の出土である。

貝製品

実用品14点、装飾品14点、の計28点で骨製品と同じく出土量が最も多い。

・実用品……Fig.55-a-10, 11はヤコウガイ螺蓋製貝斧である。以下、下表にまとめた。

Tab.42 螺蓋製貝斧

単位:mm

No.	層	残存	長さ	幅	重さ	附刃	刃先	加工状況
55 a-10	II	完形	72.1	82.4	170	⑥～⑩	荒	剥離の範囲が狭い。
55 a-11	III	完形	69.1	80.5	180	⑥～⑩	荒	剥離がだいぶ食い込んでいる。

Fig.55-a-12～16は二枚貝製の貝刀である。

Tab.43 貝刀

単位:mm

No.	層	貝種	残存状態	左右	法量		厚さ	刀	附刃	加工状況
					殻長	殻高				
55 a-12	III	シレナシジミ	完	右	65.0	65.0	1.5	荒	①～⑩	附刃は9mmから5mmで荒い。
55 a 13	III	シレナシジミ	完	右	55.7	50.0	9.5	荒	①～⑩	附刃は一定している。シレナシジミでは小さい貝である。好資料である。
55 a-14	III	リュウキュウ マスオ	完	左	53.5	35.6	—	細	③～⑩	一様に剥離が確認される。孔は後のものである。
55 a-15	III	リュウキュウ マスオ	完	左	53.5	35.6	—	細	①～⑩	前記に比べて附刃の範囲が狭い。
55 a-16	III	リュウキュウ マスオ	完	右	52.5	37.9	—	細	②～⑩	細かく剥離が認められる。

Fig.55-a 17はスイジカイ製の利器である。突起についてみるとNo.1、5、6は若干、突起を残しNo.2、3、4は基部から破損する。体唇部は背面から腹面にかけて破損が認められる。他に加工痕は認められない。第Ⅲ層25~30cmの出土である。

18はイトマキボラ製の利器である。殻口部を9mmほど除去し、殻軸部をポイント状に加工したものである。また、第2体唇部に径12.3mm×12.7mm、14.8mm×12.8mmの粗孔が3個認められる。孔は方形を呈し、外側から穿孔する。殻長は130.0mm、殻径50.1mmを測る。第Ⅲ層30~35cmの出土である。

19、20はホラガイの有孔製品である。19は2孔タイプで殻長21.9mm、殻径10.1mmを測る。孔径は①16.5mm×14.5mm、②16.0mm×15.8mmを測る。体唇部の背面は大きく欠損する。殻頂部は丸味を帯びる。20は殻口が大きく破損したもので1孔タイプである。残存部の大きさは長さ27.0mmを測る。孔径21.5mm×24.9mmを測る。殻頂部は丸味を帯びる。両者とも第Ⅲ層30~35cmの出土である。

21、22は二枚貝有孔製品である。リュウキュウマスオ1点、カワラガイ1点が出土した。

Tab.44 一枚貝有孔製品

単位:mm

No.	層	貝種	残存状態	法量			孔	加工状況
				右左	殻長	殻高		
55 a-21	Ⅲ	リュウキュウ マスオ	完	左	50.9	35.2	7	12.3×13.7 中・中
55 a-22	Ⅲ	カワラガイ	破	右	50.5	65.5	30	12.0×9.3 上・中

装飾品

Fig.55-a・b 22~30はオオベッコウガサ、サラサバティ、ゴホウラ、を用いた貝製品である。

Tab.45 貝製品

単位:mm

No.	層	貝種	残存状態	法量			加工状況
				最大長	最大幅	厚	
55 a-23	Ⅲ	サラサバティ	破	110.2	11.5	17.5	邊底面の内縁に若干の押圧剝離を確認。木製品
55 a-24	Ⅲ	サラサバティ	破	70.8	20.0	28.0	文様か模様に残る。上部の内縁は押圧剝離の後研磨を施す。未製品
55 b-25	Ⅲ	サラサバティ	破	-	8.4	17.7	筋縫面及び外縁に加工痕が認められる。
55 b-26	Ⅲ	オオベッコウガサ	破	45.7	10.7	2.0	外縁は摩耗、内縁は剥離する。
55 b-27	IV	ゴホウラ	破	75.5	32.6	6.5	外面にアバタが頗るにみられる(死貝?)外縁の一部に研磨痕が認められる。外の削離は自然的なのに丁寧に削離する。木製品
55 b-28	III	オオベッコウガサ	破	-	8.7	2.0	内縁を剝離
55 b-29	III	オオベッコウガサ	破	-	6.6	2.8	内縁を剝離
55 b-30	III	オオベッコウガサ	破	-	5.2	3.0	内縁を剝離

Fig.55-b 31、32はオオベッコウガサの殻頂近くに粗孔を施したものである。前者は縦66.0mm、横52.5mm、孔径16.5mm、20.1mmを測り、後者は縦74.2mm、横60.0mm、孔径13.0mm×10.8mmを測り、複孔であり、両者とも外縁に若干の剥離が認められるが、人工か自然かは明瞭でない。それぞれ第Ⅲ層15cm～30cm、0cm～5cmの出土である。

33はヤコウガイを加工したもので貝匙の破片と推定される。外殻面に研磨痕が認められる。残存部の最大長25.7mm、幅25.7mmを測る。第Ⅲ層25cm～30cmの出土である。

34はウミウサギの貝の前端と後端と背面に粗孔を施したものである。孔の大きさは前端が5.3mm×5.6mm、中央が8.2mm×7.1mm、後端が7.2mm×7.3mmを測り、長さ10.4cm、幅5.9cm厚さ4.8cmを測る。第Ⅲ層の出土である。

35はタヤガサンミナシガイの背面に研磨、殻頂に穿孔の後、外唇に1cm弱の打割調整が確認されるもので、大きさは推計10.4cm×4.6cmを測る。第Ⅲ層30cm～35cmの出土である。

Fig.96-9は中型イモガイで、体層部は既になくまた、アバタを呈し、殻頂に研磨痕が認められる。ビードの未製品と考えられる。殻径20.0mm、最大長16.0mmを測る。第Ⅲ層25cm～30cmの出土である。

Tab.46 第11号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 J-29グリッド				
重複	なし					
構造	形状	圓丸方形（長方形）のくずれた形。南側の石積み外に底のような部分が付いている。				
	規模	壁面石積み内は南北最大長約240cm、東西最大長約210cm。底部分は50～90cmの幅。				
	深さ	此部分は15～20cm。石積み内は30～35cm。				
	壁	北西隅は露頭した岩盤を壁面としているが、そこ以外はすべて石積みによって壁面化粧している。なお、底部分は東壁に石積みの壁があるだけで、南と西は地山を掘り込んで壁としている。				
造	壁面石積	地山をほぼ直に掘り込んでから、最大長15～40cmの石を積んで壁面化粧している。				
	床面	掘跡のある一帯は凹みになっているので、地山の土（黄褐色）を運び込んで張床をしている。				
	炉跡	張床の上にできた炉跡が3つ検出された。北側の③は①を切っており、①より新しい炉跡である。炉の上には1～5cmの灰層が堆積していた。				
	柱穴	口徑15～20cm、深さ15～20cmの柱穴が8本検出された。南側は石積み内にはなく、底部分に検出された。				
出土	器群	A B C D E F G				
	I				1	
	II	1			3	
	III	1		1	63	1
	IV	1	2		12	
遺物	石器	石斧1個、磨石1個、石錐2個、振器3個、未製品1個、破片4個、石製袋身具1個				
	骨製品					
	貝製品	ビード1個				
食料残滓	貝類	貝類33個（少量）、イノシシ骨、魚骨少量、ウミガメ僅少。				
	堆積状況	上部は礫が多く混入するが、下部は黒褐色土で土器などが多い。張床（黄褐色土）は厚さ5～10cmで、その下は黒褐色土。				

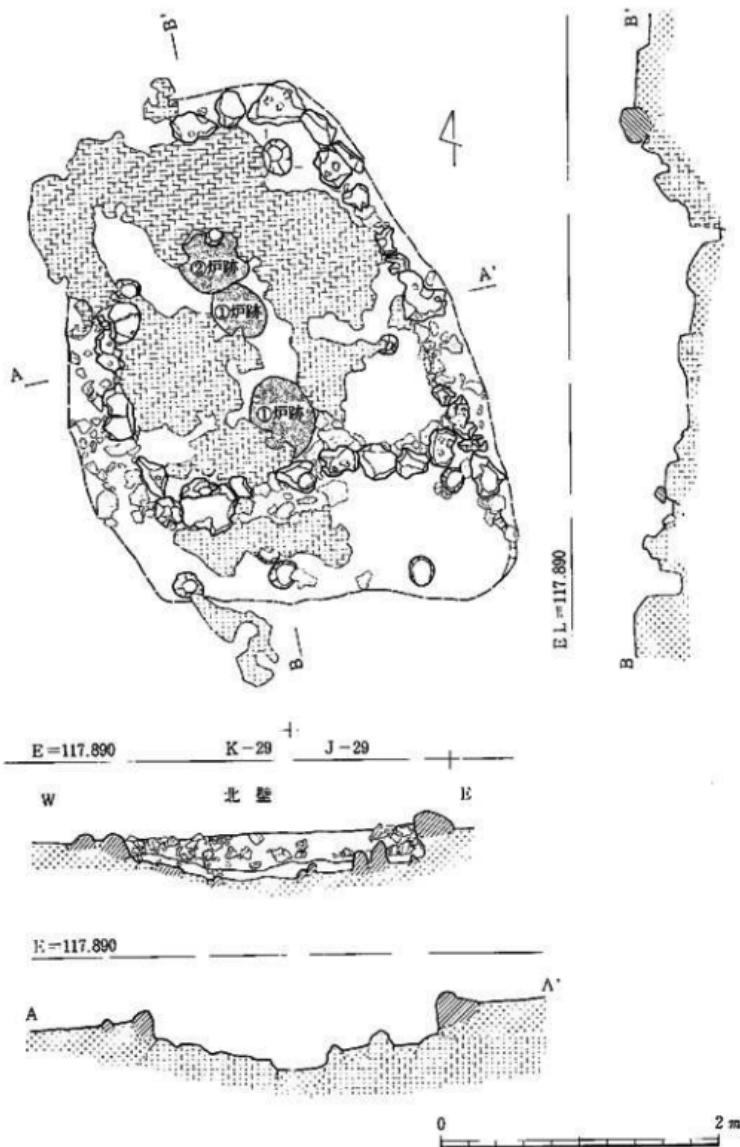


Fig.56 第11号竖穴住居穴测图

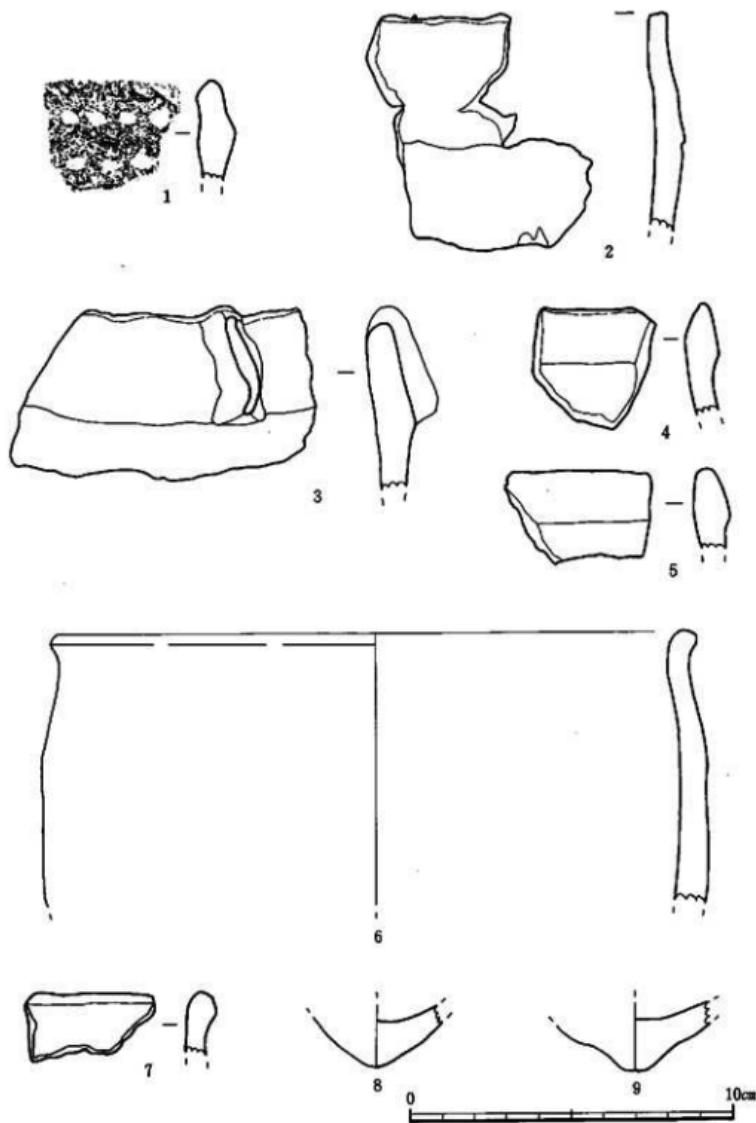


Fig.57 第11号竪穴住居内出土の土器

1. B群土器 2~7. E群土器 8・9. E群土器の底部

Tab.47 第11号竪穴住居内出土の土器

施設番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形態等の特徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 57 PL. 29 1	" Ⅱ層	B群 I	深鉢?	有文の肥厚口縁。肥厚帯とその直下に單刃工具で押捺刻文。	両面とも摩耗。	良く、 硬い。	黄褐色	微細な石英 が微粒。
" " 2	" Ⅱ層	E群 Iイ1	"	有文の肥厚口縁。カヤウチバンタ式系統の土器。全体的に輪な成形。アバタ状を呈する。	外側ナデ。 内面ナデと 条痕。	"	褐色	ほとんど見 えない。
" " 3	" Ⅱ層	" Iイ3	深鉢?	有文の肥厚口縁。カヤウチバンタ式系統の土器。肥厚帯に複数の凸帯を貼付けて小さい山を造る。	外側ナデ。 内面ナデと 条痕。	"	黄褐色	石灰岩の粗 粒・粗砂粒 が少量。
" " 4	" Ⅰ層	" Iイ2	"	無文の肥厚口縁。カヤウチバンタ式系統の土器。	両面ナデ。	"	灰褐色	ほとんど見 えない。
" " 5	" Ⅱ層	" Iイ2	"	無文の肥厚口縁。宇佐浜式系統の上器。	外側摩耗。 内面ナデ。	"	黄褐色	細かい石英 が微量。
" " 6	" Ⅱ層	" Iイ3	深鉢	無文口縁。輪に成形。(口径19.9、 底径20.5)。	外側ナデと 指圧。 内面ナデ。	"	褐色	石灰岩の粗 粒・石灰質 の粗砂粒が 多量。
" " 7	9号 竪穴住居 Ⅱ層	E群 Vイ4 (0)	深鉢?	無文の肥厚口縁。肥厚は微弱。	両面とも摩耗。	悪く、 脆い。	茶褐色	無い石英が 微量。
" " 8	" Ⅱ層	E群 トイ2		E群期の尖底。	両面とも剥離。	"	黄褐色	ほとんど見 えない。
" " 9	" Ⅱ層	" トイ2		E群期の尖底。乳房状の尖底。	外側ナデ。 内面摩耗。	良く、 硬い。	"	"

Tab.48 第11号竪穴住居内出土の石器

施設番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 種	分類	石質	法 量 (cm · g)				上 な 特 徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 58 PL. 44 1	11号 竪穴住居 床着	石製装飾品		粘板岩	10.2	2.5	0.5	3.2	研磨は裏面を除く、各面に施される。左側に浅い抉りを入れる。裏面は削ぎ面。
" " 2	" Ⅱ層	石 猛		チャート	1.7	1.6	0.4	1.0	打製石器。基盤部への抉りはない。

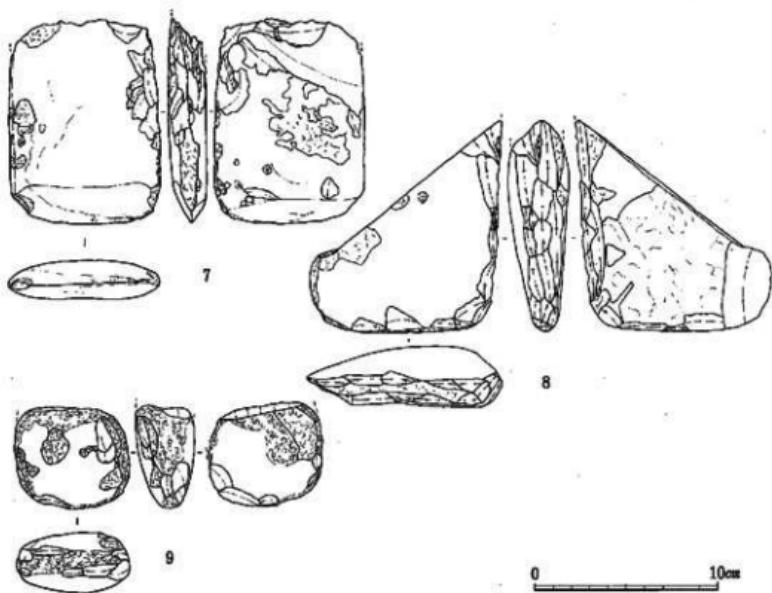
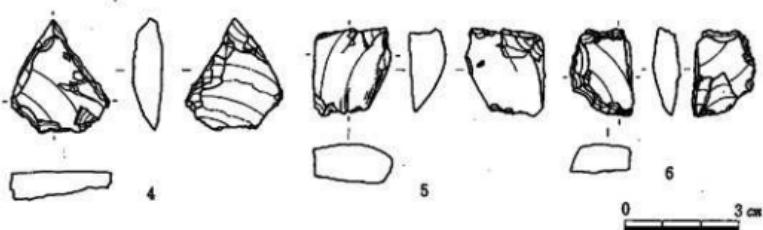
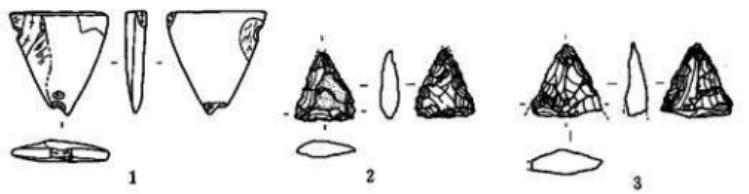


Fig.58 第11号竪穴住居
1. 石製装身具 2・3. 石器 4～6. スクレーバー 7. 石斧
8. 石斧未製品 9. 転用品(磨石?)

捕获番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び網	器種	分類	石質	法量(cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig.58 PL.44 3	11号 堅穴件網 直層	石 織		チャート	(18)	(18)	(0.55)	(1.4)	破損品。打製石器。先端は鋭い。表面のチャート片を使用。
" "	"	スクレイパー			2.9	2.5	0.7	5.1	
" 4	直層	バーナー							
" 5	"				2.8	1.4	0.8	5.2	スクレイパーの可能性があるもので、下端に剥離痕が認められる。
" 6	"				2.4	1.5	0.6	2.9	スクレイパー。刃は下端に附ける。裏面から押圧を加える為、剥離痕は表面に限られる。
" 7	直層	石斧	IBU特 21a	砂岩	(112)	8.0	2.0	(300)	片刃的両刃。上端が破損。研磨は裏面と左側に施される。右側面は剥離と敲打が認められる。
" 8	直層	石斧	未製品	砂岩	(105)	10.1	3.3	(365)	石斧未製品。施理面から剥れる。研磨は裏面と裏面の一部に施される。裏面は剥離面。内側と下端は剥離と敲打が認められる。
" 9	直層	軽用品		玄武岩	5.5	6.6	3.1	189	石斧から磨石に転用されたものである。裏面は新鮮。他は敲打を主とする。特に上端面は滑面となる。

貝製品

Fig.59の1点のみである。イモガイ科の貝を用いたもので殻頂及び体縁部に研磨痕が認められる。平面形は方形を呈するが穿孔されてなく、完成品と考えられることから別の用途の可能性もある。

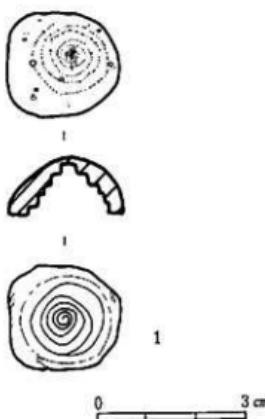


Fig.59 貝製品

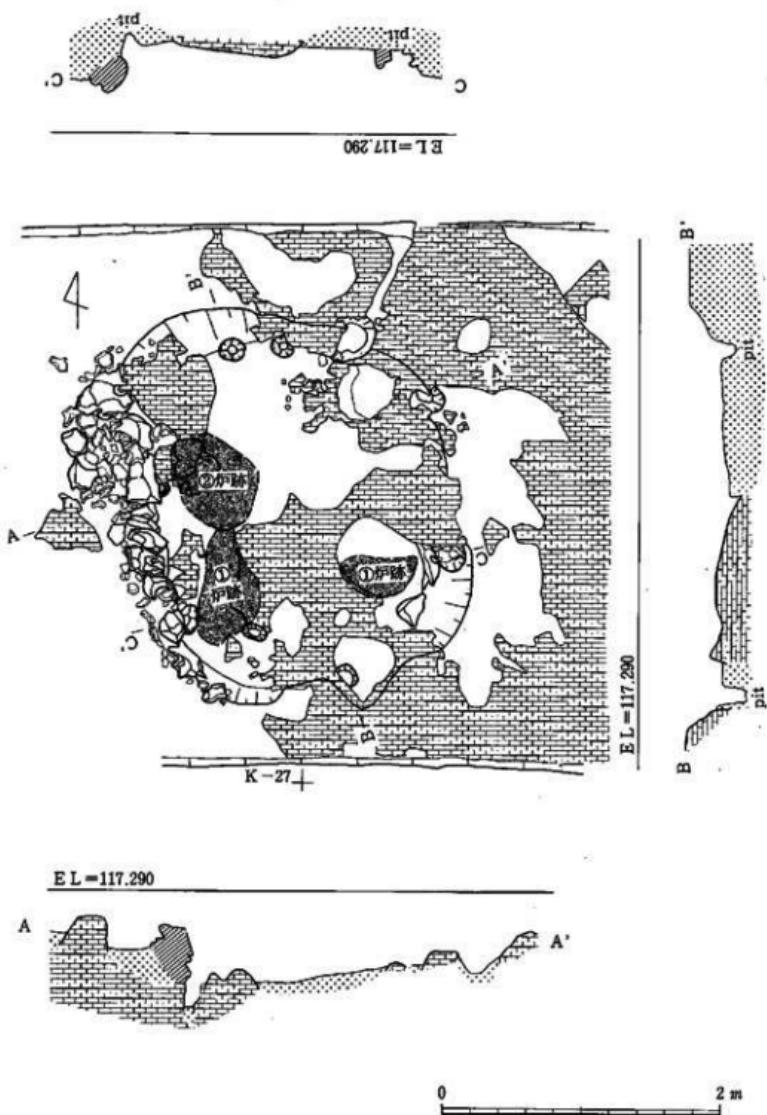


Fig.60 第12号竖穴住居跡実測図

Tab.49 第12号竪穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 J-27グリッド						
	重 複	なし						
形 状	状	円形に近い隅丸方形(やや正方形)						
規 模	模	南北最大長約250cm、東西最大長約220cm。						
構 造	深 さ	25~30cm						
	壁	東側は地山を掘り込んでから石積みをして壁面化粧している。東南隅、東北隅、北西隅は地山を掘り込んで壁面としている。そのほかは露頭している岩盤を壁面として利用している。						
	壁 面 石 積	東壁は最大長20~30cmの石を積んで壁面としている。						
造 成	床 面	床面は地山面と岩盤面が半々ぐらいである。						
	炉 跡	3つの炉跡が検出された。東側の①は②に切られており、②が新しい炉跡である。炉の上には1~2cmの灰層が堆積していた。						
	柱 穴	口径15~20cm、深さ12~25cmの柱穴が壁に沿って8本掘っている。						
出 土 遺 物	土 器 (口縁部の個数)	層 群	A	B	C	D	E	F G
		I				1		
		II					12	
		III		3			174	3 1
		IV					1	
	石 器	石斧2個、磨石4個、破片10個						
	骨 製 品	イノシシ製1個、サメ歯製1個						
	貝 製 品	シレナシジミ製の貝刃1個、スイジガイ製利器1個、ヤコウガイ貝匙1個、その他2個						
	食 料 残 渣	貝類364個(多量)、イノシシ骨、魚骨、ウミガメ少量、ジュゴン僅少。						
	堆 積 状 況	上部は疊や土器の多い黒褐色の堆積層で、下部は疊は少なく土器が多い。						

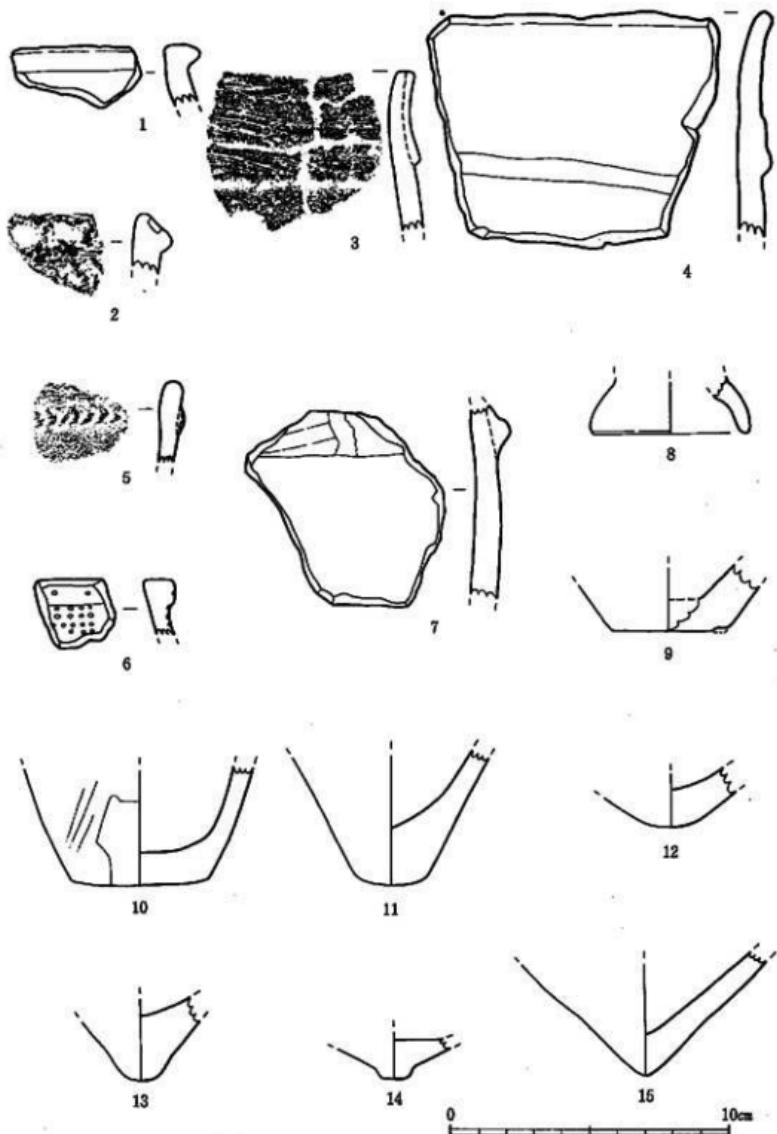


Fig.61 第12号竪穴住居内出土の上器

1・2, B群土器 3・4, E群土器 5・6, F群土器
7・8, G群土器 9, B群土器の底部
10~15, E群土器の底部

Tab.50 第12号竪穴住居内出土の土器

博岡番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形式	器種	形態等の特徴	器面調整	備考	
						焼成	色調 混入物
Fig. 61 P.L. 30 1	12号 竪穴住居 Ⅲ層	B群 Ⅲ c 口	深鉢?	無文の肥厚口縁。肥厚帯に単窓で斜線刻文。	外面ナデ。内面摩耗。	良く、硬い。	茶褐色 石灰質の粗砂粒・貝片 が少々。
" 2	" 面層	" Ⅲ d 口	"	有文の肥厚口縁。肥厚帯に単窓で斜線刻文。	外面ナデ。内面摩耗。	"	石灰質の粗砂粒・貝片 が多量。
" 3	" 背層	E群 Iイ3	深鉢	無文の肥厚口縁。肥厚帯の造りは難で、条痕がナデ消されていない。	外面ナデと 条痕。 内面削離。	" 黄褐色	石灰岩の粗 砂粒・粒等が少々。
" 4	" Ⅲ層	Iイ4	"	無文の肥厚口縁。肥厚帯の造りは難で、条痕がナデ消されていない。	尚面ナデ。 悪く、脆い。	黄褐色	石英を多量 に混入。
" 5	" Ⅲ層	F群		八角の两侧に点刻文。凸沿直上に 斜側の細疣状文。	内面ナデ。 良く、硬い。	茶褐色	雲母と石英 が多量。
" 6	" Ⅲ層	"		有文の肥厚口縁。肥厚帯とその直 下に横位の押し引き文。同文様下 には波紋。	背面剥離。 脆い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒と貝片 が多量。
" 7	" Ⅲ層	G群		凸带を有する脚部。E群期に所 属?。	両面剥離。 良く、硬い。	茶褐色	雲母と石英 が多量。
" 8	" Ⅲ層	" 古村土器?		台付(胎もしくは脚台)。E群期に 所属。(古径5.6)。	両面剥離。	" 黄褐色	ほとんど見 えない。
" 9	" Ⅲ層	B群 口		B群期の平底。(底径3.9)。	底面・外側 ともナデ。 内面摩耗。	" "	石灰質の粗 砂粒等が多 量。
" 10	" Ⅲ層	E群 ロイ3		E群期の平底。(底径4.8)。	外面ナデと 質削り。内 面ナデ。	" 茶色	石灰質の粗 砂粒が少々。
" 11	" 背層	E群 トイ3		E群期の底部。尖底であるが尖端 を平底に成形。	両面ナデ。 良く、硬い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒が微量。
" 12	" Ⅲ層	" ハイ2		E群期の底脚。尖底であるが尖端 を平底に成形。	両面剥離。	" "	"
" 13	" Ⅲ層	" トイ3		E群期の底脚。尖底であるが尖端 を平底に成形。	両面ナデ。	" "	石灰質の粗 砂粒が少々。
" 14	" Ⅲ層	" トイ2		E群期の底脚。尖底であるが尖端 を平底に成形。	外面ナデ。 内面破損。	" "	石灰質の粗 砂粒が微量。

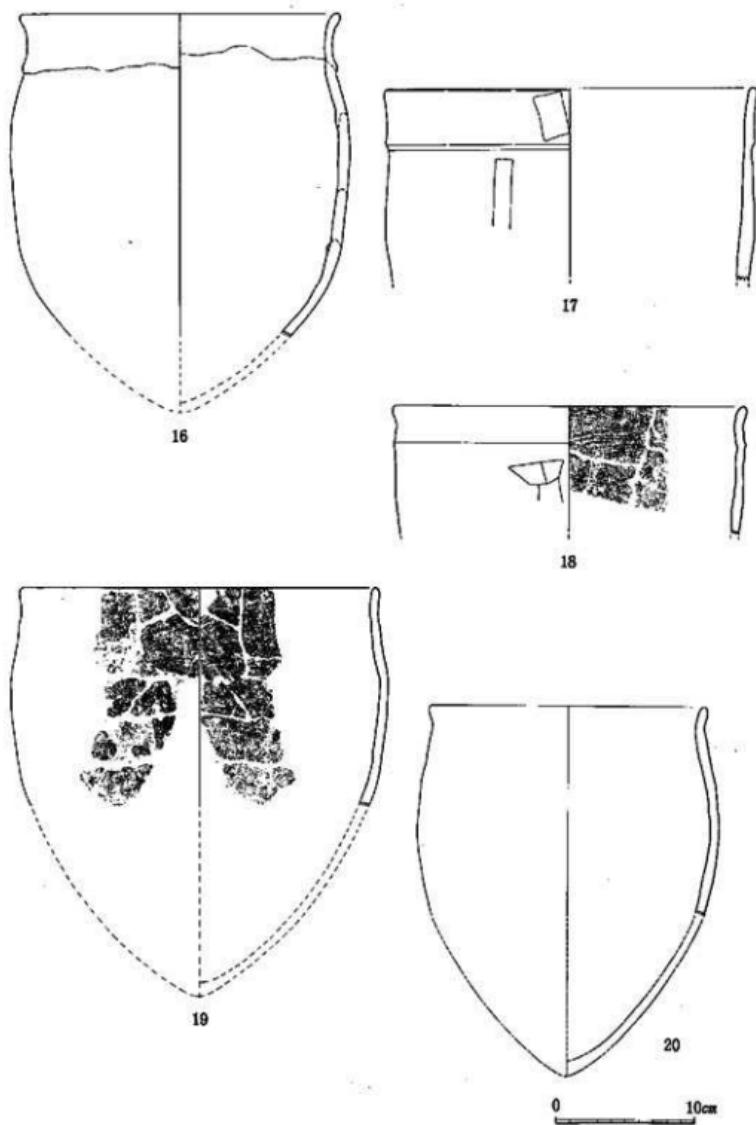


Fig.62 第12号竪穴住居内出土の土器 16~20, E群土器

掲出番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器種	形態等の特徴	施 考		
					留面調整	焼成	色調
Fig. 61 P.L. 30 15	12号 等穴住居 15	R群 トイ2		E群側の底部。尖端である。	外面ナデ。 内面ナデと 条痕。	良く、 硬い。	石灰質の粗 砂粒が少気。
" P.L. 31 16	12号 等穴住居 16	R群 トイ3	複合	無文の肥厚口縁。軽厚部の成形は 薄。(口徑22.5、胸深24.3、高さ 28.5)。	外面ナデ。 内面ナデと 条痕。	良く、 硬い。	石灰岩の粗 粒。
" " 17	" 17	川輪 トイ3		無文の肥厚口縁。丁寧に成形する。 (口徑26.7、胸深26.5)。	外面ナデと 塑削り。 内面ナデ。	"	茶褐色
" " 18	" 18	川輪 トイ3		無文の肥厚口縁。成形は確。(口 徑25.4、胸深25.0)。	外面ナデと 塑削り。 内面ナデと 条痕。	悪く、 弱い。	石灰質の粗 粒と石英が 微見。
" " 19	" 19	目輪 トイ3	"	無文口縁。口径よりも肩幅が大き い。口縁は直1枚。(口徑25.7、 胸深27.0、高さ29.3)。	両面ともナ デと条痕。	良く、 硬い。	石灰質の粗 粒と貝片が 少量。
" " 20	" 20	川輪 トイ3	"	無文口縁。口径よりも肩幅が大き い。成形は確。(口徑20.0、胸深 21.7、高さ26.4)。	両面ナデ。 内面ナデ。	悪く、 弱い。	"

Tab.51 第12号堅穴住居内出土の石器

掲出番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	石質	法 尺 (cm・g)			主な 特 徴	
					長さ	幅	厚さ		
Fig. 63 P.L. 45 1	12号 堅穴住居 1	石斧	IAT.I. 大 2/6a	安山岩 粘合	13.4	7.0	3.7	499	両刃の磨製石斧。両面と両側面に丁寧な研磨。敲打は上腹面にのみ限定。刃の研ぎ痕 しがある。
" " 2	" " 2	II BM中 3/4a	安山岩 粘合		9.9	5.3	2.5	235	両刃の磨製石斧。研磨は両面に集中。両側面は敲打を主とし、研磨が部分的に残る。 右側面は全体的に歪む。
" " 3	" " 3	磨石	1 SA イ1	安山岩 粘合	4.6	4.9	4.9	1,791	小型の磨石。磨石は表面のみで、周辺および背面は敲打である。表面は敲打が流れ滑 れを帯びる。
" " 4	" " 4	磨石	1 SA イ1	綠色 安山岩 粘合	6.4	6.6	5.9	2,150	磨石は表面と左側の一部に残り、周辺および背面は敲打である。表面に敲打が流れ滑 れを帯びる。
" " 5	" " 5	II LC イ7	砂岩		20.7	13.2	8.0	2,800	両面・左側面の大部分は敲打となる。右側面・下端面に敲打が集中する。

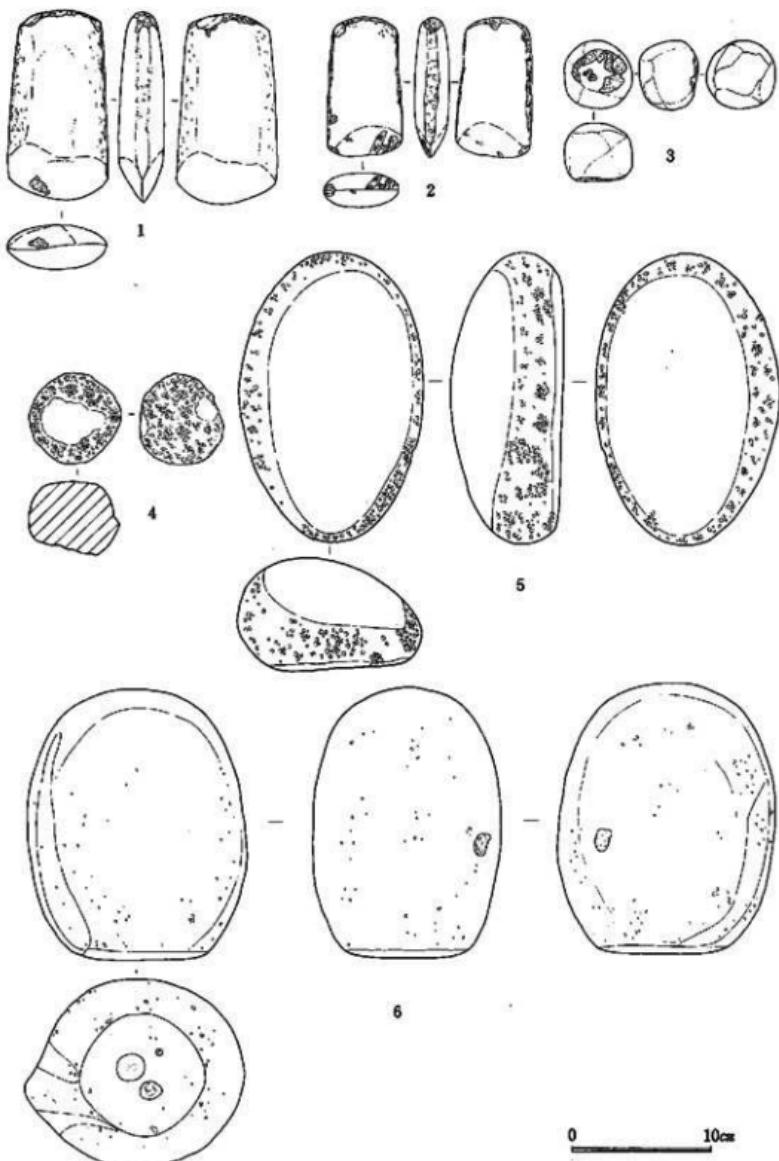


Fig.63 第12号竪穴住居 1・2. 石斧 3～6. 磨石

挿図番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	石質	法示(cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 63 PL. 45 6	12号 堅穴住居 Ⅲ層	磨石	ILLD 45	石英 麻岩	19.4	15.5	13.1	5,180	磨面は両面、上・下端面・左側面に上に残る。右側面は敲打。下端面は平担となる。左側面は一部突出する。

骨製品

Fig.64 1から3の3点が得られた。

1はイノシシの腓骨をもちいた骨針で両端が欠損している。横断面を見ると先端部は円形、軸頭部は偏平の階円を呈し、近位端と考える。研磨は丁寧であるが、軸頭側の一部に自然面が認められる。残存部の最大長95.2mm、最大幅8.3mm、厚さ5.5mmを測る。第Ⅲ層5cm～10cmの出土である。

2はオオザメの歯で、歯冠部の縁に鋸歯の痕が認められないほど全体的に摩耗するが、他に加工痕は認められない。色は黒褐色を呈する。製品かどうか検討の必要がある。完成品で最大長29.7mm、最大幅27.0mm、厚さ10.5mmを測る。第Ⅲ層0cm～5cmの出土である。

3はイノシシの下歯大歯で基部と先端部に穿孔の痕がある。また、外縁は先端から半分ほどまで研磨のためエナメル質を削る。基端を切り取り研磨調整する。ほぼ完形に近く最大長82.0mm、最大幅12.3mm、厚さ8.0mmを測る。第Ⅲ層5cm～10cmの出土である。

貝製品

Fig.64の6点が得られた。

4はシレナシジミ製の貝刀である。右殻を用い殻長86.5mm、殻高77.5mmを測る。剥離は1.5mmと細かく、附刀の範囲は③～⑦に及ぶ。

5はスイジガイ製の利器である。No.1、6は若干突起部を残す。No.2、3、4、5は基部から破損する。体層部は背面を大きく破損する。他に加工痕は認められない。No.1は他に比べて突起部は大きい。第Ⅳ層の床面からの出土である。

6はタケノコガイの内唇部に研磨を加えたものである。破損品で残存部の最大長63.3mm、最大幅17.2mm、孔径5.7mm×4.7mmを測る。殻は摩耗するが装飾品と考えられる。第Ⅲ層0cm～5cmの出土である。

7はヤコウガイの貝趾の破片と考えられる。研磨が著しく真珠層のみで厚さ2.8mmを測る。また、灰色を呈し、火を受けたと考えられる。第Ⅲ層5cm～10cmの出土である。

8、9はオオベッコウガサの殻頂近くに粗孔を施するもので他に加工痕は認められない。孔は何れも外殻から穿孔する。前者は第Ⅳ層で長さ64.8mm、幅50.5mm、厚さ16.3mm、孔径12.8mm×19.6mm、後者は第Ⅲ層の出土で長さ66.5mm、幅53.4mm、厚さ16.5mm、孔径15.0mm×19.6mmである。

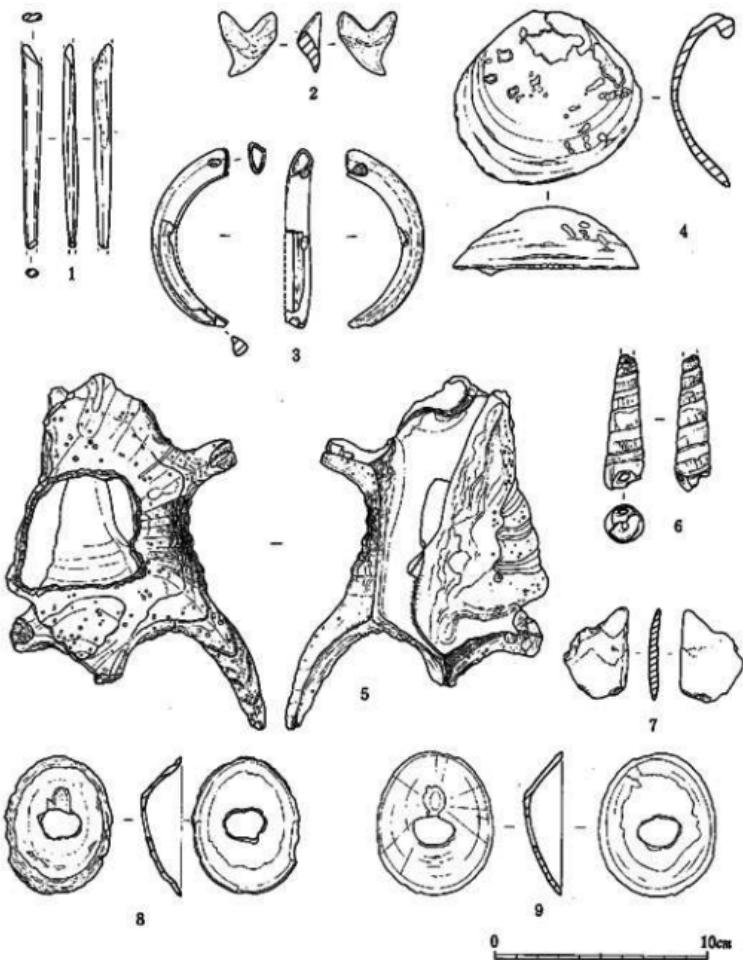


Fig.64 1～3.骨製品 4～9.貝製品

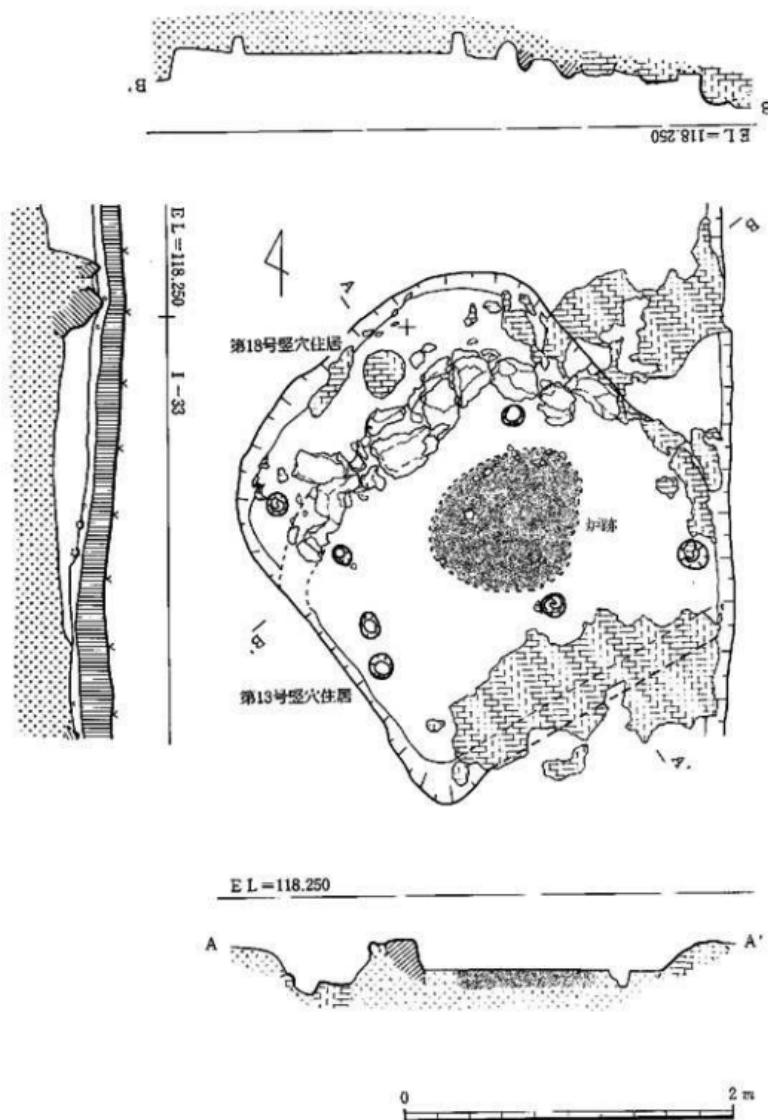


Fig.65 第13号竖穴住居跡実測図

Tab.52 第13号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 I-33、J-33グリッド						
	重複	第18号竪穴を切っており、第18号竪穴より新しい。						
構	形状	隅丸方形（長方形）						
	規模	南北最大長約190cm、東西最大長約230cm。						
	深さ	20~25cm						
	壁	東壁の半分と南壁は露頭した岩盤を壁面として利用。 東壁の半分と北壁は石積みによって壁面化粧している。 西壁は地山を掘り込んで壁面としている。						
造	壁面石積	東壁の北側半分と北壁は最大長30~40cmの石を積んでいる。						
	床面	第18号竪穴の遺物包含層の上に、黄褐色土を入れて張床としている。						
	炉跡	中央部に炉跡が検出された。炉の上には1~2cmの灰層が堆積していた。						
	柱穴	口径15~20cm、深さ10~20cmの柱穴が6本検出された。						
出土遺物	土器 (口縁部の個数)	層群	A	B	C	D	E	F
		I					9	
		II	2			1	15	1
		III	5	6		1	96	1
	床面						1	
	石器	磁石1個						
	骨製品	ジュゴン製骨製品1個						
	貝製品	シレナシジミ製貝刃2個						
	食料残滓	貝類141個（多量）、イノシシ骨、魚骨、ウミガメ、ウミガメ少量						
堆積状況		黒褐色土の堆積で、礫は少ない。						

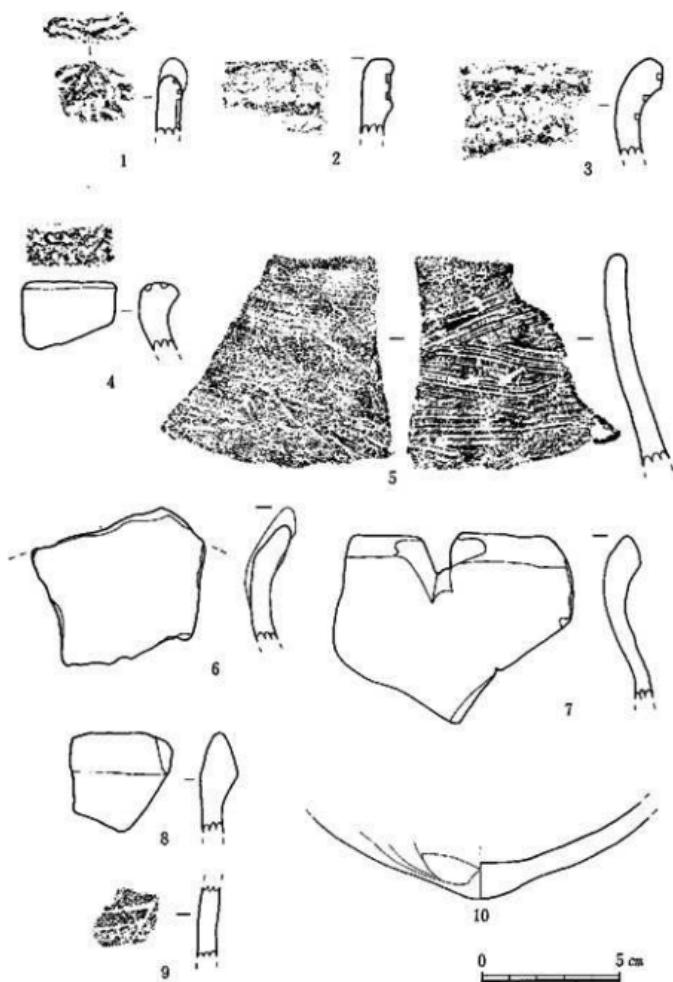


Fig.66 第13号堅穴住居内出土の土器

1・2. A群土器 3・4. B群土器 5～8. E群土器
9. F群土器 10. E群土器の底部

Tab.53 第13号竪穴住居内出土の上器

掲出番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 様	形 細 等 の 特 故	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 66 P.L. 32 1	13号 竪穴住居 Ⅲ層	A群	深鉢?	A群期の伏堂式土器。山形口縁の 裏部に瘤状の突起。口唇・口縁に 叉状工具で押し引き文や沈線文。	外面ナデ。 内面削離。	悪く、 弱い。	黒褐色	石英・チャート片が多量。
" " 2	" Ⅲ層	"	深鉢	A群期の有文カヤウチバンタ式。 肥厚唇に单葉で押捺刻文。成形は 丁寧。	両面ともナ デ。	"	茶褐色	石英・磁鐵 鉱等が多量。
" " 3	" Ⅲ層 Ⅲc	B群 Ⅲc	深鉢?	有文の肥厚口縁。肥厚唇とその直 下に単葉工具で押捺刻文を施す。	"	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒が少量。
" " 4	" Ⅲ層	" Ⅲc口	"	有文の肥厚口縁。口唇に点刻文を 二条施す。	"	"	"	石灰質の粗 砂粒が少量。
" " 5	" Ⅲ層	E群 Vイ3	壺	無文の壺。内側に細むく。	両面ともナ デと条痕。	"	"	石灰岩の粗 粒・粗砂粒 が少量。
" " 6	" Ⅲ層	E群 Ⅲ	深鉢	無文の山形口縁。	外面ナデ。 内面ナデと 条痕。	"	"	石灰岩の粗 粒と貝片が 少量。
" " 7	" Ⅲ層	" Ⅲイ3	深鉢	無文の肥厚口縁。宇佐浜式系統。	外面ナデ。 内面ナデと 条痕。	悪く、 弱い。	"	石灰質の粗 砂粒が少量。
" " 8	" Ⅲ層	" Ⅲイ2	深鉢?	無文口縁。宇佐浜式系統の土器。	両面削離。	良く、 硬い。	"	石灰質の粗 砂粒・石英 が微量。
" " 9	" Ⅲ層	F群		有文脚部。沈線文を縦位と斜位に 施す。	外面削離。 内面摩耗。	良く、 硬い。	暗褐色	石灰質の粗 砂粒が微量。
" " 10	" Ⅲ層	E群 チイ3		外側に大きく開く。	外面ナデと 鋸削り。 内面ナデと 条痕。	"	黄褐色	石灰岩の粗 粒・粗砂粒 が多量。

Tab.54 第13号竪穴住居内出土の石器

掲出番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 様	分 類	石質	法 量 (cm · g)				主 な 特 徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 67 P.L. 46 1	13号 竪穴住居 Ⅲ層	圓 石		砂 岩	11.0	7.8	6.4	1,010	磨面は両面、左側面、上・下端面に認めら れる。敲打は右側面。

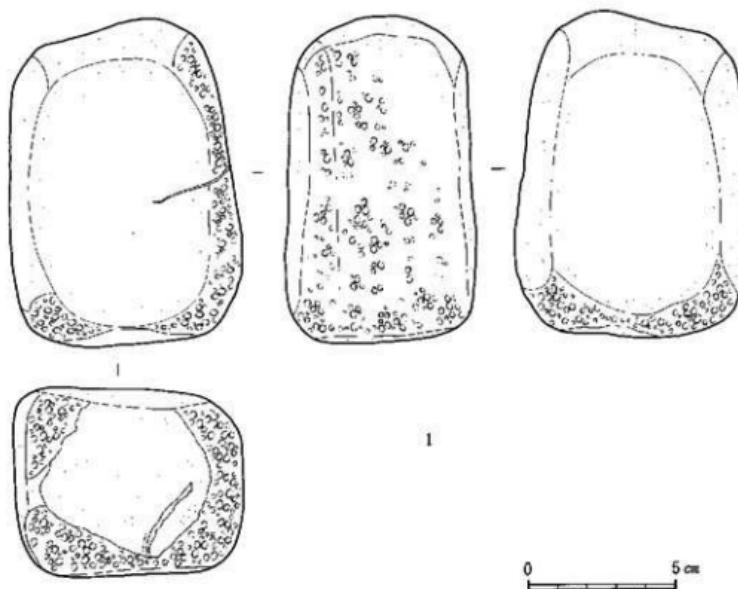


Fig.67 第13号竪穴住居 1. 磨石

骨製品

Fig. 68 1の1点のみである。ジュゴンの肋骨を用いたもので、横位に溝状の加工痕を3条施し、研磨したもので色は黒褐色を呈する。溝状痕は切断のためのものと考えられる。骨錐の未製品と考えられる。残存部の最大長22.7mm、最大幅17.6mm、厚さ12.1mmを測る。第Ⅲ層の出土である。

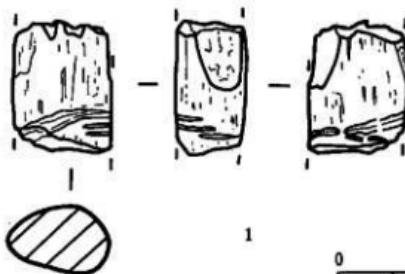
Tab.55 シレナシジミ製貝刀

No	貝種	法量			刃先	附刀範囲	加工状況
		殻長	殻高	重さ			
68-2	シレナシジミ	50.1	43.5	6.5	荒	①～⑤	歯はかなり奥まで食い込んでいる。
68-3	シレナシジミ	-	50.0	24.1	細	①～不明	大きい貝である。大きく破損し、剥離は2mm前後と細かい。

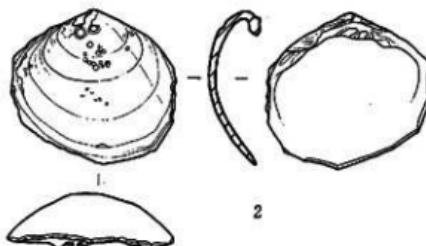
貝製品

貝刀が2点得られた。

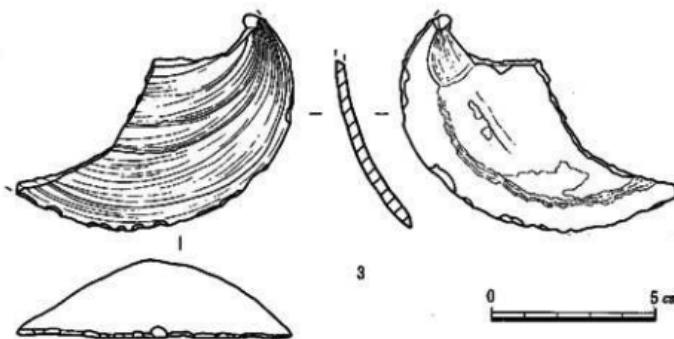
いずれもシレナシジミ製の貝刀である。



0 3 cm



2



0 5 cm

Fig.68 1. 骨製品 2・3. 貝製品

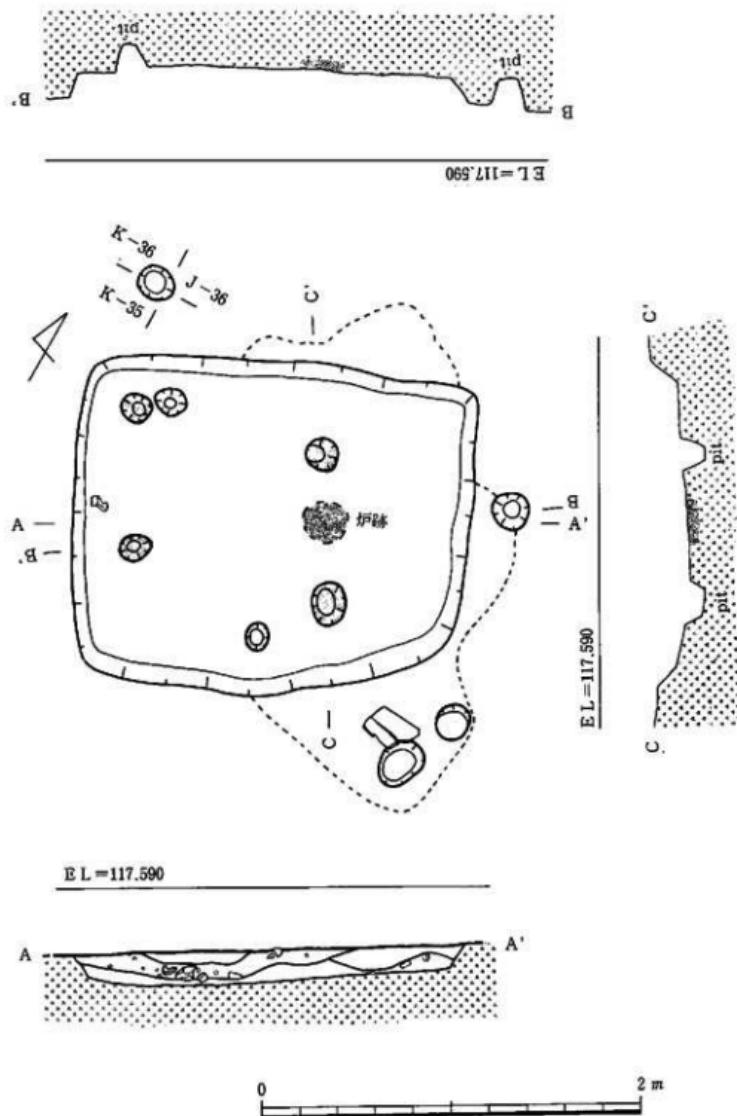


Fig.69 第14号竪穴住居跡実測図

Tab.56 第14号竪穴住居跡

位置	地区	第2地区 J-35グリッド							
	重複	なし							
構	形状	隅丸方形(ほぼ正方形)							
	規模	南北最大長160cm、東西最大長約200cm 今回の竪穴で最も小さい。							
	深さ	13~18cm							
	壁	地山を掘り込んで壁面としている。							
造	壁面石積	なし							
	床面	地山面のみ							
	炉跡	直径約25cmの円形炉跡が検出された。炉の上の灰層は僅か2~3mm。							
	柱穴	口径15~20cm、深さ8~10cmの柱穴が6本検出された。							
出土遺物	土器 (口縁部の個数)	層群	A	B	C	D	E	F	G
		I		3			5		
		II	1	1		1	3		
		III	2	5		3	35	4	1
堆積状況	石器	破片2個							
	骨製品	サメ脊椎製2個、リクガメ利用1個							
	貝製品	ハナイモ・イモガイ科製2個							
	食料残滓	貝類694個(多量)、イノシシ骨・魚骨少量、ウミガメ・ジュゴン僅少。							
堆積状況		第Ⅲ層で陸産マイマイが集中して堆積していた。							



Fig.70 第14号住居内出土の土器

1・2, A群土器 3～6, B群上器 7・9, E群土器
8, F群土器 10・11, G群上器

Tab.57 第14号竪穴住居内出土の土器

掘出番号 P.L. 棚号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	樹 種	形 狽 等 の 特 徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 70 14号 P.L. 32 1	14号 竪穴住居 Ⅱ層	A群	深鉢	A群期の荻窓式土器。叉状工具で縦位と横位に短沈線文を施す。	外面削離。 内面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	石英が多量。
" 2	" Ⅱ層	"	深鉢?	有文のカヤウチパンタ式土器。肥厚帯に押捺刻文を二条施す。	外面ナデ。 内面ナデと 条痕。	"	暗褐色	石英と石灰 砂粒質が微量。
" 3	" Ⅲ層	B群 Ⅲc口	深鉢?	有文の肥厚口縁。肥厚帯下に单鹿で押捺刻文。	両面削離。	悪く、 脆い。	黄褐色	石灰質細砂 粒と貝片等 が多量。
" 4	" Ⅲ層	" Ⅲdイ	深鉢	無文の肥厚口縁。アバク状。	外面摩耗。 内面ナデ。	良く、 硬い。	"	石灰質の粗 砂粒が少量。
" 5	" Ⅰ層	B群 Ⅲdイ	深鉢?	有文口縁。口唇近くに单鹿工具で 押捺刻文。	両面ナデ。	良く、 硬い。	赤褐色	ほとんど見 えない。
" 6	" Ⅱ層	" Ⅲd口	深鉢?	有文口縁。口壁に单鹿工具で押捺 刻文。	外面削離。 内面ナデ。	悪く、 脆い。	"	ほとんど見 えない。
" 7	" Ⅲ層	E群 Ⅲイ3	深鉢	宇佐浜式系統の土器。	両面にナデ と条痕。	良く、 硬い。	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が多量。
" 8	" Ⅲ層	F群	深鉢?	有文の肥厚口縁。肥厚帯とその直 下に叉状工具で押し引き文。	両面削離。	脆弱。	黄褐色	石灰質細砂 粒・貝片が 多量。
" 9	14号 竪穴住居 Ⅲ四	E群 Vイ3	深鉢	無文口縁。器形は14号Ⅲ層に近い。	外面ナデ。 内面ナデと 条痕。	良く、 硬い。	赤褐色	石灰質の粗 砂粒と石英 が少量。
" 10	" Ⅲ層	G群		中空の把手を貼付けた瓶部資料。 E群期の所産。	外面ナデ。 内面削離。	悪く、 脆い。	黄褐色	石英が多量。
" 11	" Ⅲ層	"		中空の把手を貼付けた瓶部資料。 凸帯は縦位に貼付ける。凸帯の左 側は横位の短沈線文。?	両面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	ほとんど見 えない。

骨製品

Fig.71-1、2、3の3点が得られた。

1、2、はサメの脊椎の臼部中央に小孔を有するものである。1は径22.0mm、厚さ8.2mm、孔
径5.1mm×4.4mmを測る。孔は中心より若干ずれる。第Ⅲ層5cm～10cmの出土である。

2は径12.0mm、厚さ7.8mm、孔径3.5mmを測る。第Ⅱ層の出土である。2点とも孔以外に加工
痕は認められない。

3はリクガメの腹甲板に6個の小孔を施したものである。縁の一部は打割れによる調整がなされる。孔は左右に3個ずつ穿孔するが、位置は縦位に平行で横位には若干ずれる。孔は略長方形を施し平均5.0mmを測る。主に裏面から穿孔する。最大長77.4mm、最大幅64.6mmを測る。県内で初めての製品で用途は不明である。第Ⅲ層5cm～10cmの出土である。

貝製品

Fig.71-1、2、の2点が得られた。

4はハナイモの肩部の体層部の腹面を横位に擦り、穿孔したものである。殻長35.6mm、殻径23.4mm、孔径9mm×3.7mm、第Ⅲ層5cm～10cmの出土である。

5はイモガイ科の体層部を除去したもので、ビードの未製品と考えられる。体層部は未完成で火を受けている殻頂に小孔1.5mm、肩部は丸みをおびているが研磨か摩耗か不明である。

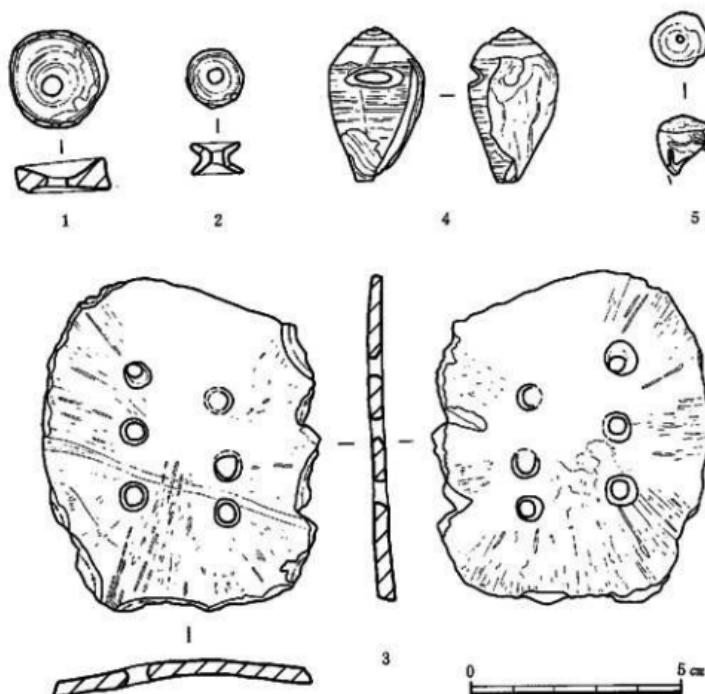


Fig.71 1～3.骨製品 4・5.貝製品

Tab.58 第15号竪穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 I-36・37、J-36・37グリッド						
	重 複	不明						
構 成	形 状	西側の一部の検出だが、隅丸方形と見られる。						
	規 模	発掘した部分で見ると、南北最大長約420cmと大きい竪穴である。						
造 成	深 さ	20~30cm						
	壁	西壁の北半分は露頭した岩盤を壁面として利用している。 西壁の南半分は石積みで壁面化粧されている。						
造 成	壁 面 石 積	西壁南半分は最大長10~25cmのやや小さな石を積んでいる。						
	床 面	岩盤面と地山面						
造 成	炉 跡	地山面に3つの炉跡が検出された。炉の上には1~2cmの灰層が堆積していた。						
	柱 穴	口径15~20cm、深さ15~25cmの柱穴が4本検出された。						
出 土 遺 物	土 器 (口縁部の個数)	層 群	A	B	C	D	E	F
		II						
		III	5	44	24	9	3	4
	IV							
石 器	破片5個、石装身具1個、石製品(未製品)1個。							
	骨 製 品	——						
貝 製 品	ヤコウガイの蓋貝斧2個							
	食 料 残 滓	貝類71個(少量)、イノシシ骨・魚骨少量、ウミガメ・ジュゴン僅少。						
堆 積 状 況		黒褐色の中に土器が夥しく検出された。						

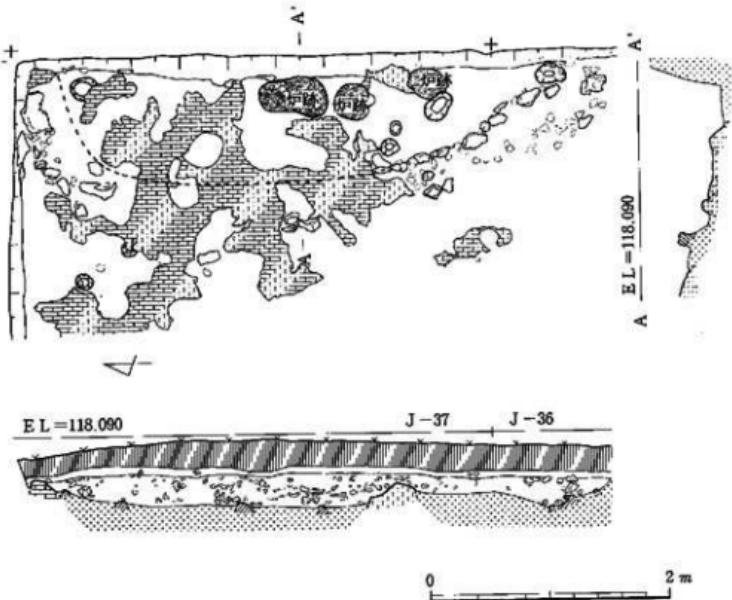


Fig. 72 第15号竪穴住跡実測図

Tab.59 第15号竪穴住居内出土の土器

標団番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器種	形態等の特徴	表面調整	焼成	色調	混入物
Fig. 73 P.L. 33 1	15号 竪穴住居 Ⅰ層	B群	深鉢	B群期の宇佐浜式土器。肥厚唇下を指などで調節して、同部位を強調。	両面ともナ メと条痕。	良く、 硬い。	"	石灰岩の粗 粒・サンゴ 片等が多量。
" " 2	" " 層 Ⅱ層	" B群	" " "	B群期の宇佐浜式土器。	外曲ナデと 条痕。 内面剥離。	"	黄褐色	石灰質の粗 粒砂粒等が多 量。
" " 3	" " 層 Ⅲ層	" B群	" " "	B群期の宇佐浜式土器。口径と周 縁はほぼ同サイズ。(口径26.4、 周径26.1、器高29.0)。	両面ナデ。	"	"	石灰質の粗 粒砂・サンゴ 片等が多量。
" " 4	" " 層 Ⅳ層	" " "a	" " "	有文の宇佐浜式土器。肥厚唇とそ の直下に单範工具で押捺刻文。	両面ナデ。 想く、 硬い。	"	"	石英と石灰 質の細砂粒 が多量。
" " 5	" " 層 Ⅴ層	" " "Ct	深鉢?	有文の肥厚口唇。肥厚唇に单範工 具で押し引き文。	外曲ナデと 指圧。 内面 ナデと条痕。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の粗 粒砂・サンゴ 片等が少。

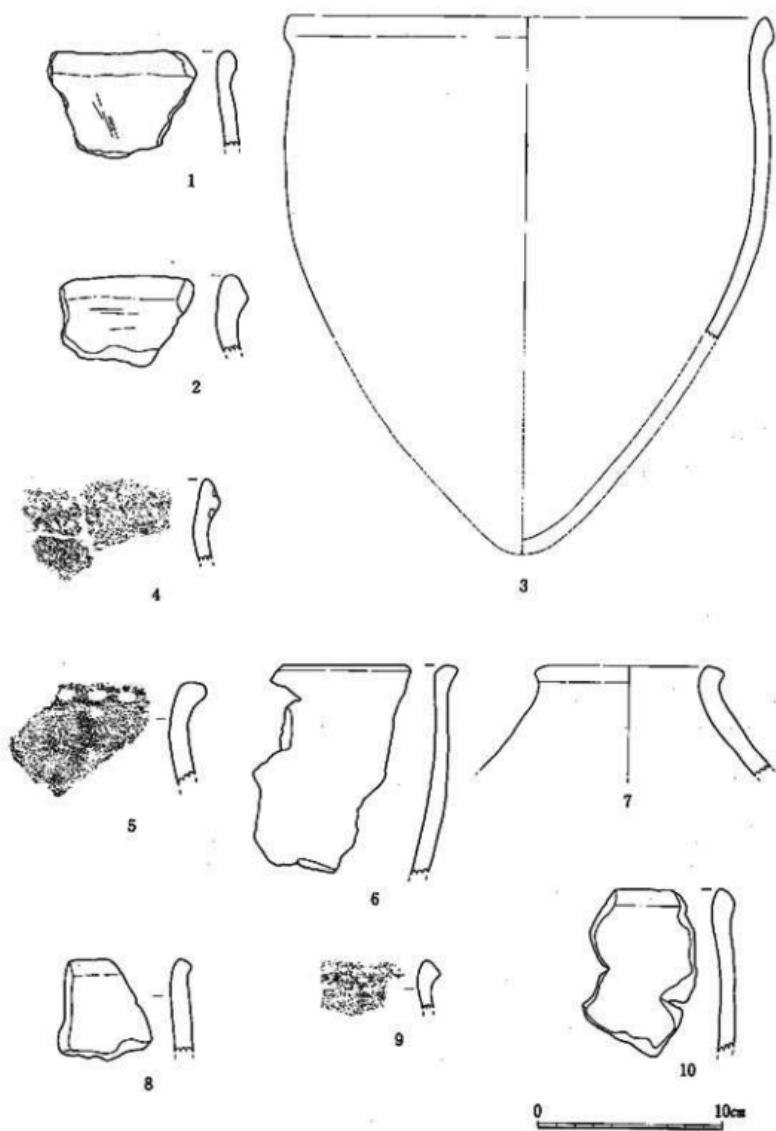


Fig.73 第15号整穴住居内出土の土器 1～9, B群土器 10, C群土器

標図番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び 番	形 式	器 種	形 状 等 の 特 徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 73 P.L. 33 6	15号 壁穴住居 裏唇	B群 III bハ	深鉢?	無文の肥厚口縁。(口径24.8、胴径23.8)。	両面とも剥離。	良く、硬い。	茶褐色	石灰質の細砂粒や粗砂粒が多量。
" " 7	" 壁 裏唇	" III c口	壺	無文の肥厚口縁で蓋形、ナテ肩状。(口径10.2)。	両面ナテ。	"	"	石灰岩の粗砂・粗い石英が少量。
" " 8	" 壁 裏唇	" III dイ	"	無文の肥厚口縁。	両面ナテ。	"	黄褐色	石灰質の粗砂粒が多量。
" " 9	" 壁 裏唇	" III dロ	"	有文の肥厚口縁。口唇は単範工具で押捺記文。	外面穿耗。 内面ナテ。	"	"	石灰質細砂粒・貝片等が少量。
" " 10	" 壁 裏唇	C群 II	"	無文の肥厚口縁。アバタ状を呈する。	外面剥離。 内面ナテと 条痕。	"	"	石灰岩の粗砂粒が微量。
Fig. 74 P.L. 34 11	" 壁	" III a	"	有文の肥厚口縁。肥厚帯に单面で押捺文。アバタ状を呈する。(口径13.8、胴径16.4)。	両面ナテ。	"	茶褐色	石灰質の微砂粒等が少量。
" " 12	" 壁 裏唇	" III c口	"	無文の肥厚口縁。アバタ状。	両面剥離。	"	黄褐色	石灰質の粗砂粒等が微量。
" " 13	" 壁 裏唇	" III cハ	"	無文の肥厚口縁。	"	"	"	"
" " 14	" 壁 裏唇	E群 VIイ3 (△)	"	無文の肥厚口縁。アバタ状。肥厚帯は人字が剥離・穿耗。(口径26.2、胴径25.2)。	外面剥離。 内面摩耗。	良く、硬い。	茶褐色	石灰質の粗砂粒等が少量。
" " 15	" 壁 裏唇	F群	深鉢?	有文の肥厚口縁。肥厚帯下に斜位を複数に貼付ける。凸部両側に点刻文。沈線文は縱位・横位。(口径20.2)。	両面ともナテ。	"	"	石灰質の微細粒が少々。
" " 16	" 壁 裏唇	"	"	有文の肥厚口縁。肥厚帯下に斜位の沈線文。	外面剥離。 両面ナテ。	"	"	石灰質の微砂粒・石英が多量。
" " 17	" 壁 裏唇	"	"	有文調節。横位と斜位の沈線文を施す。	両面ナテ。	"	黄褐色	"
" " 18	" 壁 裏唇	B群 ハ	"	平底。底面が内側に窪む。(底径3.2)。	外面剥離。 内面ナテ。	"	"	微細な石灰質の砂粒が少量。
" " 19	" 壁 裏唇	C群 ハ	"	平底。(底径2.8)。	外面摩耗。 内面ナテ。	限界。	"	石灰質の粗砂粒等が少量。

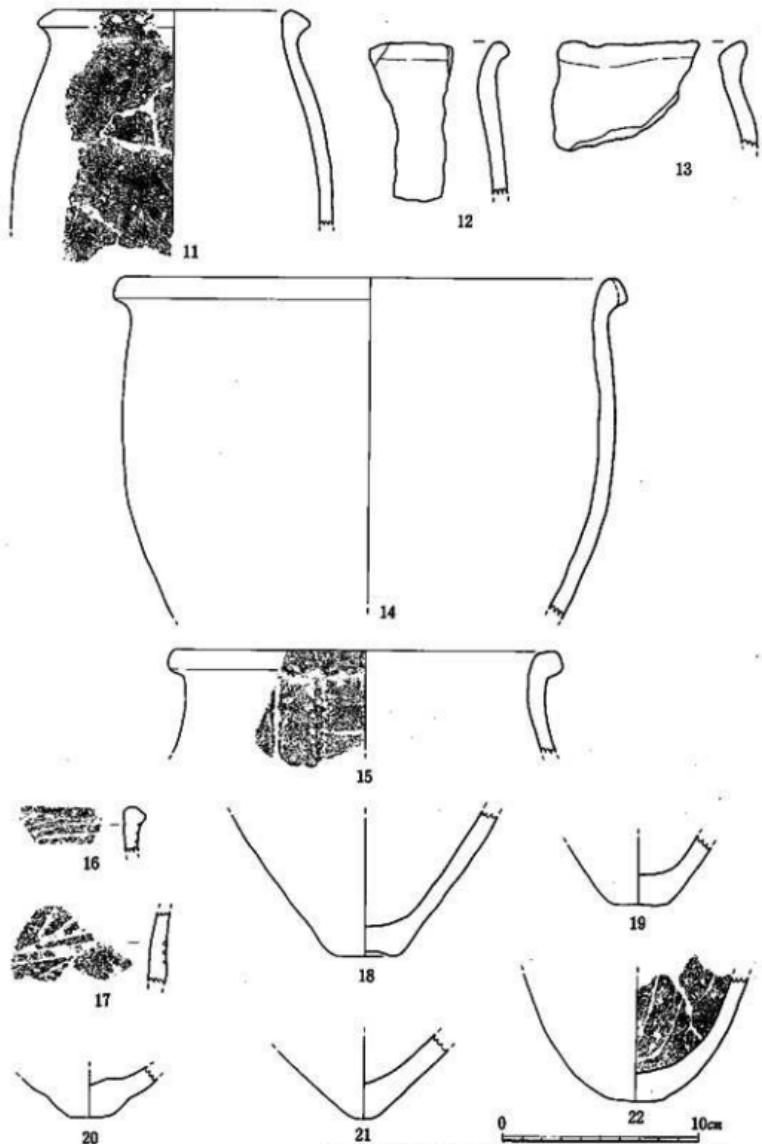


Fig.74 第15号竪穴住居内出土の土器
11~13. C群上器 14. E群土器 15~17. F群土器
18. B群土器の底部 19~21. C群土器の底部
22. E群土器の底部

播磨番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 様	形 状 等 の 特 徴	器面調整	備 考		
						焼成	化膚	窯 入 物
Fig. 74 P.L. 34 20	15号 堅穴住居 頂層	C群 ハ		平底。(底深2.3)。	両面とも剥離。	黄褐色	石灰質の粗砂粒が強烈。	
" " 21	日層	" ト		尖底。尖端は半搾氣味、アバク状を呈する。	外表面ナデ。 内面剥離。	良く、硬い。	黄褐色	石灰質粗砂粒が少量。
" " 22	日層	E群 ヘイ4		丸底。	外表面ナデ。 内面ナデと条痕。	"	"	想い石英が少量。

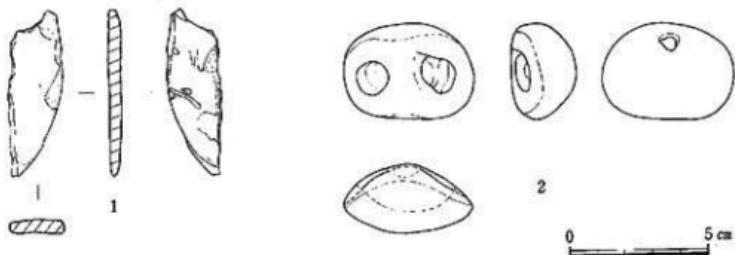


Fig.75 第15号堅穴住居 1. 石製身具(未製品) 2. 有孔石製品(製身具)

Tab.60 第15号堅穴住居内出土の石器

播磨番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 様	分 類	石質	法量 (cm・g)				上 な 特 徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 75 P.L. 46 1	15号 堅穴住居 頂層	石 制 身具品の 未 製品	石質品	筋岩	5.3	1.9	0.5	6.9	研磨は裏面に集中し、表面は部分的に施す。また、左側面の下半にも部分的に研磨を施す。
" " 2	日層	有 孔 石 製品	打ノジュー ル	石岩	3.4	4.7	2.8	29	表面の両側から穴を穿り貫通させる。穴のサイズは左側が 1×1.2 cm、右側は 1×1.5 cm。全体的に摩耗する。

只要品

2点得られた。

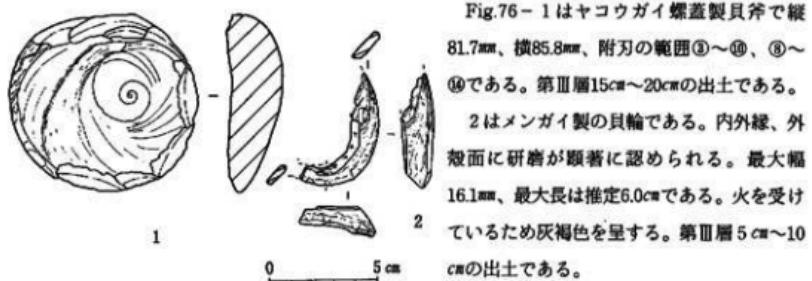


Fig.76-1はヤコウガイ螺蓋製貝斧で縦81.7mm、横85.8mm、附刃の範囲③～⑩、⑥～⑩である。第III層15cm～20cmの出土である。

2はメンガイ製の貝輪である。内外縁、外殻面に研磨が顕著に認められる。最大幅16.1mm、最大長は推定6.0cmである。火を受けているため灰褐色を呈する。第III層5cm～10cmの出土である。

Fig.76 1・2. 貝製品

Tab.61 第16号竪穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 J-36・37、K-36・37グリッド							
重 複	複	なし							
構 造	形 状	隅丸の長方形							
	規 模	南北最大長約470cm、東西最大長約210cm							
	深 さ	5～15cmと最も深い竪穴である。							
	壁	露頭した岩盤を壁面として使用している所もあるが、多くは地山を浅く緩やかに掘り込んで壁面としている。							
	壁 面 石 積	なし							
	床 面	岩盤面と地山面が半々くらい							
	炉 跡	地山面に4つの炉跡が検出された。切り合いかないので、前後関係は不明。炉の上には0.5～1cmの灰層が堆積していた。							
柱 穴	口径15～25cm、深さ7～20cmの柱穴が12本検出された。								
出 土	土 (口縁部の個数)	層 群	A	B	C	D	E	F	G
		I		1	2	1			
		II	2	9	4	15			
		III	8	32	24	15	1	2	1
	器 (口縁部の個数)	IV		1					
遺 物	石 器	破片1個							
	骨 製 品	ジュゴン製1個							
	貝 製 品	――							
	食 料 残 渣	貝類332個(多量)、イノシシ骨・魚骨・ウミガメ少量、ジュゴン僅少。							
堆 積 状 況		浅い堆積で疊や土器などが少ない。							

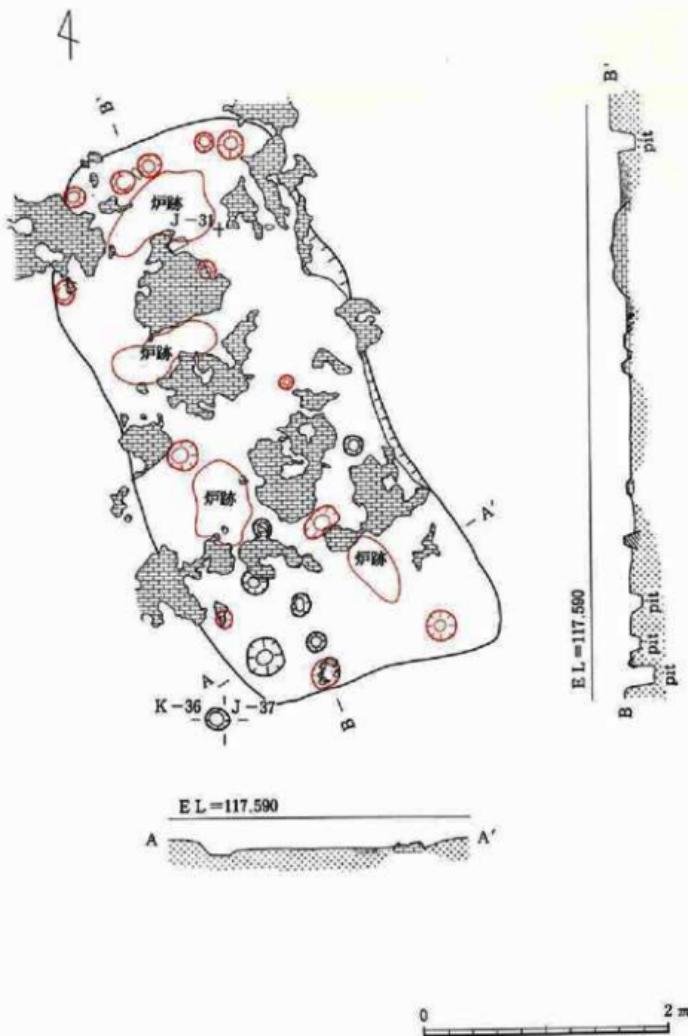


Fig.77 第16号竪穴住居跡実測図

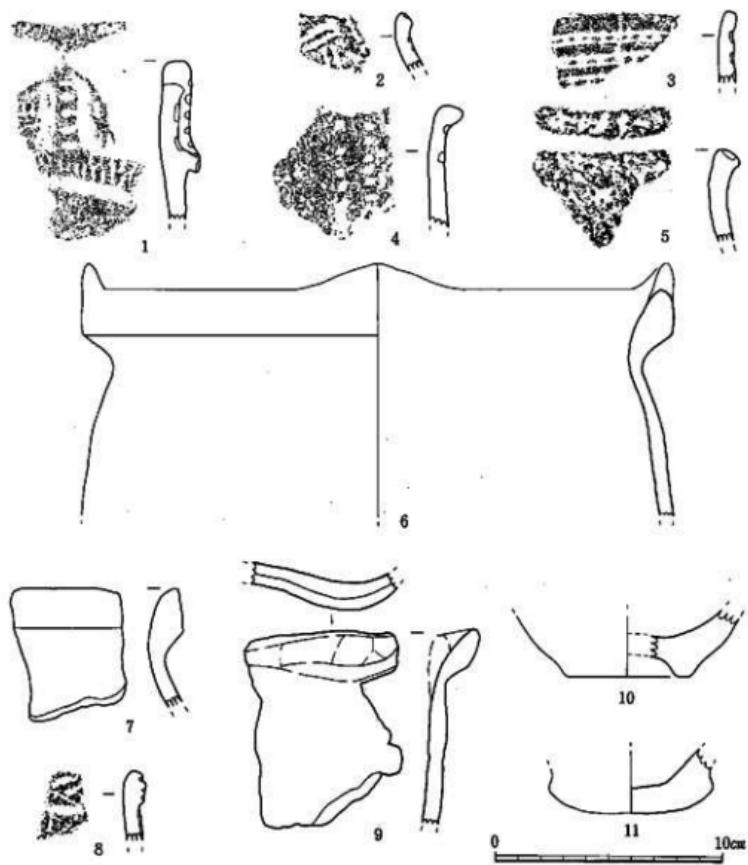


Fig.78 第16号竪穴住居内出土の土器
1～3. A群土器 4・5. B群土器 6・7. D群土器
8. F群土器 9. G群土器 10・11. B群土器の底部

Tab.62 第16号竪穴住居内出土の土器

種別番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 様	形 異 等 の 特 徴	器面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 78 P.L. 35 1	16号 竪穴住居 III層	A群	深鉢	狹葉式土器。山形口縁に凸筋を複数個位と横位に貼付ける。文様は單範工具で口齊・口縁・凸筋に点刻文。	両面ナデ。	良く、 硬い。	赤褐色	石英・チャート片多量。
" " 2	" II層	A群	?	狭葉式土器。内側にきつく傾む。文様は口縁に点刻文、口部が又状工具による押し引き文。	両面削離。	良く、 硬い。	暗褐色	ほとんど見 えない。
" " 3	" II層	"	深鉢	大山式土器。单範工具で押抜刻文を施す。	"	"	黒褐色	石英・チャート片多量。
" " 4	" 直筒	B群 直c口	深鉢?	有文肥厚口縁。単範で押抜刻文。	外面削耗、 内面ナデ。	悪く、 軟い。	黄褐色	石灰質粗砂 粒が少量。
" " 5	" III層	III d イ	深鉢	有文口縁。口齊に单範工具で点刻文。	両面削離。	"	"	細い石英が 少量。
" " 6	" 直筒	D群	深鉢	山を持つ字佐浜式。(口径32.1)。	両面ナデ。	堅敏	茶褐色	石英・石灰質の粗砂粒 が多量。
" " 7	" II層	"	"	宇佐浜式土器。肥厚直口を窓割りで調整し、強調する。	外面ナデと 窓割り。 内面ナデ。	"	暗褐色	石英・石灰質粗砂粒・ 雲母が多量。
" " 8	" II層	F群	深鉢?	西柄式上図。肥厚骨に斜位沈線文で羽状に組み合せる。肥厚柄下に縦位の沈線文。	両面とも削 離。	悪く、 硬い。	茶褐色	石英・雲母 が多量。
" " 9	" 直筒	G群	深鉢	無文口縁。口縁にぎき口を造る。已標期の所謂。	外面削離、 内面ナデ。	良く、 硬い。	"	石英が多量 に混入。
" " 10	" II層	B群 ハ		平底。底面は内側に岸む。底面・ 外表面の成形は丁寧。(底径55.)	両面ナデ。 内面削離。	"	"	石灰質の粗 砂粒・貝片 が多量。
" " 11	" II層	" ホ		底盤が比較的大きい平底。立ち上がりの箇所で一口、きつく、くびれ外縁に開く。(底径7.1)。	両面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の粗 砂粒・石英 が多量。

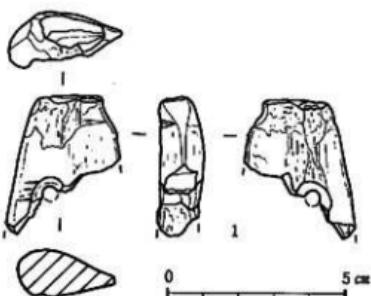


Fig.79 1. 骨製品

骨製品

Fig.79-1のジュゴンの骨を用いた製品のみである。肋骨の基部近くに穿孔するもので薄い部分に若干の自然面を残す。横断面は梢円を呈するが、一端に細長くなる。側面に研磨痕が確認され、色は黒褐色を呈することから火を受けたと考えられる。骨錐の軸顶部とされる。残存部の最大長38.0mm、最大幅27.5mm、軸顶部18.3mmを測る。孔径は5.0mmと推定される。第Ⅱ層の出土である。

Tab.63 第17号整穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 L-29グリッド						
重 複	複	なし						
構 造	形 状	台形に近い隅丸方形						
	規 模	南北最大長約320cm、東西最大長約250cm						
	深 さ	20~30cm						
	壁	北・西・南はすべて露頭した岩盤を壁面として利用している。東壁は石積みをして壁面化粧している。						
造 成	壁面石積	東壁は最大長約30cmの石を立てて積んでいる。						
	床 面	ほとんど岩盤面で、わずかに地山面がある。						
	炉 跡	地山面に1つの炉跡が検出された。炉の上には0.5~1cmの灰層が堆積していた。						
	柱 穴	竪穴内には口徑約25cm、深さ約15cmの柱穴が2本検出された。また、竪穴の西外側には、岩盤の穴を利用した柱穴が3本検出された。						
出 土 遺 物	土 器 (口縁部の個数)	群	A	B	C	D	E	F
		I					4	
		II					2	
		III		1	1		19	
	石 器	石斧3個、磨石1個、石鎌1個、破片12個						
	骨 製 品	ジュゴン製1個						
	貝 製 品	——						
	食 料 残 滓	貝類54個(少量)、イノシシ骨・魚骨少量、ウミガメ・ジュゴン僅少。						
堆 積 状 況	土器が大量に堆積していた。東南隅には3個の石斧がまとめて検出された。							

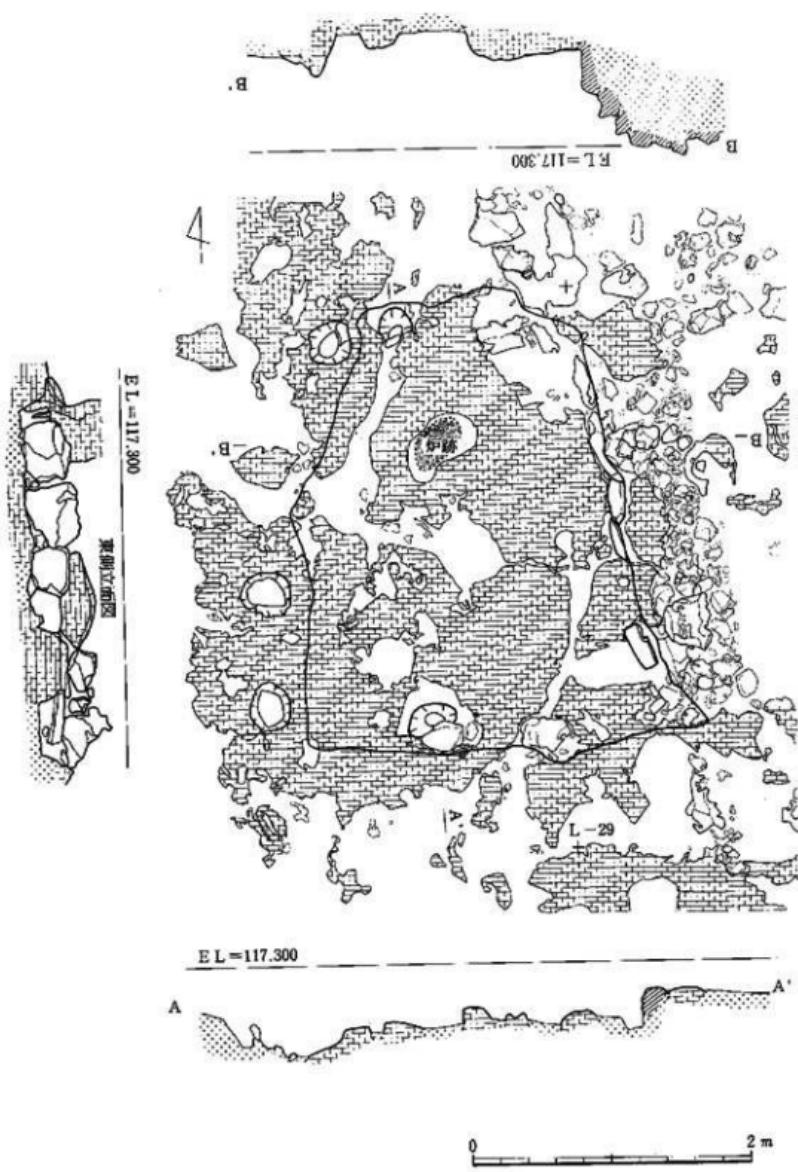


Fig.80 第17号竪穴住居跡実測図

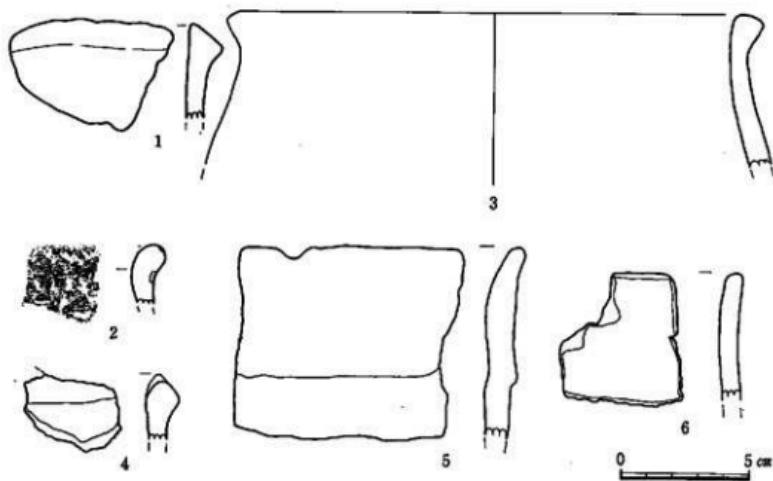


Fig. 81 第17号竖穴住居内出土の土器 1・2, B群土器 3, C群土器 4～6, E群土器

Tab. 64 第17号竖穴住居内出土の土器

掲載番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	基 標	形 細 等 の 特 徴	裏面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 81 P.L. 36 1	17号 竖穴住居 Ⅲ層	B群 Ⅱ	深鉢	宇佐浜式土器。	外面削離。 内面ナデ。	悪く、 脆い。	黄褐色	石灰質の細 砂粒、石英 が多量。
" " 2	" Ⅲ層	" Ⅲ b	深鉢?	有文口縁。肥厚帯とその直下に單 範で押捺刻文。	内面ナデ。	良く、 硬い。	茶褐色	石灰質の微 砂粒が少量。
" " 3	" Ⅲ層	C群 Ⅲ c 口	深鉢	無文の肥厚口縁。肥厚帯を丁寧に 形成する。アバタ状を呈する。 (口径20.9)。	外面ナデ。 内面摩耗。	"	黄褐色	石灰質の細 砂粒、石英 が多量。
" " 4	" Ⅲ層	E群 Ⅲ i 3	深鉢	宇佐浜式系統の土器。山形の肥厚 口縁。丁寧に成形。	両面ナデ。 型模	黄褐色	石英、石灰 質の細砂粒 等が少量。	
" " 5	" Ⅲ層	" Ⅰイ4	"	カヤウチパンタ式系統の土器。肥 厚帯下の仕上げは難。	外面ナデ。 内面削離。	"	"	石英等が多 量混入。
" " 6	" Ⅲ層	" Vイ1	"	無文の直口口縁。アバタ状を呈 する。	両面削離。	"	暗褐色	石灰質の細 砂粒が微量。

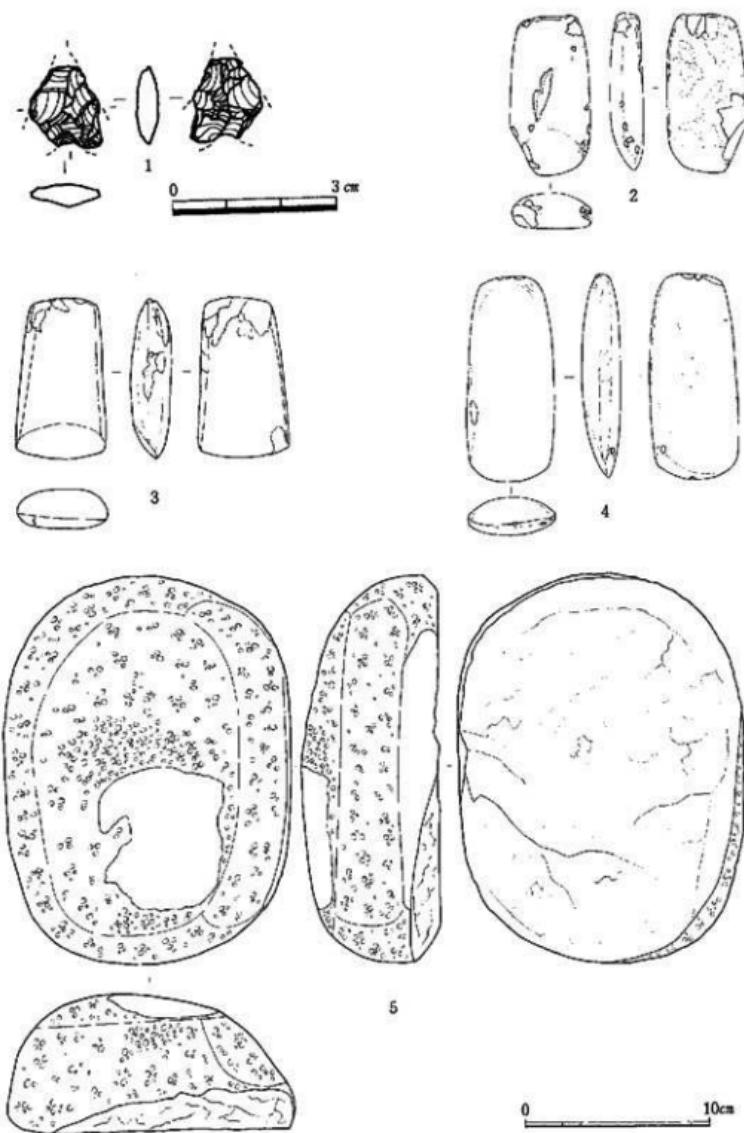


Fig.82 第17号竖穴住居 1.石器 2~4.石斧 5.磨石

Tab.65 第17号竪穴住居内出土の石器

地図番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	石質	法量(cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig.82 PL.46 1	17号 竪穴住居 Ⅱ層	石 繖		チャート	(1.5)	(1.2)	0.4	0.7	打製石繖。先端と両側の下端を欠く。基端部に抉りを入れる。
" " 2	" Ⅲ層	石 斧	I AM小 2ロC	千枚岩	8.5	3.3	1.8	(118)	片刃の磨製石斧。両面・両側面に研磨を施すが、裏面のみ鏡面ではない。敲打は上端面に集中。
" " 3	" Ⅲ層	"	I BM中 2イC	"	8.7	4.7	2.2	160	片刃。両面と両側面に丁寧に施すが、右側面に敲打が認められる。上端面は剥離面。
" " 4	" Ⅲ層	"	I BL中 2ハC	玄武岩	11.0	4.3	2.1	190	片刃。研磨は上端面を除いて、丁寧に施す。敲打は両側の一部と上端に集中。
" " 5	" Ⅰ層	磨 石	Ⅲ LLD ロ(i)		21.0	15.6	7.3	(3450)	裏面は使用時に破損。表面と両側面の一部分は磨面である。他は敲打である。

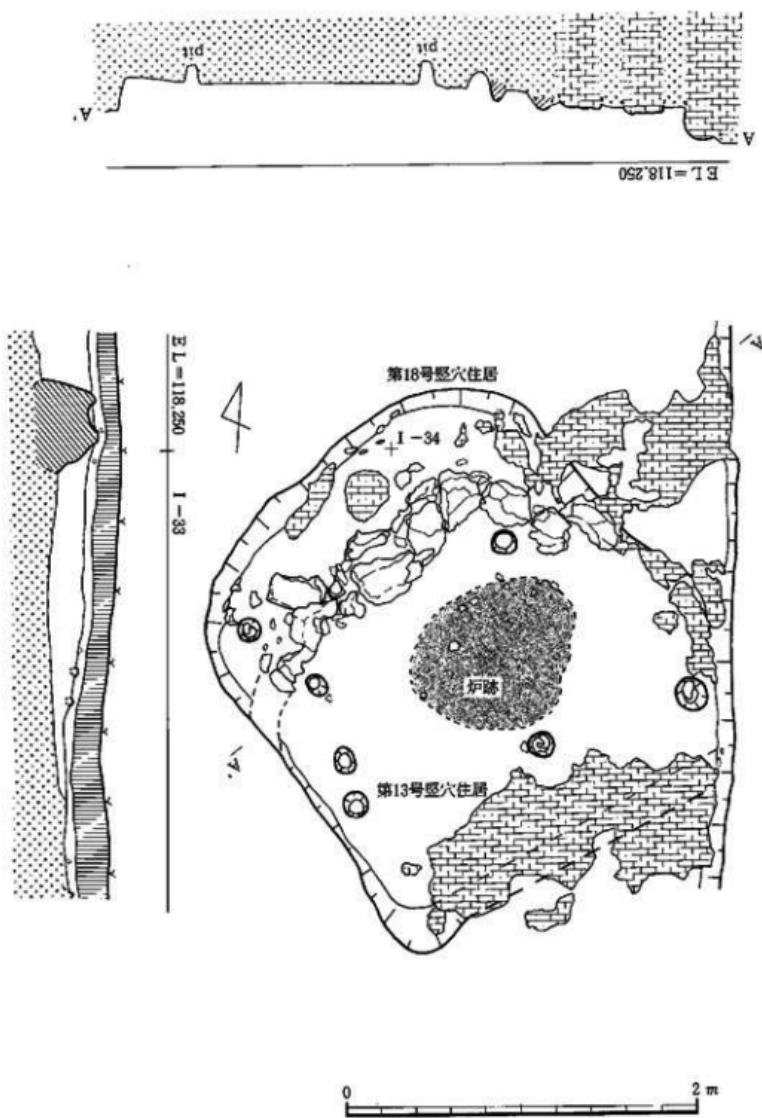


Fig.83 第18号竖穴住居断面图

Tab.66 第18号竪穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 I - 33・34グリッド							
	重 複	第13号竪穴に切られており、第13号竪穴より古い。							
構 造	形 状	隅丸方形(正方形)							
	規 模	220×220cm							
	深 さ	30~35cm							
	壁	発掘できた北側の一部で見ると地山を掘り込んで壁面としている。							
	壁面石積	なし							
	床 面	地表面が検出されたが、中央部から南側では岩盤面もあると考えられる。							
	炉 跡	第13号竪穴の張床に覆われておらず不明。							
	柱 穴	北西隅に1本だけ検出、未発掘部分については不明。							
出土 遺 物	土器 (口縁部の個数)	層 群	A	B	C	D	E	F	G
		I							
		II							
		III				1	5		3
	石器	——							
	骨製品	ジュゴン製1個							
	貝製品	——							
	食料残滓	貝類2個(僅少)、魚骨少量、イノシシ骨少量。							
堆積状況		竪穴内の堆積の約80%は第13号竪穴で壊されている。壊されていない北側部分で見ると、疊や土器の多い黒褐色土の堆積。							

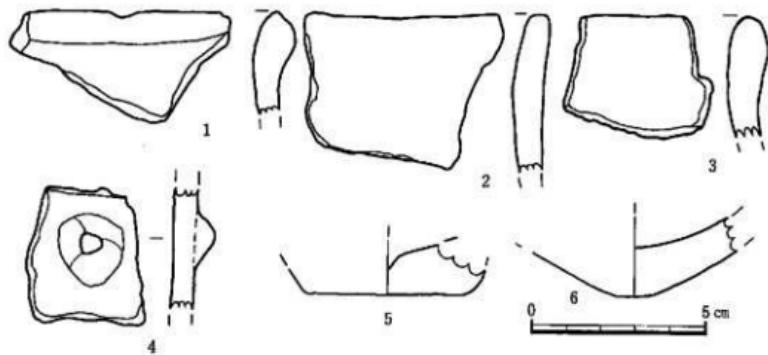


Fig. 84 第18号竖穴住居内出土の土器
1～3, E群土器 4, G群土器 5, B群土器
6, E群土器

Tab.67 第18号竖穴住居内出土の土器

鉢岡番号 PL番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器種	形 造 等 の 特 徴	表面調整	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 84 PL. 36 1	18号 竖穴住居 Ⅲ層	E群	深鉢	E群期の平底式系統の上器。 直口縁。	両面摩耗。	良く、 硬い。	ほとんど見 えない。	黄褐色。
" " 2	" Ⅲ層 V 13	"	"	無文の直口口縁。	両面剥離。	"	"	石灰質の細 砂粒が少々。
" " 3	" Ⅲ層 冒イ 3 (0)	"	"	無文の直口口縁。脛厚は薄弱。	外側摩耗。 内面ナデ。	"	"	石英等が微量。
" " 4	" Ⅲ層 G群	G群	"	瘤状の突起を施付けた凹部片。 E群期に所属。	外側ナデ。 内面剥離。	"	"	石灰質細砂 粒等が多量。
" " 5	" Ⅲ層 B群 口	B群	"	B群期の平底。(底径4.7)。	両面剥離。	脆弱。	"	石灰質の微 砂粒が少々。
" " 6	" Ⅲ層 E群 ト	E群	"	尖底。	両面剥離。	良く、 硬い。	"	石灰質の粗 砂粒が少々。

骨製品

Fig.85の1点のみである。ジュゴンの肋骨の一端をヘラ状に尖らしたものである。他端の溝状を抉り、切断したと考えられる。先端部をまず大きく割り、研磨を施しヘラ状に刀をつけたものである。最大長100.0mm、最大幅25.2mm、厚さ14.0mmで断面は偏平の梢円形を呈する。第Ⅱ層の出土である。

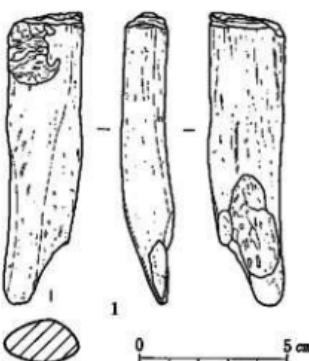


Fig.85 1. 骨製品

Tab.68 第19号竪穴住居跡

位 置	地 区	第2地区 I - 34・35、J - 34・35グリッド								
重 複	第20号竪穴を切っており、第20号竪穴より新しい。									
構 造	形 状	5角形に近い不定形								
	規 模	南北最大長約330cm、東西最大長380cm以上								
	深 さ	5~15cmの浅い竪穴								
	壁	西壁はほとんど露頭した岩盤を壁面として利用しているが、北壁、南壁は地山を浅く緩やかに掘り込んで壁面としている。東壁は未発掘で不明。								
造 成	壁面石積	発掘した範囲にはなし								
	床 面	岩盤面や地山面のほかに、第20号竪穴の堆積層面。								
	炉 跡	ほぼ中央に凝灰岩で囲んだ方形の石囲い炉跡。外径95×100cm、内径70×80cm、高さ15cm。炉内は灰層が堆積し、炉面と開口石内面は赤く焼けている。ほかに石囲いのない炉跡が1つ検出された。炉の上には1~2cmの灰層が堆積していた。炉を挟んで2つの柱穴検出。								
出 土 遺 物	柱 穴	口径15~25cm、深さ12~18cmの柱穴が9本検出された。								
	土器 (口縁部の個数)	層 群	A	B	C	D	E	F	G	
		II				1	2			
		III					19		1	
食 料 残 滓	石 器	石製装身具2個								
	骨 製 品	——								
	貝 製 品	——								
	食 料 残 滓	貝類5個(僅少)、イノシシ骨・魚骨少量、ウミガメ・ジュゴン僅少。								
堆 積 状 況	黒褐色土で土器や礫などがやや多い。									

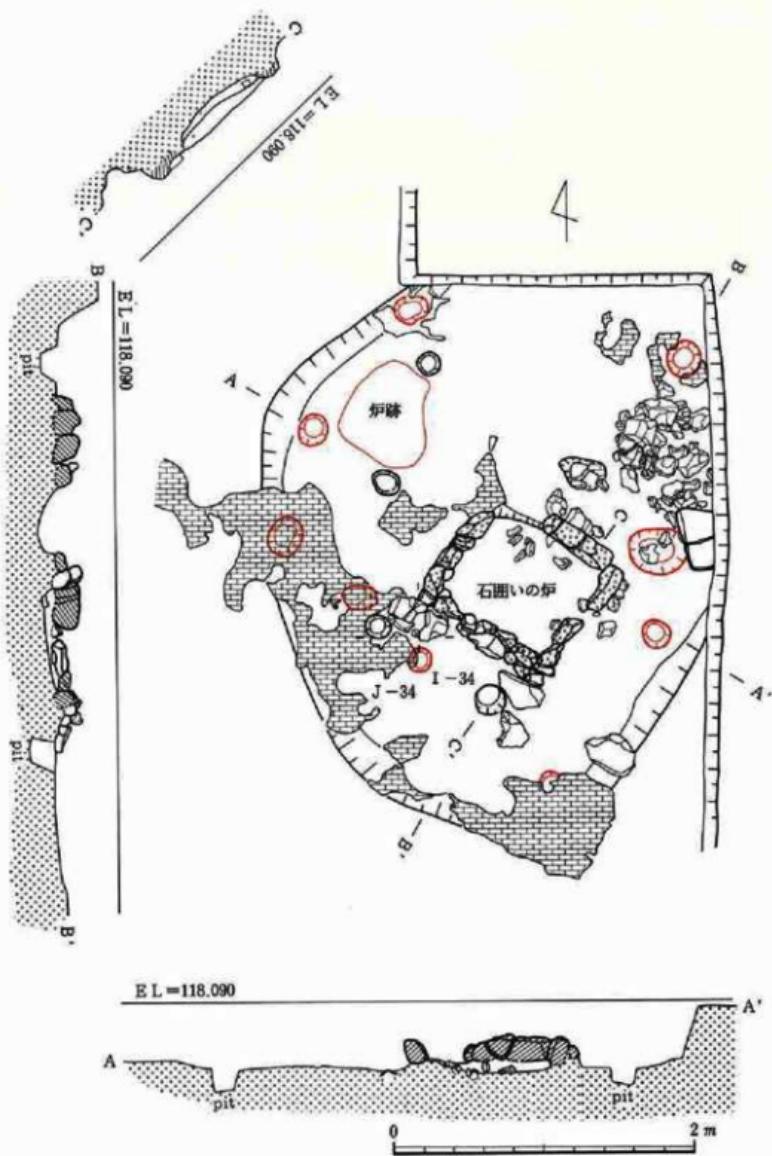


Fig.86 第19号竪穴住居跡実測図

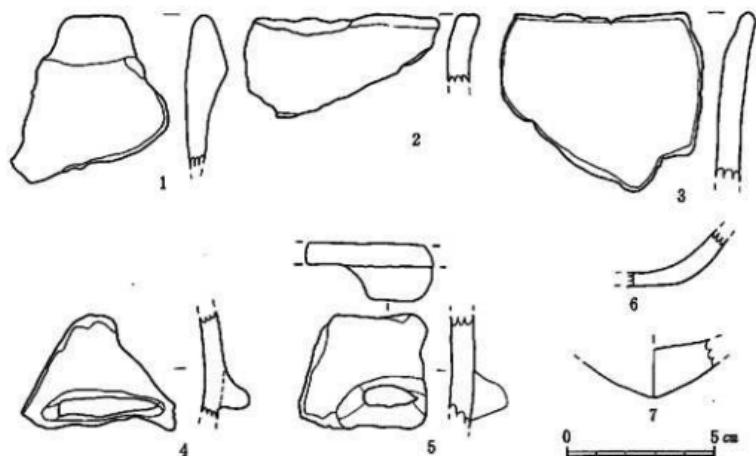


Fig.87 第19号堅穴住居内出土の土器
1. D群土器 2・3. E群土器 4・5. G群土器
6・7. E群土器の底部

Tab.69 第19号堅穴住居内出土の土器

福岡番号 PL.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 横	形 态 等 の 特 徴	器面調査	備 考		
						焼成	色調	混人物
Fig. 87 P.L. 37 1	19号 堅穴住居 Ⅲ層	D群	深鉢	宇佐浜式土器。丁寧に成形する。	両面とも剥離。	良く、 硬い。	茶褐色	石英が多量。
" 2	" Ⅲ層 Vイ3	E群	深鉢	無文口縁。外反は弱い。	"	"	黄褐色	石灰質微砂粒、石英が多量。
" 3	" Ⅲ層 Vイ4	"	"	無文口縁。外反は微弱。比較的丁寧に成形。	両面ナデ。	"	"	"
" 4	" Ⅲ層	G群		外耳状の把手を貼付けた側部片。 E群期に所属。	"	"	茶褐色	石灰質の粗砂粒が多量。
" 5	" Ⅲ層	"		外耳状の把手を貼付けた側部片。 E群期に所属。	外面ナデ。 内面摩耗。	"	黄褐色	"
" 6	" Ⅲ層 イイ3	E群		平底。底面から丸味を保持しながら立ち上がる。	両面滑耗。	"	"	石灰質の粗砂粒が少量。

捕獲番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形 式	器 種	形 态 等 の 特 徴	器面調査	備 考		
						焼成	色調	混 入 物
Fig. 87 P.L. 37 7	19号 豎穴住居 目録	E群 チイ 3		尖底。	外面剥離。 内面摩耗。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の機 砂粒が微量。

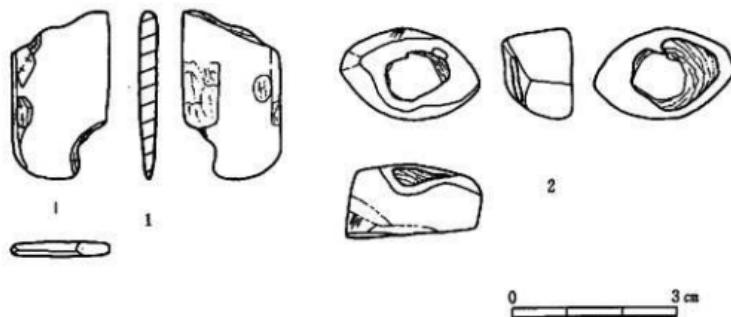


Fig.88 第19号豎穴住居 1. 石製装身具 2. 有孔石製品

Tab.70 第19号豎穴住居内出土の石器

捕獲番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器 種	分 類	石質	法 尺 (cm・g)			主 な 特 徴
					長さ	幅	厚さ	
Fig. 88 P.L. 47 1	19号 豎穴住居 目録	石 製 品	装 身 品	千枚岩	(2.7)	1.7	0.3	(17) 両面と両側面に研磨を施すが底底しない。 下端に刃を付ける。両刃。
" " 2	" 青層	有 孔	石 製 品	"	1.6	2.5	1.2	4.3 各面に研磨が施される。両面の研磨は鋸、 舟を打ち削りさせる。孔のサイズは0.7~ 1.5cmを測る。

Tab.71 土留め石積み遺構

位 置	地 区	第2地区(第2段丘西側縁辺および法面部)。 K・L・M-27~37グリッド							
	重 複	第17号竪穴住居より新しい。							
構 成	形 状	第2段丘の法面や縁辺に沿って、蛇行する様に南北に走る。							
	規 模	南北約35m、残存幅約1m。							
	高 さ	残存高約80cm。(第3段丘面から計測した場合)。							
造 成	石 材	人頭大・拳大の琉球石灰岩を主体とする。							
	手 法	第2段丘の縁辺や法面に露頭する石灰岩を利用しながら石積みする部分と法面を若干、掘り込んで石積みを施す箇所がある。野面積みである。							
出 土 遺 物	土 器 (口縁部の個数)	層 群	A	B	C	D	E	F	G
		I	1	1	5		32		
		II	5	1	5		28		
		III			1		2		
	石 器	石斧1個、磨石3個、砥石1個、転用品1個、用途不明1個、破片32点							
	骨 製 品	骨錐1個、ジュゴン製骨製品2個							
	貝 製 品	オニコブシ製ポイント1個、イモガイ科製品5個							
備 考		当時の地表面から10~30cm積みあげている(第2段丘側からの計測)。							

Tab.72 石積み遺構内と E F - 33・34・その他のグリッド出土の土器

標図番号 PL.番号 遺物番号	グリッド 及び層	形式	器種	形態等の特徴	裏面調整	備考		
						焼成	色調	記入物
Fig. 90 PL. 37 1	上 石 留 め 皿 唇	A群	深鉢	無文のかやウチバンク式。肥厚唇を丁寧に成形。	両面とも柔軟。	良く、 硬い。	茶褐色	石灰質の微 砂粒が多量。
〃 2	土 留 め 石 積 み 皿 唇	E群 II	"	無文口縁で山を持った。丁寧に成形。	両面剥離。	"	"	ほとんど見 えない。
〃 3	E-33 皿唇	B群 I	"	有文のかやウチバンク式。肥厚唇に叉状工具で点刺紋。	外面摩耗。 内面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質の細 砂粒が多量。
〃 4	E-33 皿唇	" II	"	字佐式十唇。	外面剥離。 内面ナデと 柔軟。	"	"	石灰岩の粗 粒・貝片が多量。
〃 5	E-33 皿唇	" III C口	"	無文の肥厚口縁。	両面ナデ。	"	茶褐色	石灰質の細 砂粒が少額。
〃 6	F-34 1唇	" III dイ	深鉢?	有文口縁。口唇と口縁に叉状工具で押捺刻文。	両面剥離。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質微砂 粒が少量。
〃 7	F-34 1唇	C群		有文剥離。汎縁を剥離に施す。アバタ状。	両面剥離。	堅穢	"	ほとんど見 えない。
〃 8	F-34 1唇	" III b	"	有文口縁。口唇に点刻文。口縁に 斜波模文。	両面剥離。	"	"	石灰質微砂 粒が少量。
〃 9	F-34 1唇	E群 I	"	カヤウチバンク式系統。無文。 肥厚唇や口縁の成形が確で破壊とな る。	両面ナデと 指拌。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質細砂 粒等が少額。
PL. 38 10	F-34 1唇	" III N 13	"	リボン状の突起を貼付ける無文口 縁。	外側ナデ。 内面ナデと 柔軟。	堅穢	"	"
〃 11	E-33 皿唇	" N 13	"	有文口縁に小さな山を貼付ける。 山の西側に位置の沈縫を施し、山 を強調する。	両面ナデ。	良く、 硬い。	"	微細な石英 を少量。
〃 12	F-34 1唇	G群		外耳状の把手。把手のみの資料。 焼成・混入物等からE群隸属。	外側ナデ。 内面破損。	"	黄褐色	石灰質の細 砂粒が少量。
〃 13	盛土	C群 II	深鉢	有文の字佐式。肥厚唇は叉状工 具で一部に押捺刻文、他は無文 (施文が途中で止まる)。	両面ナデ。	良く、 硬い。	茶褐色	"
〃 14	盛土	C群 I	深鉢?	無文の字佐式土器。アバタ状。	外側剥離。 内面ナデ。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質細砂 粒と石英が 少量。
〃 15	盛土	C群 I	深鉢	無文の字佐式十唇。アバタ状。	両面摩耗。	良く、 硬い。	黄褐色	石灰質細砂 粒と石英が 少量。
〃 16	盛土	D群	"	字佐式土器。肥厚唇は丸味を帯 びる。成形は丁寧。	両面ナデ。	堅穢	茶褐色	石灰質微砂 粒が多量。
〃 17	L-K 33 焼上③	E群 V 12	深鉢	無文の深鉢。口唇はほぼ同じ。口 縁部でくびれる。(口径14.4、高 さ14.5、器高15.5)	外側ナデと 窓割り。 内面ナデ。	"	"	石灰質の微 砂粒が少額。

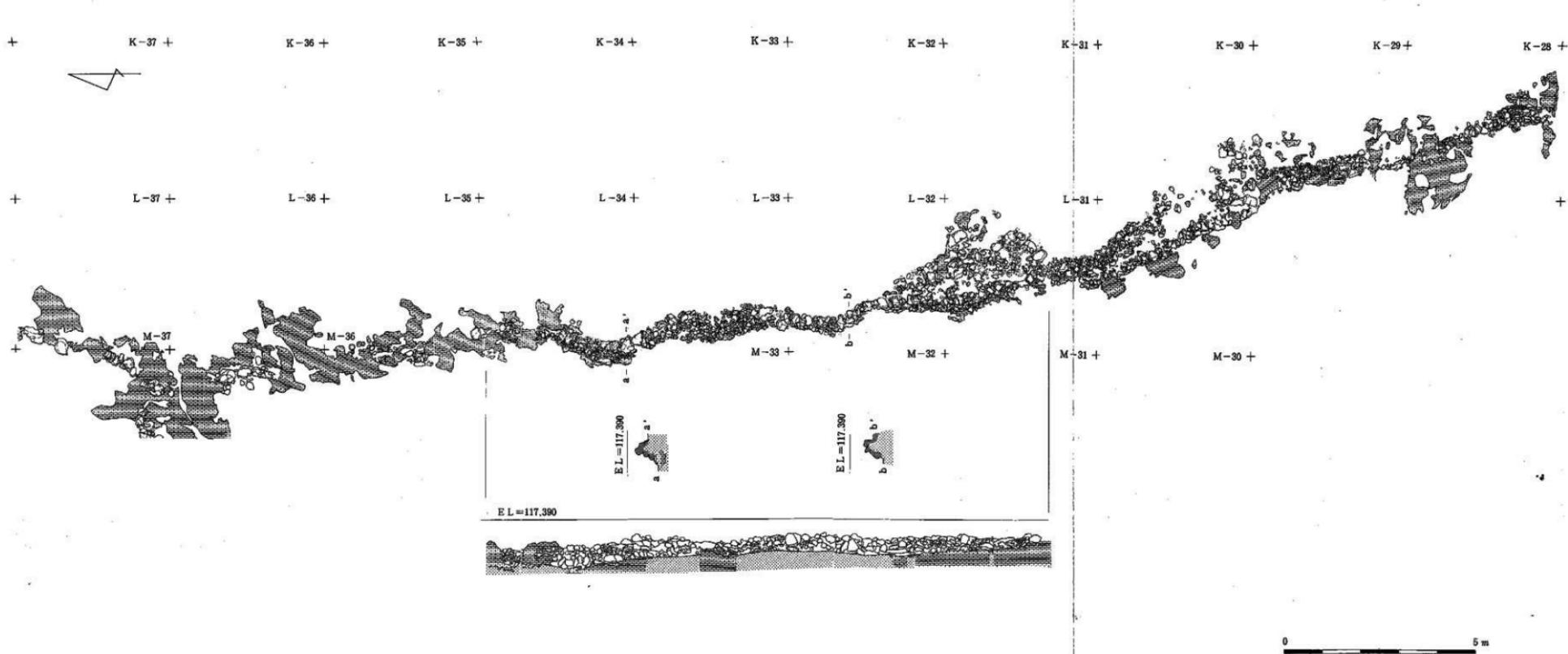


Fig.89 土留め石積み造構平面図および立面図



Fig.90 土留め石積み
E・F-33・34
その他のグリッド

1. A群土器 2. E群土器
3~6. B群土器 7・8. C群土器 9~11. E群土器 12. G群土器
13~15. C群土器 16. D群土器 17. E群土器

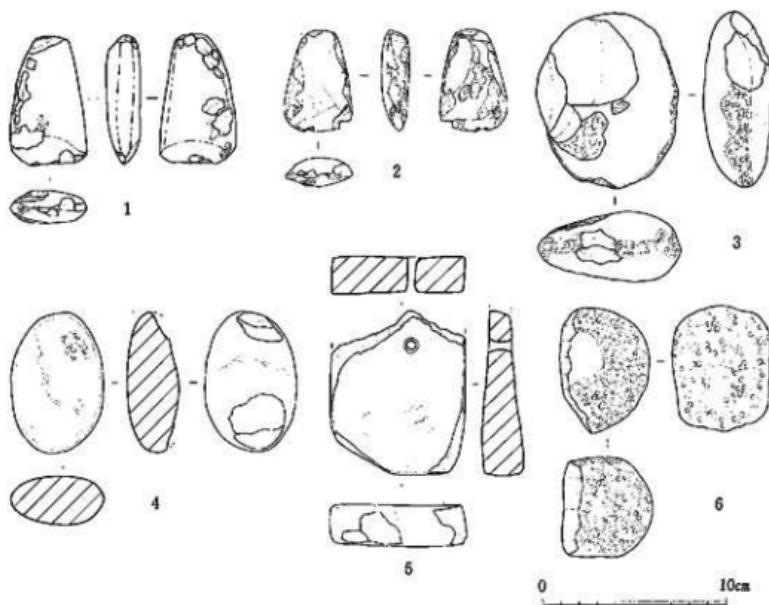


Fig.91 石積み造構内 1. 石斧 2. 転用品(なめし川石器) 3・4・6. 磨石 5. 砥石

Tab.73 「[留め石積み造構内出土]石器

標題番号 PL.番号 遺物番号	グリッド 及び層	器種	分類	石質	法量 (cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重さ	
Fig. 91 PL. 47 1	石積み 造構内 1層	石斧	I.B.S中 (1イ)a	変 質 岩	7.0	4.1	1.8	89	両刃石斧。研磨は両面・両側面に施すが、左側面は微底せず、剝離面が残る。敲打痕は上端面に残る。
" " 2	" 1層	転用品	I.301	變 質 岩	5.5	3.7	1.5	50	小形の石斧を皮なめし用等に転用。刃縁は 慣れ、小さな磨面となる。研磨は両面に集中。 敲打と剝離は上端面と両側面が主。
" " 3	" 1層	磨石	II.SA ロイ	砂 岩	9.5	7.7	3.6	(320)	表面は摩滅。両面及び両側、上・下端は 敲打痕が全面に残る。
" " 4	" 2層	"	II.SA 43	"	7.5	5.0	2.8	(139)	両面・両側面は摩滅し、磨面となる。 上・下端は敲打が慣れ、摩滅気味。
" " 5	" 1層	"	V(SA) ロ(2)	"	(6.8)	(4.9)	5.3	(269)	磨石の破片。両面は摩滅し、滑面となる。 敲打は上・下端面・右側面に集中。
" " 6	" 1層	砥石		石 英 質 岩 (?)	8.0	7.3	2.2	(211)	両面から穿孔する(直径5mm)。両面・両 側面は研ぎで摩滅する。近世の机用砥石 とみられる。

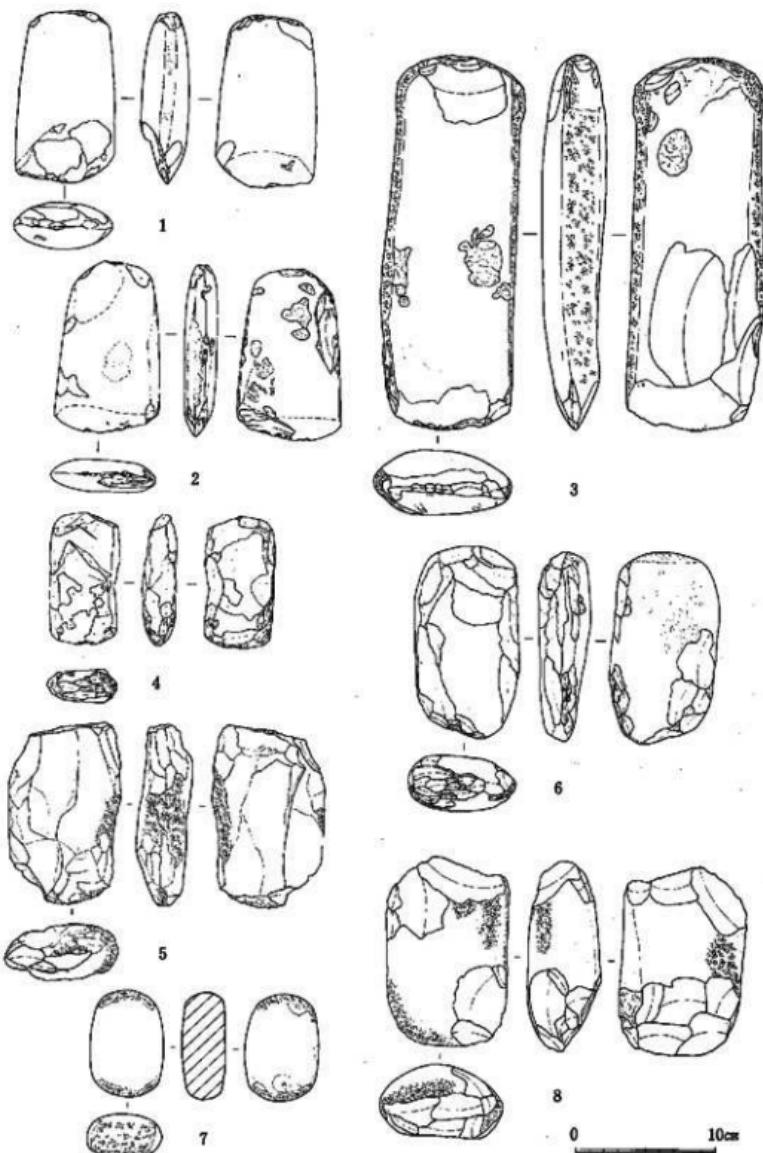


Fig.92 E・F-33・34 1~3.石斧 4~6.石斧未製品 7・8.軒用品(磨石)

Tab.74 E・F-33・34出土の石器

拓図番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び面	器種	分類	石質	法量(cm・g)			主な特徴
					長さ	幅	厚さ	
Fig. 92 P.L. 48 1	E-33 Ⅲ層	石斧	IBL大 (41a)	變遷 砾岩	(122)	7.1	3.4	(470) 内部の破損面に再度、削刃する。両面と左側面に研磨を施す。右側面は敲打が主である。上端面も同様。
" 2	" Ⅲ層 210a	"	IBL大	綠色 片岩	12.2	7.4	2.3	370 片刃的両刃。基本的に両面・両側面に研磨を施すが、敲打は左側面と上端面に集中する。研磨は徹底しない。
" 3	E-34 Ⅲ層 24a	"	ICLL特 24a	綠色 片岩	26.7	9.5	4.5	2,100 片刃的両刃。出土石斧の中で最も大きい。研磨は主に表面と裏面に集中。他は敲打を主体。両側の上端部分で抉りが入る。
" 4	F-34 Ⅰ層	石斧	未製品	變遷 砾岩	9.4	5.1	2.4	195 両面・両側面、上・下端に調整削離を施した後に両側、上・下端の縁を敲打で済す。研磨は両面の下部に施すが削刃されない。
" 5	" Ⅰ層	"	"	變遷 砾岩	12.7	8.0	3.5	578 荒削りの段階で、両面・両側面の剥離面は大きい。敲打は両側面の一部にのみ認められる。(手頃な河石を使用)。
" 6	E-33 Ⅲ層	"	"	"	13.8	7.5	3.6	645 手頃な河石を使用する為、両面に自然面が残る。調整削離と敲打は両側面と上・下端面に集中。
" 7	F-37 Ⅰ層	再利用 磨石	"	"	7.7	5.8	3.1	249 石斧の剥離部を磨石として再利用。研磨および軽減は両面と両側面に観察される。上・下端面は敲打。
" 8	E-33 Ⅰ層	磨石	"	"	13.5	8.8	5.3	(960) 石斧の剥離部を磨石として再利用。研磨および軽減は両面と両側面に観察される。下端面と両側面は敲打。裏面の剥離は使用時のもの。
Fig. 93 P.L. 4 9	F-34 Ⅰ層	磨石	ISA イ2	砂 岩	6.8	5.8	4.6	275 研磨は裏面に部分的に認められる。他は敲打面である。
" 10	" Ⅰ層	"	⑩MB 口(2)	砂 岩	(10.0)	8.9	6.5	(672) 両面は磨減。敲打は裏面の一部と両側面・下端面に集中。
" 11	" Ⅰ層	"	⑩MB 口(6)	砂 岩	(9.5)	7.8	5.3	(621) 左側面と上端面が破損。両面・右側面は滑沢を帯びる。下端面に敲打。
" 12	" Ⅰ層	"	II.C イ2	砂 岩	18.7	12.0	6.2	2,150 両面は摩滅。両側面、上・下端面は敲打が主体。
" 13	" Ⅰ層	"	II.C イ6	砂 岩	17.7	11.5	5.7	1,791 両面と右側面は摩滅し、滑潤となる。上・下端と左側面は敲打。

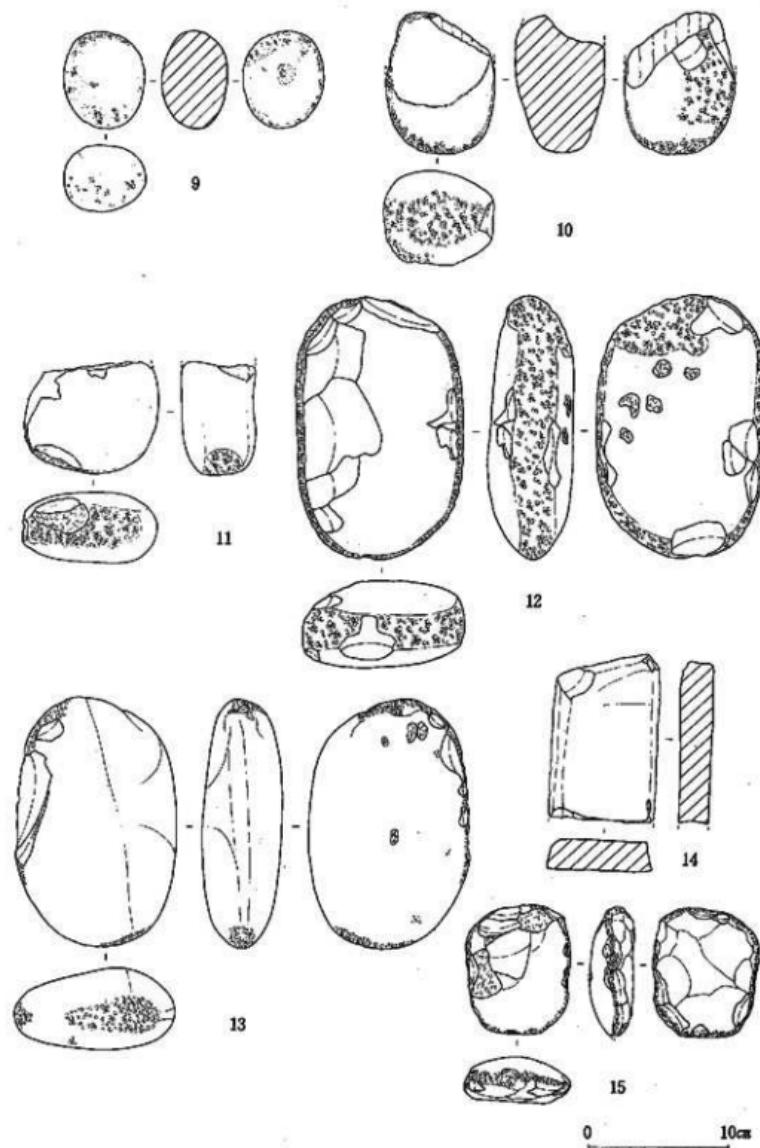


Fig.93 E · F - 33 · 34 9~13. 磨石 14. 石皿 15. 用途不明

種別番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び測 定用具	器種	分類	石質	法量(cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 93 P.L. 49 14	E-33 直透	石 砕		砂岩	(12.0)	(7.6)	(2.3)	(435)	石面破片。表面は摩滅し、滑面。加端面と左側面は敲打が現れる。裏面と右側面は研磨面。
" " 15	F-34 1透	用途不明		砂岩	9.2	7.5	3.1	299	表面の状況から磨石片を利用したものとみられる。縁辺に調整剤を加えた後に、練を敲打で削す。

Tab.75 その他のグリッド出上の石器

種別番号 P.L.番号 遺物番号	グリッド 及び測 定用具	器種	分類	石質	法量(cm・g)				主な特徴
					長さ	幅	厚さ	重量	
Fig. 94 P.L. 50 1	R-32 1透	石 砕	装飾品	ヒ スイ	1.8	0.7	0.45	4.3	ヒスイ要菅玉の木製品が縦方向に割れたものに孔(0.7mm)を両側から穿って装飾品として加工したもの。県外からの持ち込み。
" " 2	J-32 表採	石 砕		黒 曜 石	1.6	1.2	0.3	0.5	打製石器。石器の破片で、基準の両側を欠く。
" " 3	表採	再利用 調 理 石		青 色 千 枚 岩	5.2	6.1	3.5	(165)	石斧頭部片を磨石として再利用したものと考えられる。両面・両側面は研磨面で、下端部に敲打がみられる。
" " 4	K-21 1透	用途不明		千 枚 岩	5.9	2.4	2.5	62	瓶形様の石器。研磨は上半部の各面に集中。敲打は下半部と上端面施される。
" " 5	表採	石 砕		砂 岩	44.7	30.3	5.7	15,200	この状態で完形とみられる。鉛理面から剥離した石の両面に敲打を加える。表面中央は深み、滑らかな面となる。

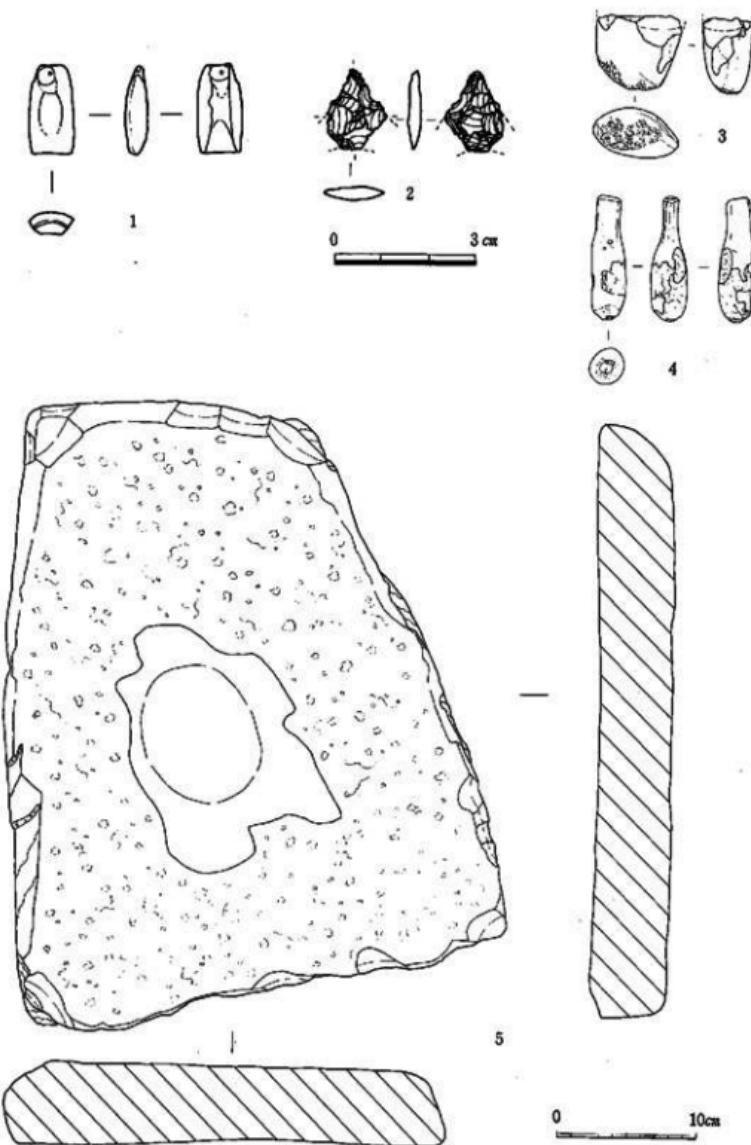


Fig.94 その他のグリッド 1. 有孔石製品 2. 石鎌 3. 転用品(磨石) 4. 用途不明 5. 石皿

E - F グリッド

骨製品

Fig.95の2点が得られた。

1はイノシシの右尺骨を用いた骨錐である。研磨のため光沢が顯著である。遠位端を片側から削り尖らしたもので先端部は僅かに欠損する。最大長98.3mm、最大幅27.0mmを測る。E-33第Ⅱ層の出土である。

2はジュゴンの肋骨の一端をポイント状に加工したものであるが、先端より2.5mmのところに溝状痕を施す。また、先端は大きく粗削りがみられる。破損品であるため用途は不明である。残存部の最大長27.8mm、最大幅11.0mm、厚さ9.1mmを測る。E-33グリッド第Ⅲ層の出土である。

貝製品

Fig.95-3はオニコブシの殻軸部をポイント状に尖らしたものである。また、体層部は穿孔あるいは殻の除去された可能性が強いが、風化しているため明瞭でない。F-30・33グリッド第Ⅲ層の出土である。

4はマグライトガイの殻頂部に研磨が認められる。また、貝の模様が顯著に残る。殻径24.6mm、殻長35.5mmを測る。E-34グリッド第Ⅲ層の出土である。

5はハナイモガイの殻頂及び肩部に研磨、殻口は約1cmほど打削が認められる。また、貝の模様が顯著に残る。殻径25mm、殻長33mmを測る。E-34グリッド第Ⅲ層の出土である。

6はタヤガサンミナシガイの肩部を丁寧に研磨したものである。形状から殻頂部にせんこうした可能性が強い。最大長39.0mm、最大幅15.0mmを測る。

その他の

骨製品

Fig.95-7はジュゴンの肋骨を板状に加工したもので両端とも破損し、横断面は半梢円を呈している。形状からヘラ状の製品と考えられる。残存部の最大長29.1mm、幅10.4mm、厚さ5.6mmを測る。28グリッド、1層の出土である。

貝製品

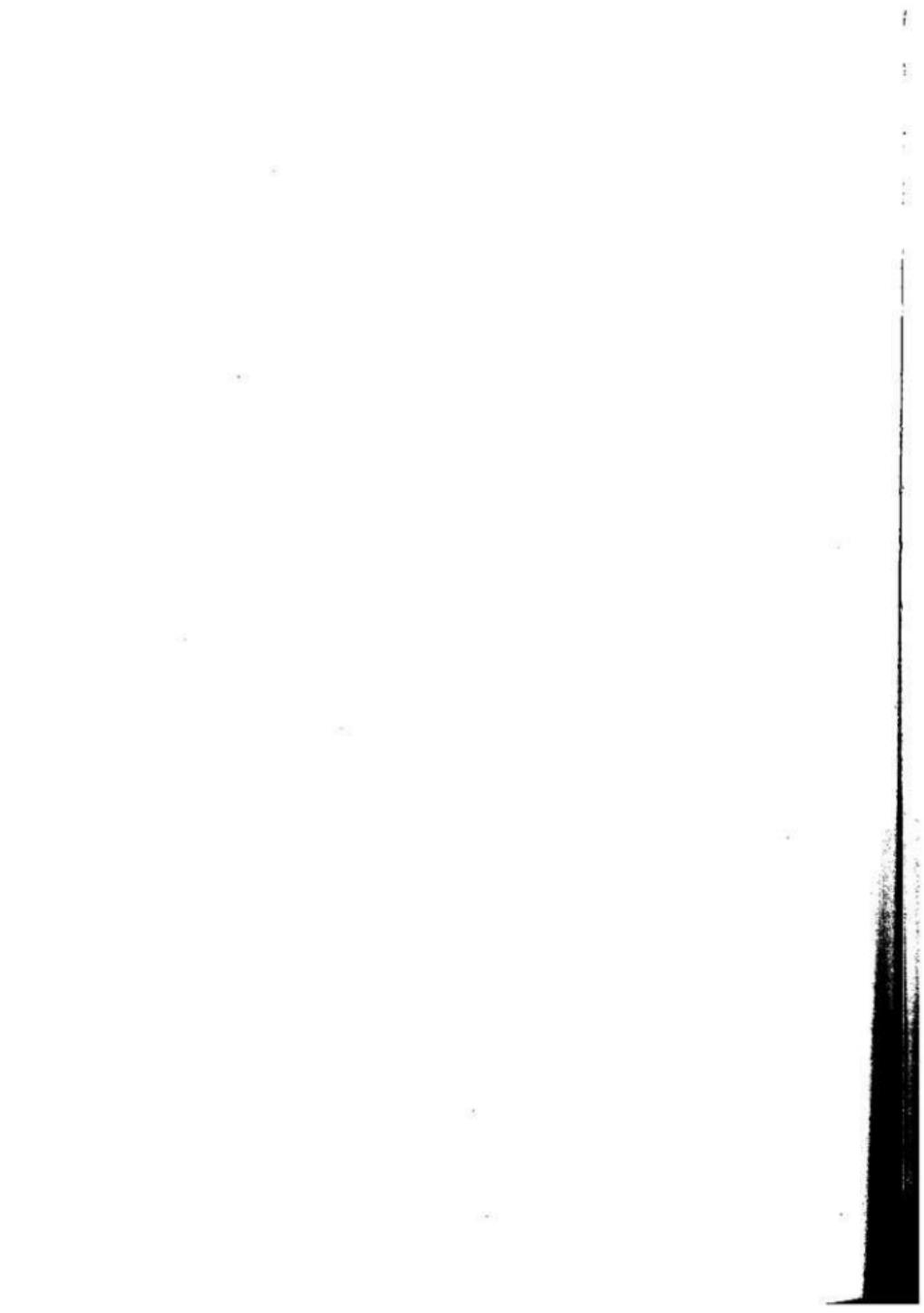
6はイモガイの体層を両面から研磨し、孔を開けたものである。殻軸も除去されている。完形品で殻径35.7mm、殻長54.7mm、孔径22.8mm×14.8mm、装飾品である。



Fig.95 E・F-33・34グリッド
その他のグリッド

1・2. 骨製品 3~6. 貝製品
7. 骨製品 8. 貝製品

第10号竪穴住居 9. 貝製品



第VI章 自然遺物

第1節 貝類遺存体

高嶺遺跡の一次・二次調査によって得られた貝類は、46科123種の腹足類（巻貝）と二枚貝類を中心としたものであり、他にヒザガガイ、コウイカ、ツノガイ、カニ、ゴカイ類等も若干見られた。表④には、本遺跡から出土した自然遺物として、貝類の他にも無脊椎動物も加えた。また、貝製品も含めた。これらの遺物のほとんどは、住居跡より得られたものである。

本遺跡から出土した貝類では、海産種は僅かであった。このような傾向は、沖縄貝塚時代中期（前V期）の特徴と一致する。そのため、遺跡形成がなされた時代に採集された貝類の組成を、完全に今回の発掘試料（住居跡を中心とするもの）が反映しているかどうかという検証が必要であろう。この検討は後日に譲ねるとして、ここでは発掘試料のみを対象とした。

1. 非食料残滓の貝類

貝製品等の残滓でないと考えたものを表⑤にまとめた。貝製品の素材と考えたもののうち、サツマビナ、ツノガイ類はシヌグ堂遺跡、古我地原^(甲1)貝塚等から類似資料が得られている。ゴカイ類の水管管は、ツノガイ類と同様な用途に用いられたものと思われる。

オカヤドカリ類の使用殻は、今回も認められたもののみを対象から除いた。また使用殻の多い第1号竪穴のⅠ層から得られたカヤノミカニモリ、ヨフバイモドキも、使用殻として取り扱った。高嶺遺跡のような海岸から離れた高台にまでアマオブネ類等の小型の貝殻を用いたオカヤドカリ類の侵入が認められた。このことは、かなり多くの遺跡において食料残滓としての貝殻がオカヤドカリ類によって攪乱を受けている可能性を示唆するものであろう。

化石貝類は2種2個体が出土した。両種とも印象化石であり、加工された跡がなく、周囲の球状石灰岩から流入してきたものと思われる。

本遺跡の主体貝として、オキナワヤマタニシが著しく多かった。本種には大小の2型が認められた。両者及び現生のものの殻径を表⑤に示した。小型個体は主にⅡ層から出土しており、現生個体とはほぼ同じ殻径を有していた。大型個体はⅢ層

表⑤ 高嶺遺跡出土の非食料残滓の貝類

1. 貝類
a. 山岸制度、利用形態により食料残滓から離いたもののオカヤドカリ類 ⁽¹⁾ トミカニモリ、ホシダガラ ⁽¹⁾ 、コマツガイモ ⁽¹⁾ ハマツガイ ⁽¹⁾ タカヤマタニシ ⁽¹⁾ 、シボイモ ⁽¹⁾ 中形イモ ⁽¹⁾ シケノコガイ ⁽¹⁾ 、サザガタモ ⁽¹⁾
b. 土岸制度、利用形態により食料残滓に含めたもののケコガニア ⁽¹⁾ スジガイ ⁽¹⁾ ホラガイ ⁽¹⁾ ナガツヅラ ⁽¹⁾ シレヅラ ⁽¹⁾ ミ ⁽¹⁾ カワラガイ ⁽¹⁾
c. 水陸 ⁽²⁾ 受けたものであるもの
ダ・ツクセンサンザニ ⁽¹⁾ 、イクラモ ⁽¹⁾ 、小眼イモガ ⁽¹⁾ 、タケノコガイ ⁽¹⁾
d. 水岸以外の死殻であるもの（歩孔貝、タマガイ類殻食肉性）
チャッセンサンザニ ⁽¹⁾ 、タケノコガイ ⁽¹⁾ 、リュウキューイモガ ⁽¹⁾ 、ツラミ ⁽¹⁾
e. 鳥糞等の廃棄物上に見られ、食料残滓から離いた標記メカニコ、クララガイ、ホクシングタマ・サツマビナ、ニシキンキバフデ、マダラモ ⁽¹⁾ 、サヤガタモ ⁽¹⁾ 、小形イモ、コモシニモ ⁽¹⁾ ベニタケ ⁽¹⁾ 、ツノガイの一箇化石 ⁽¹⁾ 、ゴカイ類の死殻
f. オカヤドカリ類の利用殻
コマツガイモ ⁽¹⁾ シボイモ ⁽¹⁾ シダガラ ⁽¹⁾ ホラオブズ ⁽¹⁾ リュウキューイモ ⁽¹⁾ 、ニシキンキバフデ ⁽¹⁾ 、オキナワヤマタニシ ⁽¹⁾
g. 土岸 ⁽²⁾ よりオカヤドカリ類の使用殻と人為的組合 ⁽¹⁾ リュウキューイマガガイ、カヤノミカニモリ、ヨフバイモドキ ⁽¹⁾
h. 化石
サラサバティ ⁽¹⁾ の一種、二枚貝の一種
i. その他
これらは、現生のものと考へて、食料残滓から離いた。その他の（現生のものと同サイズで、近縁の復元物と考へられる。）オキナワヤマタニシ（小型）

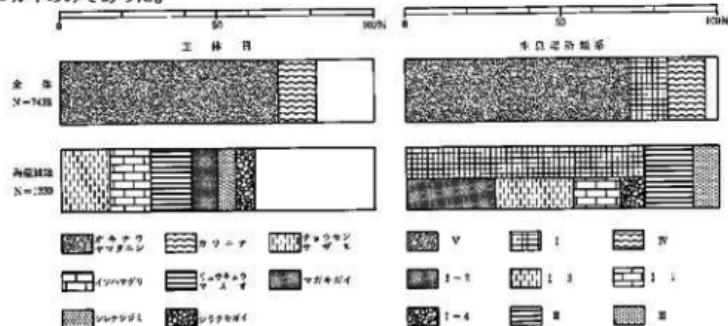
表⑤ オキナワヤマタニシの殻径の比較

区分	殻径 (平均土岸標準偏差)	種 群	調査数
現 生	18.12±0.89		9
小型個体	18.15±0.67		25
大型個体	22.26±1.16		50

を中心に出上した。このことから小型個体は、遺跡より新しい時代のものと考えたい。そのため表④に示したように食料残滓の解析から除いた。

2. 食料残滓貝類の特徴と貝類の生息場所

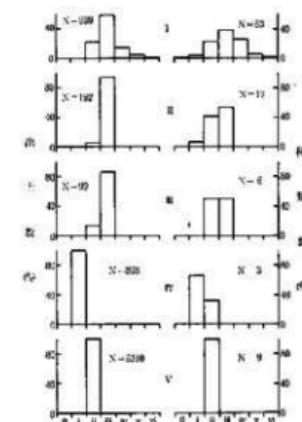
本遺跡の主貝類は前述のオキナワヤマタニシで全体の69.3%を占め、それにカワニナの12.0%が次いでいた（図⑥）。前者は陸域の、後者は淡水域の種である。海産種は少なく、全体の16.5%を占めていたに過ぎない。海産種では、チョウセンサザエ、イソハマグリ、リュウキュウマスオ、マガキガイ、シレナシジミ、シラクモガイ等が主貝類となっていた。この6種で全体の61.4%を占めており、主貝類の優占率が低かった。これらの海産の主貝類は、各生息場所類系ごとに分かれている傾向にある。同一類系としたものは、千瀬（I-3）のチョウセンサザエとシラクモガイのみであった。



図⑥ 高縄遺跡から出土した食料残滓貝類の主貝類構成および生息場所類系組成

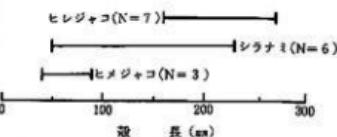
次に生息場所類系により、得られた貝類の採集場所組成を示した（図⑦）。主貝類に從い陸域が71.4%、外洋・サンゴ礁域が12.6%、淡水域12.1%となっていた。海産種のみでは、外洋・サンゴ礁域が3/4を占めており、内湾・転石域、河口干潟・マングローブ域と続いている。外洋・サンゴ礁域では、イノー内（28.8%）、千瀬（24.6%）の種が多くあった。

各生息場所ごとの特徴について、最大殻長を基準にまとめた（図⑧）。外洋・サンゴ礁域（I）では出土数、種類数とも他の海域より多く、iii(4-8cm)のサイズクラスを中心とした正規分布に近い分布をしていた。この海域のそれぞれの区分において、潮間帯中・下部（I-1）ではイソハマグリが著しく多く、この場所の貝類の87%を占めていた。イノー内（I-2）では、



図⑧ 各生息場所類系ごとの出土数および種類数のサイズ別頻度分布
サイズの表示は表1に従う。

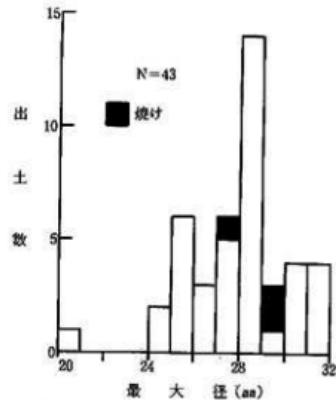
マガキガイが比較的多く（28%）、種類数も38種と最も多かった。この生息場所より得られるシャコガイ類の殻長範囲を図⑤に示した。いずれの種においても、殻頂部を有し前・後縁のいずれか一方が残存しているものから、その殻長を推定した値も含めてある。ヒメ



図⑤ シャコガイ類の殻長範囲

ジャコ、シラナミ、ヒレジャコの順に大きく、特にヒレジャコは比較的大型の個体であり、同程度のサイズと推測される破片も多かった。大型シャコガイの出土は、本遺跡周辺の同時期の遺跡の遺構内からも確認されている。^{(註3) (註4)}それゆえ、「謎石」的な意味を持ち、食料残滓とは異なるのかもしれない。

チョウセンサザエは、干瀬（I - 3）の主な採集目標だったようだ（63%）。本種のフタ最大径の分布は、28mm前後のものを中心とするものであった（図⑥）。他遺跡と比べて、比較的大型の個体を採集していたことがうかがえる。薩斜面（I - 4）では、サラサバティ・ギンタカハマが比較的多かった（両者合わせて61%）。



図⑥ チョウセンサザエのフタの最大径分布

内湾・転石域（II）では、サイズクラスⅠの個体が中心となり、Ⅱ（2 - 4cm）以下の小型種も多かった。これは、リュウキュウマスオが全体の85%を占める程度に出土したことによっていた。河口干瀬・マングローブ域（III）でも、出土数、種類数の分布様式はⅡと同様であった。ここでの主体貝はシレナシジミであり、75%となっていた。この類系で良く採集されるアラスジケマンも出土したが、その量は僅少であった。

淡水域（IV）は、ほとんどⅠ（1 - 2cm）の個体で占められていた。本遺跡の第2の主体貝であるカワニナが、この生息場所のほとんど全てを構成していた。陸域（V）は全てⅡのサイズクラスに入るるもののみであった。第1の主体貝であるオキナワヤマタニシがその97%を占めていた。他の種も林内・林縁部に生息するものが多く、住居跡を中心とした遺跡であり、周辺は開けた林であったことが示唆される。

3. 住居跡間の出土様式の比較

1) 出土量

図⑦に海産貝と陸産貝の出土量の関係を示した。両者の関係に基づき、住居跡は3つのグループに区分できると考えられた。第1は海産、陸産とも出土量の多い第6号と第10号竪穴、第2は海産貝の出土量が100以上と多いが陸産貝は600以下と比較的少ない第9号、第12号および第14号竪穴、第3は両者のいずれもが少ないその他の住居跡である。普通、古い住居跡が残滓の投棄の場となることが多い。本遺跡の土器形式により、古い住居跡と認められたのは、礫床1号と第1

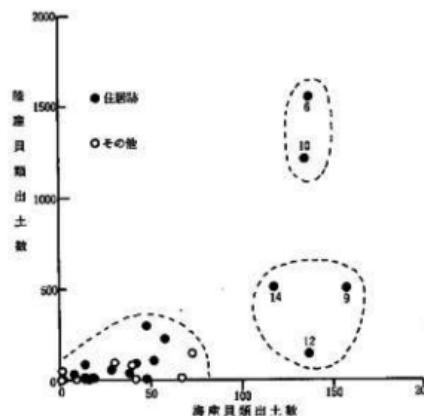


図6 住居ごとの海産貝類と陸産貝類の出土数の関係
図中の番号は住居跡番号を示す。

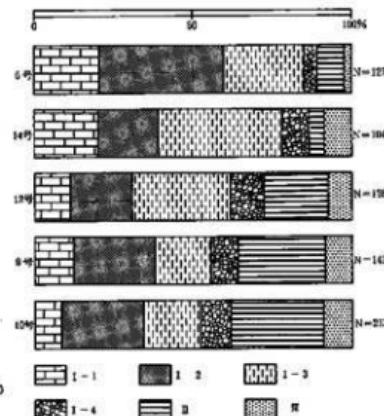


図7 住居時間の出土海産貝類の生息場所類系の比較

号、第2号、第3号、第6号、第15号および第16号の各竪穴である。図6に示した第1と第2のグループと古い住居跡は、第6号竪穴を除いて対応していない。むしろ、海産貝は新しい住居跡に多いという結果となった。これらの要因や各グループの内容を検討することは、今後の課題といえよう。

2) 海産貝類の採集場所

また、海産貝の多く出土した5つの住居跡（第1、第2のグループ）ごとに、出土貝類の生息場所類系を比較した。これは、住居跡での採集場所に相違があるか否かを明らかにしようとしたものである。その結果が図7である。

第6号、第14号竪穴のように外洋・サンゴ礁域のものも出土数が85%を越えるものや、第9号、第10号竪穴のように内湾や河口・潟の種が40%近く存在するものが認められた。第1グループに属する第6号と第10号で生息場所が大きく異なっている。このような相違は、投棄集團の差異を表わすものかもしれない。

3) 出土貝類の集中性

次に主体貝の各住居跡間での集中性を、森下のI-8指数を用いて検討した。この指数は、その値が1より小さければ一様な分布を示し、1より大きければ集中した分布を示す。対象とした各生息場所の主体貝では、いずれも1以上の値を取り、集中して分布することが示された。得られた集中度は、2前後のイソハマグリ、マガキガイ、チョウセンサザエ、ギンタカハマガイ、サラサバティおよびシレナシジミの群と4前後のリュウキュウマスオ、カワニナおよびオキナワヤマタニシに分けられる。

表6 主体貝の住居跡ごとの集中性

種名	生息場所	集中度
イソハマグリ	I-1	2.001
マガキガイ	I-2	2.451
チョウセンサザエ	I-3	2.053
ギンタカハマガイ	I-4	1.770
リュウキュウマスオガイ	II	4.345
シレナシジミ	III	2.370
カラニナ	IV	4.274
オキナワヤマタニシ(大)	V	3.875

※ 森下のI-8指数

後者がより高い集中性を表わしている。

この結果より、リュウキュウマスオを除く海産の主体貝は比較的コンスタントに採集されたことが考えられる。一方、高い集中度を示す種は一度に多量に採集されるか、また別の要因がはたらいたことがうかがえる。

また、ある住居跡に集中する種としてマドモチウミニナとキベウミニナが挙げられる。前種が5個のうち4個が、後種が6個のうち5個が第13号竪穴より出土している。これらはマングローブに生息する種であり、現在の地形から齊城島に生息可能な場所はないと考えられる。両種は、対岸の古我地原貝塚から夥しい量が出土している。^(図2)このように両種を採集する場合には、通常の島の周辺での採集と異なった選出の採集方法が行われていた可能性も考えられる。

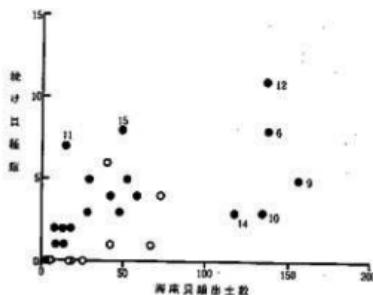
以上、住居跡間の比較を行って来たが、貝殻が投棄される住居跡がある単一集団により形成されたものであるということがこのような解析の大前提である。つまり、ある集団が日々投棄する住居跡を変えていったとしたならば、図⑦に示した比較は意味を持たなくなる。今回は大前跡を受け入れるとして考えた。今後大前提の検討を他の遺物などから行い、各集団の特徴が浮上がることを期待したい。

4. 焼け跡を有する貝類

今回は、焼け跡の有無も上出した全ての貝類についてチェックを行った。その結果、38種で焼け跡が確認された。これは、出土種数の約30%に相当する。詳細な検討を加えることができなかつたので、その概略を記すことにとどめる。

焼け跡を有する貝類の多い住居跡は、第12号、第6号、第15号、第11号竪穴の順で、11種から7種の間であった。これらは第15号を除いて、海産出土量の多い住居跡であった。そこで、焼け貝の種数と海産貝類の出土数の関係を見た(図⑧)。およその傾向として、出土数が増加するに従い焼け貝の種数も増加している。ただし、出土数が少ないにもかかわらず焼け貝種数の多い第1号、第11号、第15号のグループと、逆のパターンを持つ第9号、第10号、第14号の各竪穴住居跡のグループが識別されるかもしれない。前者は土器形式により古いと考えられる住居跡を含んでおり、なんらかの関係を持つことも予測させる。

焼け跡を有する貝の種では、サラサバティ、ヒレジャコ、イソハマグリ、チョウセンザザエ、カクニナ、クモガイ、シラクモガイに焼け跡が多く見られた。これらの半分は、本遺跡の主体貝であり、出土数が多いことに起因しているのかもしれない。ただ最も多かったオキナワヤマタニ



図⑧ 海産貝類の出土数と焼け貝種数の関係

シは、第6号竪穴で1個体のみ焼け跡を有するものが見られただけであった。

貝類の焼け跡に関しては、奄美の宇宿港遺跡から報告がある。^(註5)この遺跡では、包含層中に焼けた貝殻が見られただけで、炉跡や灰層は確認されていない。焼けた貝類は中・大型の巻貝が多いという結果となっている。その種類は、シラクモガイ、ミカドミナシ、チョウセンサザエ、イソハマグリ等であり、高嶺遺跡での焼けの多い種と似た傾向にある。時期も場所も異なるが、同じような食様式を行っていた可能性も考えられる。しかし、イソハマグリのように、食するのに直接焼く必要性がないと思われる種も見られ、焼け跡が調理の結果かどうかかも再考せねばならないのかもしれない。

5. 陸産貝類の食用の可能性

今まで述べてきたように、本遺跡では約70%が陸産貝のオキナワヤマタニシで占められていた。本種の食料残滓の可否は、従来から論じられている。本遺跡では住居跡から集中して出土した(図⑩)。住居跡の新・旧関係と本種の出土量は、海産種と同じく、一致しなかった。

また、本種の成長段階を第10号竪穴の結果により示すと、1198個体のうち1188個体が成貝であった。このような成貝の多い傾向は、報告された知場塚原遺跡や宇佐浜B貝塚と同様^(註6)な結果である。これは食用とする場合の成貝の選択的採集も考えられるが、本種の成貝が幼貝や他の陸産貝に比べて厚い殻を有することから堆積中に破損、溶解していくことに起因することも考えられる。池原らは、沖縄本島の石灰岩二次林で本種の個体数の多いことを報告している。生息数の多いことも、出土数が多くなる原因の一つではないだろうか。では住居跡へ集中する原因は何であろうか。住居跡が残滓投棄の場となり、そこをオキナワヤマタニシが微生息場所として利用した結果ではないかと考えられる。この場所への集中は、本種の食性が落葉のみであることから食性に起因するものではなく、各種の残滓が作り出す空間への選択性ではないかと想像される。

知場塚原遺跡では、1つの住居跡に本種が集中しており、他の要因も考え合わせて食用の可能性が低いと考えられている。本遺跡でも集中する傾向が強いこと(表⑩)や、確実に食用となつた海産種と比較して、あまりにも膨大な個体貝が出土していることから食用になったとは考えにくいのではないだろうか。いずれにせよ、本種の食料残滓の可否の検討は今後も各方法により進めなければならないと思われる。

6.まとめ

沖縄貝塚時代中期(前Ⅴ期)に属する本遺跡の食料残滓は住居跡を中心に出土し、その大部分は陸・淡水貝類であった。海産種の出土は僅少であり、その主体貝はチョウセンサザエ、イソハマグリ、リュウキュウマスオ、マガキガイ等であった。このような海・陸産貝の出土比率、主体貝の構成は、隣接したばかり同時期の集落遺跡であるシヌグ堂遺跡^(註7)とはほぼ同様であった。住居跡ごとの貝類の組成等を検討した結果、上器型式の古い住居跡に残滓が集中する傾向がなかったこと、異なる海産貝類の組成を示す住居跡のある可能性、通常の採集と異なる遠出の採集のあったと思われること等が推測された。また、焼け跡を有する貝や陸産貝の食用の可否についても検討を行った。

註

- (註1)、『シヌグ堂遺跡』沖縄県教育委員会 1985年
- (註2)、『石川市古我地原貝塚』沖縄県教育委員会 1987年
- (註3)、『地荒原遺跡・苦増原遺跡』具志川市教育委員会 1979年
- (註4)、『田場小学校南方遺跡』具志川市教育委員会 1984年
- (註5)、『宇宿港遺跡』熊本大学文学部考古学研究室 1981年
- (註6)、『知場塚原遺跡』本部町教育委員会 1988年
- (註7)、『宇佐浜遺跡』沖縄県教育委員会 1989年
- (註8)、『Preliminary study on the forest floor macrofauna in the Ryuku Islands』
Ikehara et al., Ecol. Stu. Nat.Cons. Ryukyu Isl. III 1977年

表1の説明

1. 最少個体数の算出は下記のように行った。殻頂を有する個体と殻頂を欠損しているが全体の8割以上残存している個体を1個体とした。表中の二枚貝の／は、左殻／右殻を示す。二枚貝は各グリットごとに左右それぞれの総数のうち、多い方を個体数とした。リュウテン科では、殻とフタのうち多い方を個体数とした。殻頂部を有さない破片のみ出土した種類は1個体とした。

2. 表中の略号は以下のとおりである。

A：製品、C：色彩の残っているもの、D：死殻、E：水磨を受けているもの、・：殻頂部を有さない破片、ヤ：焼け貝個体数、※：出土個体の他に焼け破片が見られたもの、●：焼け破片のみ出土。

3. サイズは以下の表三による。

i : 1 - 2 cm、ii : 2 - 4 cm、iii : 4 - 8 cm、iv : 8 - 16 cm、v : 16 - 32 cm、vi : 32 - 64 cm。

4. 生息場所は以下の類系によって表わした。

I: 外洋・サンゴ礁域	0: 潮間帯上部 (I ではノッチ、II ではマングローブ)	a: 岩盤
II: 内湾・転石域	1: 潮間帯中・下部	b: 転石
III: 河口干潟・マングローブ域	2: 亜潮間帯上縁部 (イノー内)	c: 泥、砂、礁底
	3: 下潮 (I にのみ適用)	d: マングローブ植物上
	4: 集斜面	e: 河川疊底
IV: 淡水域	5: 止水	
	6: 流水	
V: 陸域	7: 林内	
	8: 林内・林縁部	
	9: 林縁部	
	10: 海浜部	
VII: その他	11: 打ち上げ	
	12: 化石	

表1 高嶺遺跡貝類の出土状況

第2節 脊椎動物遺骸

高嶺遺跡出土の脊椎動物遺存体

金子 浩昌

高嶺遺跡は沖縄本島の南、与那城村、宮城島にあり、かつて調査されたことのあるシヌグ堂遺跡に隣接し、時期的にもこれに近い沖縄貝塚時代中期、縄文時代晩期に相当する。詳しくはシヌグ堂遺跡よりも若干古くなるようであるが、いずれにしても性格的には似た立地の条件、文化ということになろう。

本遺跡では多くの住居地を含む遺構が発掘され、それぞれの住居内、遺構内覆土に動物遺存体が検出されている。それらの詳細な分析は、動物遺体の廃棄、埋存の過程を知る手掛りとなるものであるが、とりあえず、ここではその数量を詳しく報告しておきたいと思う。本遺跡の資料を調査するに当っては、その発掘の段階から金武正紀、金城亀信氏等に大変お世話になり、種々教示も得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

それぞれの動物遺体についての概要を述べる。

1. 軟骨魚綱

・メジロザメ科

鋸歯をもつ歯の断片が出上している。

・エイ類

尾棘片が1点出上している。幅が12.0mm以上になるものであるらしい。

Tab.76 エイ

グリッド	層位	部位	個数
10号	Ⅲ	尾棘	1

2. 硬骨魚綱

・ウナギ属

検出は少ない。歯骨は全長が50.0mmに達するような大型の標本がある。

・ウツボ属

やや多い出土である。大・小の個体が検出されている。

・カマス属

歯骨1点のみの検出である。検出例の少ない魚種である。カマスは海水面表層を活発に動く魚であるために、中・底棲魚を主として魚獲する方法であった当時は捕れなかったのであろう。

・スズキ科

アラ……出土量は少ない。

・ハタ類……やや多い魚種である。

・フエダイ科……本種もまた少ない魚である。

・クロダイ……稀である。

・ヨコシマクロダイ……稀である。

・フエフキダイ

多くの骨が検出されている。前上顎骨、歯骨のみに限った集計であるが、多い例で一つの住居地内覆土から10数個体分の出土があった。前上顎骨の全長の別掲の柱状グラフに示したが、前上顎骨全長32~34mmに高い表示がみられる。この程度の大きさは体長にして380mmになる。体長の分布に二つの山のあることが表示されているが、幾つかの遺跡との比較から考えてみたい。

・ベラ科

前上顎骨、歯骨、上下の咽頭骨で示したが、出土量の多い魚種である。少くとも4種類位は含まれており、そのうちコブダイ型のものが最も多く、この種のベラは現在ではあまり多くないが、かつてはかなりの個体が棲息していたのであろう。また最も大型になるようである。

・ブダイ科

ブダイ科の各種を総計するとその数は最も多く、ナンヨウブダイ、ナガブダイがほぼ同数、イロブダイがやや少ない。ハゲブダイ、アオブダイ属はごく少数である。このような出土は当時の、この近海でのブダイの生態状況を反映しているものであろうが、現代のそれにも共通する点があるようである。

ブダイ類の咽頭骨の計測をみると、ナンヨウブダイに大小の個体が含まれ、またナンヨウブダイ、ナガブダイ、イロブダイとともにほぼ同じような大きさのものが含まれる。イロブダイに比較的大きい個体の多いのも特徴的である。これらに比べるとハゲブダイのように小さい個体が多く、大きい個体は少ない。

3. 猪虫綱

・アオウミガメ

個体長を推定できる主要な四肢骨の出土はやはり多くない。ほぼシヌグ堂遺跡の場合と同じ程度である。しかし、その他の部分の骨の出土はシヌグ堂を上回るようである。本遺跡での特徴的な在り方として注目される。

・陸ガメ類

ウミガメ類に比べて極めて少ない。食料として捕られたものか問題ものくるかと思う。

出土した脊椎動物遺存体種別表

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATA
I 軟骨魚綱	I Class Chondrichthyes
1. サメ目	1. Order Lamniformes
科・属不明	Fam. et gen. indet.
II 硬骨魚綱	II Class Osteichthyes
1. ユナギ目	1. Order Anguilliformes
ユナギ属の一種	Anguillasp.
ウツボ科	Family Muraenidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
2. ボラ目	2. Order Mugiliformes
カマス科	Family Sphyraenidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
3. スズキ目	3. Order Perciformes
フエダイ科	Family Lutjanidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
タイ科	Family Sparidae
クロダイ属の一種	Acanthopagrus sp.
フエキダイ科	Family Lethrinidae
ヨコシマクロダイ	Monotaxis grandoculis
ベラ科	Family Labidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
ブダイ科	Family Scaridae
ナガブダイ	Scarops rubrouiolaceus
イロブダイ	Bolbometopon bicolor
アオブダイ属	Ypsiscarus sp.
ナンヨウブダイ	Scarus gibbus
ハゲブダイ	Scarus Sordidus
4. フグ目	4. Order Tetraodontiformes
マフグ科	Family Tetraodontidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.

ハリセンボン科
イシガキフグ

Family Diodontidae
Chilomycterus affinis

III 蜥虫綱

1. カメ目
　　リクガメ科
　　属・種不明
　　ウミガメ科
　　アオウミガメ
2. 有鱗目(ヘビ亜目)
　　属・種不明

III Class Reptilia

1. Order Chelonia
Family Testudinidae
Gen. et sp. indet.
2. Order Ophidia
Fam. et sp.indet.

IV 鳥綱

1. ミズナギドリ目
　　ミズナギ
　　属・種不明
2. ワシタカ目
　　ワシタカ科
　　ノスリ
3. ツル目
　　クイナ科
　　属・種不明
4. スズメ目
　　カラス科
　　カラス属の一種

IV Class Aves

1. Order Procellariformes
Family Procellariidae
Gen. et sp. indet.
2. Order Falconiformes
Family Accipitridae
Buteo buteo
3. Order Gruiformes
Family Rallidae
Gen. et sp. indet.
4. Order Passeriformes
Family Corvidae
Corvus sp.

V 哺乳綱

1. 翼手目
　　オオコウモリ科
　　オオコウモリ
2. 齧歯目
　　ネズミ科
　　ケナガネズミ

V Class Mammalia

1. Order Chiroptera
Family Pteropodidae
Pteropus dasymallus
2. Order Rodentia
Family Muridae
Diplothrix legatus

3. クジラ目	3. Order Cetacea
科・属不明	Fam. et gen.indet.
4. 食肉目	4. Order Carnivora
イヌ科	Family Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
5. 海牛目	5. Order Sirennia
ジュゴン科	Family Dugongidae
ジュゴン	<i>Dugong dugong</i>
6. 偶蹄目	6. Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
リュウキュウイノシシ	<i>Sus leucomystax riukiuanus</i>

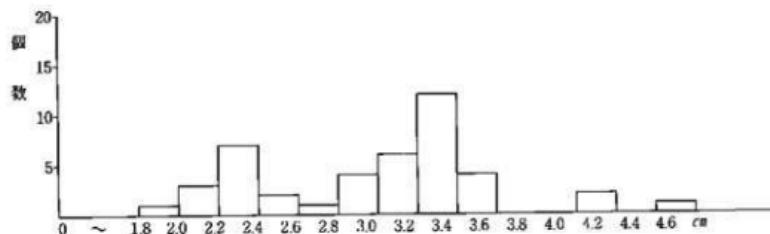
Tab.77 魚骨

凡例 右前上頸骨 左前上頸骨
右下頸骨 左下頸骨 右上咽頭骨 左上咽頭骨
下咽頭骨

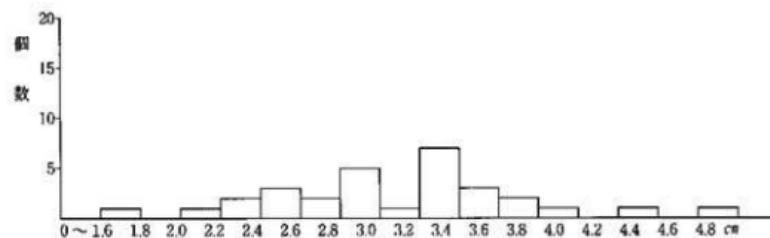
目・科名	種名・部位	順序・遺構		1号		2号		3号		4号		5号											
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	不明	I	II	III	IV	不明	I	II	III	V
ウナギ目	ウナギ属 R+L																						
ウツボ科	ウツボ属 R+L																						
カマス科	カマス属 R+L																						
スズキ科	ハタアラタタイプ R+L																						
	ハタ A R+L																						
	ハタ類 B R+L																						
	小計																						
エイ科	フエダイ属 R+L																						
	クロダイ属 R <perp>L</perp>																						
エホモダ科	ヨコシマクロダイ属 R+L																						
	エフキ木 明 R+L																						
	小計																						
ベラ科	ベラ属 R+L																						
	A 下咽																						
	Cコブダイ属			1	2																		
	D R <perp>L</perp>																						
キノコ科	その他 R <perp>L</perp>																						
	小計																						
ブダイ科	チンヨウブダイ属 R+L																						
	ブダイ B R+L																						
	ブダイ (種名) R+L																						
	ブダイ (不明) R+L																						
	チンヨウボウブダイ属 R <perp>L</perp>																						
	チンヨウボウブダイ (明) R <perp>L</perp>																						
	チンヨウボウブダイ (動) R <perp>L</perp>																						
	ハゲブダイ属 R <perp>L</perp>																						
	小計	1	2	1	1																		
フグ目	フグ属 R+L																						
	上・下咽																						
	上・下咽 不明																						
	小計	1	2	1	1																		
	歯																						
種不明	R+L																						
総合	計	2	5	4	2	1	2	8	2	1	4	4	5	1	2	3				1	3	9	1
破片	ハリセンボン																						
	重量	705g	2	4	8	2																	
	椎	147.5g																					

※ 細片ナンバーリングなし……217g。

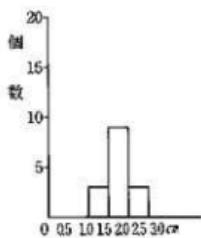
順序・遺構		12号	13号	14号	15号	16号	17号	18号	19号
目・科名	種名・部位	II	III	IV	V	VI	II	III	IV
ウナギ科	ウナギ属 R+L								
ウナギ目	ウツボ科 R+L 鰓骨			1				1	
	小計		1					1	
カクレクジ科	カマス R+L								
ハタアラタイブ	R+L	1	1					1	
スズキ科	ハタ R+L	1	1					1	
	ハタ類B R+L	1							
	小計	4	2				1		1
フエダイ科	フエダイ R+L	1							
クロダイ科	クロダイ R-L							1	
ヨコシマクロダイ	R+L							1	
フエフキ科	フエフキ R+L	1						1	
	小計	2					1		1
ベラ科	ベラ R+L	1	1					1	
ベラ属	A 下咽	3	2						
スズラニ科	Cコブダイ属	2		1	5	1	1	1	
	D R-L		1					1	
キジ科	その他 R+L							1	
	備	2							
	小計	14	4	1	5	1	1	1	1
テンヨウダラ科	テンヨウダラ R+L	1	1	1	1	1	1	1	1
ブダイ科	ブダイ B R+L	1	1	1	1	1	1	1	1
ブダイ属	(ブダイ) R-L	1							
(不明)	R+L	1							
ナシヨウボウ科	ナシヨウボウ R-L	1	1	1	1	1	1	1	1
イシモチ科	イシモチ R+L		1	1	1	1	1	1	1
オサムラサキ科	オサムラサキ R-L	1	1	1	1	1	1	1	1
ハゲブダイ科	ハゲブダイ R+L	1	1	1	1	1	1	1	1
	小計	139	28	14	11	8	36	11	37
フグ科	フグ R-L								
フグ目	上ド	1					1		1
	下ド	1					2		1
	小計	3					12		111
	備	1							
種 不 明	R+L								
総 合 計	166	215	291	11	591	122	541	181	
破片	ハリヤンボン 種								
	破 片 重量	705g	1041	311	1110	111	7	151	135
	脊 椎 重量	147.5g	26	9	1	15	22	2	2



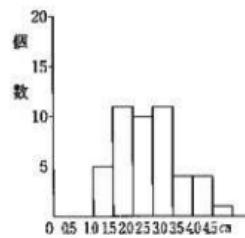
Tab.78 ハマフエフキ L



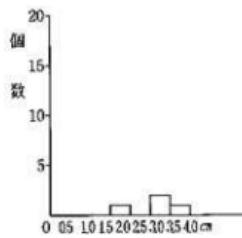
Tab.79 ハマフエフキ R



Tab.80 ベラ A 下咽頭骨



Tab.81 ベラ C 下咽頭骨



Tab.82 ベラ D 下咽頭骨

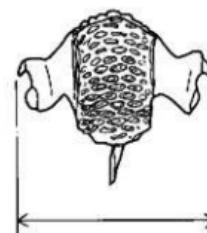
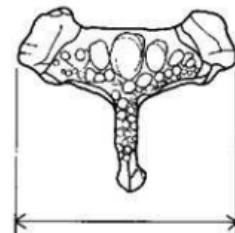
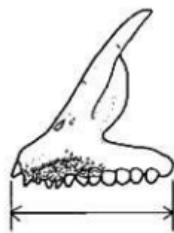
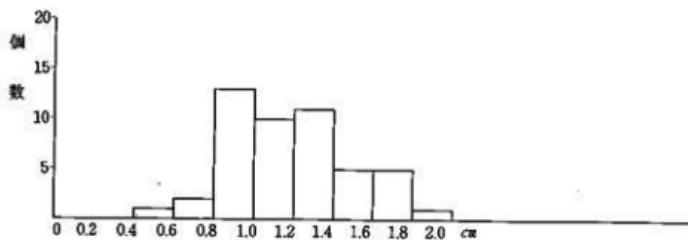
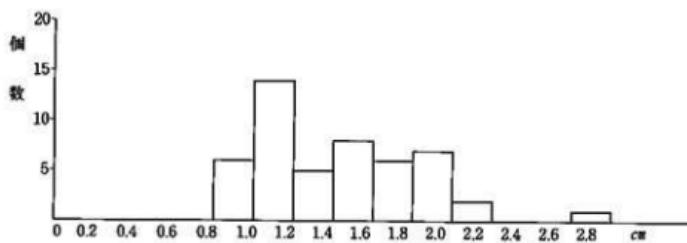


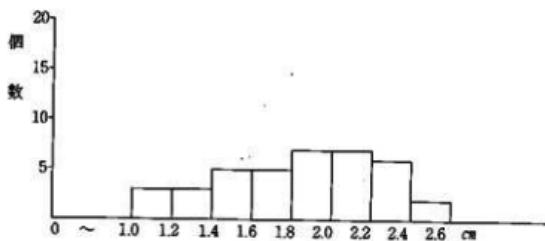
Fig.96 魚骨計測部位（模式図）



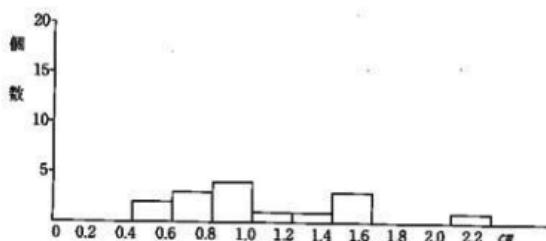
Tab.83 ナンヨウブダイ下咽



Tab.84 ナガブダイ下咽



Tab.85 イロブダイ下咽



Tab.86 ハゲブダイ? 下咽

Tab.87 アオウミガメ

右/左・() 左右不明

科名	部位	6号			10号			小計
		I	II	III	I	II	III	
鼻骨								
頭頂骨			1	(鼻～頭頂骨)頭蓋部片			1	
上腕骨	/1	1/			1/			(pro)2/1
尺骨小		(pro)			(pro)			
縁甲板								
腹甲板								
破片								2/1·1

Tab.88 陸ガメ

グリッド	層位	部 位	個数
13号	III	腹甲板	1
15号	II	内腹板	1
合計			2

4. 哺乳類

・オオコウモリ

確認できたのは僅かに1点の上腕骨片であったが、もともとこの種の歯骨は多くない。積極的な捕獲の対象外にあったのであろうと思われるが、それについても比較的古い時期に多いということはいえそうである。

Tab.89 オオコウモリ

グリッド	層位	部 位	個 数
4号	III	左上腕骨遠位端	1

・ケナガネズミ

これも僅かに1点の骨を検出できたのみであるが、シヌグ堂遺跡でも下顎骨1点が検出されている。

Tab.90 ケナガネズミ

グリッド	層位	部 位	個 数
6号	III	下顎骨	1

。クジラ類

ゴンドウクジラ程の大きさの椎体が1個検出されている。

Tab.91 クジラ

グリッド	層位	部位	個数
19号	炉跡	腰椎	1

。ジュゴン

肋骨を主とする出土であるが、3点の椎体とその棘突起があり、さらに1点下顎骨片があった。下顎骨の出土は珍しい例であろう。ほぼ同程度の出土がシヌグ堂でも知られている。

。リュウキュウイノシシ

多くの骨格、歯牙を出土している。それぞれの住居地の覆土中に埋存することが多かったようである。距骨、踵骨、指、趾骨を除いて骨齧食のためにこわされている骨が多くたが、極めて少數であるが図版に示すようなほぼ完存する骨があった。四肢骨の割りに頸骨、歯牙の少ないことが目立ったが、これは顎骨の破損標本はある程度あるので、頸骨が破損し、遊離した歯が充分に回収されていないことによるのかも知れない。歯牙の少ないことはシヌグ堂遺跡でも指摘されたことがあった。

捕獲されているイノシシは別にあげた歯牙の咬耗調査から、0才の個体1 (dm 4, Rh = 1)、1才の個体1 (M, Lf = 1)、2才の個体2 (dm, Lm = 2)、3才の個体1 (M, Lh = 1, M, Lf = 1)、計5個体が秋～冬の捕獲が推測される。推定される最小個体数は11 (踵骨による) であるので、半数が季節推定されたに留まる。いずれにしても0才から3才までの間の個体である。(f・h・mこれは下顎歯の咬耗記号、P213参照)。

Tab.92 ウミガメ出土状況

出土地点	縹1	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号
部位	II 0.5	IV	III	IV	III	IV	III	IV	V	IV
鼻 頭骨										
頭 頂骨										
後眼窓骨										
下顎骨										
頭頂骨片								1		
上腕骨										
腕						1/				
尺 骨							3			
大腿骨									1	
脛 骨										1/
鳥 II 骨										
前鳥 I 骨片						2				
末 骨			1			3 1				
上 腹 板										
中 腹 板										
下 腹 板						1/1				
肋 骨										
肋骨板片						1				1
中腹板片									1	
甲腹板片						1 1 1				
甲腹板片						1 10	1		3	
肋骨板片										
腹甲板片	1	1	3 1		1 7 13 36 4		1 1		4	2 1
椎 骨						1				
縲 骨						1 6 12 1			3	
剣状突起						1/				
剣状突起片							1		1/1	
手 骨							1			
手・足・指骨	1		1 1	1	1 15 1	1		2 1		1 4
腹 片	1			1	1 11 22 1		1 1	1 2 2	1 2 1 4	
小計	1 1 1 1 3 1 1 2 1 2 10 33 10 12 1 1 2 4 1 1 2 16 1 1 2 2 11 1									

Tab.93 ジュゴン出土状況

出土地点	縹1	2号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	12号
部位	II	III	I	I	II	III	II	III	II
下 頭骨			1/						
肱 骨			1	1	1 1	2	1	1 2	1 2
椎 体				1					
棘 突 起									
蔽 片	1					1	2		
小計	1	1/	1	1 2	1 1 3 1	1 12 12 1	2 1 2 3	1 2 1 2 3	

												(/) m・右/左					
11号	12号	13号	14号	15号	16号	17号	19号	F-33	F 34	E 33	E-34	K 36	土留め 石積み	盛 土	不明	小計	
I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V	VI	II	III	IV	V	VI	IV	
1																2	
1/																1	
																2	
																4	
																1	
1																2	
1																1	
																3	
																6	
																2	
																1	
																3	
																1	
1																3	
																20	
1	2	2	5	1	7	1	7	3	1	1	1	2	6/3	1	3	1	4 120
1	1						1									1	
																26	
																1	
																3	
																1	
2	1	2	1					2	1			1	1	1		1	43
1	3	1	1	1				1	2			1		4	1	3	71
1	1	4	10	10	1	3	7	2	1	8	1	3	4	3	1	5	1 10 317

右/左 pro...近位端近くが残っているもの																	
13号	14号	15号	16号	17号	19号	土留め石積み	E-33	E-34	F-33	L-28	J-28	J-35	K-34	K-35	不明	小計	
III	II	III	III	I	III	拳頭	I	II	不明	I	I	II	II	石積	拳頭	II	II
8	1	1		6	2		4	3	1	1	1	2	1	2		1	4 50
																	1
																	2
2			1							1	1	1	1	1	1	1	13
10	2	1	1	6	2	1	4	3	1	1	1	2	1	2	1	1	71

Tab.94 イノシシ骨部位別出土状況

注 P → 近位端

◎ → 骨体

d → 遠位端

地 区 序 号	小 類 名	不 規 則 骨	頸 椎 骨	下 脊 椎 骨	肋 骨	肩 甲 骨	尺 骨	腕 骨	桡 骨	中 手 骨	中 指 骨	大 腿 骨	腰 骨	膝 蓋 骨	距 骨	距 骨	半 月 骨	指 骨 中 節 骨	指 骨 末 節 骨	破 片
1	R										1									
	L																			6
1	R																			
1	L	1								1										7
	不																			
III	R																			
	L									④										8
	不																			
IV	R																			
	L																			1
	不																			
小計	R																			
	L	1								①	1									22
	不																			
小計	R																			
	L	1																		1
2	不																			
II	R																			1
	L	1																		
	不																			
12	R																			
	L	1																		2
	不																			
小計	R																			
	L	1																		
	不																			
3	R																			3
	L	1																		1
	不																			
III	R																			1
	L	1																		
	不																			
小計	R																			
	L	1																		
	不																			
3	R																			5
	L	1																		1
	不																			
4	R																			2
	L	1																		2
	不																			
II	R																			12
	L	1																		16
	不																			
小計	R																			
	L	1																		
	不																			

地 区 序 号	小 属 别 不 明	R L	踝 骨	下 领 骨	脊 椎 骨	肋 骨	肩 胛 骨 PScd	上 腕 骨 PSd	尺 骨 PSd	桡 骨 PSd	中 手 骨 PSd	宽 骨 PSd	大 腿 骨 PSd	胫 骨 PSd	腓 骨 PSd	距 骨 PSd	指 骨		破 片	
																	中 手 足 骨 基 节 骨 PScd	中 足 骨 末 节 骨 PSd		
5	III	R L										1								1
		不																		
		R L																		20
		不																		
	V	R L																		4
		不																		
	号	R L																		1
		不明																		
		不																		
	号	R L										1								26
		时																		
		不																		
	I	R L																		12
		不																		
	M	R L										①								15
		不																		
	6	R L																		45
		1																		
	III	L R	1 2	1 2	2 1				1	①	1	1	2 1						1 1 4.3	
		不																		
	N	R L																		2
		不																		
	V	R L																		1
		不																		
	号	R L																		1
		不明																		
		不																		
	号	R L	1	2	2	③		1	1	1	2	1							1 2 4.4	76
		计																		
		不			2	1														
7	II	R L																		5
		不																		
	R	R L																		6
		不																		
	III	L R	1						1	③									1 1 1	32
		不																		
	号	R L																		2
		不明																		
		不																		
	号	R L	1						1	①									1 1 1	34
		计																		
		不																		
8	I	R L																		6
		不																		
	R	R L																		
		不																		
	号	R L	1																	27
		不																		

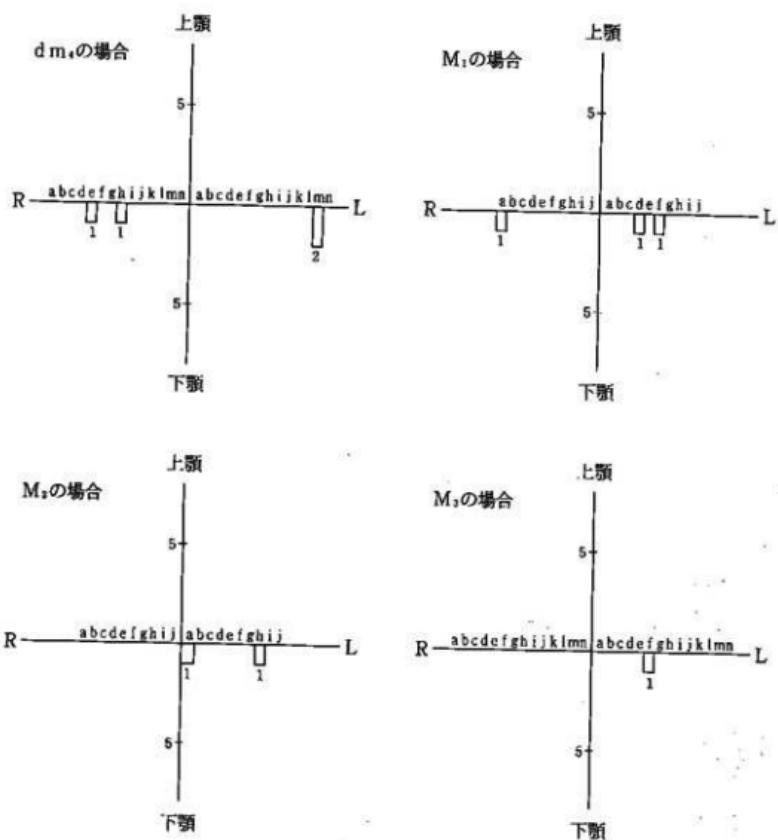
地 区	小 區	細 分 不 同	頸 椎 骨	下 頸 椎 骨	背 椎 骨	肋 骨	肩 甲 骨	上 腕 骨	尺 骨	桡 骨	中 手 骨	寬 骨	大 脛 骨	胫 骨	腓 骨	趾 骨	掌 指 骨	半 掌 指 骨	基 節 骨	中 節 骨	末 節 骨	破 片		
		R		1				①	1	1.1	1		1.③			1								
12	Ⅲ	L	1					③2					1.2	④		1	2	1		3	1	61		
		不	1	2	5	1							2						1					
		R																						1
		不						1																1
		R																						1
		不																						1
		明																						1
		不																						1
		R		1				①	1	1.1	1		1.③			1	2	2	3	2	62			
		不	1	3	5	1		③2					2						1					
		R								1													2	
13	Ⅲ	L								1														1
		R						①	1															2
		不						①																62
		R																						1
		不																						1
		R																						1
		不																						1
		R						①	1														64	
		不						①	1															
		R																						1
		十																						1
14	I	L																						1
		R																						1
		不																						1
		R																						1
		不																						1
		R																						1
		不																						12
		R																						14
		不																						22
		R							1	①	1		②	1		1	1	1						1
15	Ⅲ	L																						1
		R																						1
		不																						1
		R																						23
		不																						20
		R																						22
		不																						42
		R																						42

地 区 序 号	小 類	R L	頭 蓋 骨	下 頸 骨	脊 椎 骨	肋 骨	肩 甲 骨	上 腕 骨	尺 骨	桡 骨	中 手 骨	宽 骨	大 腿 骨	膝 骨	胫 脛 骨	踝 骨	距 骨	掌 骨	中 指 骨	指 骨	破 片		
17	■	R L	不 不																	1			9
18	■	R L	不 不	R R	不 不															1			5
19	■	R L	不 不	R R	不 不															1			4
20	■	R L	不 不	R R	不 不															1			18
21	■	R L	不 不	R R	不 不															1			1
22	■	R L	不 不	R R	不 不															1			7
23	■	R L	不 不	R R	不 不															1			3
24	■	R L	不 不	R R	不 不															1			11
25	■	R L	不 不	R R	不 不															1			1
26	E	R L	不 不	R R	不 不															1			22
27	E	R L	不 不	R R	不 不															1			4
28	E	R L	不 不	R R	不 不															1			5
29	E	R L	不 不	R R	不 不															1			9
30	E	R L	不 不	R R	不 不															1			7
31	E	R L	不 不	R R	不 不															1			4
32	F	R L	不 不	R R	不 不															1			1

地 区	小 编 号	R L 不	颈 椎 骨	下 领 骨	脊 椎 骨	肋 骨	肩 甲 骨 PSd	匕 腕 骨 PSd	尺 骨 PSd	桡 骨 PSd	中 手 骨 PSd	克 骨 上Hf	大 腿 骨 PSd	胫 骨 PSd	腓 骨 PSd	肱 三 头 肌 附 着 骨 PSd	踝 骨 PSd	距 骨 PSd	指 骨		破 片		
																			半 足 骨 PSd	基 脚 骨 PSd	中 脚 骨 PSd	末 脚 骨 PSd	
F	I	R L 不																					9
I	II	R L 不																					1
34	34	R L 不																					1
I	35	R L 不																					10
I	29	R L 不																					1
I	I	R L 不																					1
I	I	R L 不																					2
32	32	R L 不																					3
J	I	R L 不																					3
J	II	R L 不																					3
27	27	R L 不																					6
I	33	R L 不																					1
I	35	R L 不																					1
K	I	R L 不																					2
K	II	R L 不																					2
27	27	R L 不																					4
K	I	R L 不																					1
K	II	R L 不																					1
34	34	R L 不																					3
K	I	R L 不																					1
K	I	R L 不																					4
35	35	R L 不																					4

地 区 区 序	R	L	不	頭 蓋 骨	下 頸 骨	背 椎 骨	肋 骨	肩 中 骨	上 腕 骨	尺 骨	桡 骨	腕 骨	中 子 骨	克 子 骨	大 腿 骨	膝 骨	脛 骨	腓 骨	股 骨	膝 蓋 骨	距 骨	足 骨	手 指 骨	腕 骨	木 頭 骨	基 節 骨	中 部 骨	玻 璃 片
K																												6
36	R	L	不																									1
小計																												6
1	R	L	不																									1
28	L																											2
小計	R	L	不																									3
N	I	L	不																									1
32	R																											1
III																												1
明	R																											2
1	R	L	不																									1
不明	R	L	不																									3
1	R	L	不																									3
小計	R	L	不																									8
土	R																											14
帶め	I	上																										3
石	R																											3
積み	II	L																										1
不	R																											25
小計	R	L	1	1																								25
盛	R																											1
十	R																											1
不明	R	L																										27
不	R	L																										1
合	R	1	5	3																								—
計	10	4	2	4	1307	18																					885	
不	5	14	16	2																								199

Tab.95 イノシシ歯咬耗度分布



—歯の咬耗状況—

- < > : 未萌出
- + : エナメル質咬耗
- ++ : 小窩独立
- +++ : 同連絡
- ⊕ : 全面窩

M₁, M₂の場合

- | | | |
|-----|-----|-----|
| a : | < | > |
| b : | - | - |
| c : | + | - |
| d : | + | + |
| e : | ++ | + |
| f : | ++ | ++ |
| g : | +++ | ++ |
| h : | +++ | +++ |
| i : | ⊕ | +++ |
| j : | ⊕ | ⊕ |

—d m₁, M₂の場合—

- | | | |
|-----|----|-----|
| a : | < | > |
| b : | - | - |
| c : | + | - |
| d : | + | + |
| e : | + | + |
| f : | + | + |
| g : | ++ | ++ |
| h : | ++ | ++ |
| i : | ++ | ++ |
| j : | ++ | ++ |
| k : | ++ | +++ |
| l : | ⊕ | ++ |
| m : | ⊕ | +++ |
| n : | ⊕ | ⊕ |

Tab.96 イノシシ歯骨出土一覧

調査区	部位	上顎骨																	
		R						L											
		I ¹	I ²	2 ³ C	3 ⁴ c	P	M ^d	I ¹	I ²	2 ³ C	3 ⁴ c	P	M ^d	I ¹	I ²	2 ³ C	3 ⁴ c	m ^s	m ^a
4号	II																		
5号	III																		2
6号	II															1		1	
6号	III																2	2	2
	V (x ²)																		
8号	III																2		y
	V																		
9号	III																2		y (1)
	I																		
10号	III 2																		
	IV																		y
	不明																		y
11号	I																		
	II																		
12号	III																1	2	(1 1 19)
13号	III															2			
14号	III																		
15号	III 不明																		
	I																		
16号	II (x ²)																		
17号	II																		
19号	III																		
上右 歯根 めみ	I																		
E・33	I																		
E・35																			
不明																			
合計	2														2	1			

下顎骨										切齒骨 L	犬齒 破片	上顎骨 M ¹ 左右不明	下顎骨 m ¹ 左右不明	臼齒 破片	合計
R	L	P ₁	M ₂	I ₁	C	P ₁	M ₂								
								(10)	(10)						
				1											2
															3
															2
				1 1	2	1 1 1 1 1 1				(10)					17
															1
															1
															1
															8
															2
															1
															5
															1
															4
															1
															1
															1
															1
															1
															1
															1
															10
															3
															3
															1
															1
															1
															1
															4
															4
															2
															1
															1
															2
															4
															84
1 3 1 2 3 7	8 3 2 2					2 2 1	1			3	1	2	1		
	3 3 3 3														

Tab.97 ヒート

グリッド	層位	部位	個数
4号	Ⅲ	指骨	1
不明		鎖骨	1
合計			2

高嶺遺跡出土の脊椎動物遺骸の特徴

- 魚類は多くの骨をのこしていた。別表に示すように、ブダイ科を主体としていた。そのほぼ半数がベラ科である。フエフキダイはそれに次いだ。
 - 爬虫類のウミガメ類は全体量としては比較的多い出土であったのは、この遺跡の半島的な地形を反映するものであろう。
 - 哺乳類では極めて少なかったが、オオコウモリ、ケナガイタチがあり、ジュゴンの骨はやや多かった。リュウキュウイノシシは多く、その捕獲は秋、冬以外の季節の個体が半数を占める予測もあるが、歯牙標本が少ないので問題がのこる。
- 以上にみた高嶺遺跡の資料は、かつて報告されているシヌグ堂遺跡の内容と併せて、今後も考えていくべき問題を含むであろう。

第VII章 宮城島高嶺遺跡出土 の植物遺体

渡辺 誠

沖縄県教育厅文化課によって発掘された宮城島高嶺遺跡出土の植物遺体を、同課の金城亀信氏の御好意によって調査させて頂くことができた。

ラベルには、「J-30、6号竪穴、第3層、10~15cm、2/22」と、記されている。時期は、縄文時代晚期前半並行期である。

資料は2点で、クスノキ科タブノキ (*Persea thunbergii* Sieb. et Zucc.) の子葉である。いずれも二つに分かれた片側である。やや横長で、膨らみが強い（写真1）。

タブノキの種子は、石川市古我地原貝塚（縄文後期並行）からも出土している（写真2）。また鹿児島県沖永良部島の神野貝塚（縄文後期並行）では、貯蔵穴より多量に出土している（写真3、上村他1984）。

タブノキは本州以南の暖帯に分布し、実は6~7月に熟す。外側の果肉は甘酸っぱい。もしこれだけを食べるのであれば、土中に貯蔵することは意味のないことである。ことによると、今日には伝えられていない食用化の方法があるのかもしれない。民俗調査の成果に期待したいと思う。ただし嗜好品的であり、主食的なものではない。いずれにしても歴史的植物性遺物として、興味深い資料である。

引用文献

上村俊雄・他、1984：南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究。鹿児島大学法文学部考古学研究室。

謝 辞

最後に、調査の機会を与えられ種々御教示下さった沖縄県教育厅文化課の金城亀信・盛本勲氏、および鹿児島大学法文学部上村俊雄教授・同教養部田川日出夫教授に対し、衷心より謝意を表する次第である。



写真1 高嶺遺跡出土のタブ

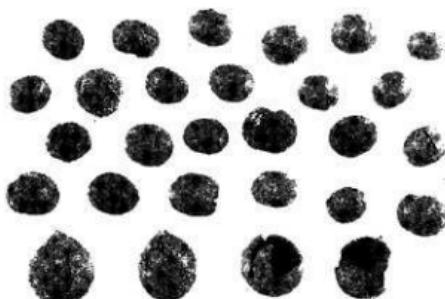


写真2 古我地原貝塚出土のタブ

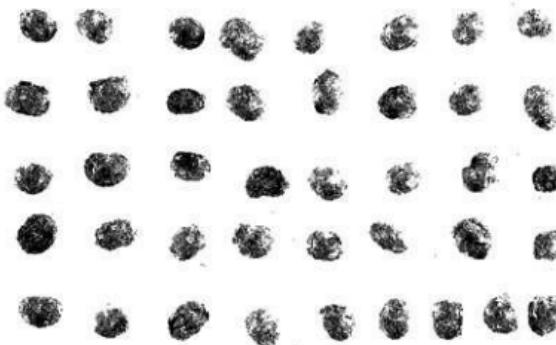


写真3 神野貝塚出土のタブ

P.L. 1

第Ⅷ章 琉球王府時代の遺構と遺物

第1節 遺構

(1) 火番小屋跡

高嶺遺跡のある丘陵は宮城島で最も高い所（標高118～125m）で、地元では「タカンミ」（高嶺）と呼んでいる。また、南へ突出した丘陵の先端部は、琉球王府時代にのろしを上げたと言えられている所で、「ヒータチモー」（火立毛）と呼んでいる。そこに、のろしに関する石碑が立っていることは以前から知られていた。

発掘調査をするための伐採作業中に、石碑の側から正方形の石積み遺構が発見された。石積み遺構はかなり土に埋まっていたが、発掘調査で振り下げていくと、火番小屋の跡であることが確認された。外面と内面は加工された大きな石を積み上げ、その中に裏込め石を詰めている。石積みの幅は70～90cmと広い。四面石積みが廻らされた小屋の中は1.5間（約270cm）×1.5間（約270cm）で四壁半の広さである。東側石積みのほぼ中央部に幅約50cmの入口が開いている。現存する石積みの高さは2・3段で50～70cm。小屋の内にも外にも柱穴が検出されないことから、当時は軒まで石が積み上げられ、その上に屋根が乗っていたものと考えられる。なお、火番小屋の北と西には石垣が廻っている。それは、冬の北風を防ぐための石垣と考えられる。

(2) 石碑

火番小屋跡の東南隅から東南へ約1.5mの地点に、高さ約70cmの微粒砂岩（方言でニーピヌフニ）がコの字状に3本立っている。中央に立っている微粒砂岩に「川田崎 針崎 丑寅小間 丑方付」という碑文が刻まれている。川田崎、針崎は地名と考えられるが、聞き取り調査でその場所を知ることはできなかった。そこで、「丑寅小間 丑方付」という方位を知るために、角度を計算してみた。子（北）を0度とすると、丑は30度、寅は60度である。丑寅の方位なので、30度と60度の間と考えられる。そこで小間が問題となる。小間という方位表示は「今帰仁旧城図」（1743年）、「羽地間切竿入帳」（18世紀）、「那覇福州航海図」（18世紀）などにも見られるが、中村誠司・仲原弘哲氏は「小間が十二支 = 30度内のブレを表わすなら、それは半分の15度以内であることは予想がつく」と述べている。小間を15度以内と考えると、丑寅の方位には丑に付く小間（30度+15度以内）と、寅に付く小間（60度-15度以内）が考えられる。そこで「丑方付」が有効となる。これは丑の方位へ付くと解されるので、丑（30度）+丑方付の小間（15度以内）で45度以内となる。つまり、^{高離島}（宮城島の古称）の火立所から「丑寅小間 丑方付」にある火立所（X）は $30^\circ < X < 45^\circ$ の方位と考えられる。

つぎに、高離島の火立所（のろしを上げる所）から丑寅の方位にある火立所を調べてみる。

「薩摩藩調製図」(18世紀)に琉球の火立所が記されている。高離島の火立所から丑寅の方位に名護市大仁屋のパン崎付近、東村大工治のギナン崎付近の火立所がある。そこで、トランシットを右碑の上に設定して角度を測んでみた。パン崎付近が39度前後、ギナン崎付近が44度前後で、2カ所とも30と45の間に納まる。

ところが、宮城島の石碑の側に立ってパン崎とギナン崎を肉眼で見ると、パン崎はよく見えるが、ギナン崎は晴れた日でも薄らとしか見えず、曇った日にはほとんど見えない。晴れた日でも曇った日でも「のろし」を確認できるのはパン崎であり、宮城島から確認する「のろし」は天仁屋のパン崎付近の火立所と考えた方がよさそうである。

「のろし」の合団を受け取った宮城島の火立所は、勝連半島の火立所へ送り、最後は首里城へ届けられたであろう。火立所は琉球王府時代における海上交通の要所だったのである。



Fig.97 火番小屋近くにある碑文拓影

註1.『郷土』第2号 沖縄大学学生文化協会 1965

2.『那覇市史』家譜資料 3

3.島尻博物館蔵

4.県立博物館蔵

5.中村誠司・仲原弘哲「羽地間切半人帳の分析実施的検討に向けて」『地域と文化』

第33号 1985

6.県立図書館東恩納文庫蔵

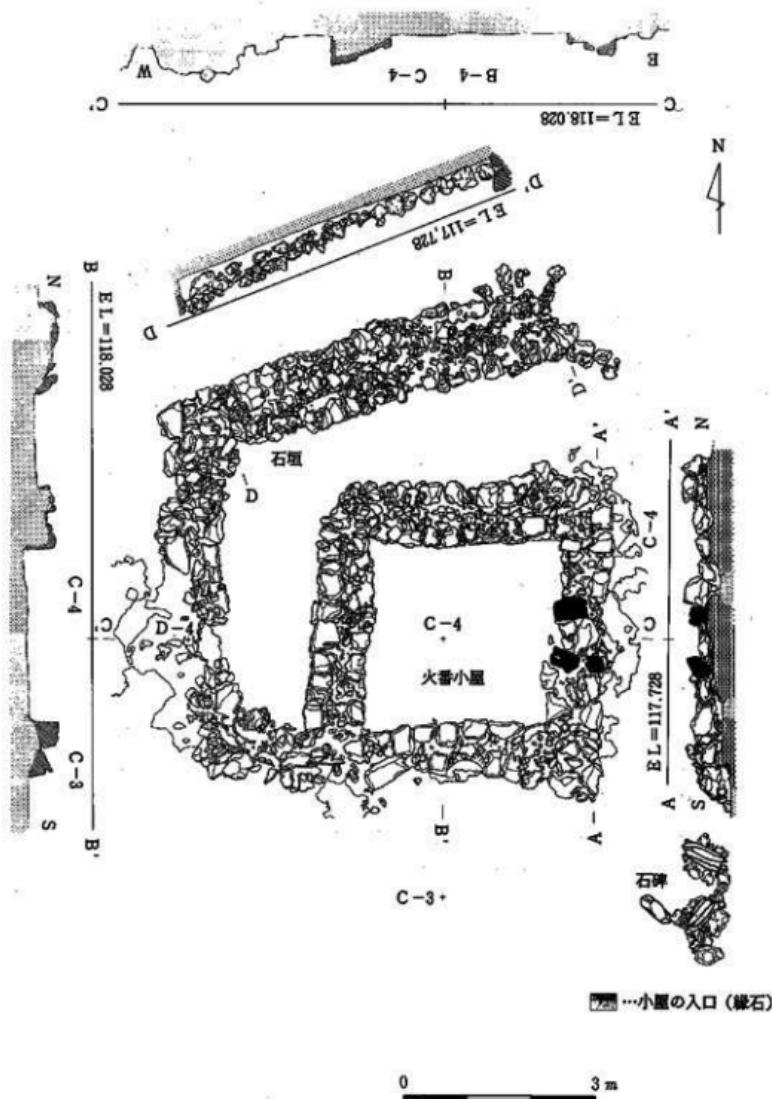


Fig.98 火番小屋と石碑

第2節 遺 物

遺跡から近世の陶器片などが若干得られた。この中で、特に目立ったキセル（雁首・吸口）、古銭・簪を図化した。キセルは火番小屋遺構近くで出土したものである。古銭・簪は第2段丘から得られた資料である。以下、略記する。

Fig.99-1は陶器製の雁首で、外面を削りで成形する。内面は陶土を丁寧に回転させながら削り取っている。雁首の長さは3.7cm、火皿径1.0cmである。残存重量7.5g。B-3第1層出土。

2は青銅製の吸口。青銅の板を筒状に成形する為、接合面が明瞭に観察できる。羅字に接続する箇所は段をつけ、吸口方向へは直線的に成形する。吸口の長さは6.2cm・羅字接続部分で内径1.0cm、吸口内径3.5mm。重量5.5g。C-3第1層出土。

3は銭の寛永通宝（初鋤年代1636年）である。青銅製品で背サビが付着する。裏面には文字はない。直徑2.4cm、孔は $6.7 \times 6.6\text{mm}$ 、厚さ1.3mm。重量3.5g。L-32第1層。

4は簪の破片で、頭部・捩の箇所が欠落。竿の横断面は四角形を呈し、先端で厚くなる。残存長5.8cm、竿の厚さ $3 \times 3.5\text{mm}$ ・残存重量4.3g。J-28第1層。

参考文献

- ・座間味政光・太田宏好・花城潤子・渡名喜明・金子浩昌・名嘉真宜勝「古我地原内古墓」
-沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(?) - 沖縄県教育委員会
1987年。

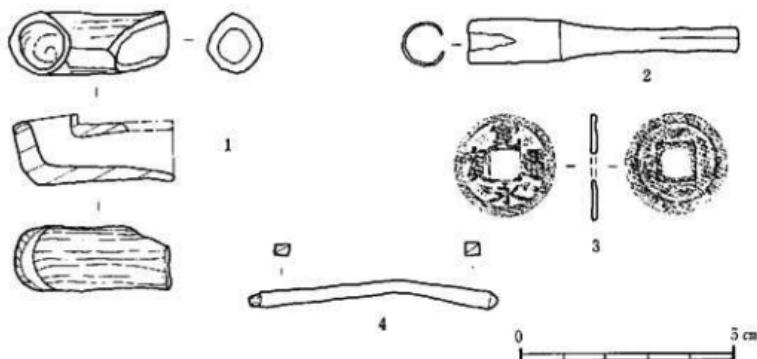


Fig.99 近世の遺物 1.雁首 2.吸口 3.銭 4.簪

第Ⅺ章 総括

宮城島内で、この時期に比定される遺跡としてシヌグ堂遺跡があり遺跡の規模も本遺跡はこれに次ぐものである。両遺跡の立地条件も共通し、遺物の内容や遺構も近似性があり、時期的にもほぼ符合する。

出土遺物や遺構の面から高巣遺跡の状況を考えてみた。まず、土器の面からはA～C群土器が第1号疊床住居・第1～3・15・16号竪穴中の覆土から多量に出土していて、これら7基の住居跡は時期的にA～C群期として把握できるのではないだろうか。また、主体となっているE群土器は第4～14・18・19号竪穴中の覆土から多量に検出し、床着も1・2点出土している。この時期の竪穴は13基が考えられた。この様な視点から大雑把にまずは、二時期に分けられる。

E群期の竪穴は、そのほとんどが切り合って重複する。切り合いの多いもので2基（1と2、5と6、7と8、9と10、13と18、19と20）が数えられた。細かく見れば、E群期の中でも竪穴の深度で二分できる。浅い竪穴（第5・7・9・13・20号）と深い竪穴（第6・8・10・18・19号）に区別できるが、明確に浅い竪穴が同時平行に存在していたかどうかについては若干の疑問も残る。この期の竪穴住居には、次の様な特徴がある。竪穴の縁に石灰岩礫を積み壁面化粧を施す。浅い竪穴に石囲いの炉を保有するのが2基存在し、大部分は一竪穴に一の地炉を基本とするが、前者は特殊な例として受け止めることができる。火種を保有する為の石囲いの炉であるのか、あるいは集落内の首長もしくはシャーマンの住居であったのかは判らないが、非常に注目される遺構である。シヌグ堂遺跡の疊床住居跡からも2基検出されている。

ところで、石器の出土状況からも上記の竪穴住居等の新旧がはっきりした。A～C群上器期の竪穴・疊床住居7基からは石斧の完形品は出土していない傾向が把握できた。この様な観点から考えると次のことが言えるのではないだろうか。これは古い竪穴等を放棄する為に使用可能な石斧を持ち出していることである。

土留め石積み遺構は浅い竪穴期に構築されていることが次の点から理解できる。第2段丘の法面および縁辺にある地山を掘り込んで石積みされているが、この地山直上にはE群期の包含層が堆積している点が確認された。また、この石積み構築前の古い竪穴（深い）が石積みの下から検出されたことなどである。この様な土留め石積みを廻らす例は全国的に見てもその例はない。

屋外焼土が三基検出され、その内の二基は集落北側にある空間（広場）に存在し、この内の二基からはE群期の小型土器が得られている。

これらの資料等から高巣遺跡の状況を調査成果を基に復元して見ることにしたい。遺跡の西側に集落の境界である石積みが存在し、集落内の北側に地炉を持つ空間（広場）を中心に住居が腰開する。住居は石灰岩礫で壁面化粧された竪穴住居で、柱は6～9本をもって上部構造物を支えている。

住居内には地山面に地炉を持っていた。海岸へ抜けるには遺跡東側崖沿いから容易に下って行くことができ、この道は当時から利用されてきた縄文の道でもあり、海岸と遺跡を結んだ道である。交流の面からは出土した黒曜石は県内では産出しない為、九州から島伝いに持ち込まれてきたものであろう。また、奄美系の土器も少量ながら出土している点から奄美地域との直接あるいは間接的な接触もあったであろう。

出土遺物の中で目立ったものとして、貝類ではオキナワヤマタニシが70%を占めている。またコウイカの殻も非常に珍らしいものである。骨製品の中でもリクガメの腹甲板に孔を6ヶ所穿った垂飾品が得られている。この手の資料も全国的に見ても報告例がないようである。石英製鏃もこれまでに報告例がない。

植物遺体は2点のみ第6号竪穴住居内から検出されていて、クスノキ科タブノキの子葉と同定されている。この木は石灰岩地帯でも生植することが知られている。この時期の遺跡では苦壙原遺跡^(註1)で炭化種子が多量に出土している(コナラ属、イクシイ、クス科)。これらの種子類は石灰岩地帯や砂丘地域では微生物や酸性土壤の為、残りにくいうようである。

ところで、遺跡南端で検出された琉球王國時代の火番小屋遺構も当時の海上監視および狼煙による伝達方法を研究する上に貴重と言える。この分野での研究に欠くことができない遺構である。

発掘調査の結果、本遺跡の推定面積は約10,000m²で、沖縄貝塚時代中期に属し、この期でも大規模な集落であることが判明した。与那城村には貝塚時代中期に位置づけられるシメグ堂遺跡・^(註2)仲原遺跡(国指定)・高嶺遺跡が所在する。いずれも発掘調査が実施された遺跡であり、これらの成果から離島に於ける当時の集落や生活形態等をある程度想定することも出来る。今ひとつ問題は、当時の墓域がまだ発見されていないことである。この発見がなされたならば集落と墓域がどのように区別され、利用されたかによって、当時の社会や精神文化もある程度解明できるものと考えられる。今後の研究や調査に期待できる。

註

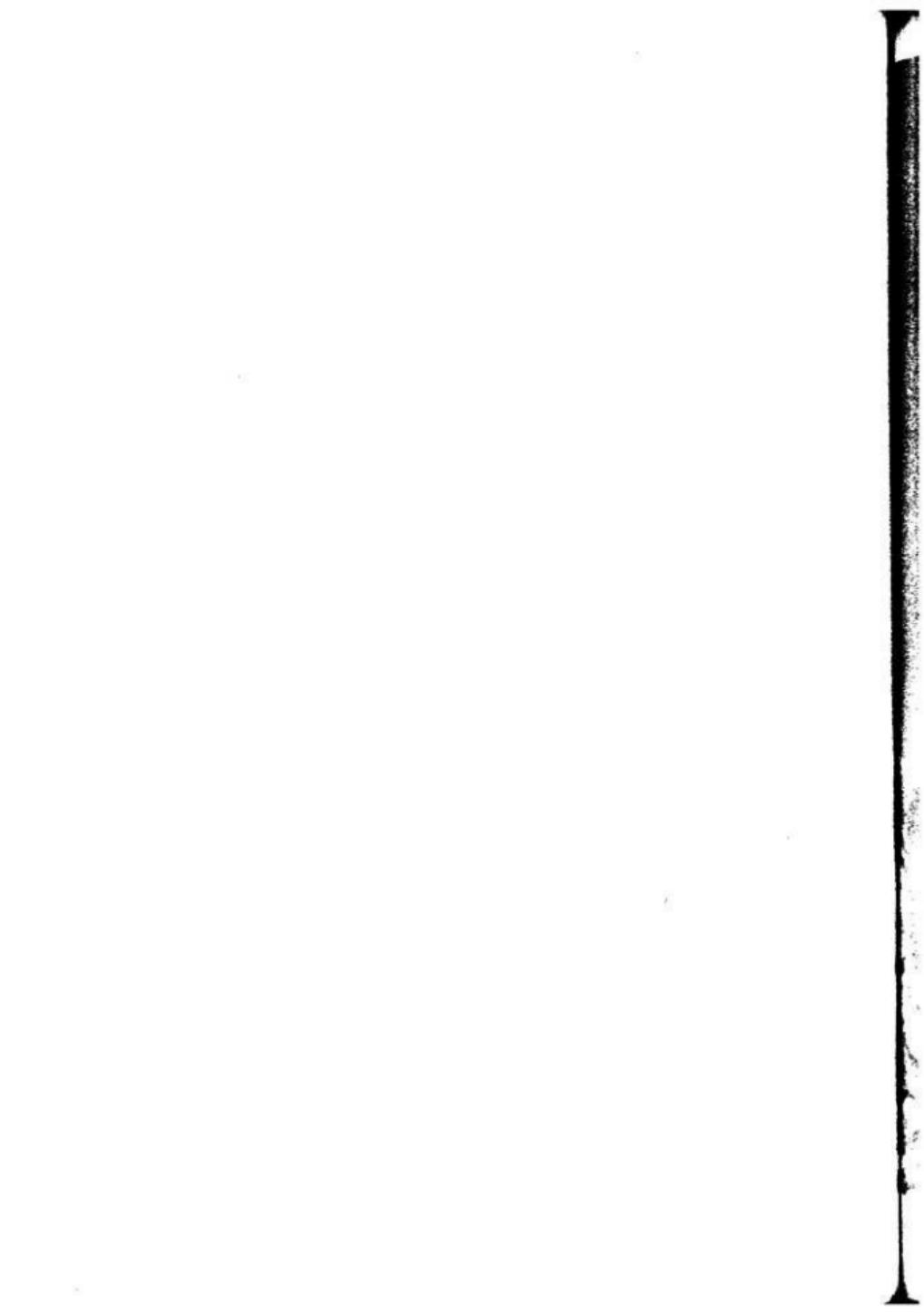
- (註1) 金武正紀他「シメグ堂遺跡」 沖縄県教育委員会 1985年。
- (註2) 金子信昌・忍田光復「骨角器の研究」(縄文論叢) 慶友社 1986年。
- 金子信昌 富山・石川県下遺跡の動物骨 私の調査史・1 「人塚」第11号 1987年。
- (註3) 新山幸裕「苦壙原遺跡」 真志川市教育委員会 1977年。
- (註4) 当真嗣・他「伊計島の遺跡」 沖縄県教育委員会 1981年。

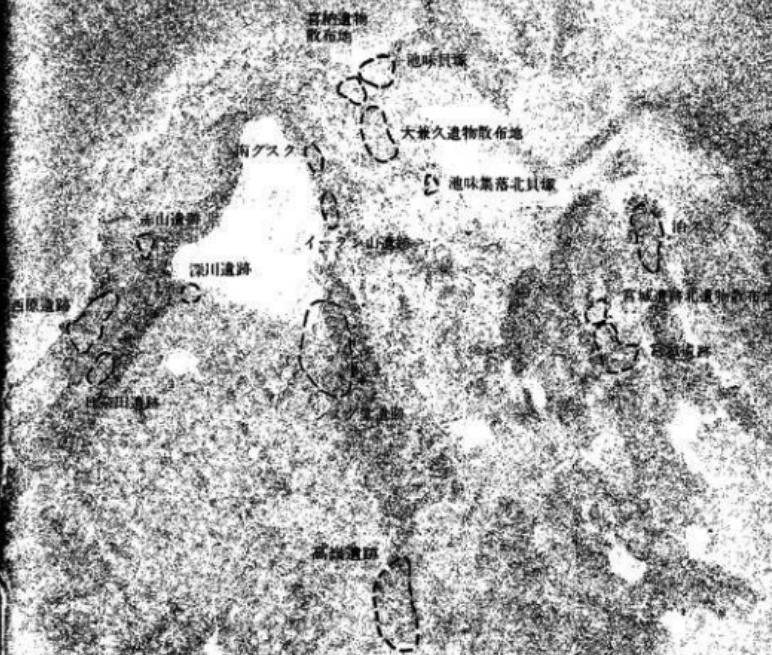
参考文献

- ・熊本大学法文学部考古学研究室「クチバナ遺跡」研究室活動報告 4 1979年。
- ・熊本県教育委員会「古保山・古田・天城」 1980年。
- ・山崎純男・島津義昭「九州の土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器 II 堆山編 1981年。
- ・熊本大学法文学部考古学研究室「土佐遺跡」(概報)研究室活動報告20 1986年。

図版

* PL. 51-55 の記号説明
A は 墓床住居、B は 穹穴住居、C は E・F - 33・34、その他の
グリット、アルファベットに後続する番号は住居番号である。
例 A 1-1 (第 1 号墓床住居跡の 1)
B 8-3 (第 8 号穹穴住居跡の 3)

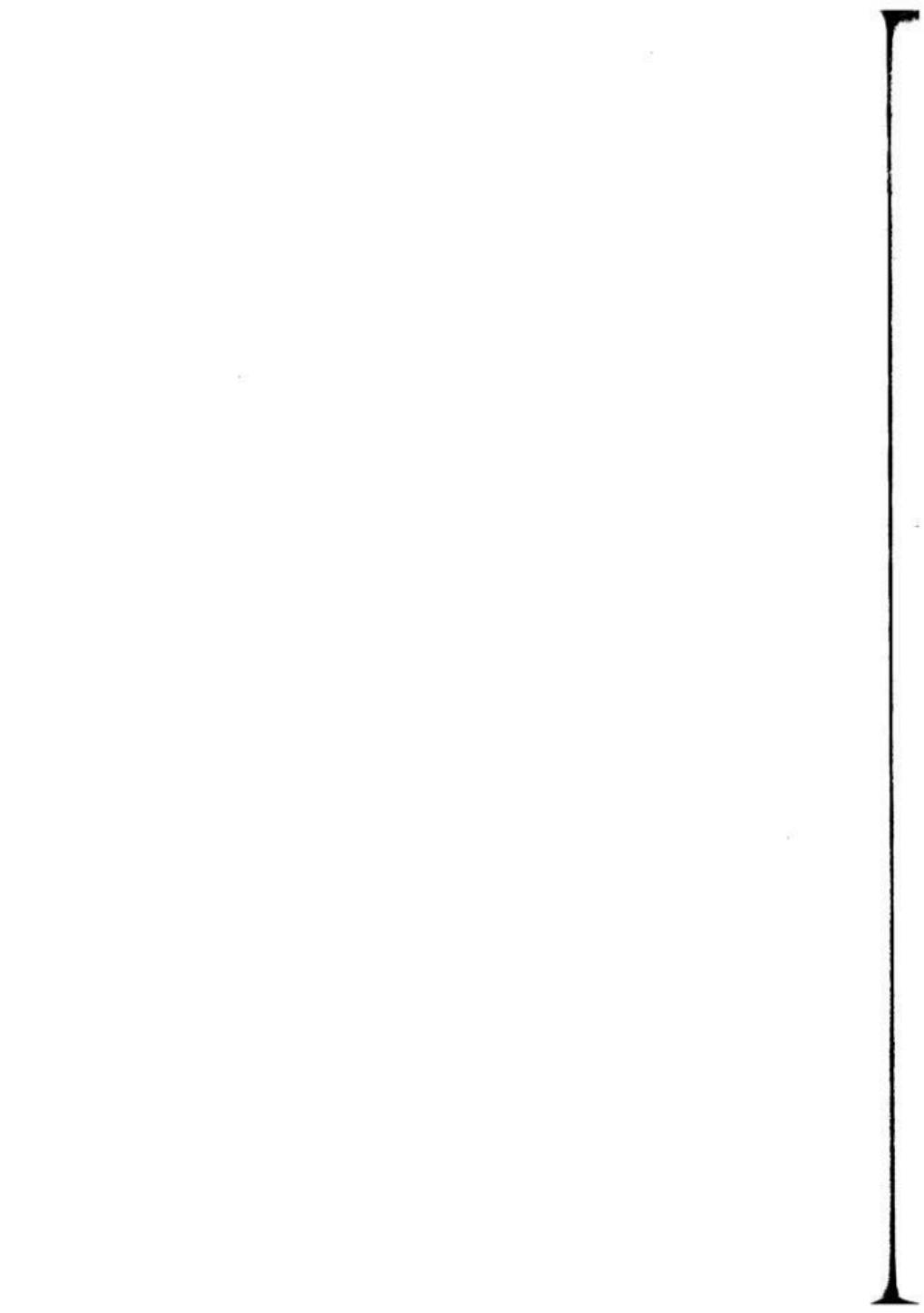


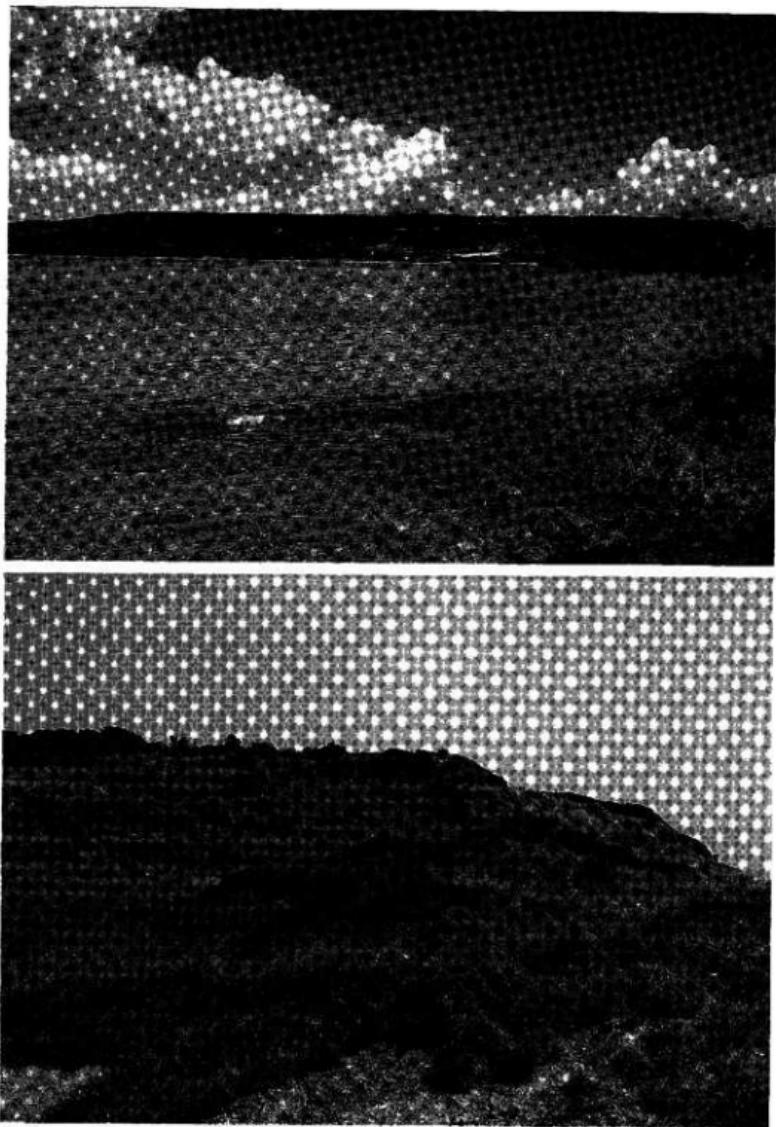


P.L. 2 宮城島の空中写真から見た遺跡分布 1984年9月撮影 $\frac{1}{20,000}$

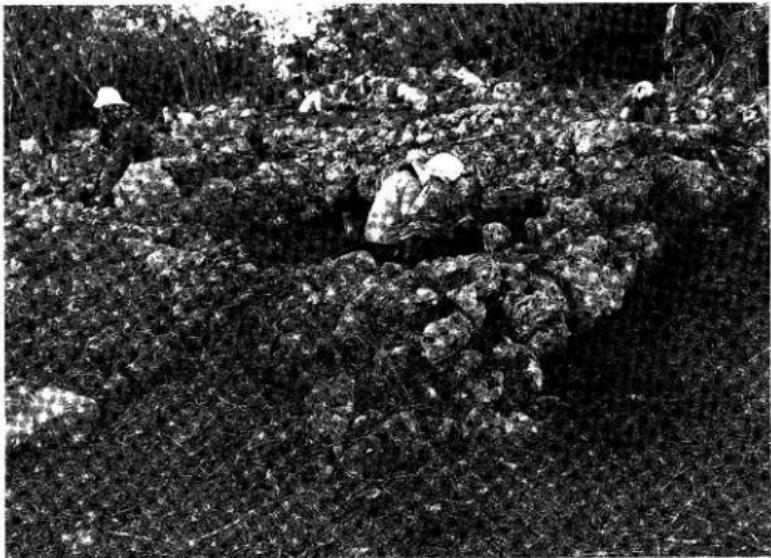


P.L. 2 宮城島の空中写真から見た遺跡分布 1984年9月撮影 $\frac{1}{20,000}$

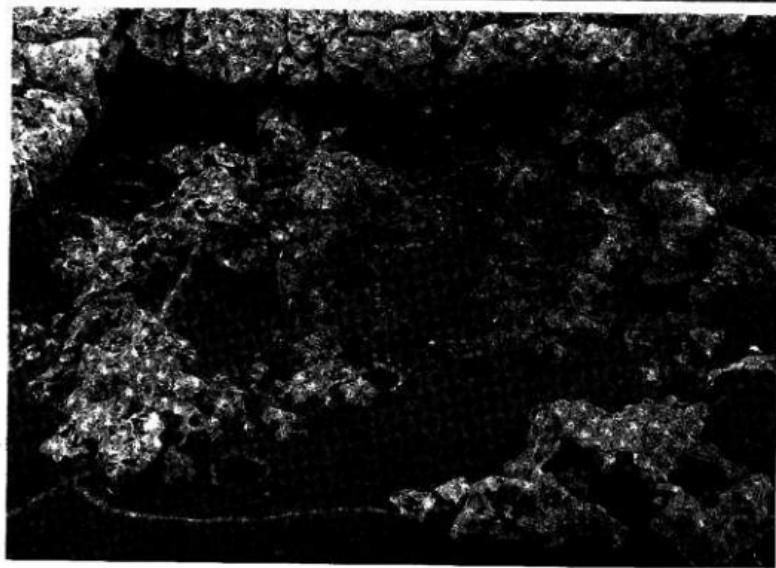
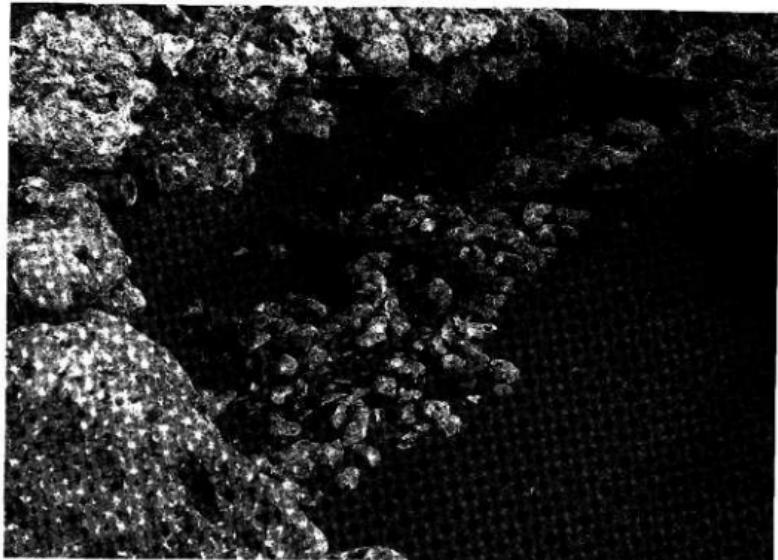




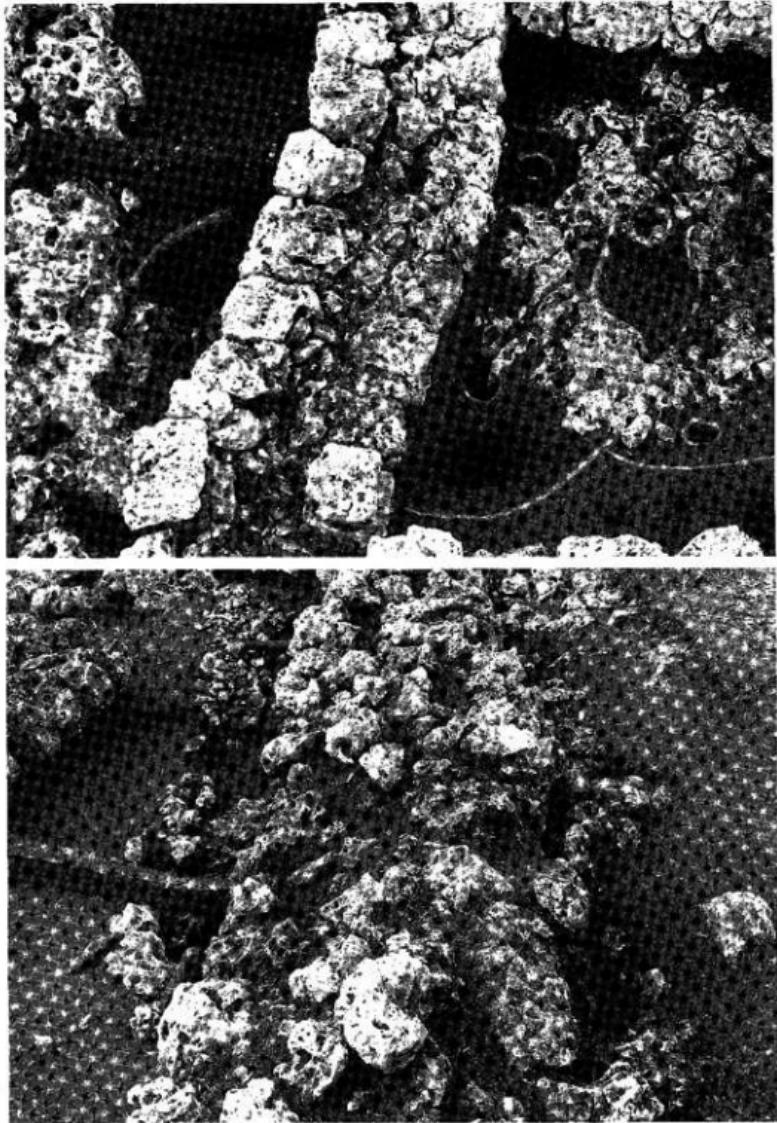
PL. 3 上：遺跡遠景
下：遺跡近景



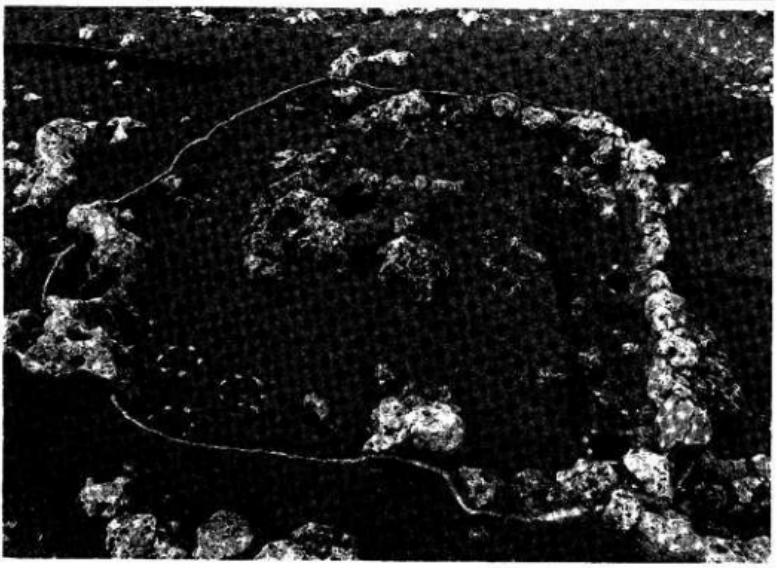
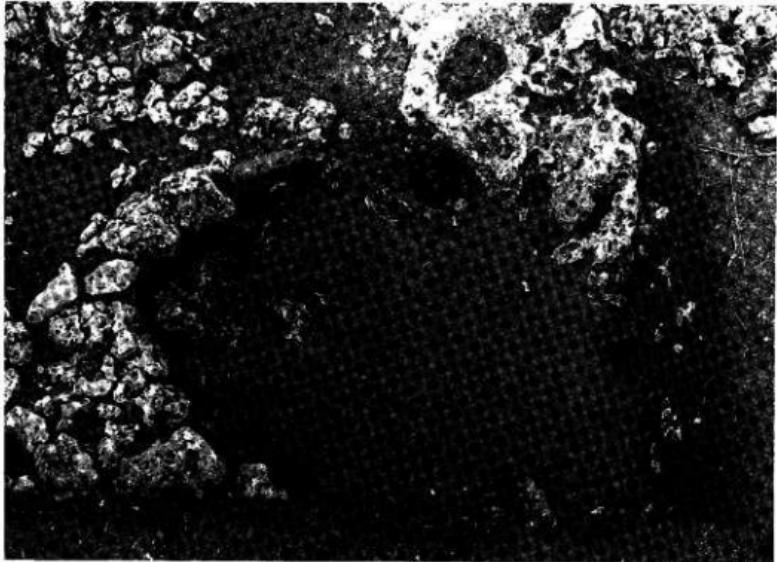
PL. 4 上：遺跡南側の発掘状況
下：第2段丘の発掘状況



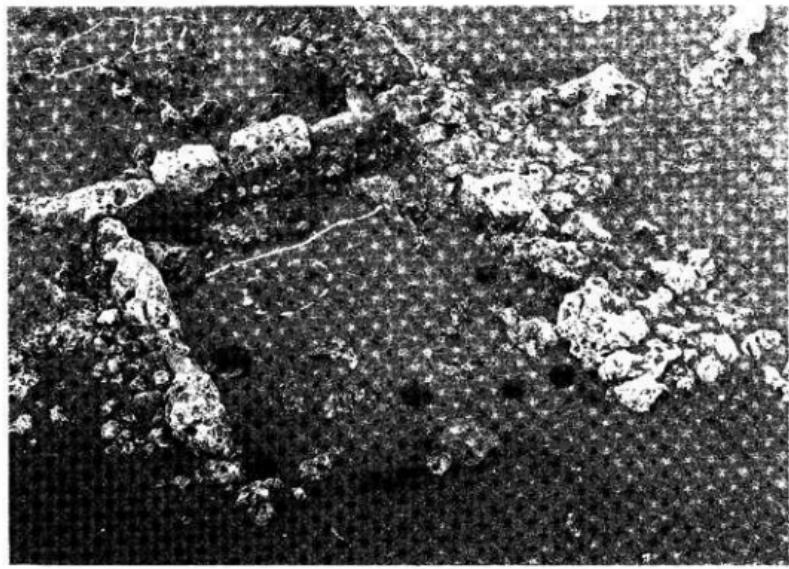
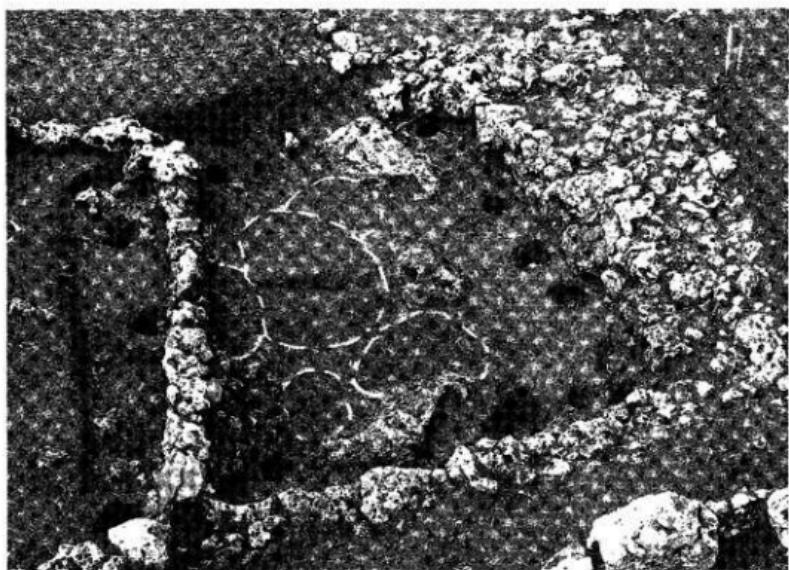
P.L.5 上：第1号罐床住居跡
下：第1号竪穴住居跡



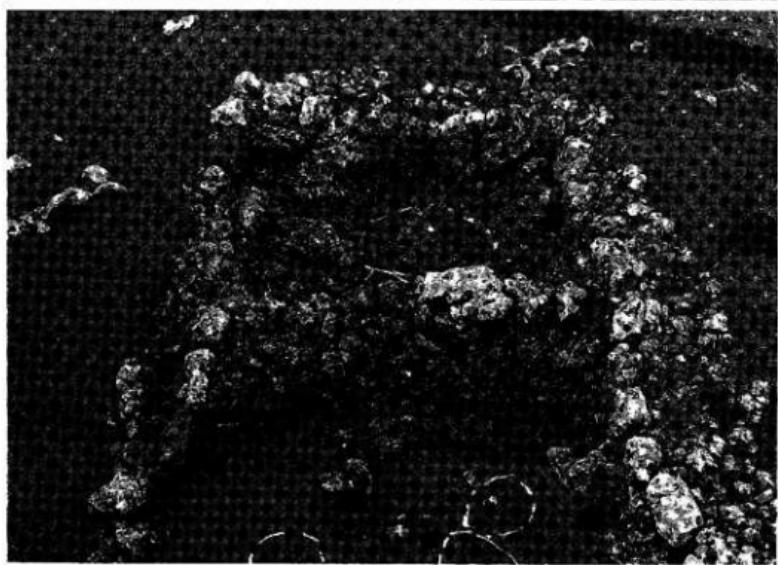
P.L.6 上：第2号竪穴住居跡
下：第3号竪穴住居跡



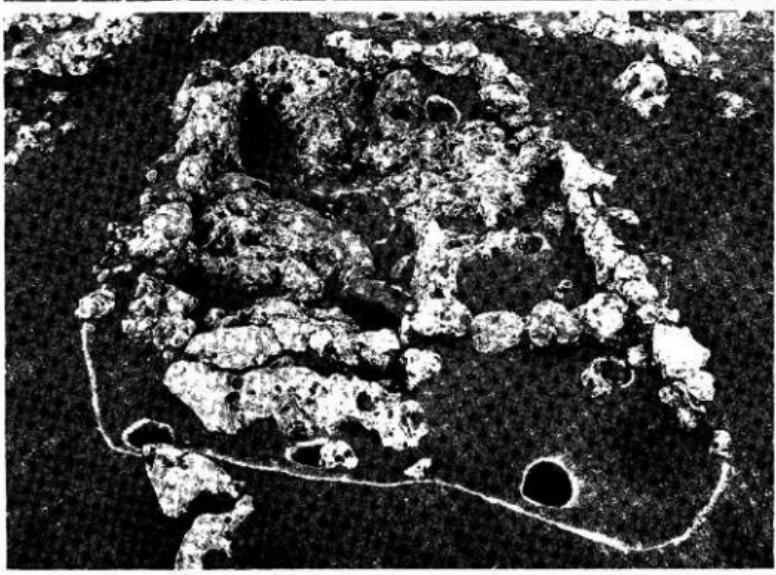
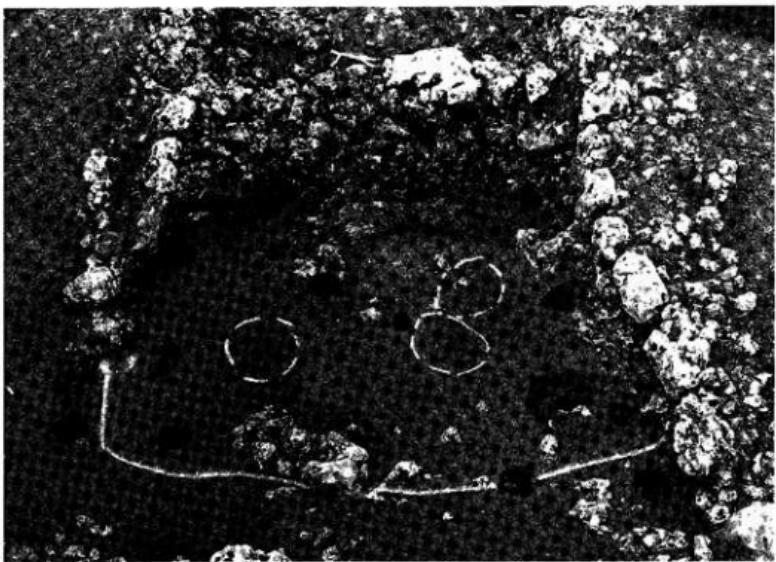
PL. 7 上：第4号竖穴住居跡
下：第5号竖穴住居跡



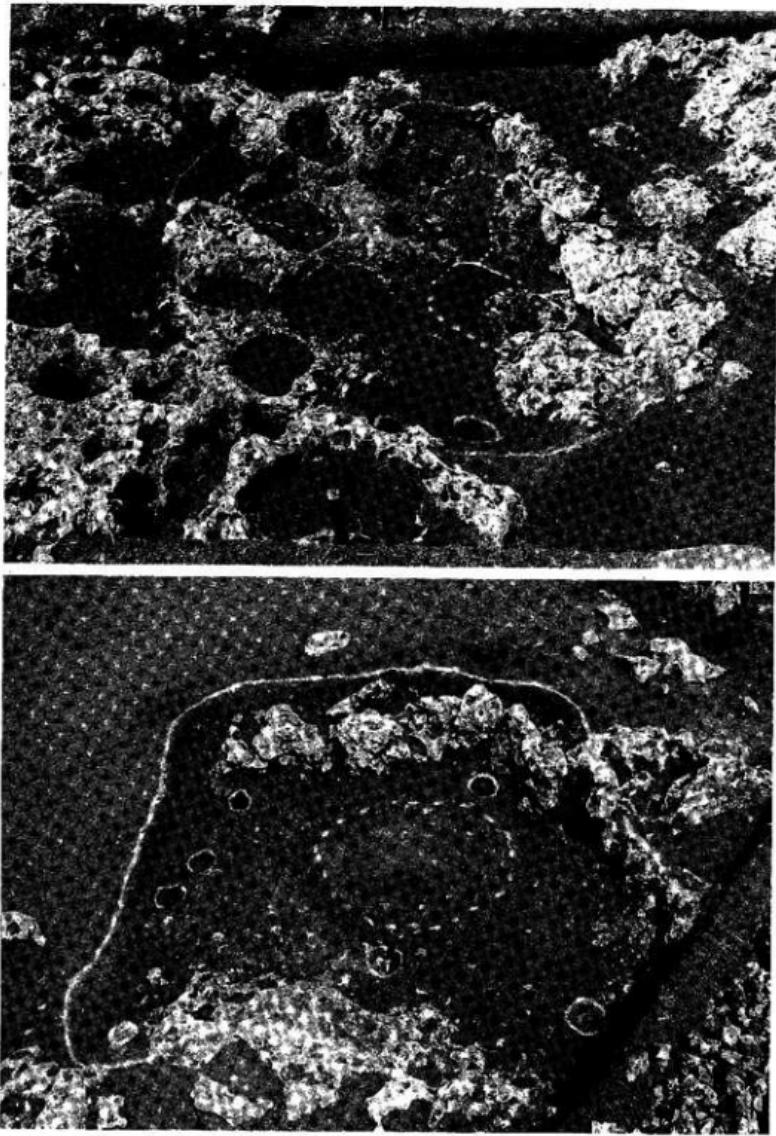
P.L.8 上：第6号竪穴住居跡
下：第7号竪穴住居跡



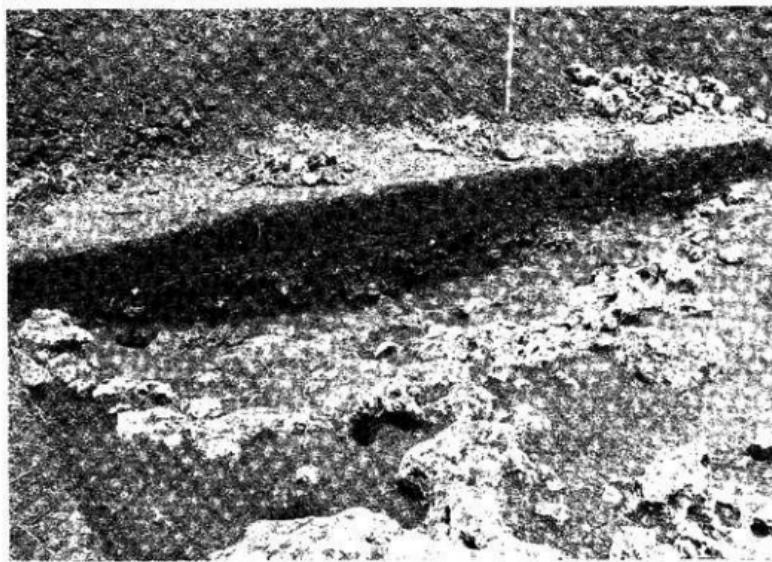
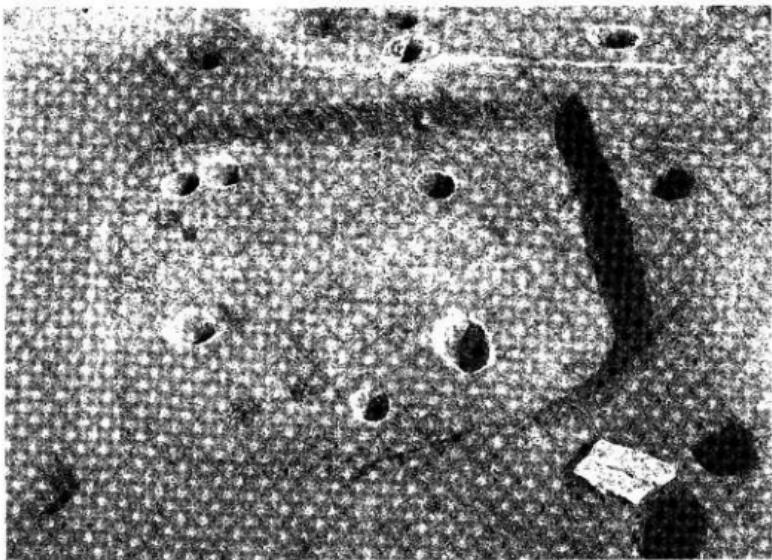
P L. 9 上：第8号竖穴住居跡
下：第9号竖穴住居跡



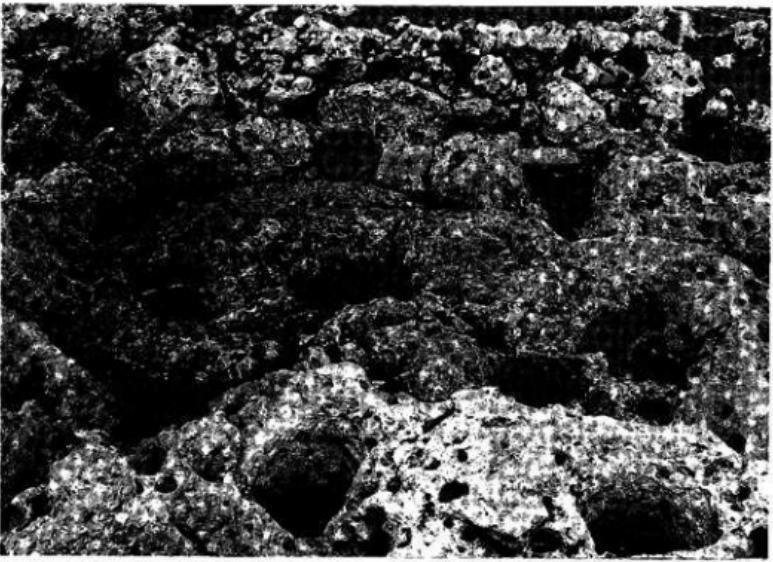
P L.10 上：第10号竖穴住居跡
下：第11号竖穴住居跡



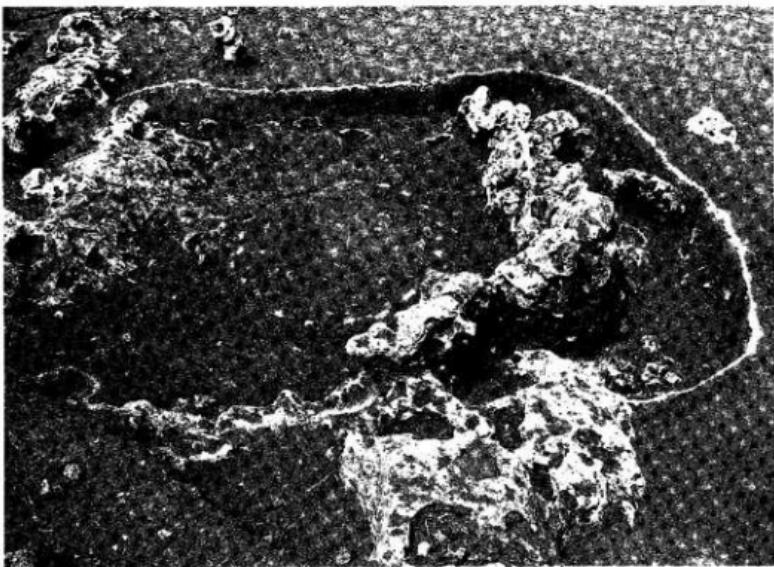
P.L.11 上：第12号竪穴住居跡
下：第13号竪穴住居跡



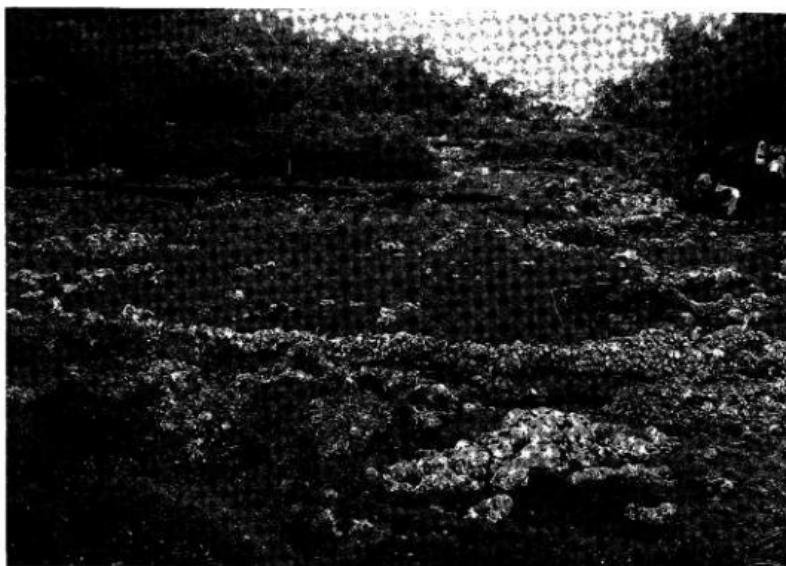
P L.12 上：第14号竪穴住居跡
下：第15号竪穴住居跡



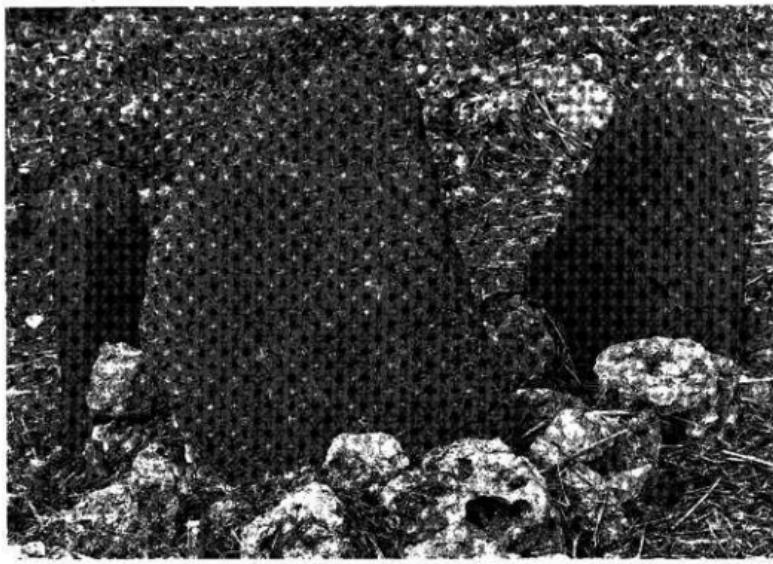
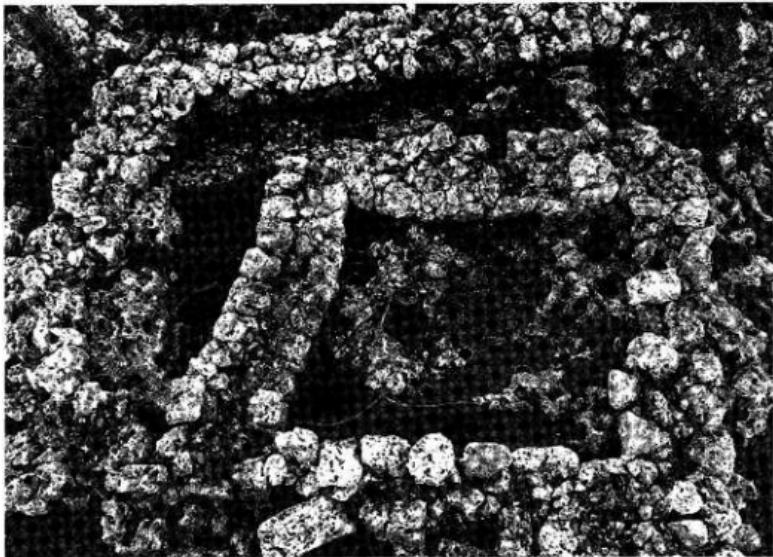
P L.13 上：第16号竪穴住居跡
下：第17号竪穴住居跡



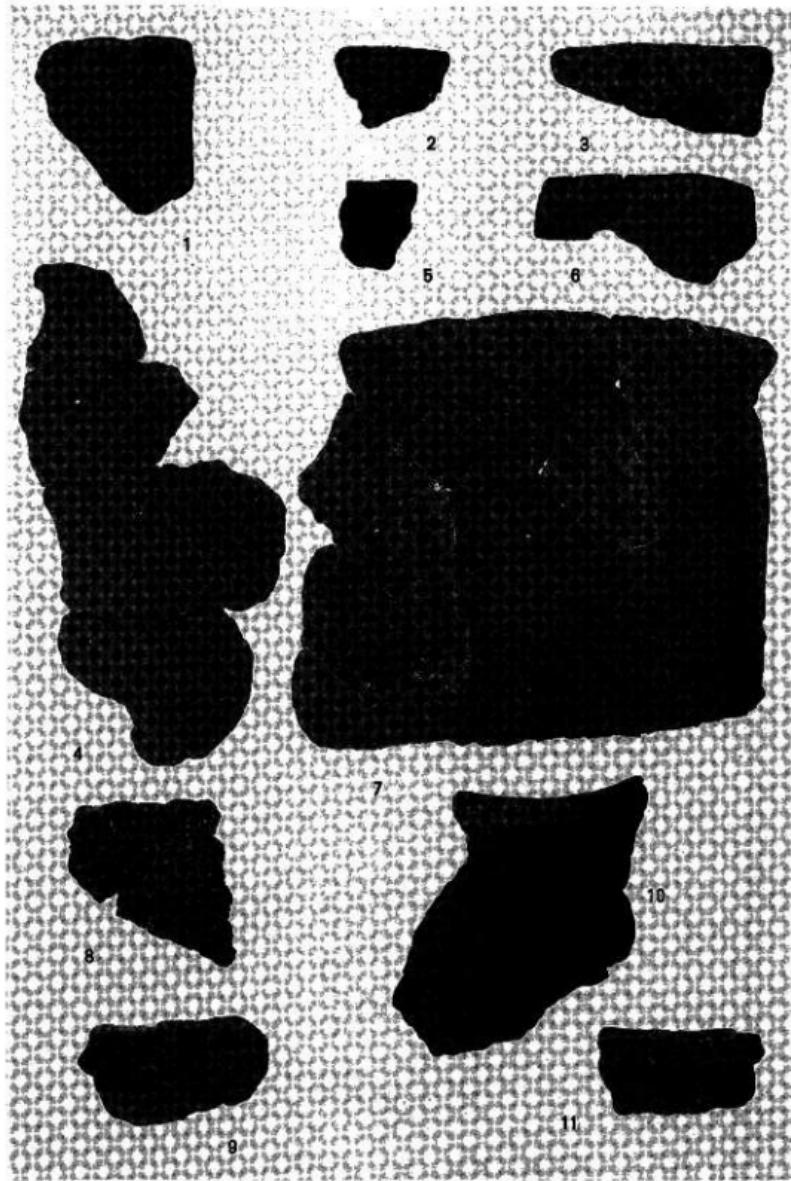
P L.14 上：第18号竪穴住居跡
下：第19号竪穴住居跡



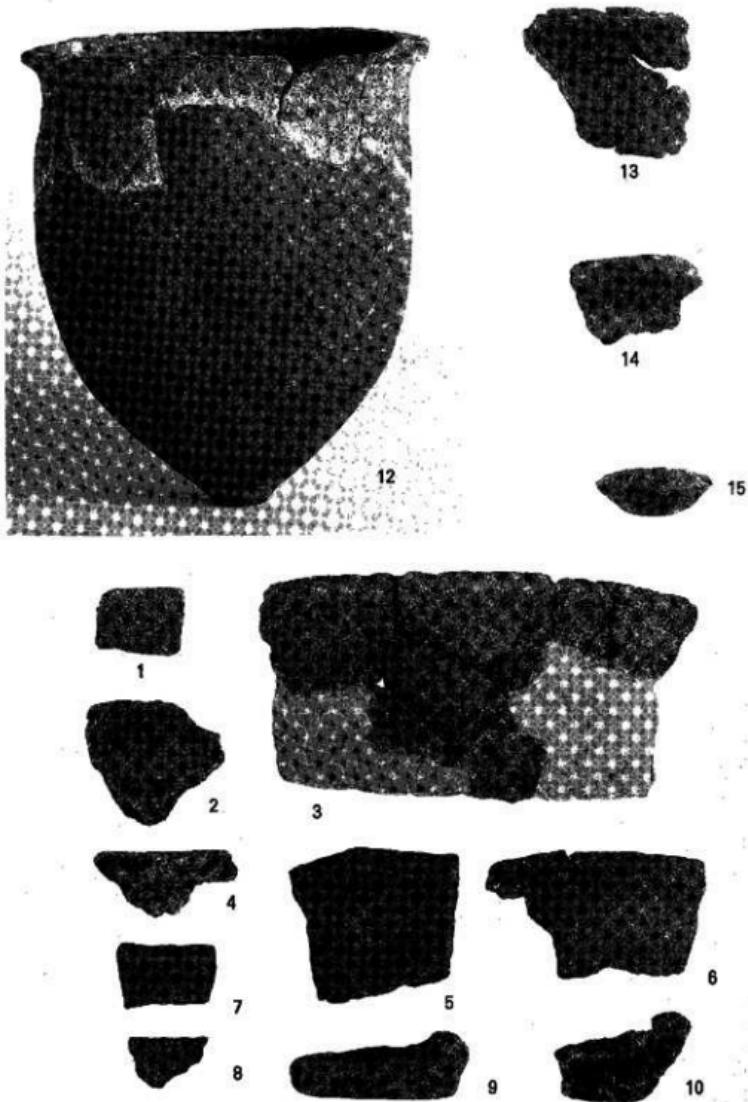
P.L.15 上：土留め石積み遺構と住居跡（第2段丘）
下：土留め石積みと層序



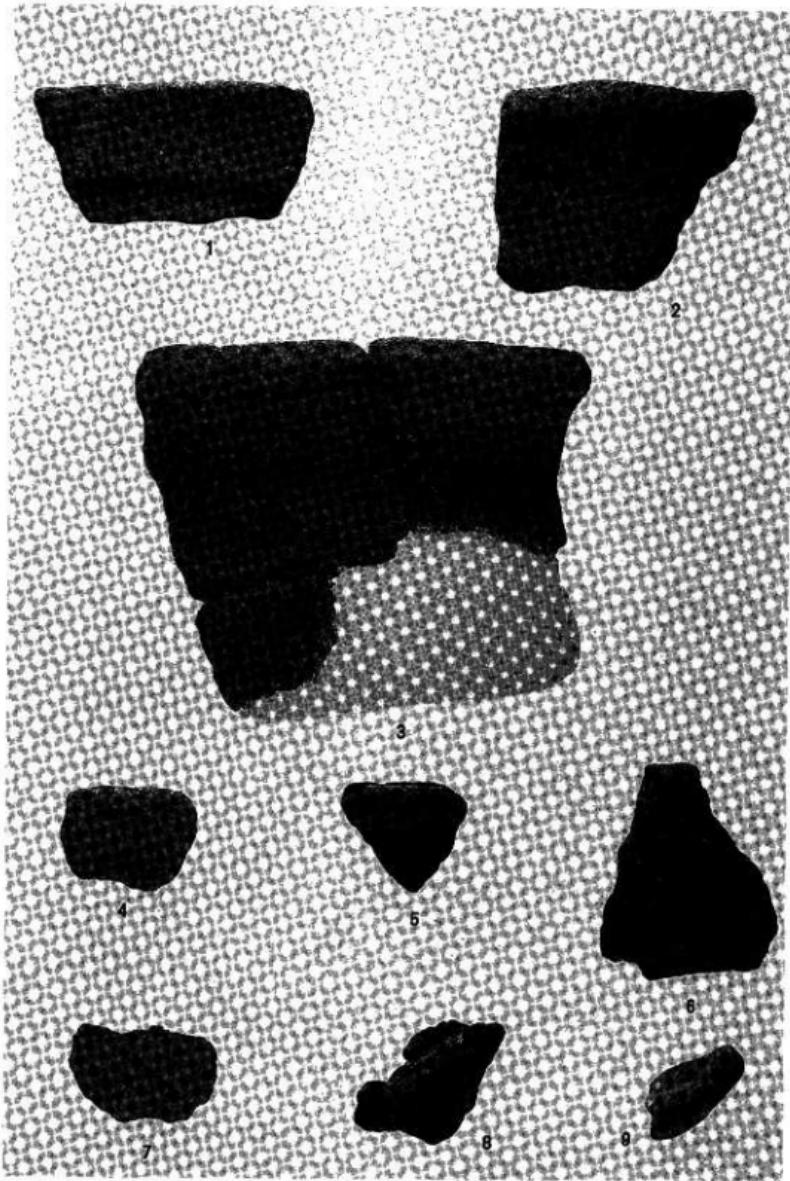
P L.16 上：火番小星と住居跡
下：碑文



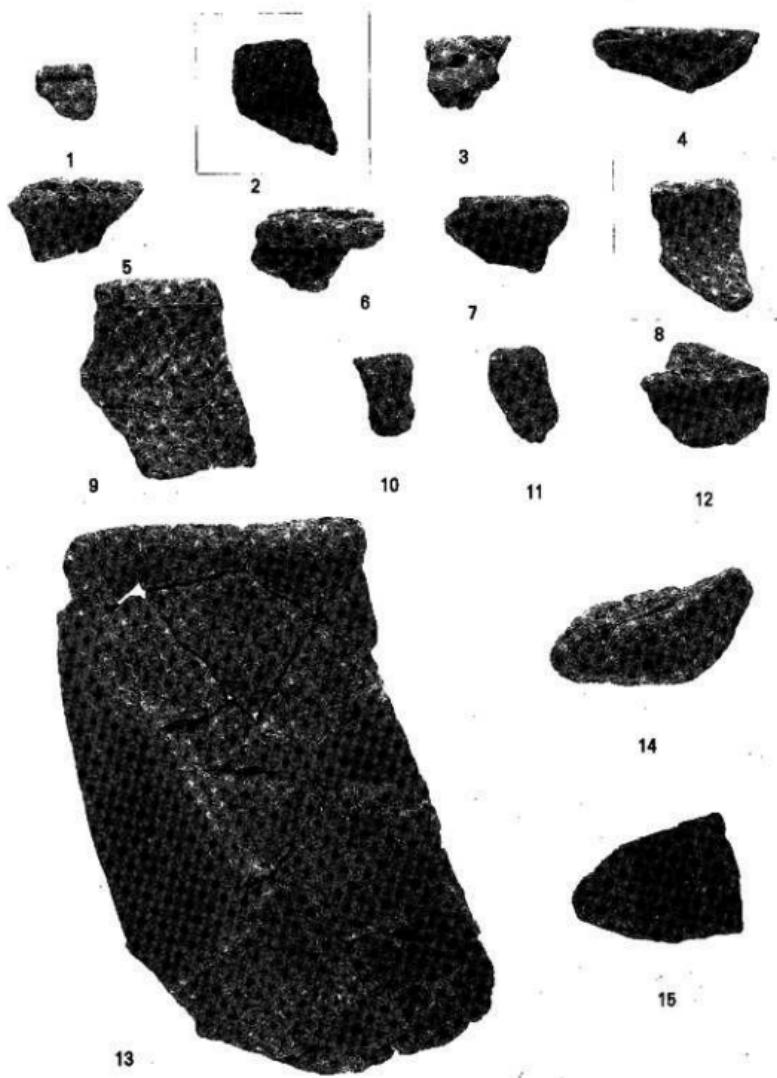
P.L.17 第1号床住内出土の土器



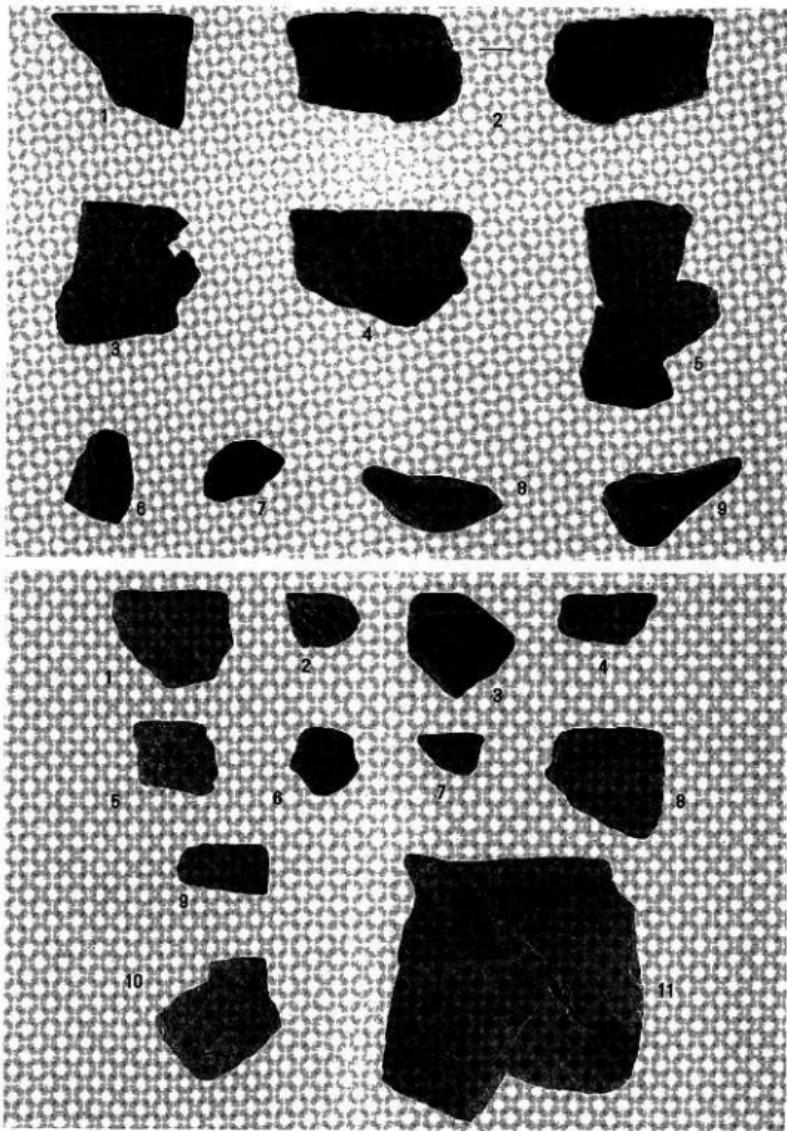
P.L.18 上：第1号縫床住居内出土の土器
下：第1号竪穴住居内出土の土器



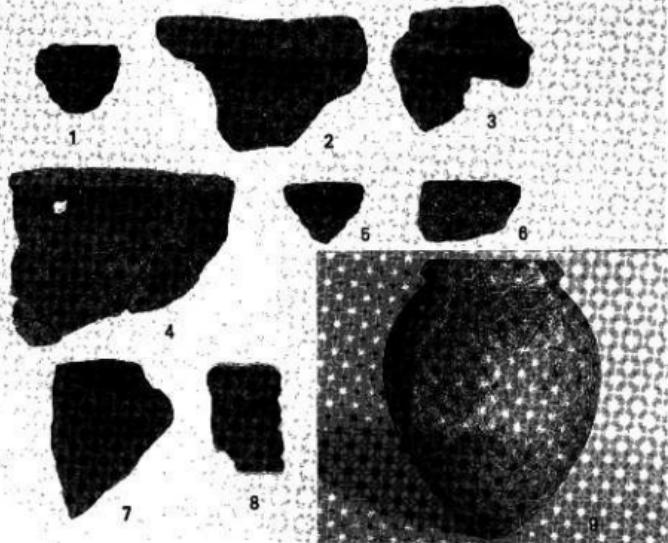
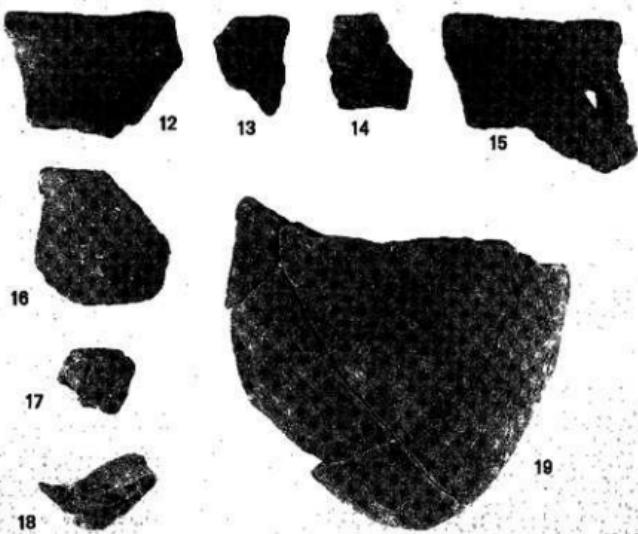
P.L.19 第2号堅穴住居内出土の土器



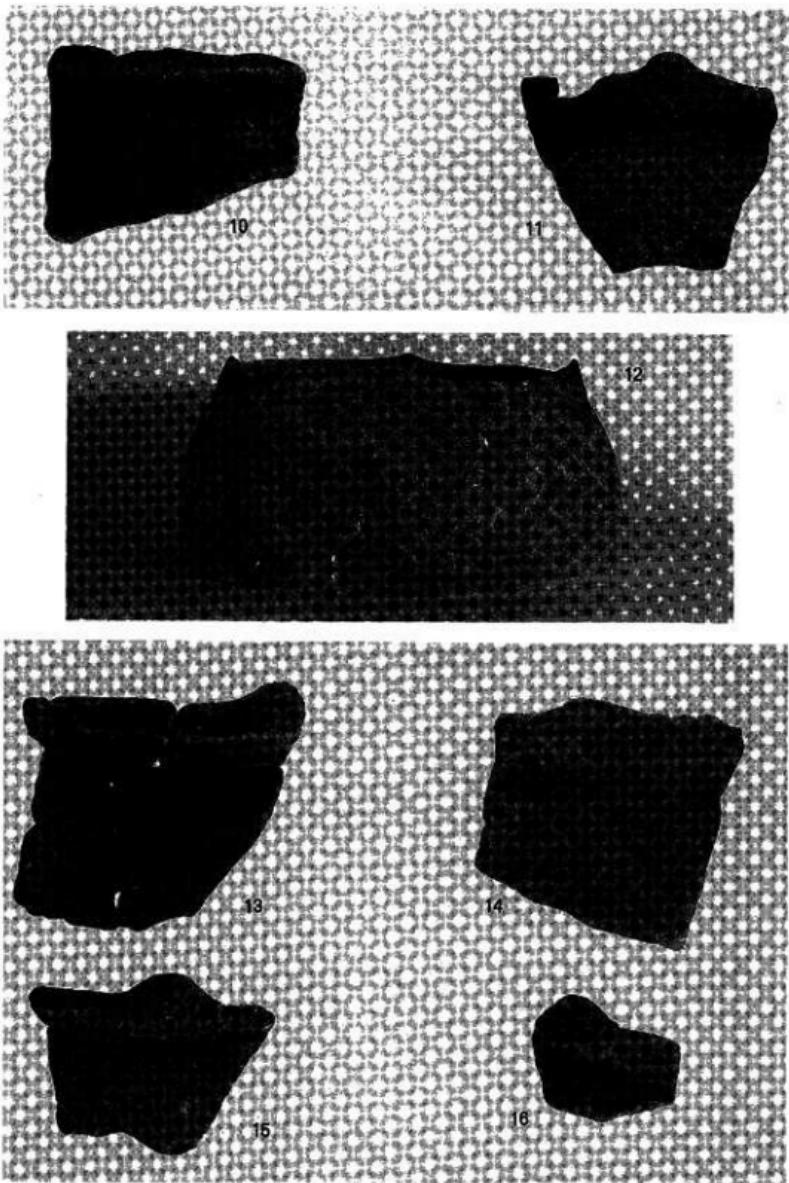
P.L.20 第3号竪穴住居内出土の土器



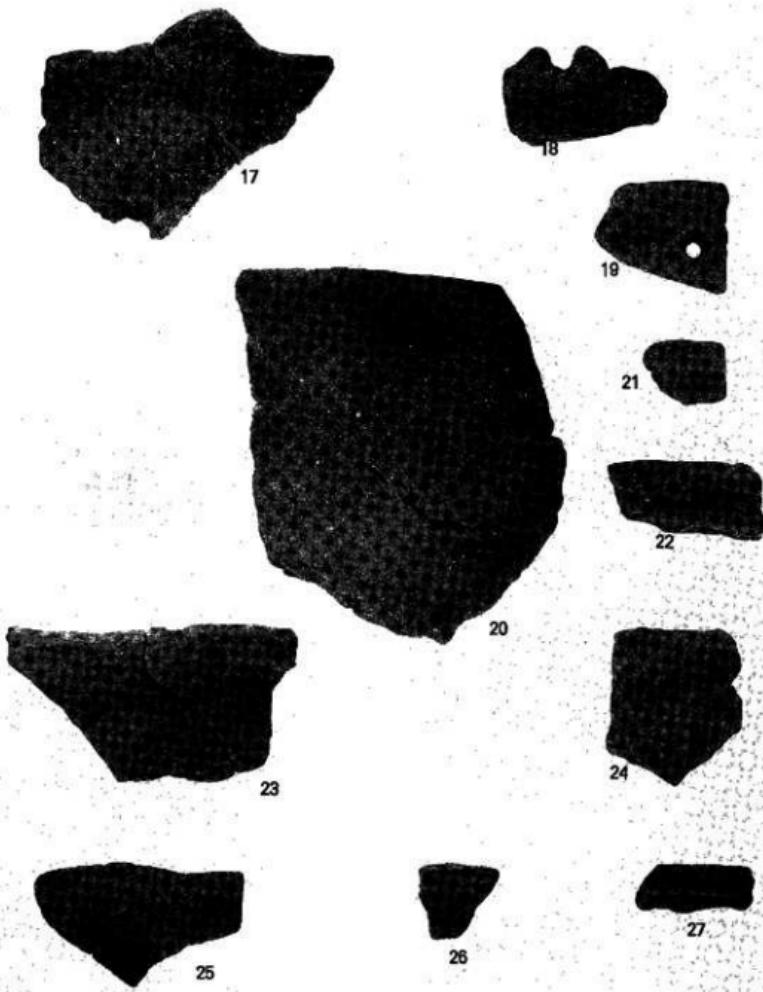
PL.21 上：第4号堅穴住居内出土の土器
下：第5号堅穴住居内出土の土器



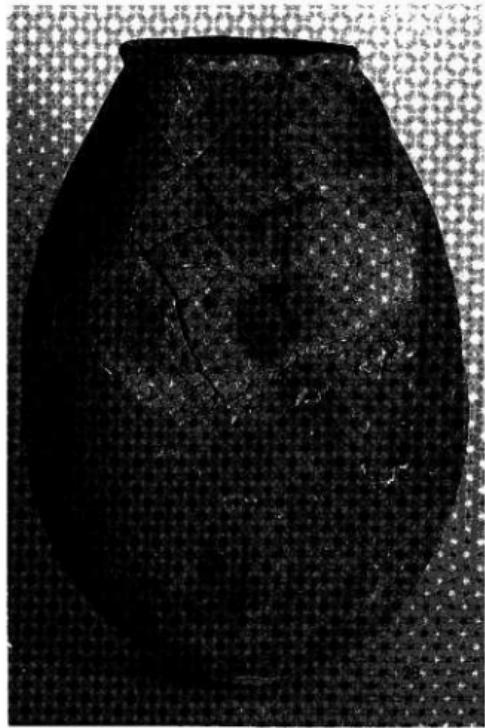
P.L.22 上：第5号竪穴住居内出土の土器
下：第6号竪穴住居内出土の土器



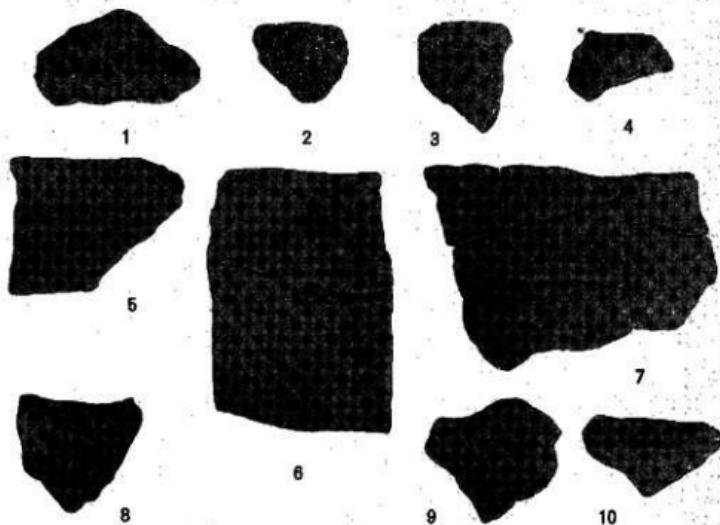
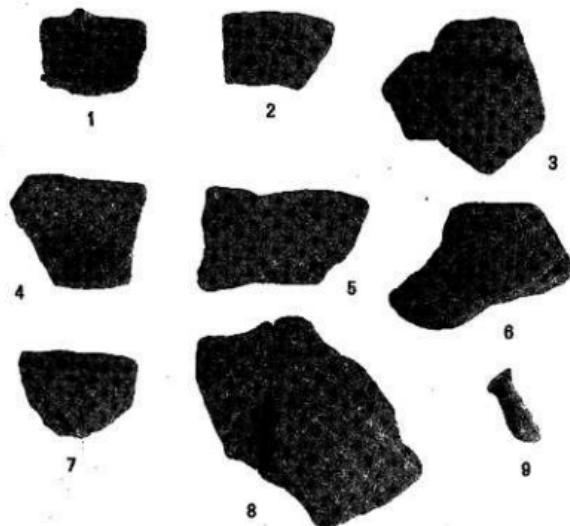
P.L.23 第6号竪穴住居内出土の土器



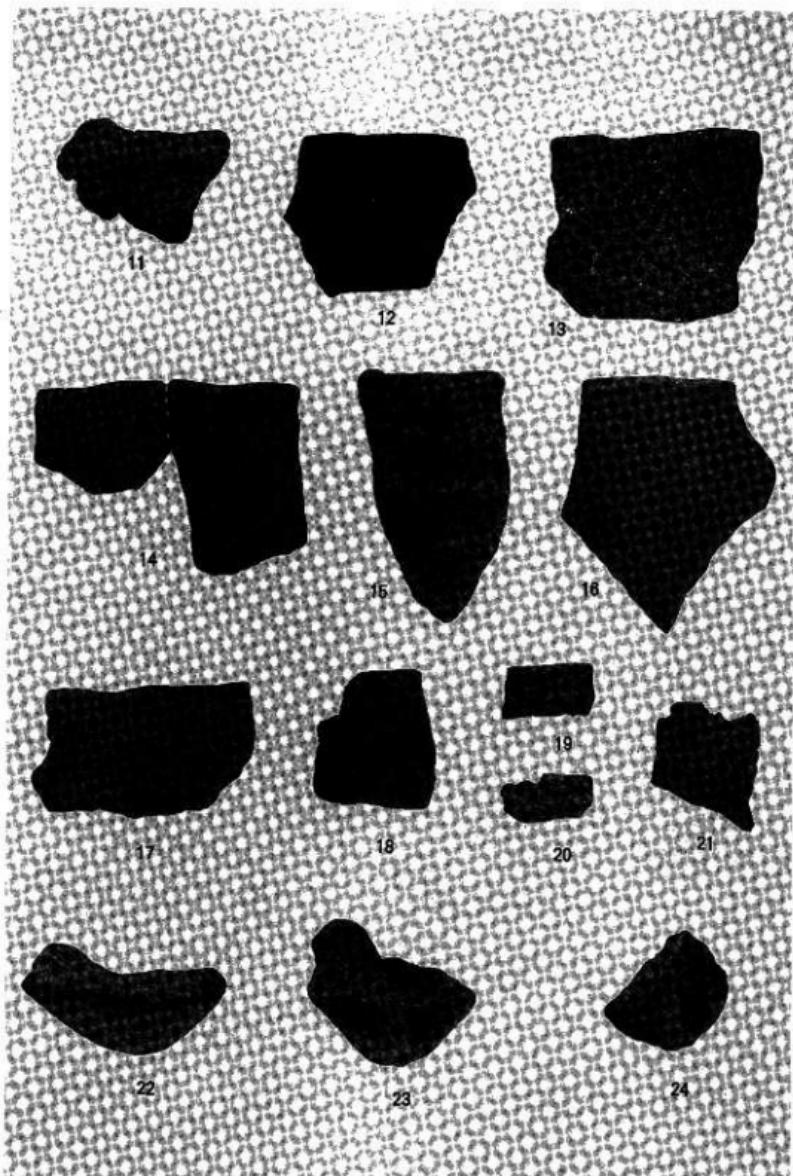
P L.24 第6号堅穴住居内出土の土器



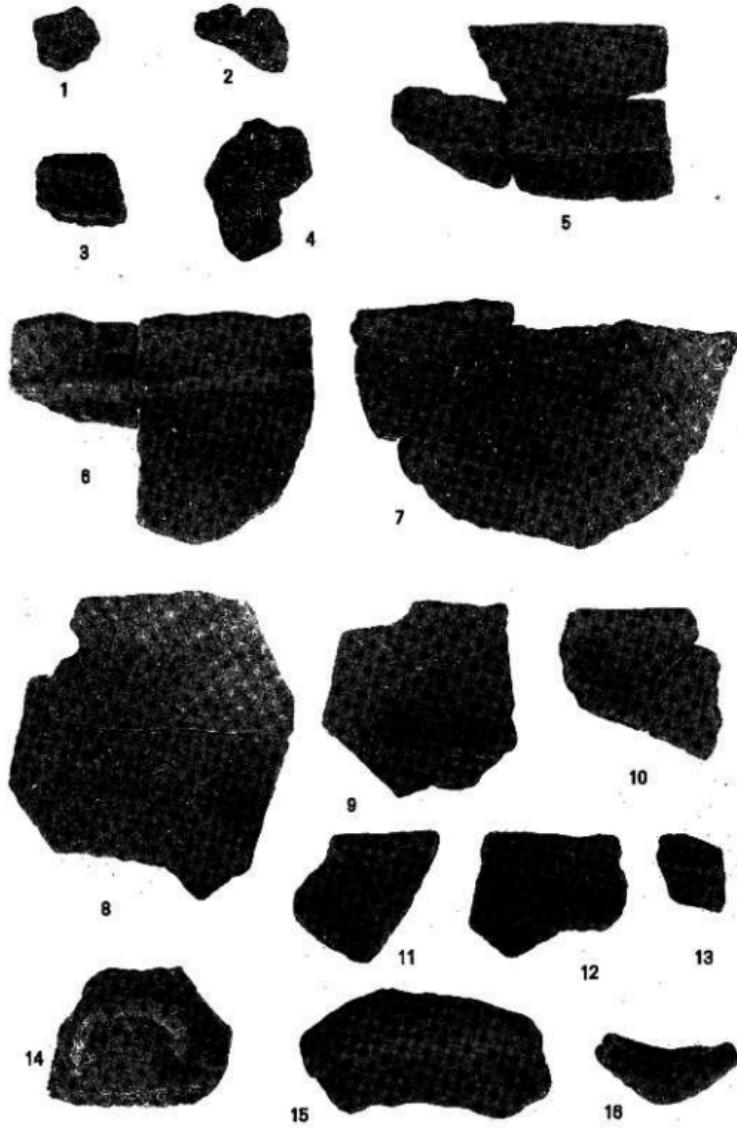
P.L.25 第6号竪穴住居内出土の土器



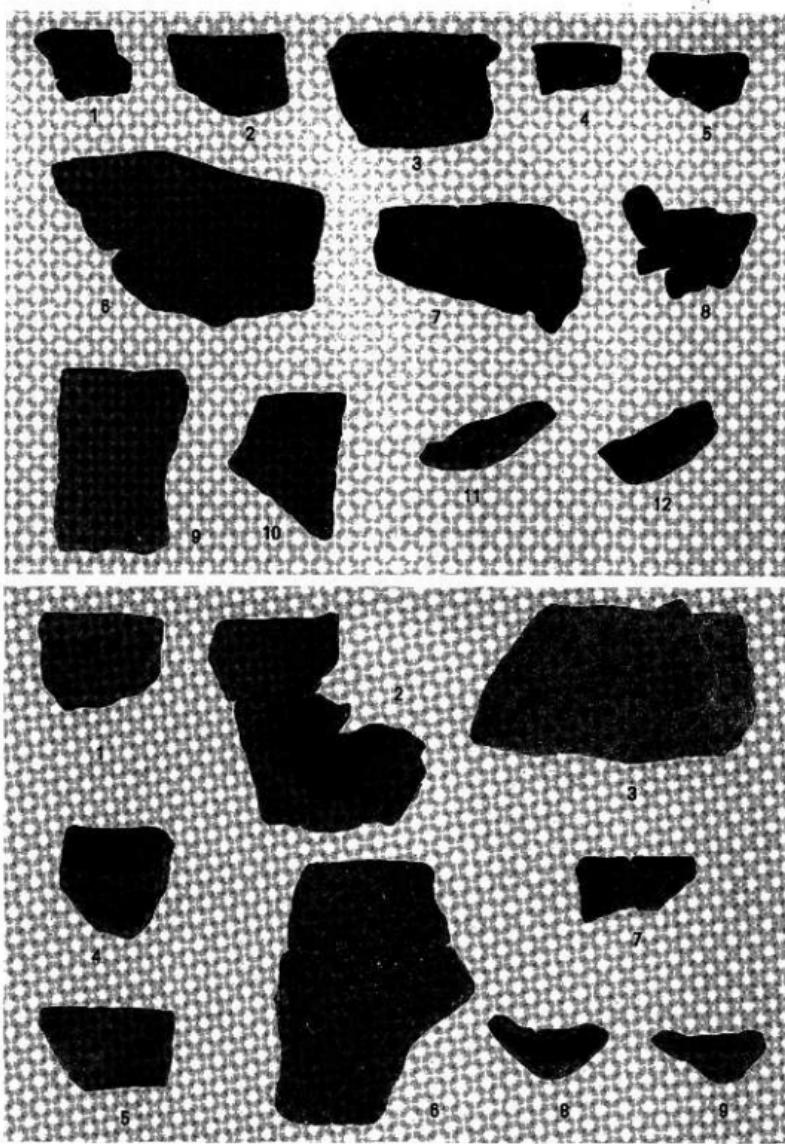
P L.26 上：第7号竖穴住居内出土の土器
下：第8号竖穴住居内出土の土器



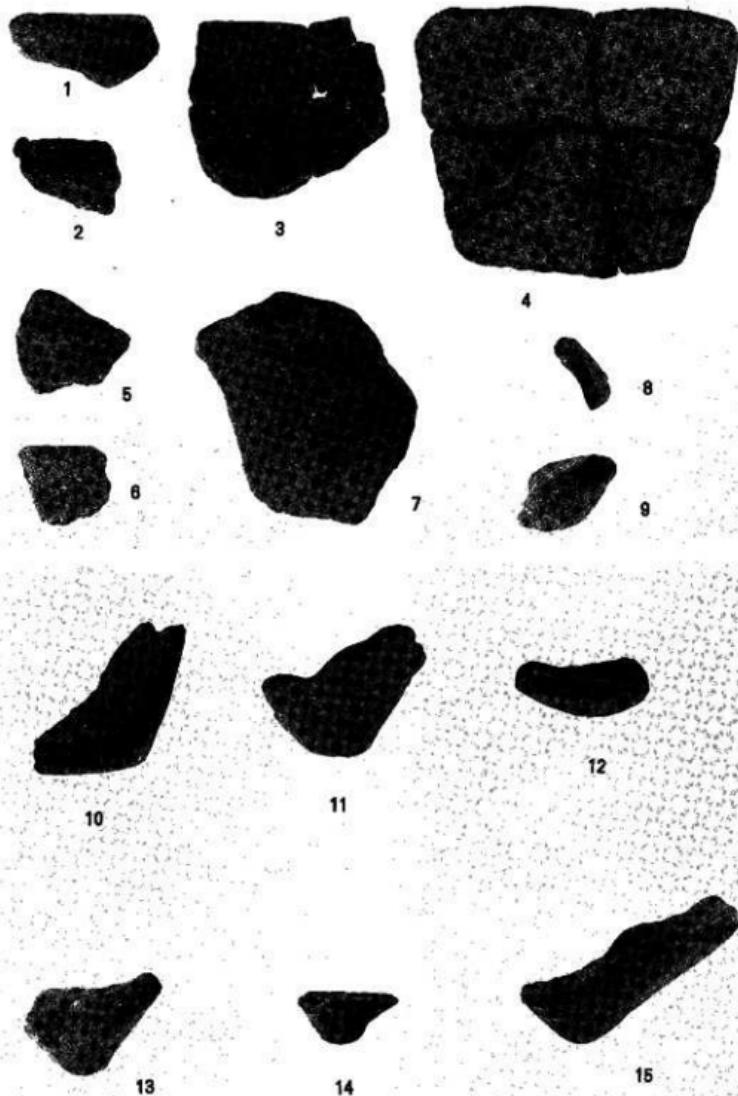
P.L.27 第8号堅穴住居内出土の土器



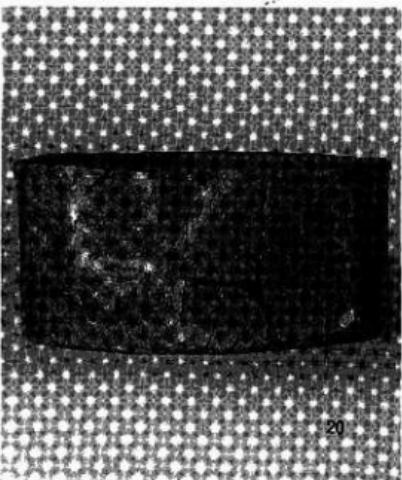
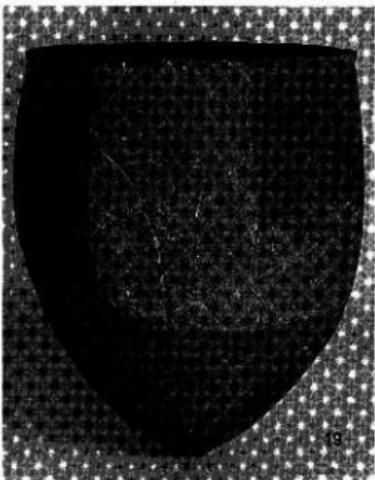
P.L.28 上：第9号竪穴住居内出土の土器
下： 同 上



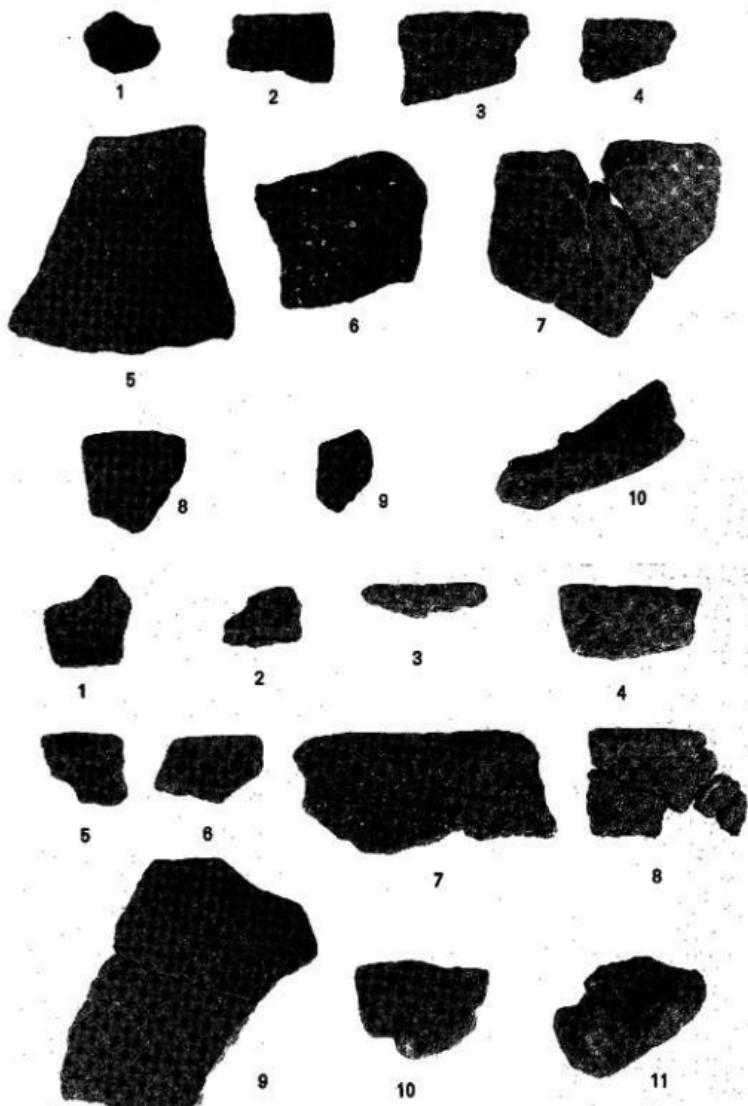
P.L.29 上：第10号竪穴住居内出土の土器
下：第11号竪穴住居内出土の土器



P.L.30 上：第12号竪穴住居内出土の土器
下： 同 上



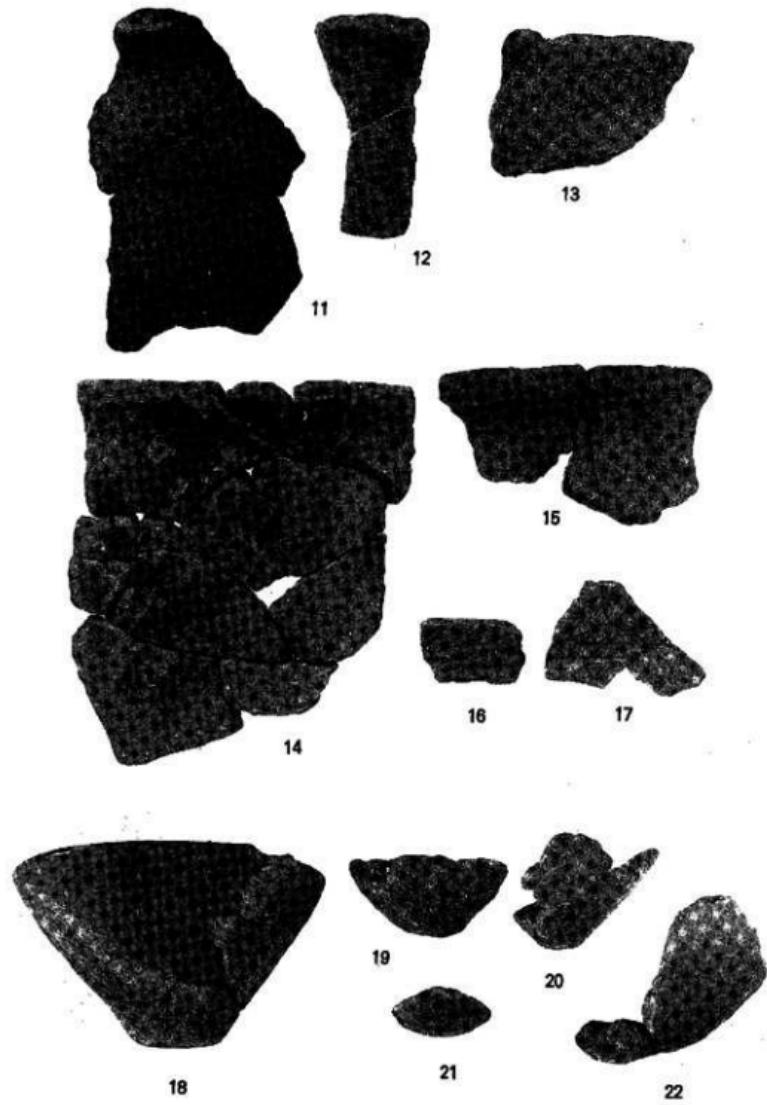
P.L.31 第12号竪穴住居内出土の土器



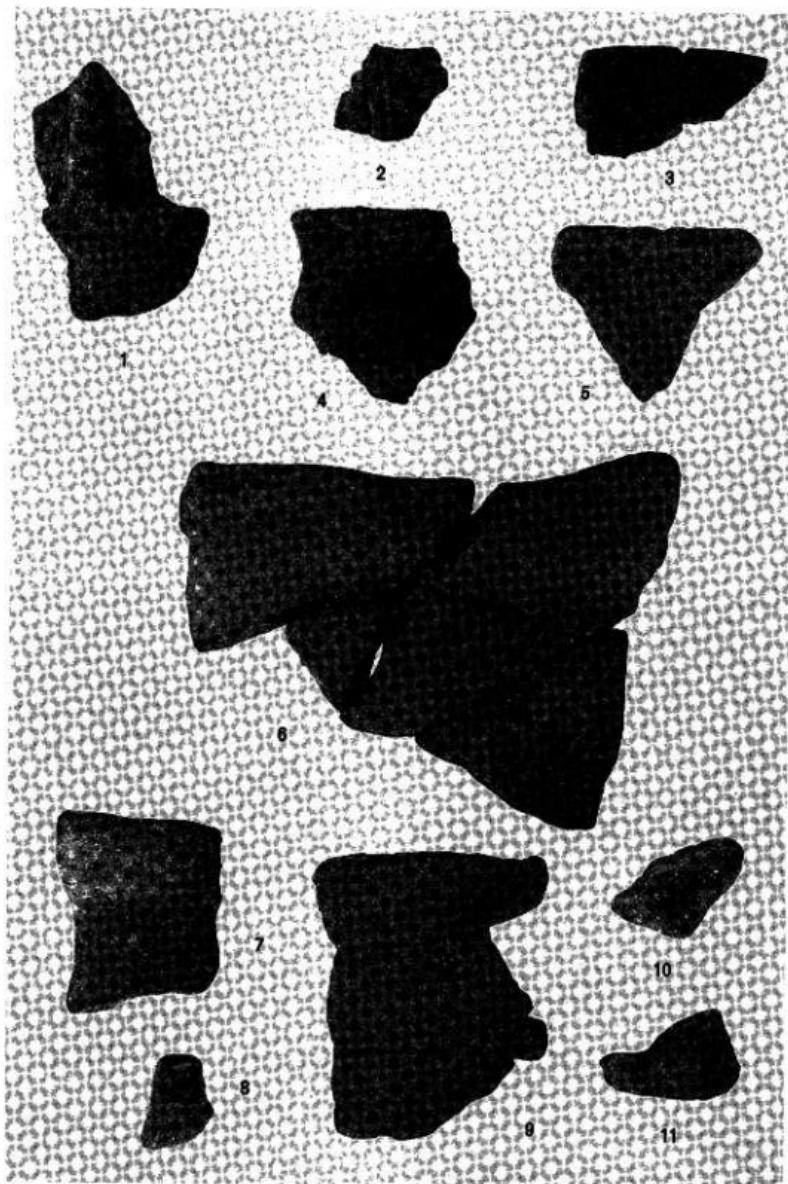
P.L.32 上：第13号竪穴住居内出土の土器
下：第14号竪穴住居内出土の土器



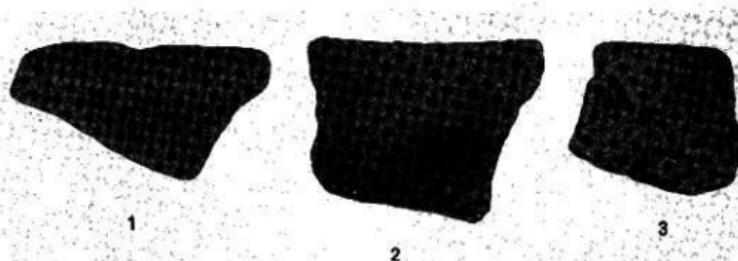
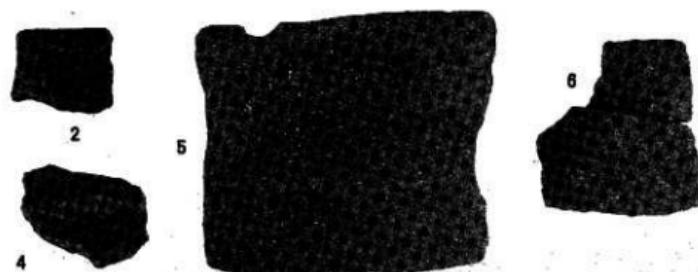
P.L.33 第15号竪穴住居内出土の土器



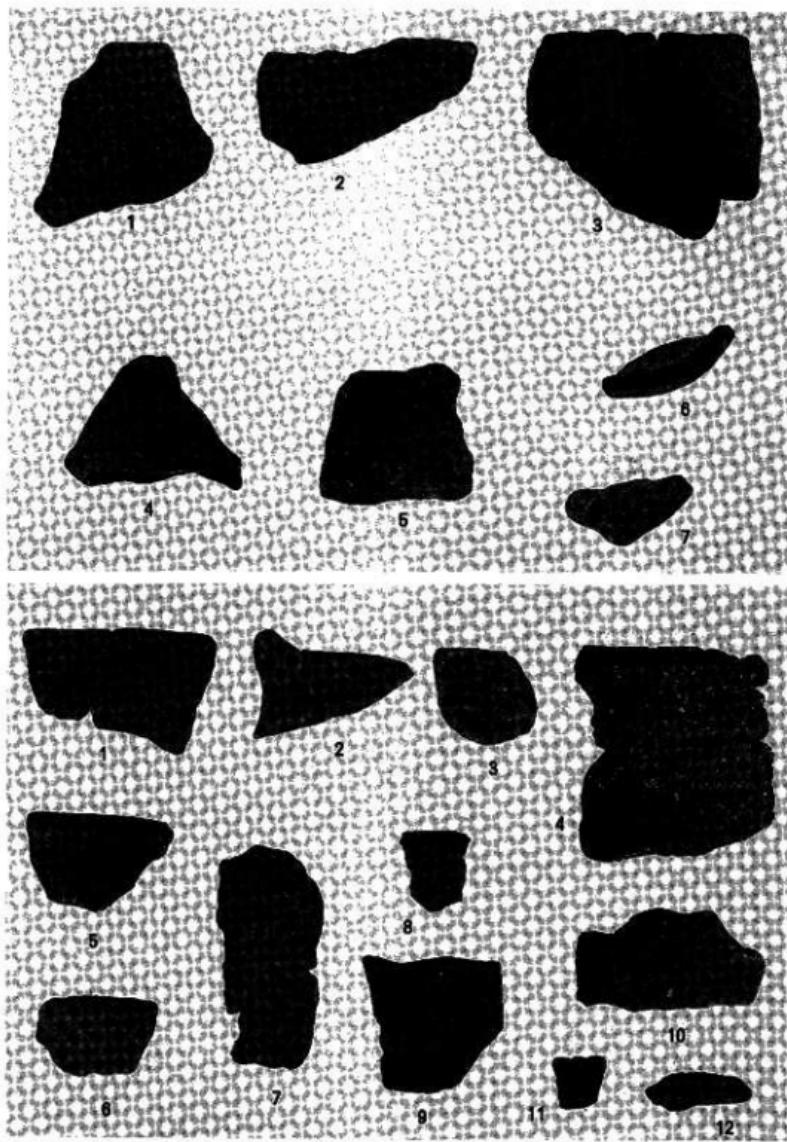
P L.34 第15号堅穴住居内出土の土器



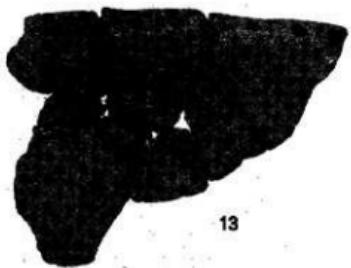
P L.35 第16号堅穴住居内出土の土器



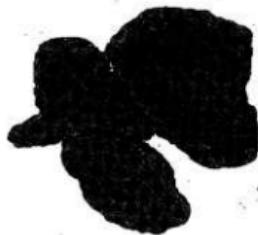
P.L.36 上：第17号竪穴住居内出土の土器
下：第18号竪穴住居内出土の土器



P.L.37 上：第19号竪穴住居内出土の土器
下：土留め石積み、E・F-33・34、その他グリット出土の土器



13



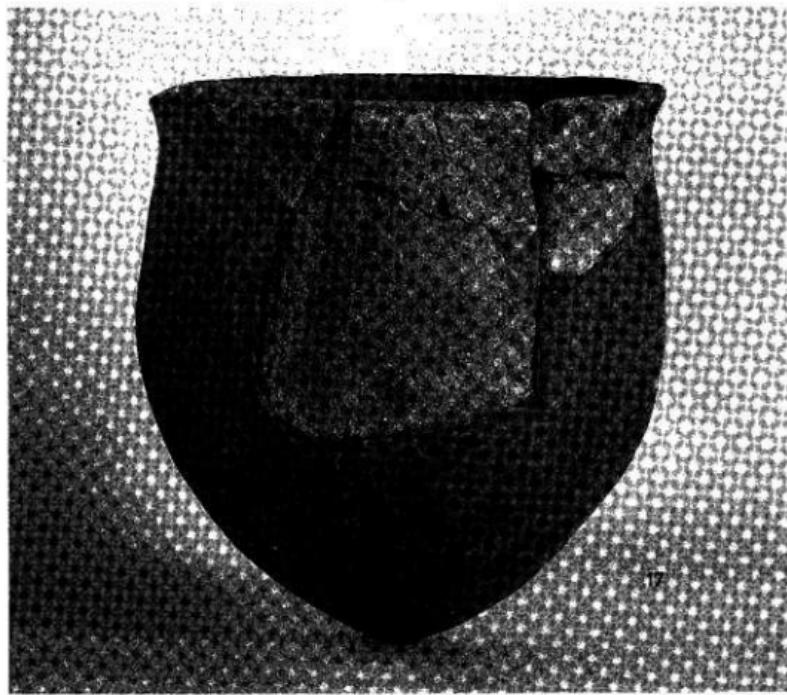
15



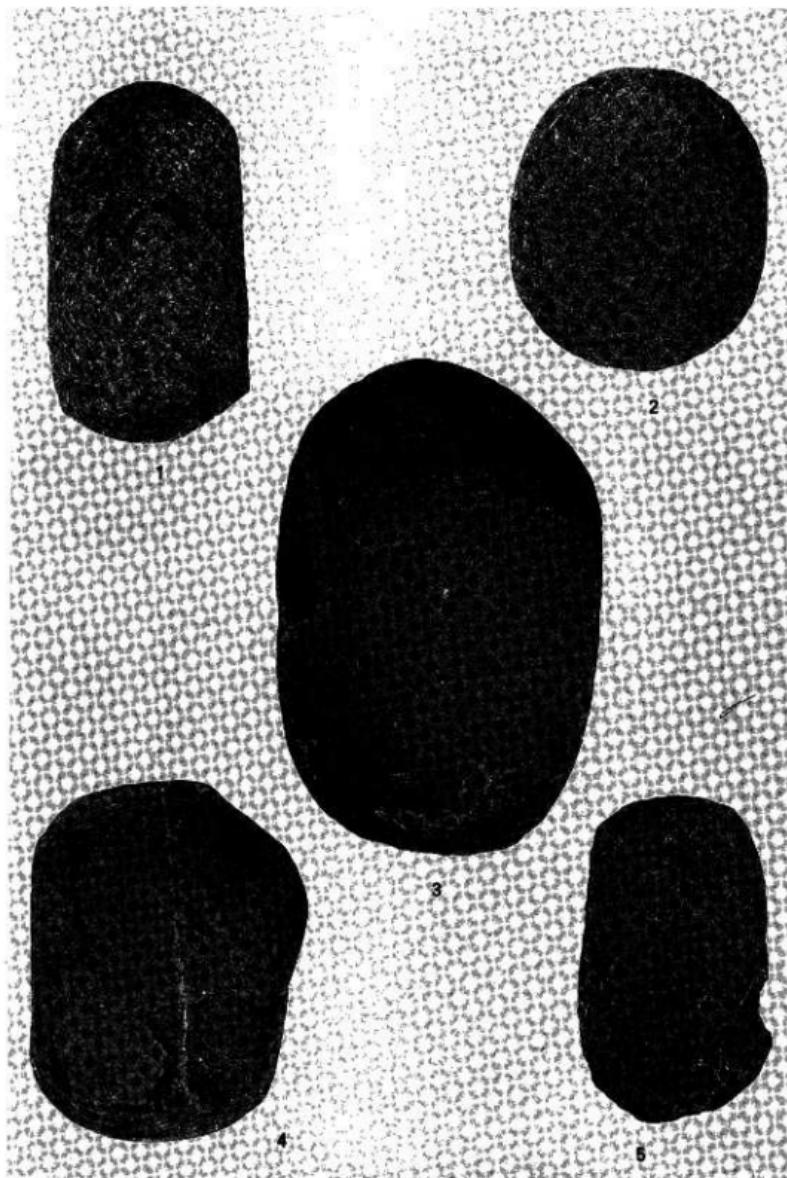
14



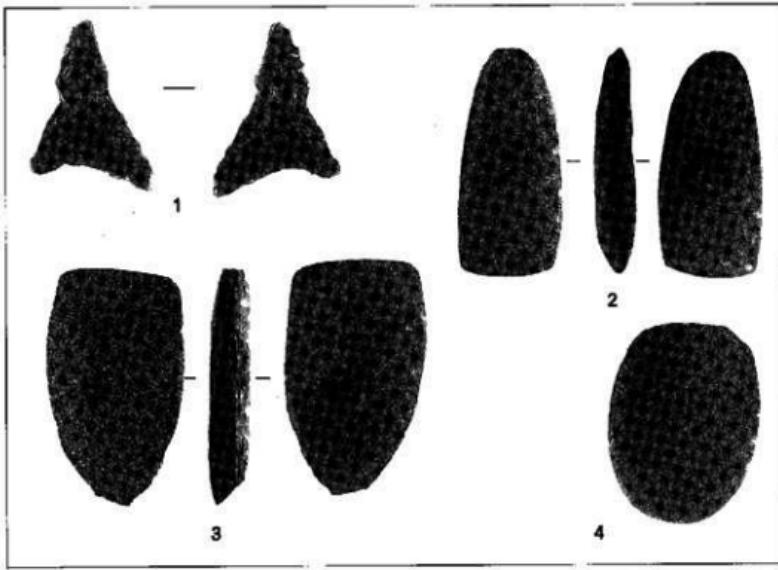
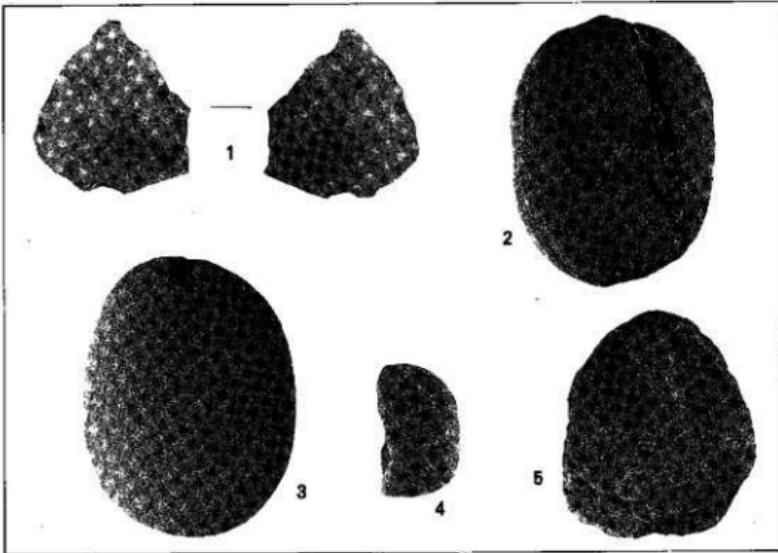
16



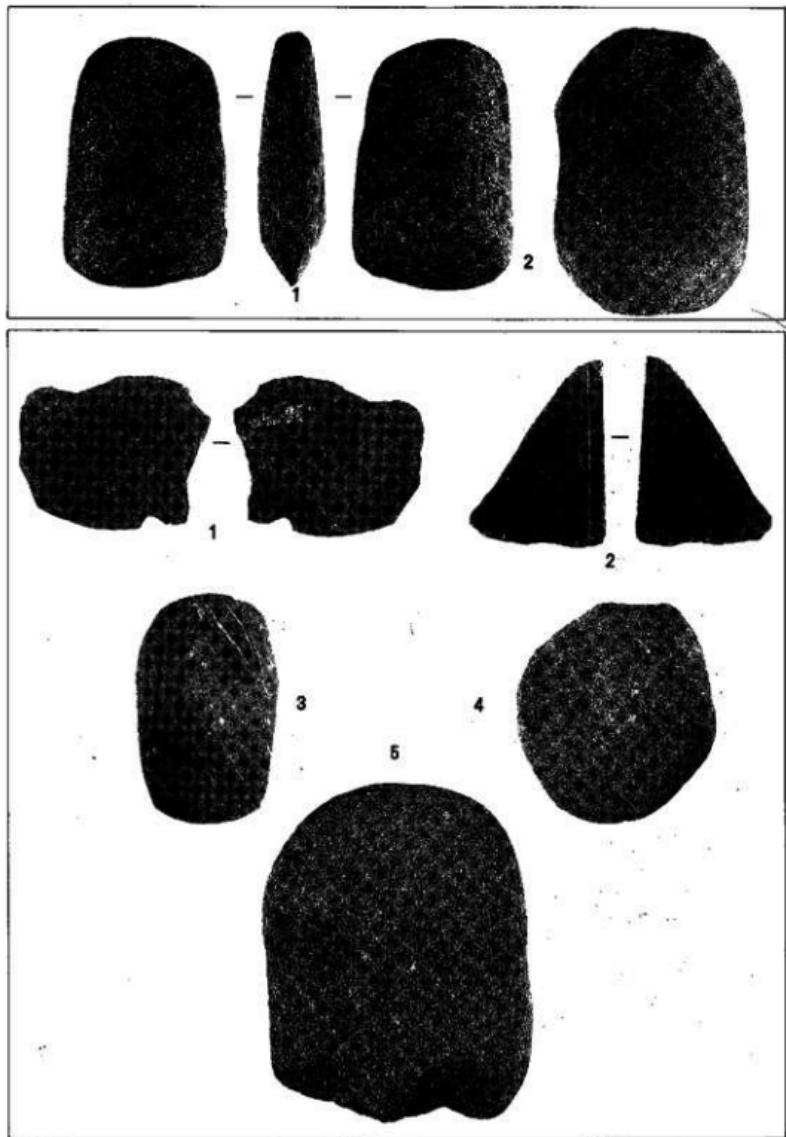
P.L.38 土留め石積み、E・F-33・34、その他グリット出土の土器



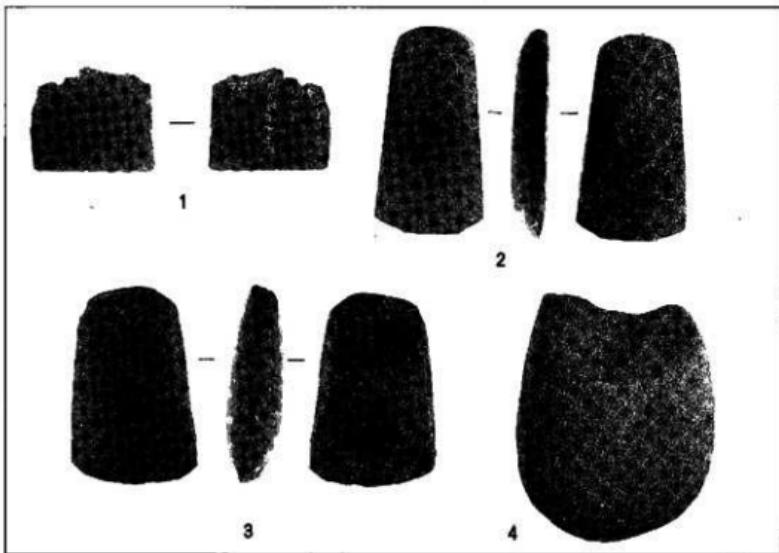
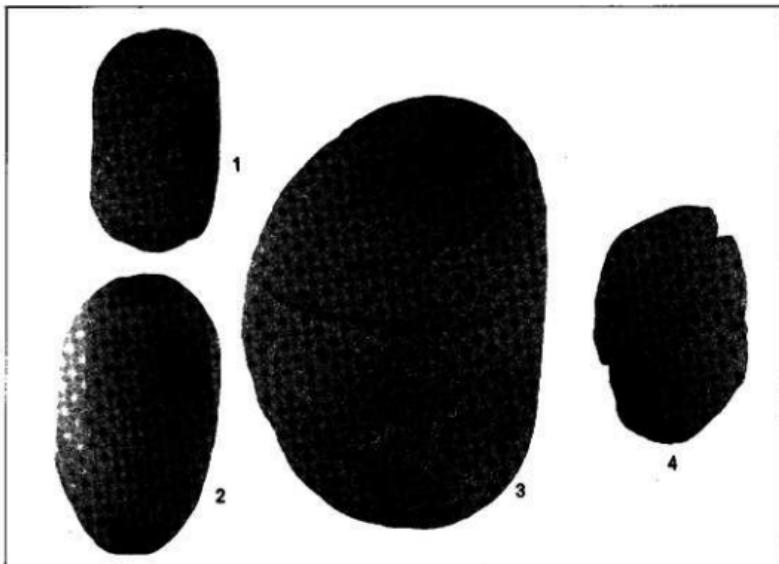
PL.39 第1号縄床住居内出土の石器 1~3
第1号堅穴住居出土の石器4, 第2号堅穴住居内出土の石器5



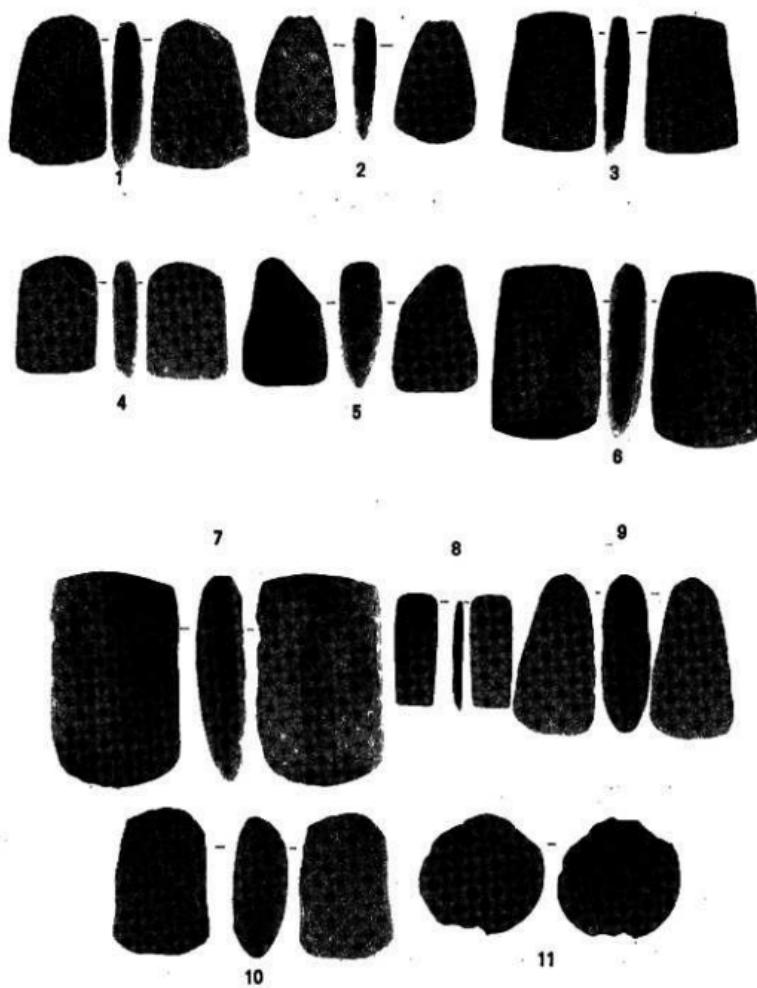
PL.40 上：第4号竖穴住居内出土の石器1～5
下：第5号竖穴住居内出土の石器1～4



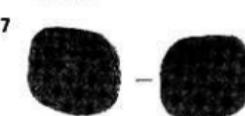
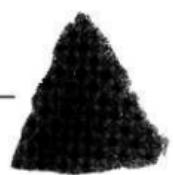
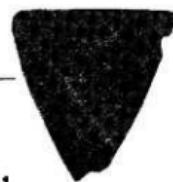
P.L.41 上：第6号堅穴住居内出土の石器1・2
下：第7号堅穴住居内出土の石器1～5



P.L.42 上：第8号竪穴住居内出土の石器1～4
下：第9号竪穴住居内出土の石器1～4

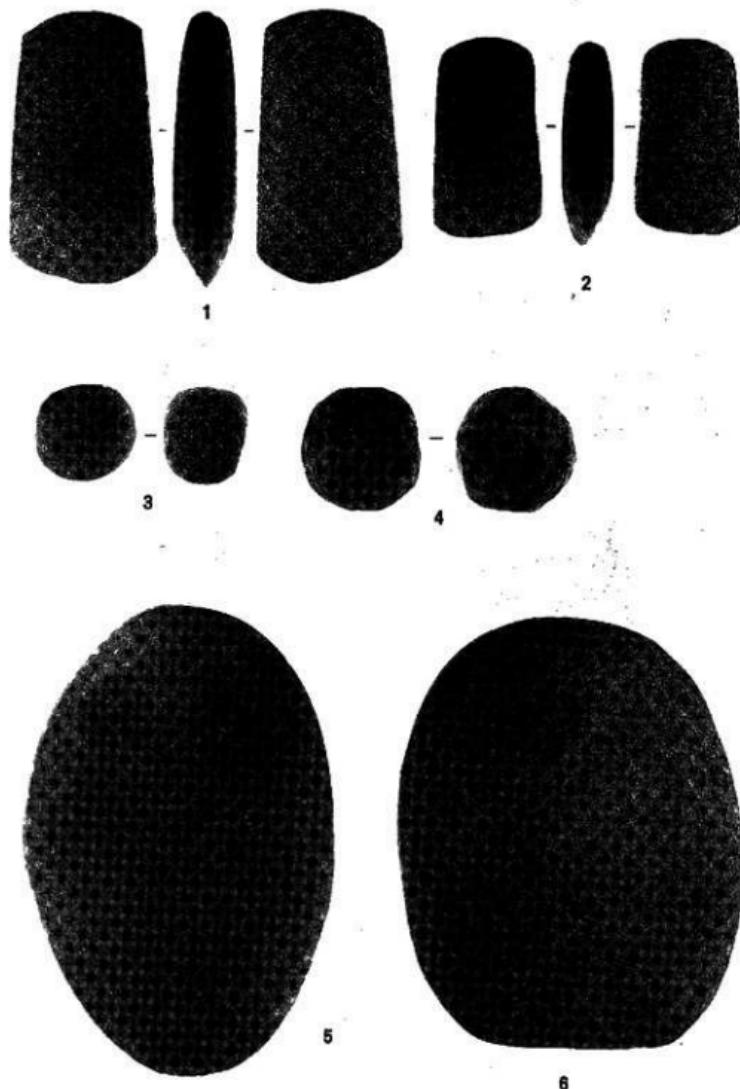


P.L.43 第10号堅穴住居内出土の石器 1~11

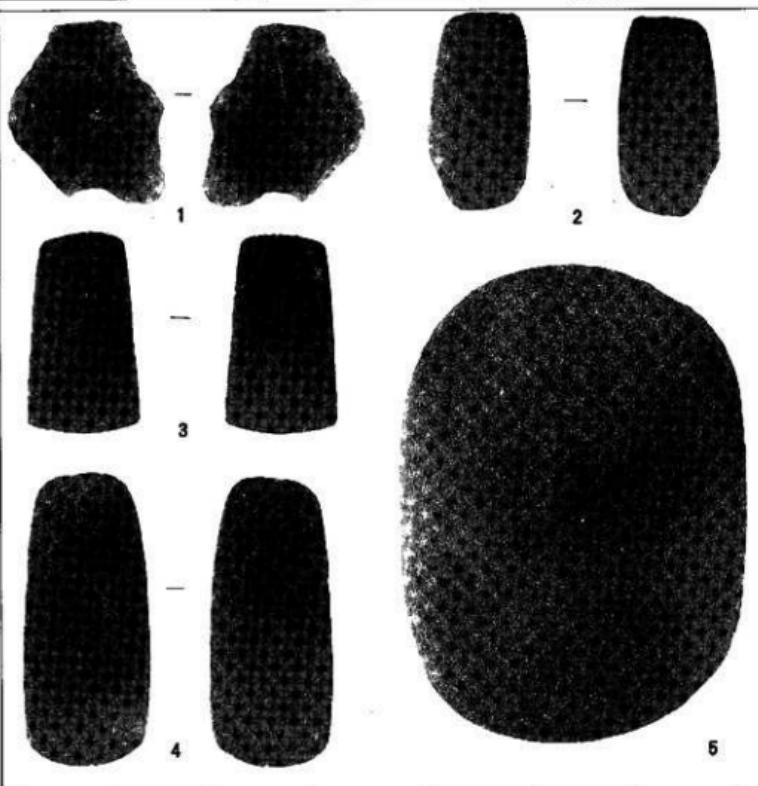
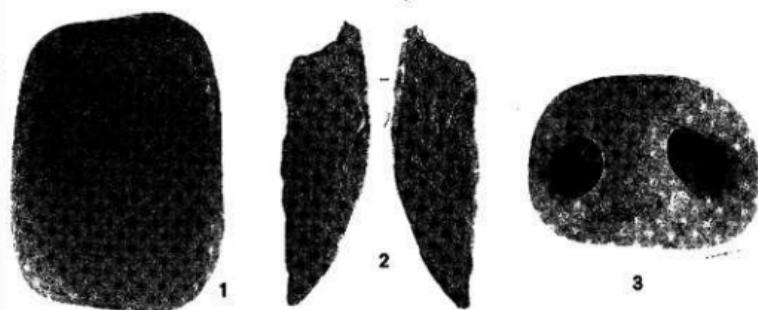


9

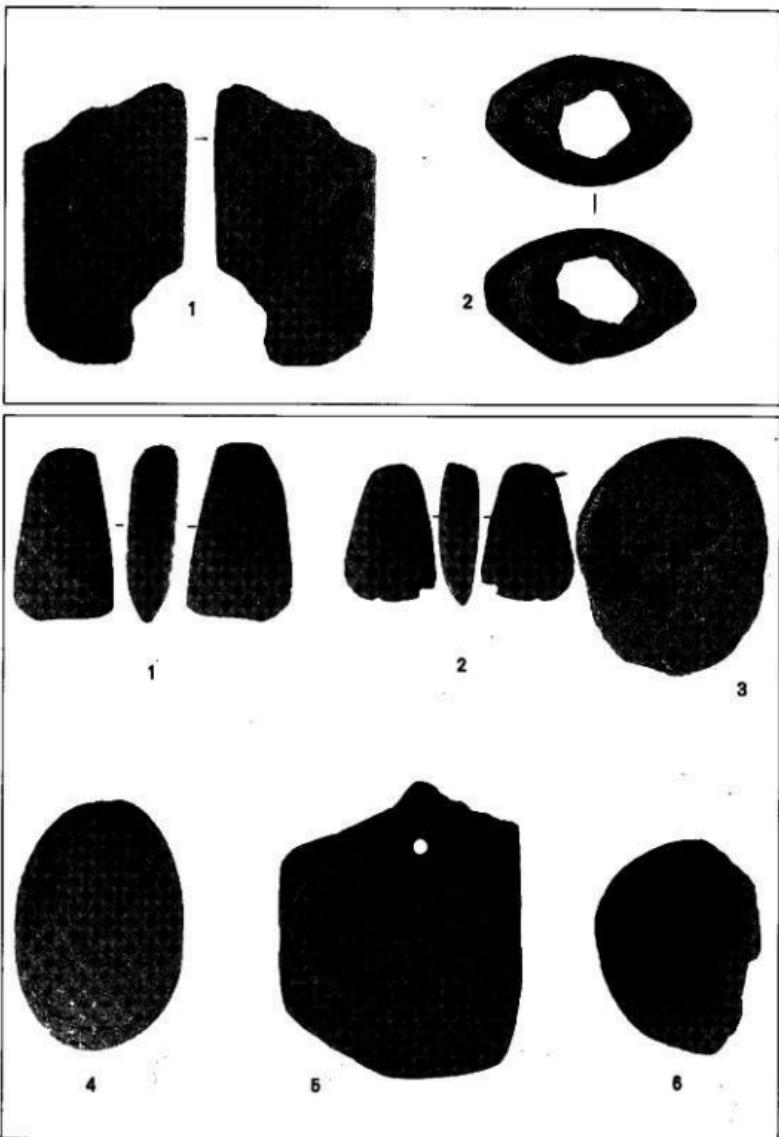
P.L.44 第11号縦穴住居内出土の石器 1~9



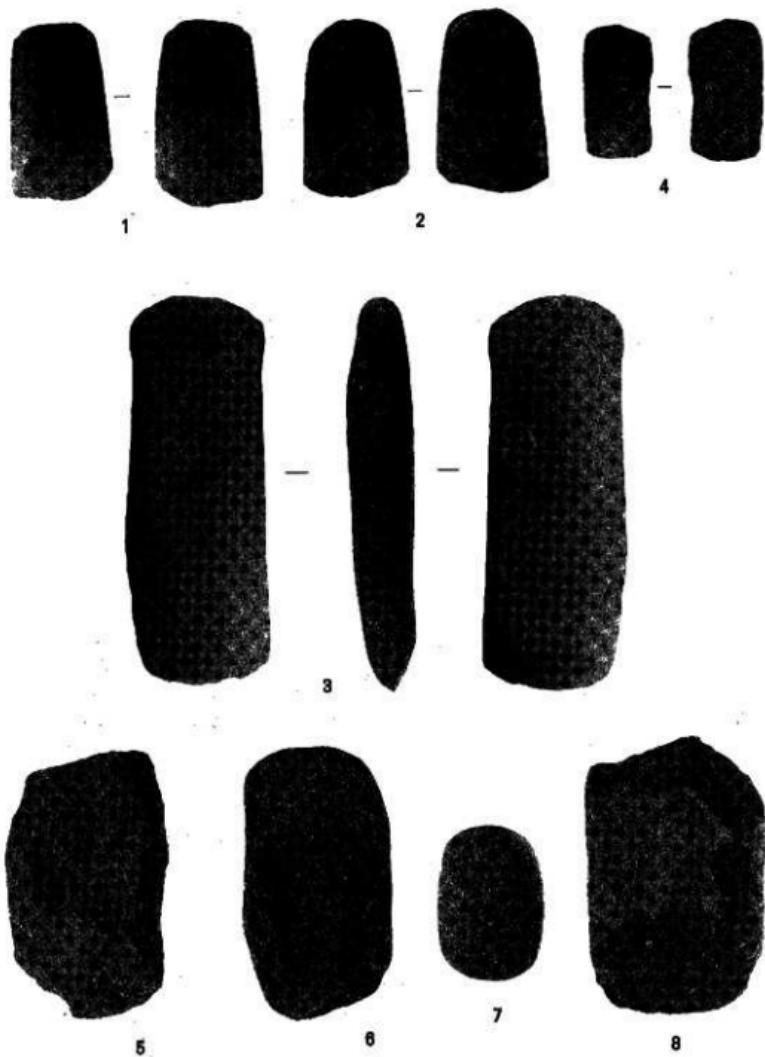
P.L.45 第12号室住居内出土の石器 1~6



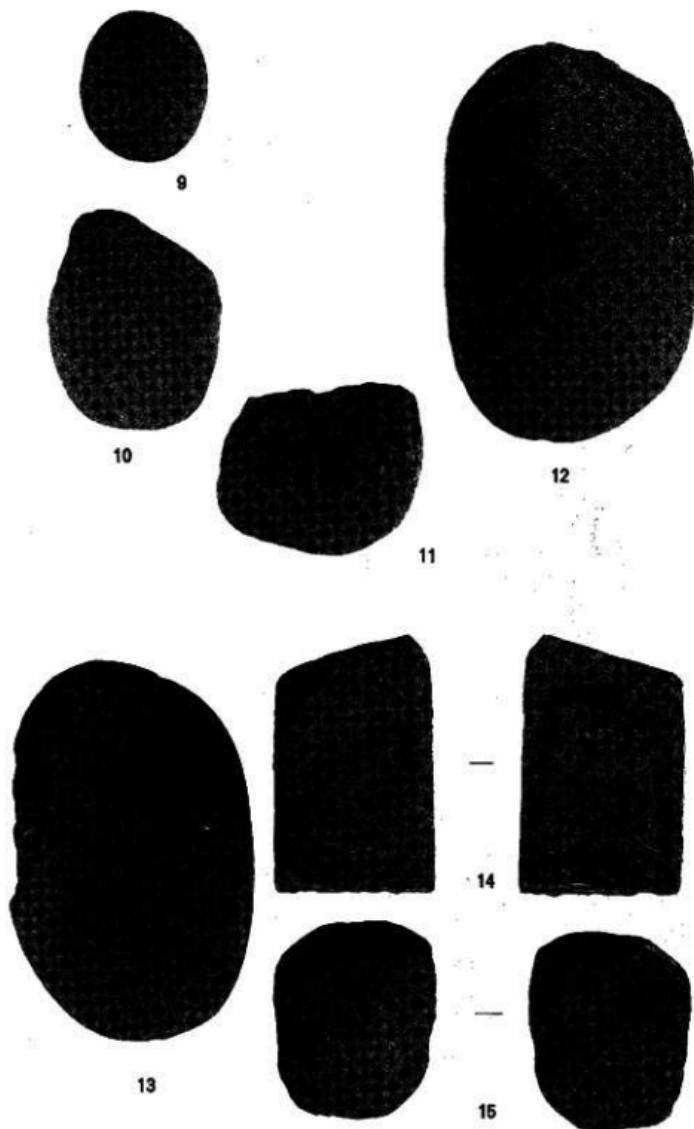
P L.46 上：第13・15号竪穴住居内出土の石器 1～3
下：第17号竪穴住居内出土の石器 1～5



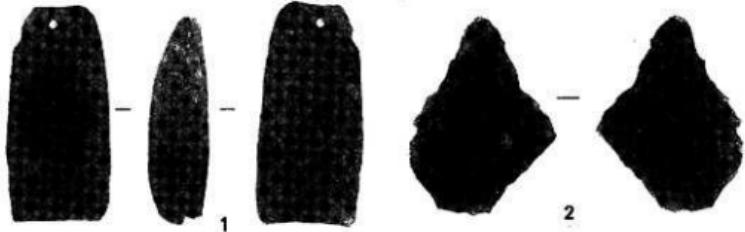
P.L.47 上：第19号墳穴住居内出土の石器1・2
下：土留め石積み・遺構内出土の石器1～6



PL.48 E・F-33・34グリット出土の石器1～8



P.L.49 E・F-33・34グリット出土の石器9～15



1

2



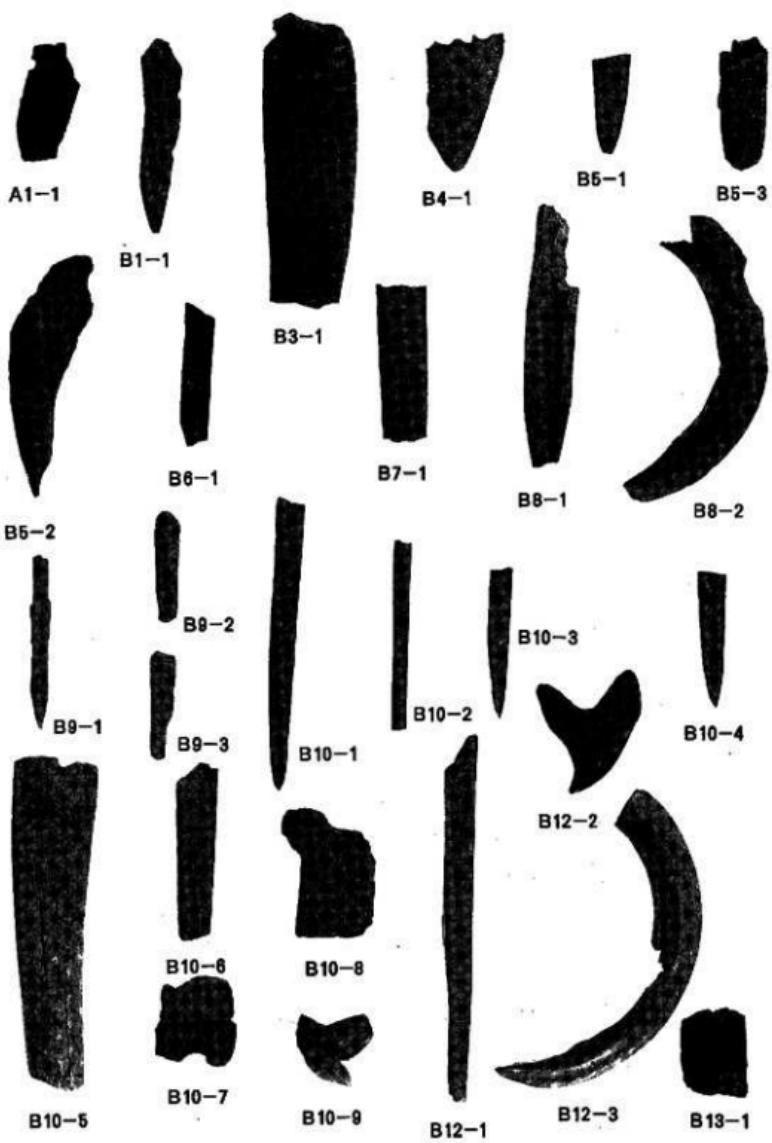
3

4

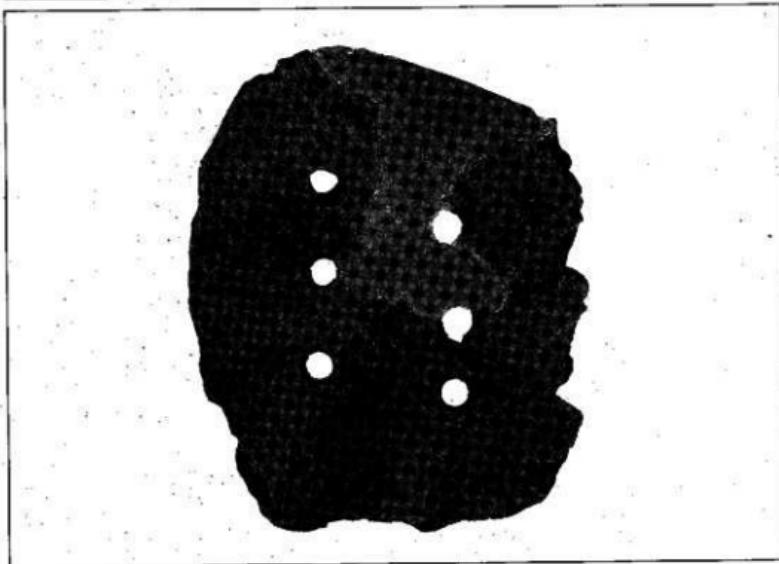
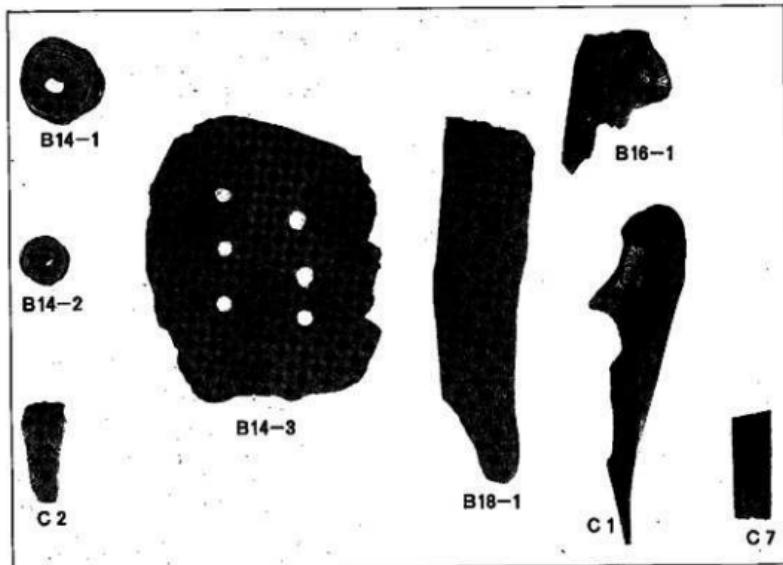


5

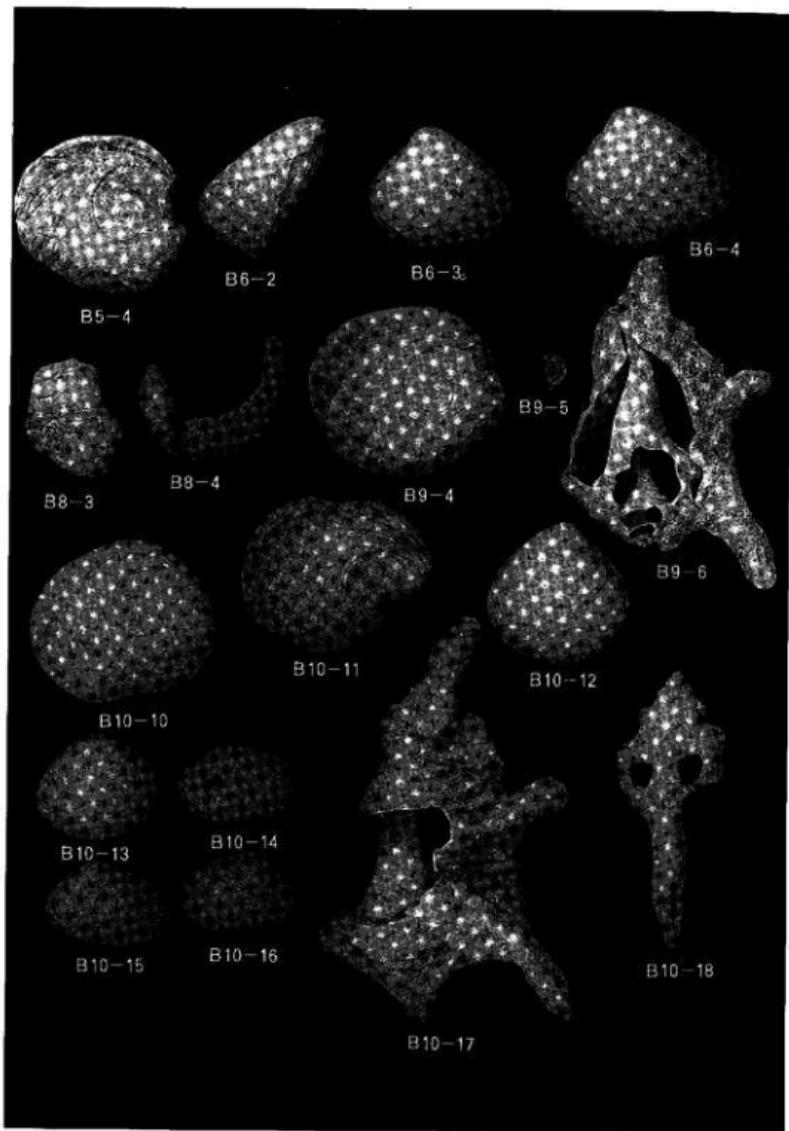
P.L.50 遺構外出土の石器 1~5

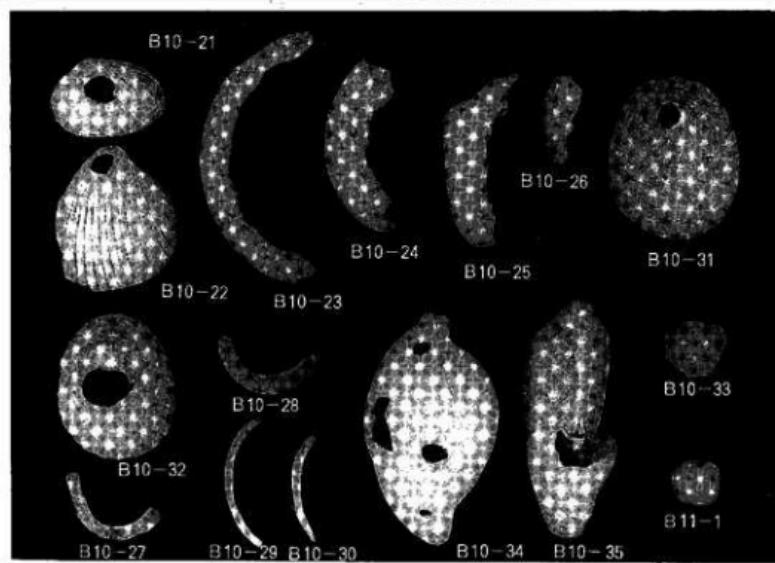
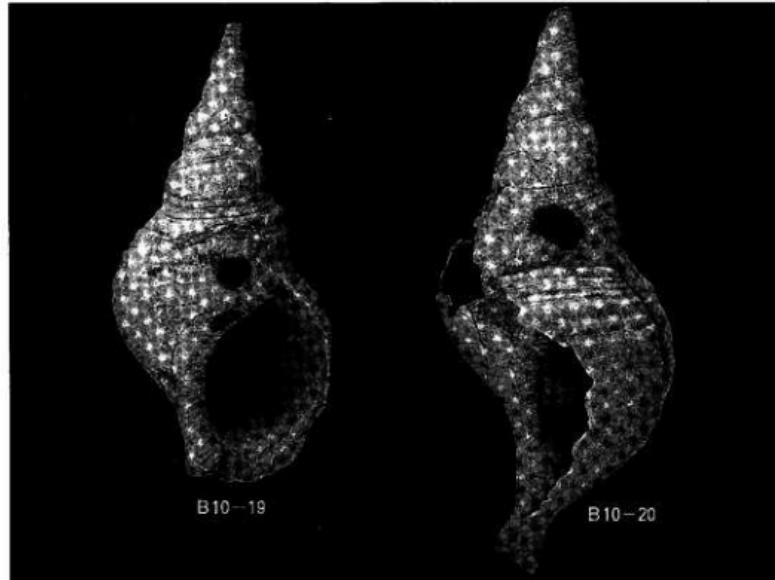


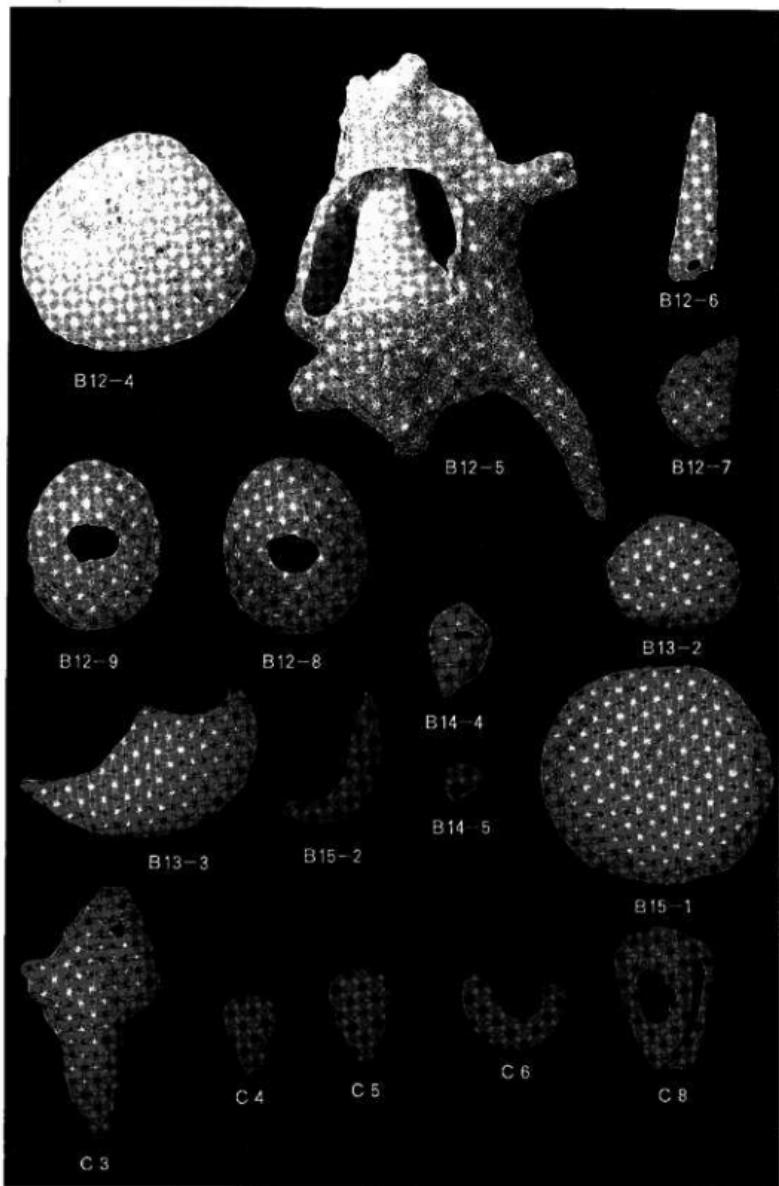
PL.51 骨製品



PL.52 骨製品（下：はB14-3の拡大）







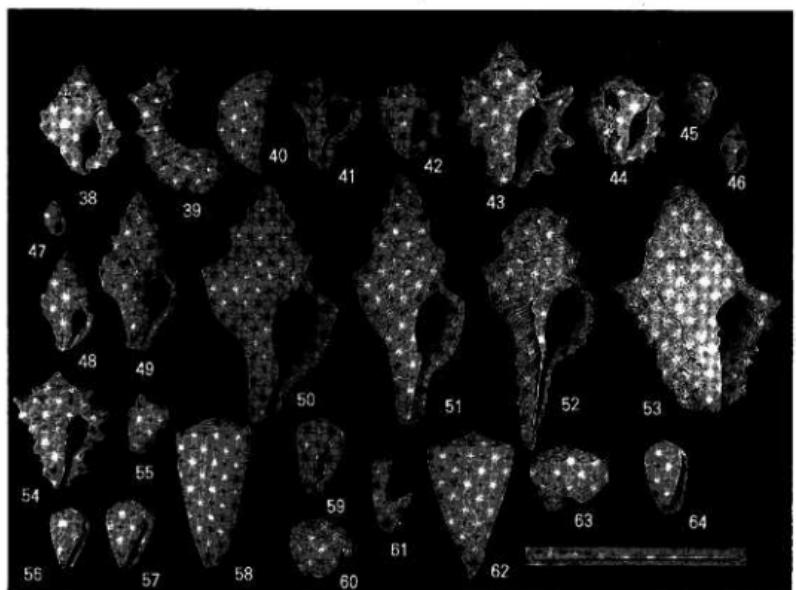
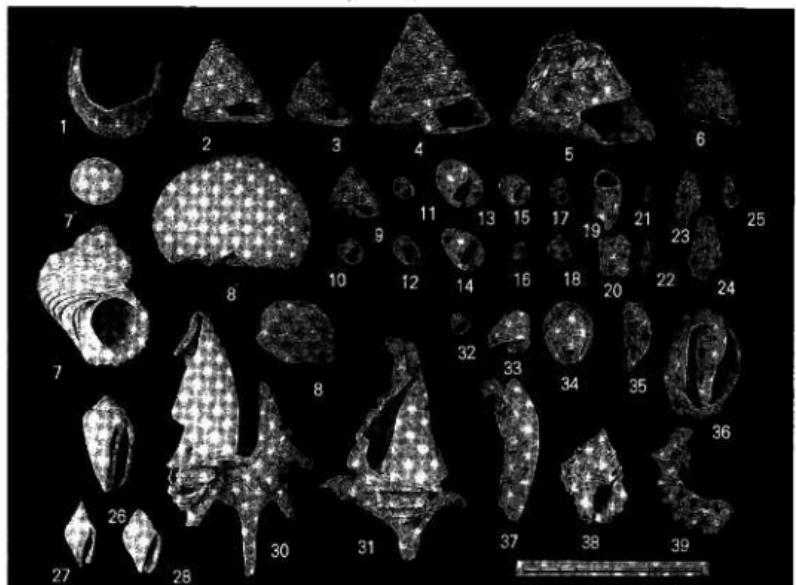
PL.55 貝 製 品

上

- | | | |
|----------------|----------------|---------------|
| 1 オオベッコウガサガイ | 2 ニシキウズガイ | 3 ムラサキウズガイ |
| 4 ギンタカハマガイ | 5 サラサバティ | 6 サラサバティ属の一種 |
| 7 チョウセンザザエ | 7' チョウセンザザエのフタ | 8 ヤコウガイ |
| 8' ヤコウガイのフタ | 9 オオウラウズガイ | 10 コシダカアマガイ |
| 11 イシダタミアマオブネ | 12 リュウキュウアマガイ | 13 ニシキアマガイ |
| 14 アマオブネ | 15 マルアマオブネ | 16 ヒメカノコガイ |
| 17 ホソスジウズラタマビキ | 18 コンペイトウガイ | 19 リュウキュウヘビガイ |
| 20 フタモチヘビガイ | 21 ヘナタリ | 22 イボウミニナ |
| 23 マドモチウミニナ | 24 キバウミニナ | 25 カヤノミカニモリガイ |
| 26 マガキガイ | 27 オハグロガイ | 28 ネジマガキガイ |
| 30 クモガイ | 31 スイジガイ | 32 ホウシュノタマガイ |
| 33 タマガイ | 34 ハナマルユキガイ | 35 ホシキヌタガイ |
| 36 ヤクシマダカラガイ | 37 ホシダカラガイ | 38 オキニシ |
| 39 オオナルトボラ | | |

下

- | | | |
|-------------|--------------|-----------------|
| 38 オキニシ | 39 オオナルトボラ | 40 ウズラガイ |
| 41 ガンゼキボラ | 42 ツノレイシ | 43 シラクモガイ |
| 44 アカイガレイシ | 45 ウネレイシダマシ | 46 スジグロホラダマシ |
| 47 ヨツバイモドキ | 48 ツノマタガイモドキ | 49 リュウキュウツノマタガイ |
| 50 イトマキボラ | 51 ナガイトマキボラ | 52 チトセボラ |
| 53 オニコブシガイ | 54 コオニコブシガイ | 55 ニシキノキバフデガイ |
| 56 マグライモガイ | 57 サヤガタイモガイ | 58 ヤセイモガイ |
| 59 キヌカツギガイ | 60 イボシマイモガイ | 61 ヤナギシボリイモガイ |
| 62 サラサミナシガイ | 63 クロミナシガイ | 64 コモソイモガイ |



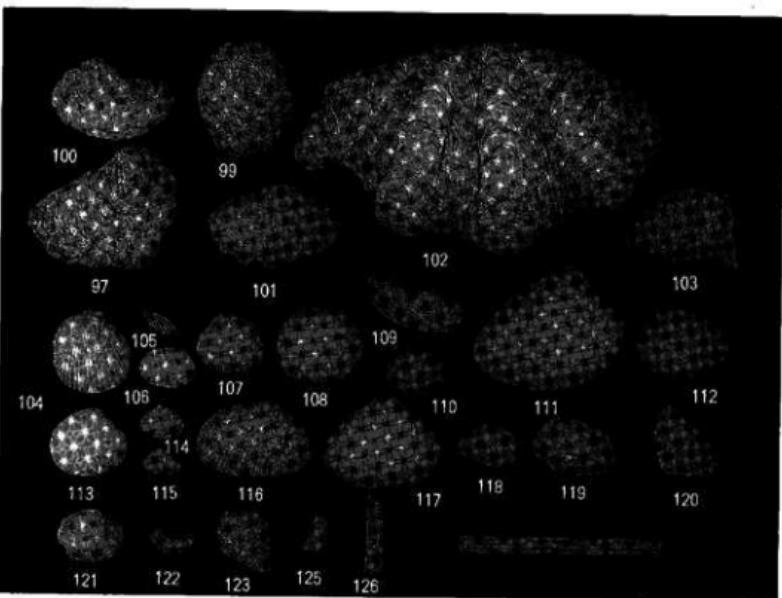
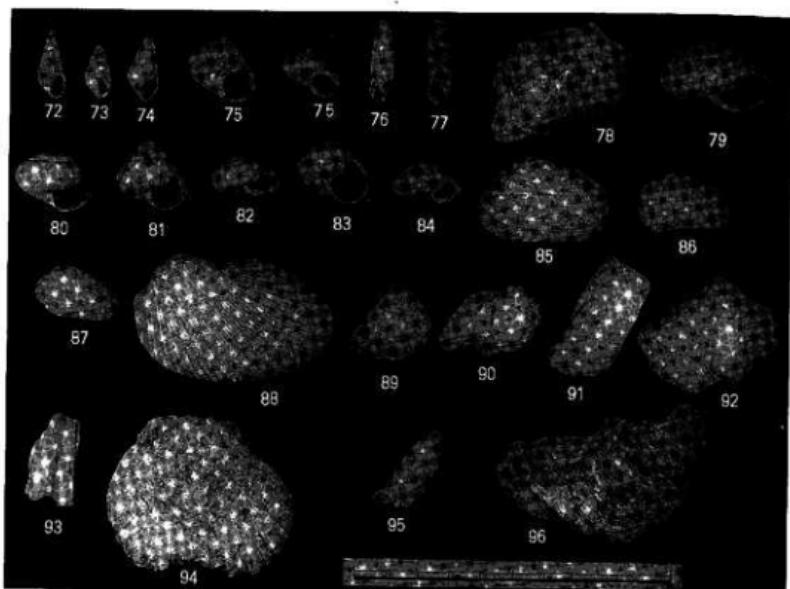
PL.56 貝類

上

- | | | |
|---------------|-----------------|---------------|
| 72 ヌノメカワニナ | 73 トウガタカワニナ | 74 カワニナ |
| 75 オキナワヤマタニシ | 75 オキナワヤマタニシ | 76 ツヤギセルガイ |
| 77 オキナワギセルガイ | 78 アフリカマイマイ | 79 シュリマイマイ |
| 80 カツレンマイマイ | 81 オキナワヤマタカマイマイ | 82 パンタナマイマイ |
| 83 ウスカラママイマイ | 84 イトマンマイマイ | 85 エガイ |
| 86 カリガネエガイ | 87 クロシノエガイ | 88 リュウキュウサルボウ |
| 89 ホソスジヒバリガイ? | 90 カイシアオリガイ? | 91 シュモクアオリガイ |
| 92 クロチョウガイ | 93 チサラガイ | 94 メンガイの一種 |
| 95 オハグロガキ | 96 ニセマガキ | |

下

- | | | |
|------------------|----------------|------------------|
| 97 イタボガキ科の一種 | 99 キクザルガイの一種 | 100 シラナミガイ |
| 101 ヒメジャコガイ | 102 ヒレジャコガイ | 103 ジャゴウ |
| 104 カワラガイ | 105 リュウキュウザルガイ | 106 ホソスジイナミガイ |
| 107 アラスジケマンガイ | 108 ヌノメガイ | 109 アラヌノメガイ |
| 110 ヒメアサリ | 111 チョウセンハマグリ | 112 スダレハマグリ |
| 113 シラオガイ | 114 イソハマグリ | 115 リュウキュウナミコガイ |
| 116 リュウキュウマスオガイ | 117 リュウキュウバカガイ | 118 リュウキュウシラトリガイ |
| 119 サメザラガイ | 120 ニッコウガイ | 121 二枚貝の一種(印象化石) |
| 122 ヒザラガイの一種(模擬) | 123 コウイカ | 125 カニのツメ |
| 126 ゴガイの一種 | | |



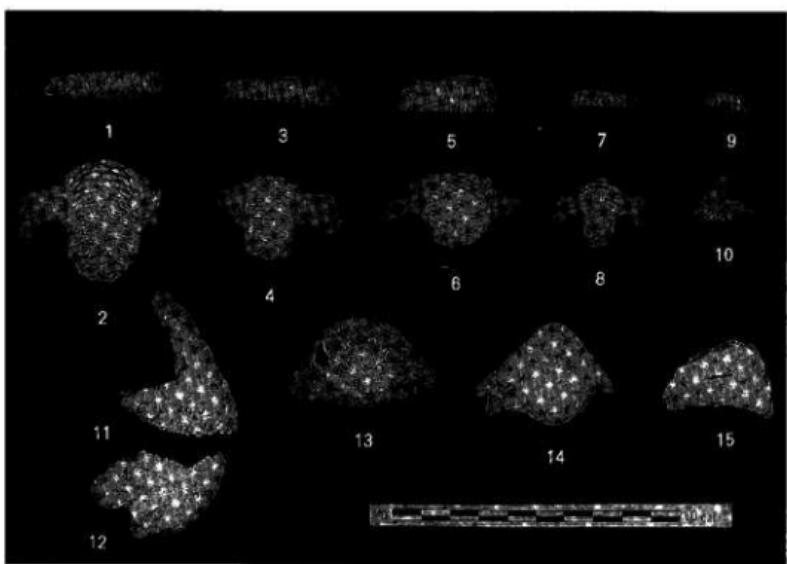
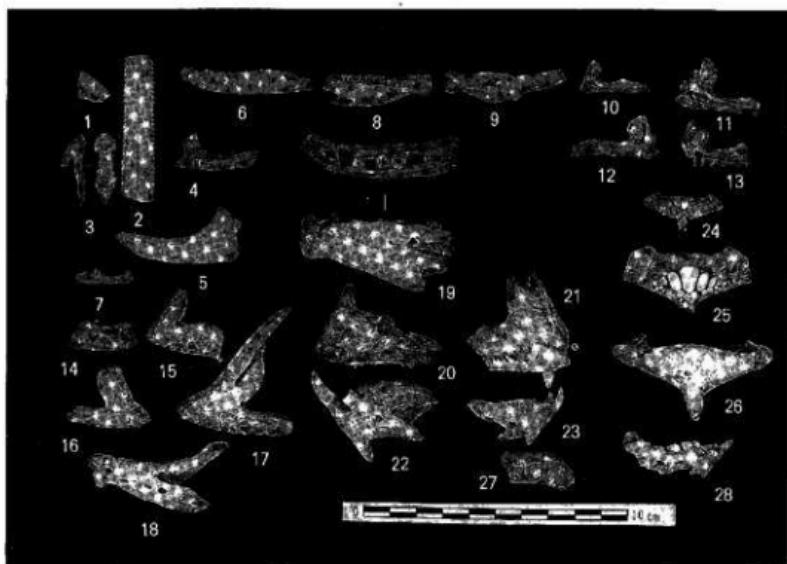
PL.57 貝類

上

- | | | |
|-----------------------------------|----------------|-------------------|
| 1 メジロザメ科歯破片 | 2 エイ類尾棘 | 3 ウナギ属前上顎・筋・鎌骨板 |
| 4 同L歯骨 | 5 同L歯骨 | 6 ウツボ類L歯骨 |
| 7 カマス類R歯骨 | 8、9 ハタ類L歯骨 | 10、11 同R前上顎骨 |
| 12、13 同L前上顎骨 | 14 クロダイ属L前上顎骨 | 15 同R前上顎骨 |
| 16、17 ハマフエフキダイ R前上顎骨 | | 18 同L歯骨 |
| 19 フエダイ科L歯骨 | 20、21 ベラ科L前上顎骨 | 22、23 同L歯骨 |
| 24~26 ベラ類下咽頭骨 (25 タキベラ属・26 コブダイ属) | | 27 ヨコシマクロダイ R前上顎骨 |
| 28 同L歯骨 | | |

下

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1、2 ナガブダイ上咽頭骨と下咽頭骨 | 3、4 ナンヨウブダイ 同 |
| 5、6 イロブダイ 同 | 7、8 ハゲブダイ 同 |
| 9、10 ブダイ類ブダイ上咽頭骨とL前上顎骨 | 11 ブダイ類のR前上顎骨 |
| 12 同L歯骨 | 13 ハリセンボン科歯骨 (イシガキフグ) |
| 14 同前上顎骨 | 15 マフグ科R前上顎骨 |



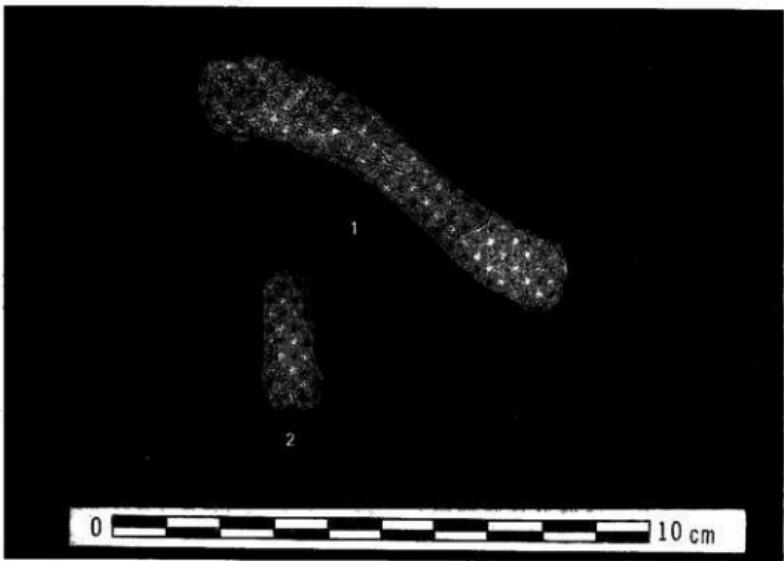
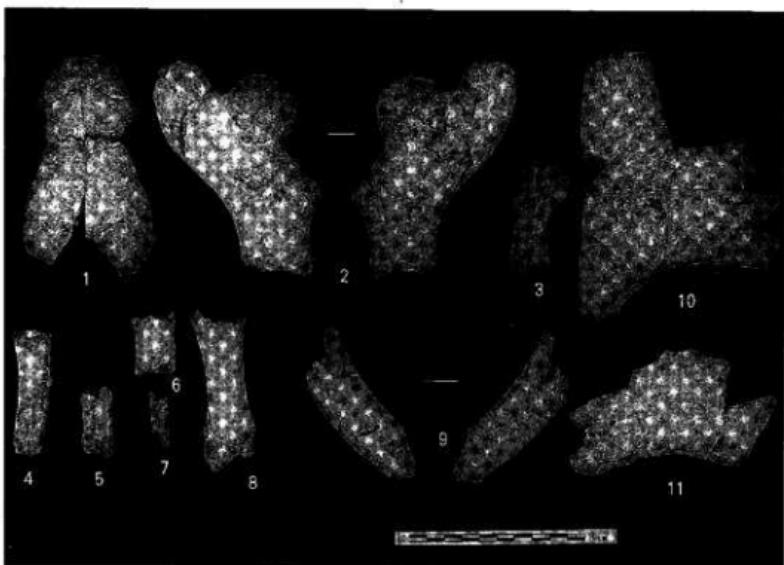
P L.59

上 アオウミガメ

- | | | |
|-----------|---------|---------|
| 1 前頭～頭頂骨片 | 2 L上腕骨 | 3 L上腕骨 |
| 4 L尺骨 | 5 L尺骨 | 6 大腿骨 |
| 7 L尺骨 | 8 L脛骨 | 9 R剣状腹板 |
| 10 L下腹板 | 11 R下腹板 | |

下 ヒト

- | | |
|------|------|
| 1 繩骨 | 2 指骨 |
|------|------|



P.L.59 ウミガメ・ヒト

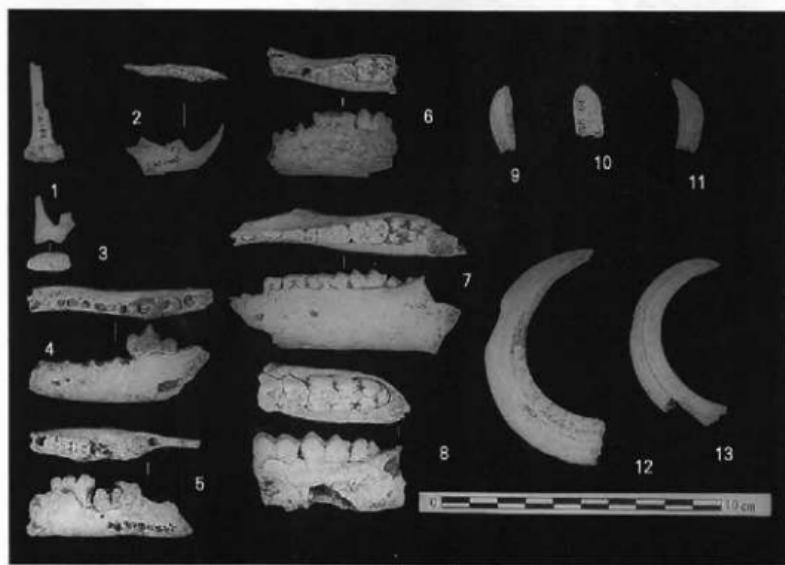
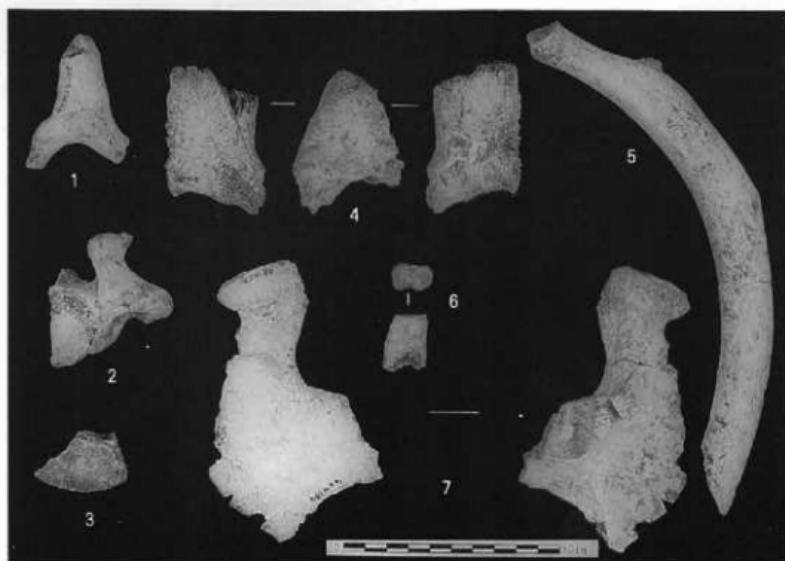
P L.60

上 ジュゴンの骨

- | | | |
|---------|-------|-------|
| 1 椎骨 | 2 胸椎片 | 3 椎体片 |
| 4 R頭蓋 | 5 肋骨 | 6 白齒 |
| 7 右下頭骨片 | | |

下

- | | | |
|--------------|------------|---------------------|
| 1 オオコウモリ左上腕骨 | 2 ネズミ類R下顎骨 | 3 イヌ P ⁴ |
| 4 イヌL下顎骨 | 5 R下顎骨 | 6 L下顎骨 |
| 7 L下顎骨 | 8 L下顎骨 | 9 L c ♀ |
| 10 L c ♀ | 11 LC ♀ | 12、13 R c ♂ |
- (5~13 リュウキュウイノシシ)



PL.60 ジュゴン・オオコウモリ・ネズミ類・イヌ・イノシシ

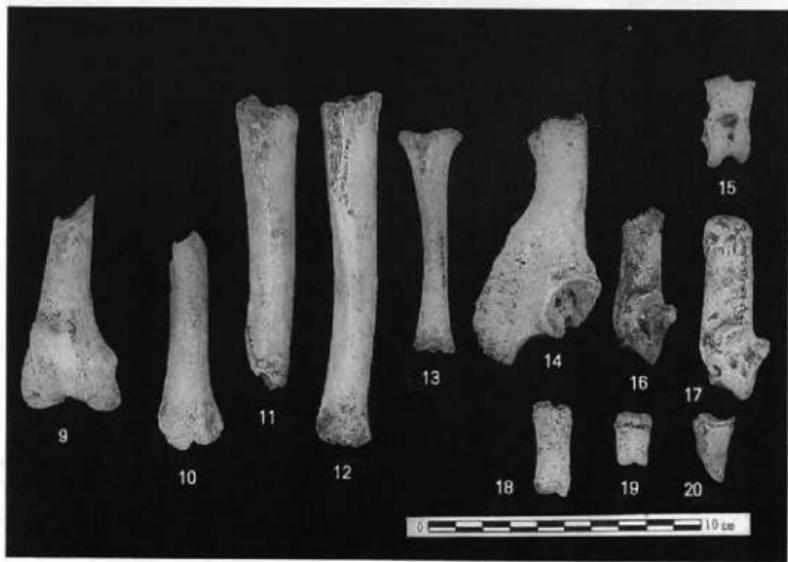
P L.61

上 リュウキュウイノシシ

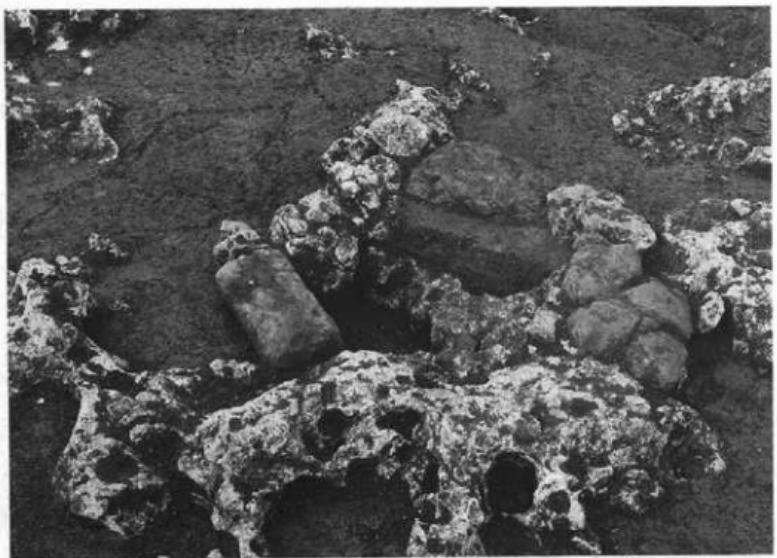
- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 1 R肩甲骨 | 2 R上腕骨 | 3 R上腕骨 | 4 L上腕骨 |
| 5 R橈骨 | 6 L橈骨 | 7 R尺骨 | 8 L尺骨 |

下 リュウキュウイノシシ

- | | | | |
|--------|--------|--------|-----------|
| 9 L大腿骨 | 10 R脛骨 | 11 R脛骨 | 12 R脛骨 |
| 13 L脛骨 | 14 R寛骨 | 15 L距骨 | 16、17 L距骨 |
| 18 基節骨 | 19 中節骨 | 20 末節骨 | |



PL.61 イノシシ



P L.62 上：石囲いの炉（第5号竪穴住居跡内）
下：同上（第19号竪穴住居跡内）



P L. 63 上：首里王府時代の火番小屋跡と碑文（矢印）
下：碑文のある位置から川田崎(A)と針崎(B)を望む



P L.64 上：遺跡から海岸へ抜ける小道
下：遺跡から海を望む（右から浮原島・津堅島・浜比嘉島）発達したリーフが注目される



210.0254
0k14

沖縄県文化財調査報告書 第92集

宮城島遺跡分布調査報告

1. 宮城島の遺跡分布

2. 高 嶺 遺 跡

発行 1989年 3月30日

沖縄県教育委員会

沖縄県那覇市旭町1番地

TEL 0988-66-2731

印刷 比嘉興文堂

TEL 0988-32-1595



